養父市 所在

# 野脇·場市·広瀬遺跡

-(主)養父朝来線緊急道路工事(建屋バイパス)に伴う発掘調査報告書-

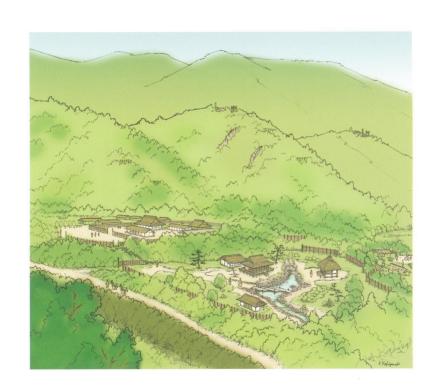
平成20(2008) 23月

**馬庫**県教育委員会

養父市 所在

# 野脇·場市·広瀬遺跡

一(主)養父朝来線緊急道路工事(建屋バイパス)に伴う発掘調査報告書-

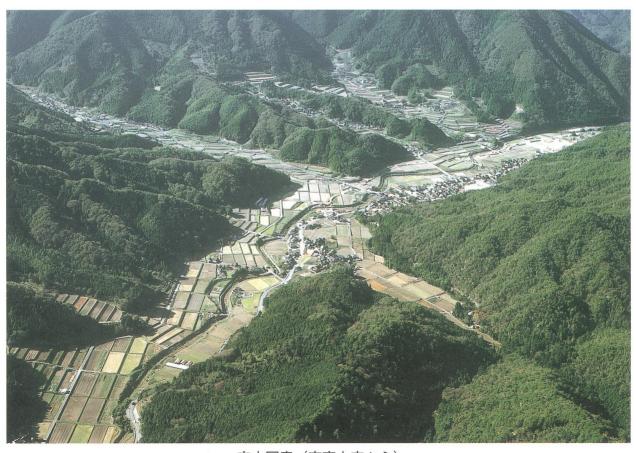


2008年3月

兵庫県教育委員会



空中写真(北西上空から)



空中写真(南東上空から)



空中写真(北東上空から)



空中写真(南上空から)



F地区空中写真(南東上空から)



F地区空中写真(北上空から)



D地区出土遺物



D地区出土ガラス玉

F地区出土ウサギ形水滴



F地区出土ウサギ形水滴

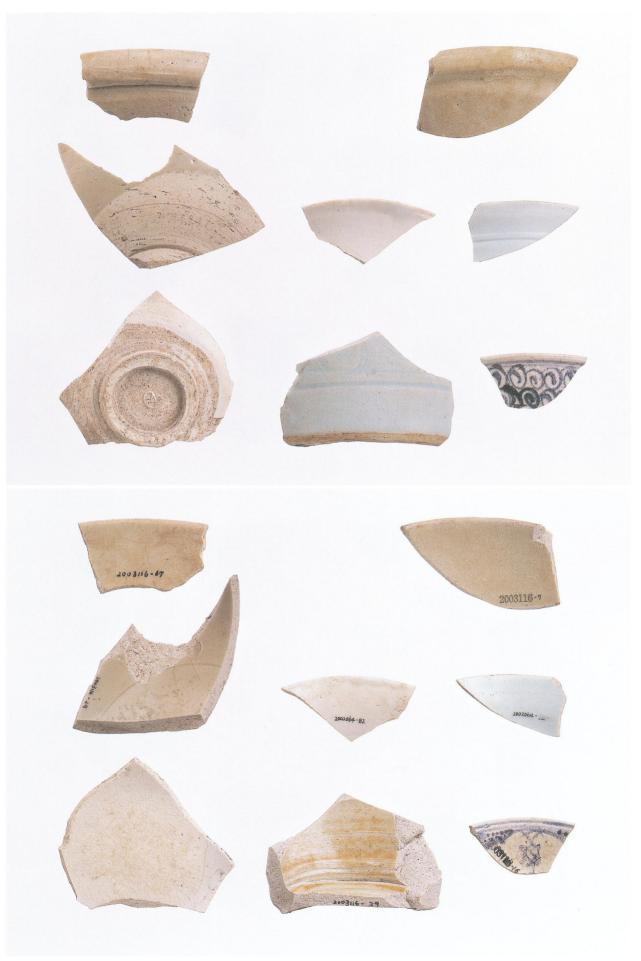


F地区SG01出土土師器皿

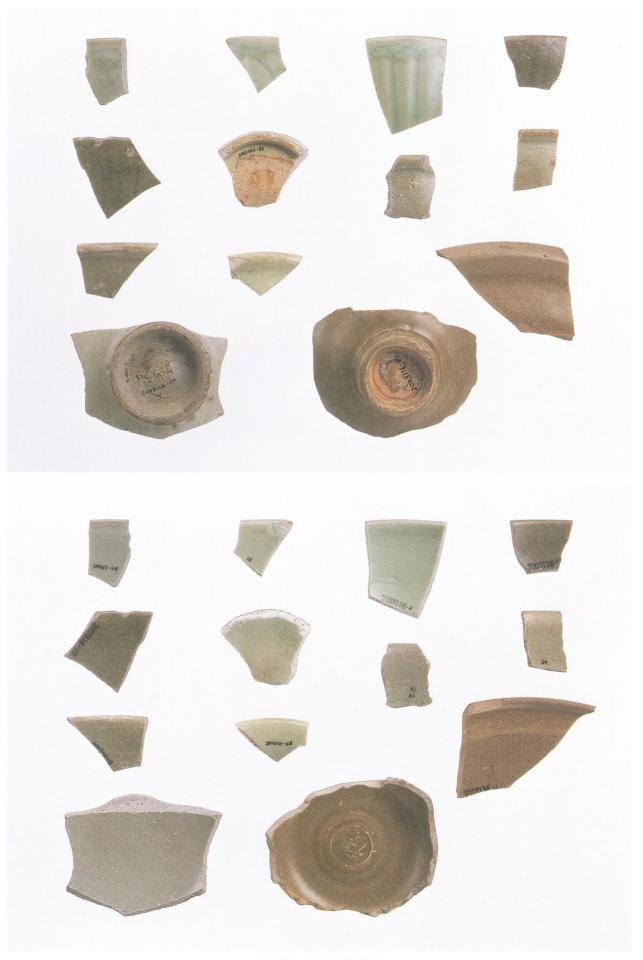
カラー図版6



F地区SG01出土遺物



F地区SG01出土磁器



F地区SG01出土磁器



F地区SG01出土陶器



場市遺跡F地区SG01出土漆椀



広瀬遺跡出土遺物

## 例 言

- 1. 本書は養父市(旧養父郡養父町)建屋に所在する野脇・場市・広瀬遺跡の発掘調査報告書である。
- 2. 野脇・場市・広瀬遺跡は、主要地方道養父朝来線改良事業である建屋バイパス建設に伴う発掘調査である。
- 3. 本書は但馬県民局県土整備部八鹿土木事務所が計画・施工した主要地方道養父朝来線改良事業に伴う発掘調査報告書である。
- 4. 分布調査は平成13年度に、確認調査は平成14年度に、本発掘調査は平成15年度に行った。すべて兵庫県教育委員会が調査主体となって実施した。分布調査は森内修造が、確認調査は渡辺 昇・別府洋二が、本発掘調査は吉田 昇・渡辺 昇が担当した。
- 5. 調査で使用した方位は国土座標第V系を使用した。また、水準は兵庫県八鹿土木事務所設定のB.M. を使用した。
- 6. 遺構図・土層断面図などは調査員が実測した。全体の50分の1の平面図は㈱ニコスに委託して図化した。
- 7. 遺構写真は調査担当者が撮影したものである。図版1の空中写真は国土地理院撮影のものを使用した。その他の空中写真は㈱ニコスに委託して撮影したものである。
- 8. 整理作業は、平成 18・19 年度の 2 ヵ年に渡って行った。平成 18 年度は兵庫県教育委員会埋蔵文化 財調査事務所で実施した。平成 19 年度は兵庫県立考古博物館で実施した。
- 9. 執筆は目次に記した依頼原稿・中近世遺物以外は渡辺が行い、編集は川村由紀の協力を得て渡辺が行った。中近世遺物は岡田章一が執筆した。
- 10. 表紙イラストは小東憲朗氏によるものである。
- 11. 本書にかかる遺物や図面・写真などの資料は、兵庫県立考古博物館(加古郡播磨町大中500)ならびに魚住分館(明石市魚住町清水立合池の下630-1)に保管している。ご活用ください。
- 12. 発掘調査・整理調査にあたって、地元関係者をはじめ多くの方々・機関のご協力・ご指導を得ました。感謝致します。

奈良文化財研究所·養父町教育委員会·水野晴雄·西 桂·藤原弘幸·西尾孝二·谷本 進 山根実生子·大平愛子



第1図 野脇・場市・広瀬遺跡の位置

# 野脇遺跡・場市遺跡・広瀬遺跡

# 本 文 目 次

例言	Î	
Ι	はし	こめに
	1	調査に至る経緯
	2	確認調査の経過と結果
	3	本発掘調査の経過
	4	整理作業の経過
II	位置	置と環境······8
Ш	野服	â遺跡の調査結果
	1	位置
	2	遺構13
	3	遺物
	4	小結
IV	場市	<b>市遺跡の調査結果</b>
	1	A 地区······29
	2	B西地区······31
	3	B東地区·······35
	4	C 地区·······35
	5	D北地区······41
	6	D地区······49
	7	E 地区······50
	8	F地区······55
	9	土器以外の出土遺物・・・・・・・93
V	広滩	領遺跡の調査結果
	1	位置
	2	遺構106
	3	遺物
	4	小結121
VI	兎刑	ジ水滴の調査
VII	放身	付性炭素年代測定結果
VIII	広凍	領遺跡、場市遺跡および野脇遺跡の地形環境青木哲哉…129
TV	424	n h l =

### 図 版 目 次

```
カラー図版1
         (上)
              野脇・場市・広瀬遺跡空中写真(北西上空から)
         (下)
              野脇・場市・広瀬遺跡空中写真(南東上空から)
カラー図版2
         (+)
              場市・広瀬遺跡空中写真(北東上空から)
         (下)
              場市・広瀬遺跡空中写真(南上空から)
カラー図版3
         (上)
              場市遺跡F地区空中写真(南東上空から)
         (下)
              場市遺跡F地区空中写真(北上空から)
         (上)
カラー図版4
              場市遺跡D地区出土遺物
         (下)
              場市遺跡D地区出土ガラス玉・F地区出土ウサギ形水滴
カラー図版5
         (上)
              場市遺跡F地区出土ウサギ形水滴
              場市遺跡F地区SG01出土土師器皿
         (下)
カラー図版6
              場市遺跡F地区SG01出土遺物
カラー図版7
              場市遺跡F地区SG01出土磁器
カラー図版8
              場市遺跡F地区SG01出土磁器
カラー図版9
              場市遺跡F地区SG01出土陶器
カラー図版10
         (上)
              場市遺跡F地区SG01出土漆椀
         (下)
              広瀬遺跡出土遺物
図版1
              野脇・場市・広瀬遺跡空中写真(国土地理院撮影)
図版2
         (上)
              野脇・場市・広瀬遺跡空中写真(南上空から)
         (下)
              野脇・場市・広瀬遺跡空中写真(北上空から)
         (上)
図版3
              野脇・場市・広瀬遺跡空中写真(南上空から)
         (下)
              野脇・場市・広瀬遺跡空中写真(西上空から)
図版4
         (上)
              野脇・場市・広瀬遺跡空中写真(北上空から)
         (下)
              野脇・場市・広瀬遺跡空中写真(南上空から)
図版5
         (E)
              場市・広瀬遺跡空中写真(北上空から)
         (下)
              場市・広瀬遺跡空中写真(南東上空から)
図版6
         (上左)
              確認調査 1・2トレンチ遠景
         (上右)
              確認調査 38トレンチから北側
         (中左)
              確認調査 2トレンチ(北から)
         (中右)
              確認調査 3トレンチ断ち割り(北から)
         (下左)
              確認調査 2トレンチ集石(北から)
         (下右)
              確認調査 31トレンチ断ち割り (南東から)
図版7
         (上)
              確認調査 調査地北半遠景(西・能座から)
         (下)
              確認調査 調査地南半遠景(西・餅耕地から)
図版8
         (左)
              野脇遺跡 空中写真
         (上右)
              野脇遺跡
                    A地区空中写真
         (下右)
              野脇遺跡
                   B地区空中写真
図版9
         (E)
              野脇遺跡 全景(北東から)
         (下左)
              野脇遺跡
                   A地区全景(南から)
         (下右)
              野脇遺跡
                    調査風景
図版10
         (上)
              野脇遺跡
                    A地区全景(南から)
         (下)
              野脇遺跡
                    A地区全景(北から)
図版11
         (上左)
              野脇遺跡
                    A地区 SD01·02 (西から)
              野脇遺跡
                    A地区 SD01·02 (南から)
         (上右)
         (中)
              野脇遺跡
                    A地区 SB01~04 (南から)
         (下左)
              野脇遺跡
                    A地区 SB03 (西から)
         (下右)
              野脇遺跡 A地区 SB04・05 (南東から)
```

図版12	(上)	野脇遺跡 A地区 SB06(北から)
	(中左)	野脇遺跡 A地区 SB06(北から)
	(中右)	野脇遺跡 A地区 SB06 (北西から)
	(下)	野脇遺跡 A地区 P10土器出土状態
図版13	(上)	野脇遺跡 B地区全景(北から)
	(下)	野脇遺跡 B地区全景(南から)
図版14		野脇遺跡出土遺物
図版15	(上)	場市遺跡遠景(北側野脇遺跡から)
	(下左)	場市遺跡 A地区 全景(南から)
	(下右)	場市遺跡 A地区 全景(北から)
図版16	(上左)	場市遺跡 A地区 全景(北から)
	(上右)	場市遺跡 B西地区 東壁
	(中右)	場市遺跡 B西地区 調査風景
	(下)	場市遺跡 B西地区 北半全景(南から)
図版17	(上)	場市遺跡 B西地区 SB01 (東から)
	(中左)	場市遺跡 B西地区 SB01 (南から)
	(中右)	場市遺跡 B西地区 SD01堆積状況(南から)
	(下左)	場市遺跡 B西地区 SX01 (南から)
	(下右)	場市遺跡 B西地区 SD02 (南から)
図版18	(上左)	場市遺跡 B東地区 調査前(北から)
	(上右)	場市遺跡 B東地区 機械掘削風景
	(中左)	場市遺跡 B東地区 南壁
	(中右)	場市遺跡 B東地区 調査風景
	(下左)	場市遺跡 B東地区 第1面全景(南から)
	(下右)	場市遺跡 B東地区 第2面全景(南から)
図版19	(上)	場市遺跡 C~F地区遠景(北側B地区から)
	(下)	場市遺跡 A~E地区遠景(南側F地区から)
図版20		場市遺跡 C・D地区空中写真
図版21	(左)	場市遺跡 B西地区空中写真
	(右)	場市遺跡 E北・E南地区空中写真
図版22	(上左)	場市遺跡 C地区 全景(北から)
	(上右)	場市遺跡 C地区 全景(南から)
	(下)	場市遺跡 C地区 全景(南西から)
図版23	(上)	場市遺跡 C地区 SH03 (北西から)
	(中左)	場市遺跡 C地区 SH03堆積状況(南西から)
	(中右)	場市遺跡 C地区 炉断面(南から)
	(下左)	場市遺跡 C地区 SH03 (南西から)
	(下右)	場市遺跡 C地区 調査風景
図版24	(上)	場市遺跡 D地区 全景(北から)
	(下)	場市遺跡 D地区 全景(西から)
図版25	(上左)	場市遺跡 D地区 東壁
	(上右)	場市遺跡 D地区 全景(南から)
	(中)	場市遺跡 D地区 SH01全景(北から)
	(下左)	場市遺跡 D地区 SH01堆積状況
	(下右)	場市遺跡 D地区 SH01壁溝堆積状況
図版26	(上)	場市遺跡 D地区 SH01全景 (北から)
	(中左)	場市遺跡 D地区 SH01南辺土坑堆積状況
	(中右)	場市遺跡 D地区 SH01炉堆積状況
	(下左)	場市遺跡 D地区 SH01南辺土坑土器出土状態
	(下右)	場市遺跡 D地区 SH01炉 (東から)
	· · ·	=

```
D地区 SH01・03 (北西から)
図版27
         (上左)
               場市遺跡
          (上右)
               場市遺跡
                      D地区
                           SH02 (北から)
          (中)
               場市遺跡
                      D地区
                           SH02 (南東から)
               場市遺跡
                      D地区 SH02 (南西から)
          (下左)
          (下右)
               場市遺跡
                      D地区
                           調査風景
                      E北地区 全景(南から)
図版28
          (上左)
               場市遺跡
          (上右上) 場市遺跡
                      E北地区
                            SK01 (西から)
          (上右下) 場市遺跡
                      E北地区
                             SK03 (南から)
          (下左)
               場市遺跡
                      E南地区
                             全景 (北から)
          (下右上) 場市遺跡
                      E北地区
                             SK05 (南から)
                      E北地区 SD10 (西から)
          (下右下) 場市遺跡
図版29
          (上)
               場市遺跡
                      F地区 場市遺跡F地区とウスギ城
          (下)
               場市遺跡
                      F地区 場市遺跡遠景 (建興寺から)
          (上)
                      F地区 場市遺跡遠景(南・広瀬遺跡から)
図版30
               場市遺跡
          (下)
               場市遺跡
                      F地区
                           西側ビクニ畑からの全景
          (上)
                      F地区
                           全景 (北から)
図版31
               場市遺跡
          (下)
               場市遺跡
                      F地区 全景(南から)
図版32
          (上)
               場市遺跡
                      F地区
                           全景(南から)
          (中左)
                      F地区 SG01アゼ (南から)
               場市遺跡
          (中右)
               場市遺跡
                      F地区
                           SG01 (南西から)
          (下左)
               場市遺跡
                      F地区
                           SG01土師器皿出土状態
          (下右)
               場市遺跡
                      F地区
                           SG01土師器皿出土状態
図版33
                      F地区
          (上)
               場市遺跡
                           SB01 (北から)
          (中左)
               場市遺跡
                      F地区
                           SB01 (西から)
                      F地区
          (中右)
               場市遺跡
                           礎石断面(南から)
                           SB02 (西から)
          (下左)
               場市遺跡
                      F地区
          (下右)
               場市遺跡
                      F地区
                           調查風景
図版34
          (上)
               場市遺跡
                      F地区
                           主殿 (SB03) (東から)
          (中左)
               場市遺跡
                      F地区
                           主殿 (SB03) 柱穴断ち割り
          (中右)
               場市遺跡
                      F地区
                           主殿 (SB03) 柱穴断ち割り
          (下左)
               場市遺跡
                      F地区
                           SG01滝部分(西から)
          (下右)
               場市遺跡
                      F地区
                           SB01滝部分断ち割り(東から)
                      F地区
図版35
          (上左)
               場市遺跡
                           SG01 (東から)
                      F地区
          (上右上) 場市遺跡
                           SG01 (北から)
          (上右下) 場市遺跡
                      F地区
                           SG01 (北から)
                      F地区
          (中左)
                           SG01 (東から)
               場市遺跡
          (中右)
                      F地区
                           SG01 (北から)
               場市遺跡
          (下左)
                      F地区
                           SG01 (南東から)
               場市遺跡
                      F地区
          (下右)
               場市遺跡
                           SG01滞水状態
図版36
          (上)
               場市遺跡
                      F地区
                           SG01下層全景(南から)
          (下)
               場市遺跡
                      F地区
                           SG01下層全景(北から)
                      F地区
図版37
          (上)
               場市遺跡
                           SG01下層遺物出土状態
          (下右)
               場市遺跡
                      F地区
                           SG01下層満水状態(北から)
          (上)
               場市遺跡
                      F地区
図版38
                           SG01最下層全景(西から)
          (中左)
               場市遺跡
                      F地区
                           SG01最下層堆積状況
          (中右)
               場市遺跡
                      F地区
                           SG01最下層洲浜
          (下左)
               場市遺跡
                      F地区 SG01最下層漆器出土状態
          (下右)
               場市遺跡
                      F地区
                           SG01最下層洲浜
図版39
                      F地区
          (上)
               場市遺跡
                           SG01新段階(上層)空中写真
          (中)
                      F地区
               場市遺跡
                           SG01中段階(下層)空中写真
```

```
場市遺跡 F地区 SG01古段階(最下層)空中写真
          (下)
図版40
                場市遺跡出土遺物(1)(B地区)
図版41
                場市遺跡出土遺物(2) (C地区・D北地区)
                場市遺跡出土遺物(3)(C地区)
図版42
                場市遺跡出土遺物(4) (C地区・D北地区)
図版43
                場市遺跡出土遺物(5)(D地区)
図版44
                場市遺跡出土遺物(6) (D地区·D北地区)
図版45
                場市遺跡出土遺物(7) (D北地区・D南地区)
図版46
図版47
                場市遺跡出土遺物(8) (E地区·F地区)
                場市遺跡出土遺物(9) (F地区)
図版48
図版49
                場市遺跡出土遺物(10) (F地区)
図版50
                場市遺跡出土遺物(11)(F地区)
                場市遺跡出土遺物(12) (F地区)
図版51
                場市遺跡出土遺物(13) (F地区)
図版52
                場市遺跡出土遺物(14) (F地区)
図版53
図版54
                場市遺跡出土遺物(15)(F地区)
図版55
                場市遺跡出土遺物(16) (F地区)
                場市遺跡出土遺物(17) (F地区)
図版56
図版57
                場市遺跡出土遺物(18) (F地区)
                場市遺跡出土遺物(19) (F地区)
図版58
                場市遺跡出土遺物(20) (F地区)
図版59
                場市遺跡出土遺物(21)(F地区)
図版60
                場市遺跡出土遺物(22)(F地区)
図版61
図版62
                場市遺跡出土遺物(23) (F地区)
図版63
                場市遺跡出土遺物(24) (F地区)
                場市遺跡出土遺物(25) (F地区)
図版64
                場市遺跡出土遺物(26) (F地区)
図版65
図版66
                場市遺跡出土遺物(27)(F地区)
図版67
                場市遺跡出土遺物(28) (F地区)
                場市遺跡出土遺物(29(F地区)
図版68
                場市遺跡出土遺物(30) (F地区)
図版69
                場市遺跡出土遺物(31) (F地区)
図版70
図版71
                場市遺跡出土遺物(32) (F地区)
図版72
                場市遺跡出土遺物(33) (F地区)
図版73
                場市遺跡出土遺物(34) (F地区)
図版74
                場市遺跡出土遺物(35) (F地区)
図版75
                場市遺跡出土遺物(36) (F地区)
                場市遺跡出土遺物(37) (F地区)
図版76
図版77
          (上)
                広瀬遺跡 北(場市遺跡)からみた広瀬遺跡遠景
          (下)
                広瀬遺跡 広瀬遺跡遠景(南から)
図版78
          (上)
                広瀬遺跡 空中写真
          (中)
                広瀬遺跡 調査区全景(南から)
          (下)
                広瀬遺跡 調査区全景(北から)
          (上)
                広瀬遺跡 SH01・02 (南から)
図版79
          (下)
                広瀬遺跡 SH01 (東から)
図版80
                広瀬遺跡 SH01アゼ (南から)
          (上左)
                広瀬遺跡 SH01 (東から)
          (上右)
          (中左)
                広瀬遺跡 SH01 (北から)
                       SH01床面土器出土状態(東から)
          (中右)
                広瀬遺跡
          (下)
                広瀬遺跡 SH01中央土坑 (東から)
```

図版81	(上左)	広瀬遺跡	SH01南側壁溝(東から)
	(上右)	広瀬遺跡	SH01北側壁溝(東から)
	(中)	広瀬遺跡	SH02 (南から)
	(下左)	広瀬遺跡	SH02 (西から)
	(下右)	広瀬遺跡	SH02 (北から)
図版82	(上左)	広瀬遺跡	SX01 (西から)
	(上右)	広瀬遺跡	SX02·03 (北から)
	(中左)	広瀬遺跡	SX02 (北から)
	(中右)	広瀬遺跡	SX03 (東から)
	(下左)	広瀬遺跡	SX03土器出土状態
	(下右)	広瀬遺跡	SX04 (東から)
図版83	(上)	広瀬遺跡	土坑群(南東から)
	(中左)	広瀬遺跡	SK01 (南から)
	(中右)	広瀬遺跡	SK02 (北から)
	(下左)	広瀬遺跡	SK03 (西から)
	(下右)	広瀬遺跡	SK03 (東から)
図版84	(上左)	広瀬遺跡	SK04 (東から)
	(上右上)	広瀬遺跡	SK05 (西から)
	(上右下)	広瀬遺跡	SK05 (東から)
	(下左上)	広瀬遺跡	SK06 (西から)
	(下左下)	広瀬遺跡	SK06 (東から)
	(下右)	広瀬遺跡	調査風景
図版85		広瀬遺跡	出土遺物(1) (SH01)
図版86		広瀬遺跡	出土遺物(2) (SH01)
図版87		広瀬遺跡	出土遺物(3) (SX03・SX04)
図版88		広瀬遺跡	出土遺物(4) (SH01・SX03・SX04・包含層)
図版89		広瀬遺跡	出土遺物(5) (SX04・SD01)
図版90		広瀬遺跡	出土遺物(6) (石器・鉄器)

# 表 目 次

第1表	野脇遺跡及び周辺傩認調査出土遺物観祭表	····27
第2表	場市遺跡 B 地区出土遺物観察表	75
第3表	場市遺跡C地区・D北地区出土遺物観察表	75
第4表	場市遺跡 D 北地区出土遺物観察表······	78
第5表	場市遺跡 D 地区出土遺物観察表	79
第6表	場市遺跡E地区出土遺物観察表	80
第7表	場市遺跡F地区出土遺物観察表	81
第8表	場市遺跡 B 地区出土石器計測表	93
第9表	場市遺跡F地区出土石器計測表	93
第10表	場市遺跡 B 地区出土金属器計測表	.100
第11表	場市遺跡F地区出土金属器計測表 ······	
第12表	場市遺跡 F 地区出土木器計測表	·105
第13表	広瀬遺跡出土遺物観察表	117
第14表	広瀬遺跡出土石器観察表	.121
第15表	広瀬遺跡出土金属器観察表	.121

# 挿 図 目 次

第1図	野脇・場市・広瀬遺跡の位置	
第2図	確認調査地点と本調査の範囲・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第3図	確認調査風景	• 4
第4図	確認調査トレンチ	
第5図	調査風景	. 5
第6図	現地説明会風景	. 5
第7図	整理作業風景	. 6
第8図	整理作業風景	. 6
第9図	調査地点図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	. 7
第10図	杉ケ沢遺跡	. 8
第11図	野脇・場市・広瀬遺跡の位置と周辺の遺跡	. 9
第12図	観音塚古墳	
第13図	禁裡塚古墳・こうもり塚古墳・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第14図	建興寺・餅耕地所在の石造物	
第15図	竹田城跡	
第16図	野脇遺跡平面図	
第17図	野脇遺跡SB01·SB02実測図 ······	
第18図	野脇遺跡SB03·SB04実測図	16
第19図	野脇遺跡SB05・SB06実測図	
第20図	野脇遺跡SB07·SB08実測図	
第21図	野脇遺跡SB09・SB10実測図	19
第22図	野脇遺跡SB11・SB12実測図	
第23図	野脇遺跡柵跡実測図	
第24図	野脇遺跡溝土層断面図	
第25図	野脇遺跡出土遺物実測図(1)	
第26図	野脇遺跡出土遺物実測図(2)	
第27図	野脇遺跡石剣実測図・写真	
第28図	場市遺跡地区図	28
第29図	場市遺跡A地区・B西地区平面図	29
第30図	場市遺跡B西地区遺構実測図	
第31図	場市遺跡 B 西地区 SB01 実測図	
第32図	場市遺跡B東地区実測図	32
第33図	場市遺跡B東地区土層断面図······	
第34図	場市遺跡B地区出土遺物実測図	
	場市遺跡C地区・D地区平面図	
	場市遺跡 C 地区SH01実測図	
	場市遺跡 C 地区・ D 北地区遺物 実測図 ·······	
	場市遺跡 C 地区遺物実測図	
	場市遺跡D北地区土層断面図······	
	場市遺跡D北地区平面図	
	場市遺跡 D 北地区 SH02 実測図	
	場市遺跡 D 北地区 SH03 実測図	
	場市遺跡 D 北地区 SH04 · SH05 実測図 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
	場市遺跡 D 北地区 SH05中央土坑実測図	
	場市遺跡 D 北地区遺物実測図	
	場市遺跡 D 地区遺物 実測図	
	場市遺跡 E 地区平面図・土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
	場市遺跡 E 北地区土坑実測図	
	場市遺跡 E 南地区遺物実測図	-
	場市遺跡F地区SG01新段階実測図	

第51図	場市遺跡F地区SG01新段階土層断面図	57
第52図	場市遺跡F地区SG01中段階実測図	
第53図	場市遺跡 F 地区SG01中段階裏込め実測図	59
第54図	場市遺跡F地区SG01古段階実測図	60
第55図	場市遺跡F地区SG01古段階土層断面図	61
第56図	場市遺跡F地区東壁土層断面図	62
第57図	場市遺跡F地区遺物実測図(1)·····	63
第58図	場市遺跡F地区遺物実測図(2)·····	
第59図	場市遺跡F地区遺物実測図(3)·····	65
第60図	場市遺跡 F 地区遺物実測図(4)·····	66
第61図	場市遺跡F地区遺物実測図(5)·····	67
第62図	場市遺跡F地区遺物実測図(6)·····	68
第63図	場市遺跡 F 地区遺物実測図(7)·····	69
第64図	場市遺跡 F 地区遺物実測図(8)·····	70
第65図	場市遺跡F地区遺物実測図(9)·····	71
第66図	場市遺跡 F 地区遺物実測図(10)·····	72
第67図	場市遺跡石器実測図	93
第68図	場市遺跡金属器実測図(1)	94
第69図	場市遺跡金属器実測図(2)	
第70図	場市遺跡金属器実測図(3)	95
第71図	場市遺跡金属器実測図(4)	96
第72図	場市遺跡金属器実測図(5)	97
第73図	場市遺跡金属器実測図(6)	98
第74図	場市遺跡鉄滓実測図	99
第75図	場市遺跡木器実測図(1)	·103
第76図	場市遺跡木器実測図(2)	·104
第77図	広瀬遺跡平面図	·106
第78図	広瀬遺跡SH01実測図 ·····	·107
第79図	広瀬遺跡SX01・02・03実測図	
第80図	広瀬遺跡SX04実測図	
第81図	広瀬遺跡土坑群実測図	·110
第82図	広瀬遺跡出土遺物実測図(1)	·112
第83図	広瀬遺跡出土遺物実測図(2)	·114
第84図	広瀬遺跡出土遺物実測図(3)	
第85図	広瀬遺跡出土遺物実測図(4)	
第86図	広瀬遺跡金属器実測図	
第87図	広瀬遺跡石器実測図	·116
第88図	水滴蛍光X線開析図	·123
第89図	水滴X線写真	·124
第90図	水滴分析地点	·124
第91図	遺跡周辺の地形分類図	
第92図	各遺跡の調査区と堆積物の観察地点	
第93図	広瀬遺跡調査区とその付近における堆積物	·133
第94図	場市遺跡A~F地区とその付近における堆積物	·134
第95図	野脇遺跡調査区における堆積物	·135
第96図	場市遺跡と周辺小字名	·137
第97図	場市遺跡とウスギ城・竹田城	·139
第98図	ウスギ城跡平面図	·140
第99図	場市遺跡SG01変遷図 ·····	·141
第100図	場市遺跡F地区SG01出土遺物編年 ·····	·143

### I はじめに

#### 1. 調査に至る経緯

建屋は養父郡養父町(現. 養父市)に所在する集落で、円山川の支流である大屋川に浅野で合流する 建屋川上流部に位置している。八代峠を越えて朝来町に入り、朝来町中心部の新井で播但自動車道路朝 来インターチェンジそして国道 312 号線につながる。国道 312 号線から国道 9 号線へと流れるルートの 脇道として年々利用が増加しつつある。主要地方道養父朝来線が通っており、集落部分については危険 な個所もあり、通行に支障をきたす狭い部分も残されていた。そのことから、兵庫県八鹿土木事務所に よってその改良事業が継続して計画実施されている。

建屋の集落内は県道に接して民家が集中しており、歩行者にとって危険な状況であった。が、歩道などの拡幅部分を確保することは困難であった。そのため、集落西側にバイパス(建屋バイパス)が計画されることとなった。予定地域には(約1500 m)、北から立石遺跡・野脇遺跡・場市遺跡・広瀬遺跡が周知の遺跡として知られている。また、それ以外にも安定した段丘面が広がっていることから、埋蔵文化財包蔵地が存在する可能性が高いものと推定された。周知の遺跡以外にも遺跡が広がっている可能性が高いと思われたので、平成13年度に計画地全体を対象として分布調査を実施した。分布調査は2001年11月12日に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所。森内修造によって行われた。その結果、周知の遺跡以外にも遺跡が広がっている可能性が高い地点が2ヶ所あり、確認調査が必要な地域となった。

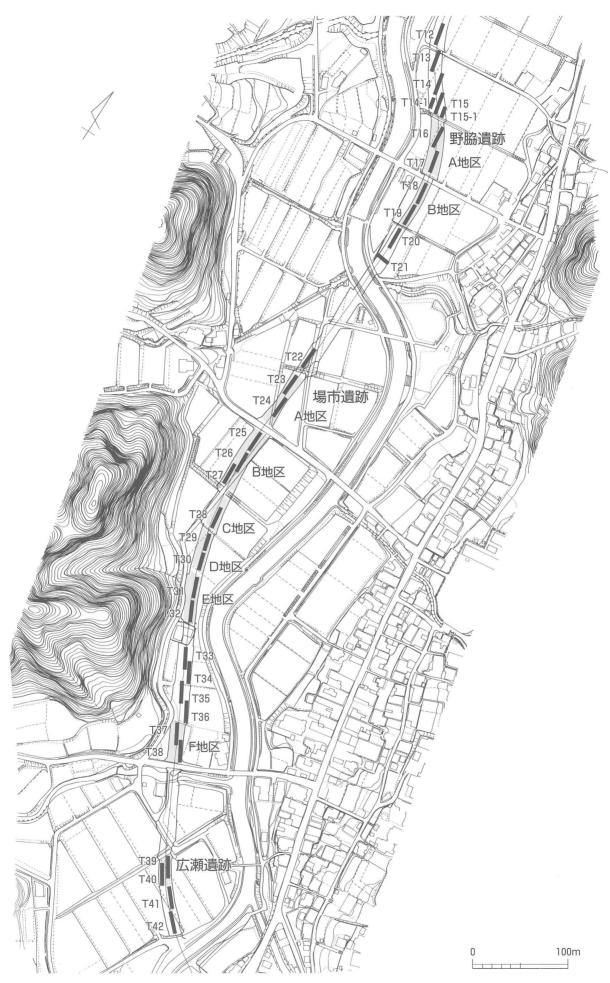
ただ、この地域は昭和50年代後半に継続して圃場整備事業が実施されており、それに先立って野脇遺跡などは確認調査が実施されている。遺構を地下保存した部分もあるが、多くは圃場整備事業によって削平されているのではないかと思われた。また、工事などによって縄文土器や石剣など縄文時代と弥生時代を中心に多くの遺物が表採されていた。本発掘調査資料を得るためにも、要調査範囲ほぼ全域の確認調査を実施することとなった。

#### 2. 確認調査の経過と結果

遺跡(本発掘調査)の範囲と掘削深度を確定するために確認調査を実施した。確認調査規模が相当量になったこともあり、受託事業として但馬県民局県土整備部八鹿土木事務所と契約を交わして確認調査を実施した。その段階で、条件が整わず調査ができなかった地点が幾つかあり、その地点については後に3回(2002139・2003085・2003247)に渡って別途直接執行の事業として確認調査を行った。

最初の確認調査 (2002064) は 2002 年 5 月 15 日から 7 月 4 日までの実働 26 日間を費やして、計 794 ㎡を調査した。44 ヵ所トレンチを設定して確認調査を実施した。調査は原則的に北側から順に作業を進めていったが、地域によって調査準備 (伐採作業など) が必要なところは後回しにした。調査準備が行いやすい旧グラウンド部分から調査を行った。5 月 29 日に 4 トレンチから行い、南側に向かってトレンチ調査を行った。北端は伐採作業とその片付けが終了し、作業の効率の良い翌週に小型の重機を入れて確認調査を実施した。6 月 11 日に 21 トレンチまでの調査を終え中間検査を受けた。建屋川を渡る前の 21 トレンチまでの調査を行ったところで、安全対策のため記録作成後埋め戻し作業を行った。その後、中央から南端に向かって確認調査を継続した。

調査は基本的に機械掘削を中心に行い、包含層を人力掘削で掘り下げ平面ならびに断面を清掃して検



第2図 確認調査地点と本調査の範囲

討した。一部、ビニールハウス部分は機械が入れないことから人力掘削のみで調査を行ったところもある。

1~3トレンチは縄文時代の集落跡である立石遺跡の範囲になる。東側の谷から西流する立石川の扇状地にあたり、比高差の最も高い部分である。耕土下に黒細砂(いわゆるクロボク層)があり、その下で2トレンチでは縄文土器(押型文)が出土している。ピット・集石土坑なども検出されたが、同一面で近世の遺物も出土していることから、古い時期の遺構は残っていないと判断した。3トレンチは堆積土が厚く3mを越えても地山は検出されず、砂層を主とする堆積層であった。ラミネーションのある層で氾濫堆積と判断される。

 $4 \sim 8$ トレンチは、段丘面の下に相当する。周辺は養父町の総合中学校の建設予定地で、養父町教育委員会の確認調査が実施されている。旧養父町スポーツセンターに相当する部分で、テニスコート・グラウンドにトレンチを設定した。谷地形のところで、厚い盛土がなされている。約2 mの盛土で、そこに旧耕土を確認している。その下は河川の氾濫堆積層で遺構はもちろん、安定した面も確認できなかった。9トレンチでは盛土は1 mとやや少ないが、下層の堆積は同様で遺構は検出されなかった。10 トレンチでは盛土は存在しなかったものの、耕土直下で礫層となり、巨礫も含まれ遺構は検出されなかった。

 $11 \sim 21$  トレンチは野脇遺跡の範囲にあたる。今までの分布調査や圃場整備によって石剣(第 27 図)や縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器が出土している。全体的にほぼ同じ高さの水田になっており、圃場整備で大きく改変されたことが窺われる。 $11 \sim 15$  トレンチは削平を受けたようで、耕土下が地山面になっており、包含層は全く存在しなかった。地山面を精査したが、遺構は検出されなかった。 $16 \sim 19$  トレンチではピット・土坑が検出され、本発掘調査対象となった。南側の  $20 \cdot 21$  トレンチは地形が大きく下がり盛土が見られ、その下から岩盤が検出された。遺構・遺物は検出されなかった。

22トレンチは建屋川左岸のやや高い部分にあたるが、削平を受けたようだ、耕土下で地山が検出され、 遺構は確認されていない。23・24トレンチは22トレンチの南側に位置し、盛土がなされて資材置場に なっていた部分である。部分的に大きな撹乱坑が認められたが、それ以外では比較的安定した遺構面が 確認された。遺物は小片だけであったが、ピットも検出されたので、23トレンチより南側を要調査範 囲とした。(場市 A 地区)

24トレンチと 25トレンチの間には町道が通っており、道路下の調査は不可能であったので、町道によって地区を分けている。  $25\sim 27$ トレンチでも部分的に撹乱坑が認められたが、遺構面は検出された。調査区に南北に農道が通っており、その東側は狭くて確認調査トレンチを設定することが出来なかったが同様の結果と判断し、農道によってB西地区・B東地区と分けた。土坑・ピットも検出され、弥生土器から中世の須恵器が出土している。  $28\sim 32$ トレンチはやや低くなっていくが、遺構面はすべてで確認されている。地山面は南にいくほど地形が下がっていくことが確認された。遺構面が深いこともあって、僅かに包含層が残っている。北から順に  $C\cdot D\cdot E$ 地区とした。農道が幾つか存在するので、その部分については後に調査することとし、D北地区と呼称した。遺構名は地区ごとではなく、主に北側から地区にとらわれず通し番号とした。

 $32 \sim 38$ トレンチの範囲が場市遺跡の範囲である。32トレンチの南側には建物があり、確認調査が出来なかったので、次年度に実施した。 $33 \cdot 34$ トレンチでは耕土直下で礫層になり、遺構・遺物は認められなかった。削平された可能性が高い。 $35 \cdot 36$ トレンチは小さな谷が存在しており、堆積層が厚く安定した面は確認されなかった。遺構は検出されていない。





第3図 確認調査風景

37・38トレンチは耕土下に約20cmの遺物包含層が検出され、輸入陶磁器など中世の遺物が出土している。一部礫層となる遺構面でピットなどの遺構も検出され、南側の町道まで調査が必要と思われた。(F地区)

餅耕地川を渡った39~42トレンチは広瀬遺跡の範囲である。39トレンチでは大形の落ち込み・ピットが検出され、竪穴住居跡の可能性が高く弥生時代後期の集落跡が残存しているものと思われる。40トレンチでは明確な遺構は検出できなかったものの、39トレンチと同じ遺構面が検出されている。41・42トレンチでは遺構・遺物は確認されていない。42トレンチから建屋川を渡り県道に接続する部分までは調査段階で確認トレンチを設定することが出来ず、後日の確認調査となった。県道を隔てたところに周知の野谷遺跡が存在し、その範囲が広がっているかもしれない地域である。

2回目の確認調査(200213)は2002年8月23日に、トレンチ2本を設定した16㎡の確認調査を実施した。広瀬遺跡南側のバイパス南端部分を対象としたものである。現県道に接した部分である。45トレンチは谷状の地形をしており、大きく落ち込んでいる。安定した面はなく、野谷遺跡が広がっている可能性は低いものと思われる。南側の一段高いところに設定した46トレンチは大きな撹乱坑があり地山面まで達していた。それ以外でも遺構は認められず、遺物も出土していない。

3回目の確認調査(2003085)は 2003 年 4 月 23 日に行った。トレンチ  $1 ext{ <math>\tau$ } 所の  $8 ext{ <math>ml}$  の確認調査である。初回の調査でトレンチを設定出来なかった  $32 ext{ }$ トレンチの南側の部分が対象地である。建物に伴う整地土が  $15 ext{ }$  に加あり、その下に盛土が約  $1 ext{ }$  加存在し、そこに旧耕土があった。その下は洪水堆積物になっており、遺構・遺物は確認されなかった。その結果、場市遺跡  $E ext{ }$  地区の範囲は  $32 ext{ }$ トレンチまでを本発掘調査とした。





第4図 確認調査トレンチ

4回目の確認調査(2003247)は当初1日の予定であったが、地権者の都合で2回に分けて行った。 トレンチ2ヶ所の調査で $16 \text{ m}^2$ の確認調査である。 $2003 \pm 10 \text{ 月} 9 \text{ 日に北側} 043 トレンチの調査を行った。$ トレンチの両壁で土層が異なっており、東から西に向かって急激に落ち込んでいく部分であった。西側 は礫層が厚く堆積しており、ともに遺構は認められなかった。南側の44トレンチは2004年1月20日 に行った。宅地に伴う整地土の下は礫層で遺構は検出されなかった。

#### 調查主体 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調查事務所

事務担当		所長	藤本修三
		主幹	輔老拓治
	企画調整班	主任調査専門員	井守徳男
		主査	甲斐昭光
	総務課	課長	森 俊彦
		主査	若林洋子
	調査第1班	調査専門員	吉田 昇
調査担当	調査第1班	主査	渡辺 昇

主查



第5図 調査風景

#### 3. 本発掘調査の経過

平成15年度に昨年度の確認調査結果を基に本発掘調査を実施した。2003年9月2日から11月28日 までの実働48日間を費やして、計3.241㎡を調査した。夏の終わりに調査打合せを行い、広瀬遺跡か ら調査を開始した。並行して場市遺跡下地区に着手し、原則的に南から北に向かって調査を行った。 機械掘削を行い、原則路線内に横置きとし、置けない場合は路線内に小運搬を行った。

别府洋二

調査範囲内に町道が通っており、生活道路として必要であり本発掘調査時に一気に面的な調査を行う ことは困難であった。そこには上下水道も通っていることから、その切替工事も必要であった。場市遺 跡のB東地区がそれに該当する。また、農道として使われていることから耕作時に調査することが出来 ない地区もあった。D北地区がそれに該当する。そのため、仮設道敷設工事と水道切替工事が終了した 年度末の3月16日から29日の実働11日間をかけて2地区220㎡の本発掘調査を実施した。(調査番号 2003248)

調査主体	兵庫県教育委員	員会埋蔵文化財調金	<b>上</b> 事務所	F
事務担当		所長	平岡慧	影昭
		主幹	輔老扬	石治
	総務課	総務課長	織田』	E博
	企画調整班	主任調査専門員	井守德	恵男
		主査	中川	涉
		課付	稲田	毅
調査担当	調査第1班	調査専門員	吉田	昇

主查



第6図 現地説明会風景

#### 4. 整理作業の経過

一部の作業については発掘調査中などに実施していたが、本格的には平成18・19年度の2ヵ年をか けて行った。兵庫県教育委員会が調査主体となり、埋蔵文化財調査事務所・考古博物館で実施した。平 成18年度は台帳作成・水洗い・注記・接合作業などから実測までを、平成19年度はそれ以降の拓本作 業と金属器の保存処理・写真撮影そして執筆編集作業を実施し報告書を刊行した。

#### 調査の組織

#### (平成18年度)

調査主体 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調查事務所

事務担当 所長 平岡憲昭

主幹 池田正男

総務課 主幹兼総務課長 若生晃彦

> 主杳 内匠靖彦

整理保存班 主任調查専門員 岡崎正雄

> 主杳 菱田淳子

調査管理 整理保存班 担当課長補佐 調査担当

担当課長補佐 渡辺 昇 調査員



眞子ふさ恵・西口由紀・木村淑子・奥野政子・川村由紀

#### (平成19年度)

調査管理

兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部 調査主体

嘱託員

事務担当 部長 若生晃彦

> 主幹 岡崎正雄

総務部 総務課長 若狭健利

> 主查 橋本弘昭

整理保存班 調査専門員 西口和彦

> 主查 菱田淳子

整理保存班 担当課長補佐 調査担当 調査員 担当課長補佐 渡辺 昇

> 嘱託員 古谷章子・杉本淳子・島田留里・友久伸子・西口由紀

岡田章一

島村順子・蔵 幾子・奥野政子・川村由紀・荒木由美子

第8図 整理作業風景

藤池かづさ・吉村あけみ

(保存処理) 調査員 主查 岡本一秀

> 嘱託員 栗山美奈・大前篤子・藤井光代



第9図 調査地点図

## Ⅱ 位置と環境

野脇・場市・広瀬遺跡の所在する建屋は、養父町の南西部に位置しており八代峠を越えると朝来郡になる。また、南東方向を登ると和田山町藤和を経て竹田城のある竹田へとつながっている。円山川の支流である大屋川に注ぐ建屋川の中心をなす集落に所在する遺跡である。建屋川を下ると養父町浅野で大屋川と合流し、東に流れて養父市場で円山川に注いでいる。建屋川は大路山西麓の唐川に源は発し、大屋川との合流部まで14.6 kmを測る。建屋までは合流部からは8.6 km、源からは6 kmである。

旧石器時代の遺跡は高原で確認されている。養父市域では関宮町轟の杉ケ沢遺跡で比較的遺跡の性格が明らかになりつつある。発掘調査も数回行われ、高松龍暉氏を中心とする分布調査成果と加えて遺跡の範囲と地区ごとの継続性が判明している。旧石器から縄文時代後期にかけて集落を営んでいる。高原の湧水地や日当たりの良い地点を選んでいる。杉ケ沢遺跡の対岸である北側丘陵上の鉢伏高原そしてやや下方の外野野遺跡や別宮家野遺跡でも縄文時代の遺跡が多く確認されている。建屋川の西側の尾根上である円山高原や上山



第10図 杉ケ沢遺跡

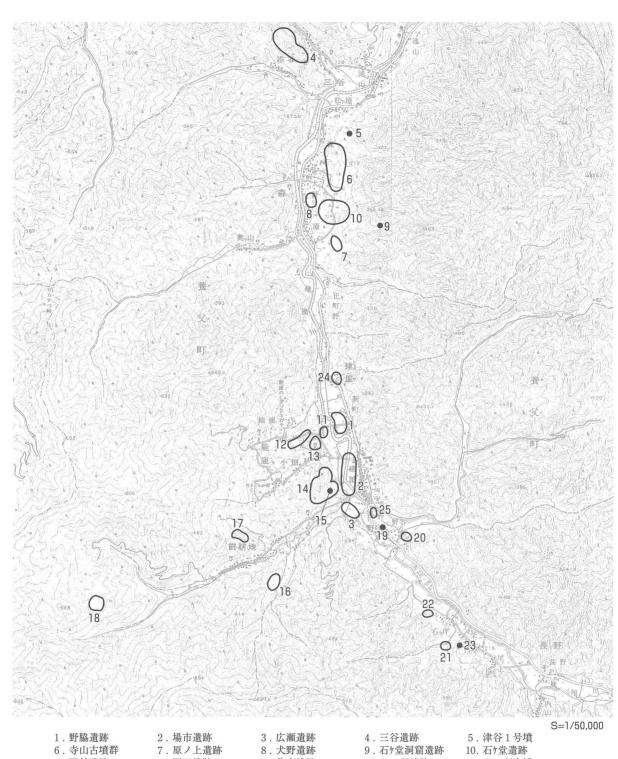
高原でも同様の遺跡が展開している可能性が高い。森石ケ堂遺跡では有舌尖頭器が出土しており、縄文早期からの遺跡である。県下で数少ない岩陰遺跡とされていたが、明瞭な遺構・遺物は検出されていない。今回調査した建屋川流域でも縄文時代の遺跡が少なからず確認されている。野外遺跡などで縄文時代前期と後期・晩期の土器・石器が採集されている。石ケ坪遺跡でも晩期の土器がまとまって出土している。また、明確な遺跡ではないが、町内で石棒が祭祀に使用されている。建屋谷上流の長野六地蔵に祀られている。同じように観音塚古墳横の墓地にある無縁仏の上にも同じタイプの石棒が見られる。辻遺跡

れている。同じように観音塚古墳横の墓地にある無縁仏の上にも同じタイプの石棒が見られる。辻遺跡など豊岡市を中心とした北但馬に多く出土している遺物であり、それが遺跡から離れて祀られていることは興味深い。

弥生時代の遺跡は旧養父町域では余り知られていない。遺跡の分布は建屋川流域の野脇遺跡周辺の方が多く知られている。前期では今回調査した広瀬遺跡ややや下流の森の犬野遺跡で出土例がある程度である。養父市域に広げても八鹿町家の下遺跡、関宮町前川向遺跡・門川遺跡で出土例がある程度である。但馬全域でも数多くの遺跡が展開しているわけではない。その中で調査例の少ない建屋川一帯は山間部でありながら前期の遺跡が存在する地域として挙げられる。

中期になると建屋川流域では前半の遺跡は確認されていないが、後半になると餅耕地のササ遺跡で早い段階に遺物がまとまって出土している。完形に復原され南但馬を代表する遺物として知られていた。 今回調査した場市遺跡でも同時期の遺構が検出されている。旧養父町域では遺跡数は増加しないが、大 藪古墳群などで石鏃が採集されており、遺跡が確認される可能性は考えられる。

後期は今まで余り多くの遺跡は知られていなかった。集落よりも丘陵上の墓が多く検出されていた。 今回調査した広瀬遺跡はこの時期の集落であり、遺構は検出されていないながらも建屋川流域に前期から継続して文化は浸透していたと思われる。養父町では確認されていないが、高地性集落も但馬では確認されつつある。朝来市大盛山遺跡は環濠を伴った集落であり、八鹿町東家ノ上遺跡、大屋町田谷遺跡、



1.	野脇遺跡
6.	寺山古墳群
1.1	照了 内、审 叶

11. 野外遺跡 16. ササ遺跡 21. カンダキダ遺跡 12. 岡田遺跡 17. 持河内城跡 22. 石ヶ坪遺跡 3. 広瀬遺跡 8. 犬野遺跡 13. 能座遺跡 18. 宝生院地蔵堂跡23. 柴山古墳

4. 三谷遺跡 9. 石ケ堂洞窟遺跡 14. ウスギ城跡 19. 野谷古墳 24. 立石遺跡

5. 津谷1号墳 10. 石ケ堂遺跡 15. ウスギ古墳 20. 野谷城跡 25. 野谷遺跡

第11図 野脇・場市・広瀬遺跡の位置と周辺の遺跡





第12図 観音塚古墳

豊岡市亀ケ碕遺跡・深谷遺跡などが調査されている。

古墳時代の集落は朝来市和田山町の加都遺跡、山東町の粟鹿遺跡・柿坪遺跡などで多数の竪穴住居跡が検出されており、朝来市筒江大垣遺跡では土器つくりの粘土採掘坑が確認され、近隣の片引遺跡では多数の土器が出土している。加都周辺で主に遺跡が確認されているが、円山川沿いの各地でも確認されている。建屋川流域では、今回の広瀬遺跡・場市遺跡ではじめて知られるようになった。縄文期の集落である鉢伏遺跡群や杉ケ沢遺跡でもこの時期に生活を再開している。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけての墳墓は尾根上で階段状に検出されている例が但馬では多く 見られる。豊岡市妙楽寺墳墓群などが代表的な遺跡で、南但馬でも朝来市柿坪中山墳墓群をはじめ市乗 寺古墳群・梶原古墳群など多くの墓が知られている。尾根筋に直交する溝を設けて墓域を画しているも ので、明瞭な墳丘は持たない小規模な墳墓である。今のところ養父町域では検出されていない。

前期の古墳は朝来市和田山町城の山古墳・同若水 A11 号墳と豊岡市の森尾市尾古墳・同小見塚古墳が確実な首長墓となる前期古墳である。城の山古墳は径 36 m以上の大形円墳である。葺石・埴輪列の外部施設はなく、長さ 6.4 m・幅 0.6 mの長大な木棺を主体部としている。棺には仕切り板が立てられ3室に分けられている。東部分には工具と刀が入れられ、中央には鏡 6 面と石釧 4、合子 1、琴柱形石製品 1、勾玉(硬玉・琥珀・ガラス)46 以上、管玉 91、刀 2、剣 1、ヤリガンナ 8、斧 1、刀子 8の多数豊富な副葬品が出土している。城の山古墳出土の三角縁神獣鏡は奈良県円照寺墓山 1 号墳鏡と同笵であることが判明している。森尾市尾古墳からは□始元年の魏の紀年銘が入った鏡が出土していることで注目された古墳である。主体部の木棺が長いのは但馬の特徴で、城の山古墳の 6.4 mをはじめ次代に構築された筒江中山 23 号墳が 8.0 m、茶すり山古墳が 8.7 m、大屋川上流の田和古墳が 5.7 mなどであ





第13図 禁裡塚古墳・こうもり塚古墳





第14図 建興寺・餅耕地所在の石造物

る。それ以外に小規模な前期の古墳も調査されている。山東町馬場 19 号墳・同東南山 2 号墳などである。 大形の前方後円墳は山陰道と但馬道の合流する朝来市和田山町平野に池田古墳が築かれる。山陰本線による土取りで墳丘は失ったが全長 141 mの盾形の堂々たる古墳である。葺石・埴輪列の外部施設も整っており、墳丘規模から考えて長持形石棺が埋納された首長墓であろうと推測される。朝来町の船宮古墳が池田古墳に続く首長墓である。その後に和田山町岡田古墳群が造営される。大規模な古墳は南但馬に集中するが、北但馬でも中期古墳は築かれている。前方後円墳は豊岡市納屋ホーキ古墳だけで、大形の円墳である茶臼山古墳や深谷古墳群で方墳が構築されている。主体部も木棺か石棺直葬である。カチヤ古墳は陰石の板材を使ったシスト系の石棺である。小口から小形の珠文鏡が出土している。

養父町では後期になって古墳が築かれはじめる。6世紀前半に遡るのが確実なのは谷間地峠の北側 に位置する観音塚古墳である。上部は損壊を受けていたが、竪穴系横口式石室と考えている。観音塚古 墳の南側尾根に上野1号墳がある。観音塚古墳と同じ地形で、埴輪・管玉・紡錘車が出土しており、古 式の石室かと思われる。場市遺跡の西側尾根上に存在するウスギ古墳は大形の円墳である。外形と規模 から見て古式の古墳になる可能性が高い。ただ、建屋流域には古墳の数は少なく、建屋の3基以外に長 野の柴山古墳・野谷古墳、森の寺山古墳群(10基)、三谷の津谷古墳しか確認されておらず、後続する 古墳が少ないことが異質である。6世紀後半になると大藪古墳群に代表される古墳が多数構築されてい る。主に円山川流域に築かれ、大藪古墳群は但馬の基準資料となる古墳群である。禁裡塚・塚山・西の 岡・コウモリ塚の4基が大形石室で首長系列となる古墳である。また、野塚支群の18号墳からは環頭 太刀が出土している。流域には沢原古墳群・口米地古墳群・中米地古墳群・鉄屋米地古墳群・大塚古墳 群・三月野古墳群さらに和田山町の高田古墳群と右岸では多数の古墳が知られている。それに比べて左 岸には少数である。大屋川流域は建屋川流域ほど少なくはないが、円山川右岸のような稠密な分布は示 していない。2~5基でなる古墳群が広がっている。基数が多いのは観音塚古墳の背後の谷間地古墳群 が20数基から構成されている。谷間地南側の堀畑1号墳は大形の横穴式石室を有する円墳である。大 藪古墳群の大形石室と同等の規模を有している。地理的に墳丘はより大きく感じられる。近くから銅鏡 の破片が採集されており、観音塚古墳と近い時期の古墳が存在していた可能性が考えられる。鉄屋米地 古墳群には竪穴式石室も確認されており、葬法が箱式石棺・横穴式石室・竪穴住居跡と変化がある。八 鹿町域では戊辰年銘の太刀が出土した箕谷古墳群や国木トガ山古墳群・東家の上古墳群が著名である。 八木川流域は4世紀後半から7世紀まで継続して連綿と古墳が築かれている。古墳時代の但馬の特徴と して前期の階段式の古墳が多いこと以外に、7世紀になって造墓活動が盛んになることがある。8世紀

代になるまで小規模な横穴式石室が構築されている。

古墳時代の須恵器窯跡は最も古いものは豊岡市竹野町鬼神谷1号窯跡で5世紀末と古いものである。 その後、豊岡市北部や日高町など北但馬に多く築窯されるが、南但馬でも岡田古墳群の中に岡田窯跡が 6世紀末に築かれ、さらに朝来町松谷窯跡・八鹿町トガ山窯跡で生産が行われている。平行して瓦窯も 豊岡市三宅・日高町上之郷に築かれる。

但馬での古代寺院は多くはない。国分僧寺・国分尼寺が日高町に造営され、朝来町立脇廃寺など数少ない。

最近の調査で古代駅路関係の遺跡が確認されている。山陰道は丹波から遠坂峠を越えて但馬に入るが 峠を下った柴遺跡では駅子の木簡や神功開寳が出土しており、粟鹿駅家と考えられるようになった。和 田山町加都遺跡では播磨から来る但馬道の道が検出されている。加都遺跡周辺で山陰道に合流し、養父 町に郡部駅屋があったが、位置は明確ではない。大屋川と合流する上野付近が候補地である。古代官道 に沿って古代の遺跡は展開している。国府の置かれた日高町と第1次国府の可能性が残される出石町に 多くの遺跡が集中している。但馬の最大の特徴は木製祭祀具の多さである。出石町袴狭遺跡群では十万 点以上と言われる多数の祭祀具が出土しており、祓の道に人形・馬形・斎串などが大量に置かれていた 状態で出土している。木簡・墨書土器・石帯・銭貨も出土している。養父町では古代の遺構は確認され ていないが、大屋川南側の上野周辺に光寺があったと伝えられている。駅家名の郡部から近くに郡衙が あったのではと推測されるが、その痕跡は認められない。八鹿町では東家の上遺跡で掘立柱建物跡が、 殿屋敷遺跡で溝が検出され、石帯・墨書土器などの官衙的遺物が出土している。この周辺に郡衙があっ た可能性が高い。山陰道から但馬国府に分岐する地点であることも有力な根拠である。

中世になると、当然荘園に組み込まれていく。平清盛が最初に但馬守に任じられたことから、平氏関係の領主が多く、また武士も平氏の系譜なる名を語ることが多かったようである。歴史的に著名で興味深いのは、一乗谷朝倉氏の出自が養父市八鹿町朝倉であることである。建屋周辺の荘園は弘安8(1285)年の『但馬国大田文』によると、尊勝寺領建屋庄、尊勝寺領建屋新庄、国衙領の建屋紙工の3ヶ所が記載されている。建屋庄は建屋を中心とした谷南半部で、森より北側に残りの2庄が存在したと考えられている。森には祐徳寺があり、建屋の1中心地でもあったようである。建屋は地元氏族が配置されており、関東御家人ではない。姓も建屋を名乗っており、朝倉氏と同じく日下部氏の系列かと思われる。





第15図 竹田城跡

## Ⅲ 野脇遺跡の調査結果

#### 1. 位置

調査遺跡のなかでは最も北側にあたり、建屋川の下流側に位置する。場市遺跡 A 地区とは 200 m離れている。

#### 2. 遺 構

確認調査の結果、1,031 ㎡を対象とした。中央に能座に向かう町道が東西方向に通っていることから、 北側を A 地区(571 ㎡)、南側を B 地区(460 ㎡)として調査した。圃場整備によって地形は改変され ているものと思われ、高い部分は削平されているようである。両地区とも基本土層は同じである。①表 土 ②黒褐細砂 ③地山(褐中砂か礫)となっており、地山面で遺構を検出している。全体的に堆積土 は薄く、耕土直下が遺構面となる部分も多くある。

#### A 地区

検出した遺構は、掘立柱建物跡・柵・溝・土坑・ピットである。掘立柱建物跡は6棟調査している。柵としたものも、掘立柱建物跡の1辺の可能性がある。掘立柱建物跡は主に北端からSB01~06と名付けている。

#### **SB01**

調査区北側で検出した  $2 \times 2$  間の建物跡で主軸は  $N4^\circ$  W である。北側に SA01 が存在しているが端部が揃っておらず、柵の方が短いので時期の異なる遺構かと思われる。西辺は比較的しっかりしているが南北の中央の柱穴は判然としない。西辺で  $4.8~\mathrm{m}$ 、北辺で  $4.5~\mathrm{m}$ を測る。中央にもピットは存在するが柱が通らないので、側柱建物と考えられる。

#### **SB02**

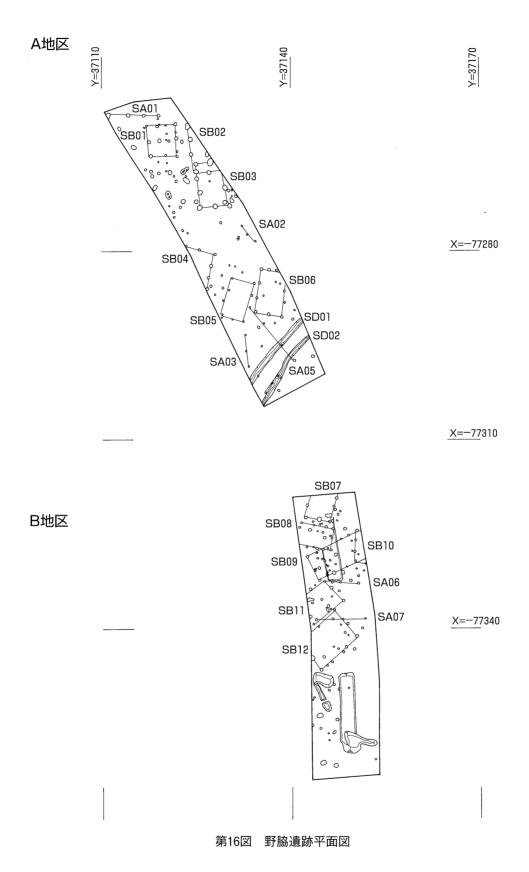
SB01 の東側で検出した南北 3 間以上、東西 1 間以上の建物で東側の調査区外に延びている。南から 2 番目のピットは位置的に総柱建物を示唆するが、現状では断定は出来ず、側柱建物とする方が妥当である。南北 7.4 m以上で、柱間の距離は心々間で南から 2.8 m・2.3 m・2.3 mとなる。東西は 2.3 mを測る。柱穴も径が  $0.7\sim0.8$  mで最大長は 1.1 mと大きい。深さも上面が削平されているに関わらず、最大 1 mと深いものである。

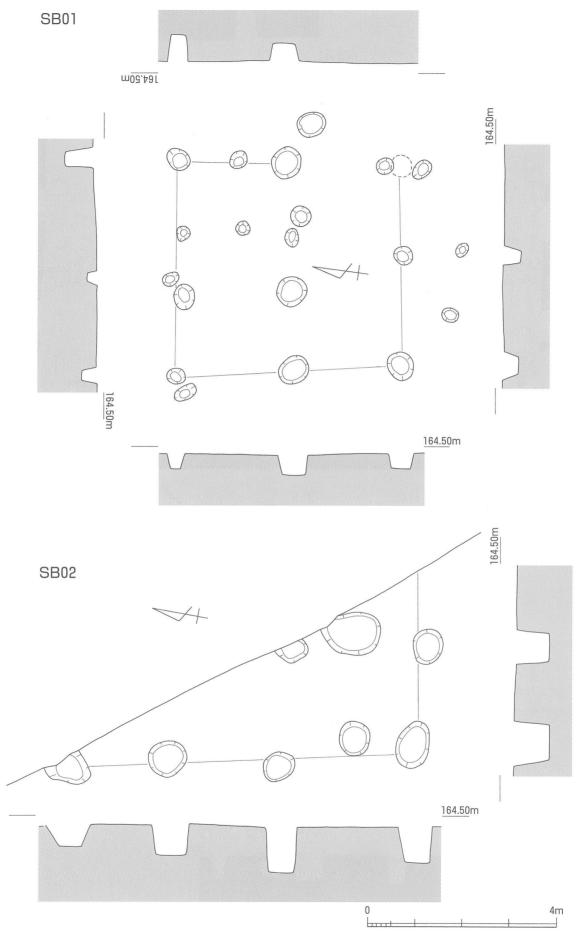
#### SB03

SB02 の南側にあり、一部切り合い関係にある。北東部分が調査区外になっているが、東西 2 間、南北 3 間の側柱建物と思われる。主軸は N4°W と SB01 と同じ方位を採る。東西  $4.8\,\mathrm{m}$ 、南北  $7.1\,\mathrm{m}$  を測る。柱間は西辺で南から  $2.5\,\mathrm{m} \cdot 2.3\,\mathrm{m}$ 、南辺では  $2.4\,\mathrm{m} \cdot 2.4\,\mathrm{m}$ となる。柱穴は比較的円形の平面形を呈しており径  $0.7\sim0.9\,\mathrm{m}$ とやはり大形である。深さも最深で  $0.9\,\mathrm{m}$ と深い。北辺中央の柱穴は南北に長い長楕円形で最大  $1.35\,\mathrm{m}$  を測る。

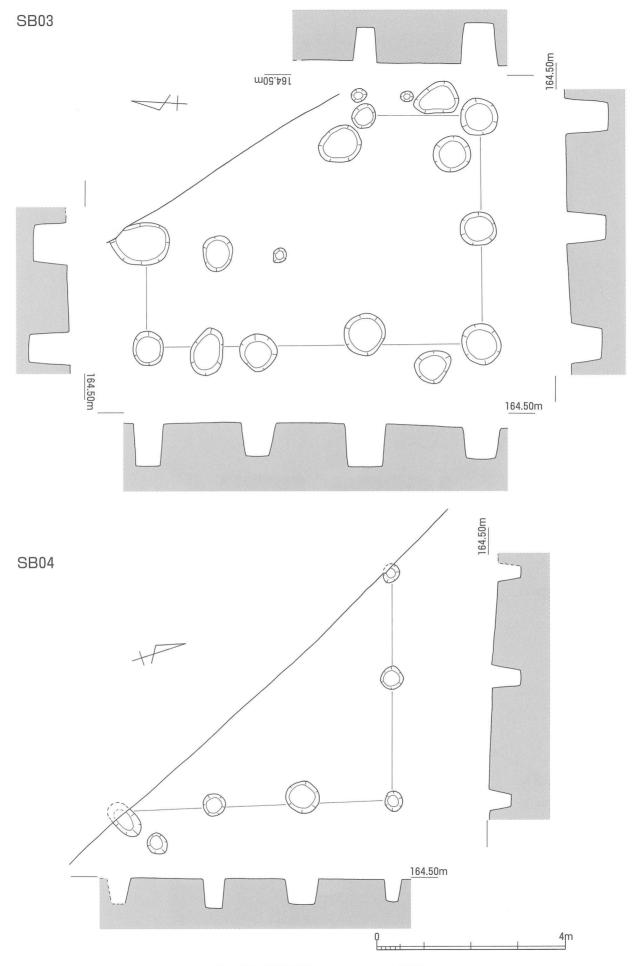
#### **SB04**

A 地区中央に位置し、調査区西側に延びている。東西 2 間以上、南北 3 間以上の側柱建物である。北辺は西から  $2.3 \text{ m} \cdot 2.5 \text{ m}$ の 4.8 m、東辺は北から  $1.8 \text{ m} \cdot 2.0 \text{ m} \cdot 2.0 \text{ m}$ の 5.8 mを測る。径はやや小振りで北辺は径 0.5 mで深さも  $0.5 \sim 0.6 \text{ m}$ である。東辺の北から 2 番目の柱穴だけ径 0.65 mと少し大きい。

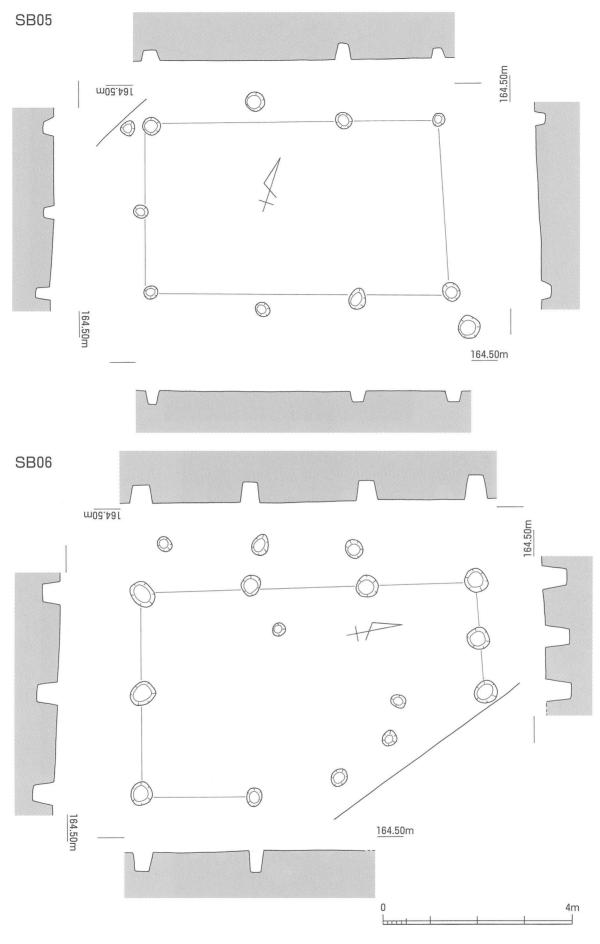




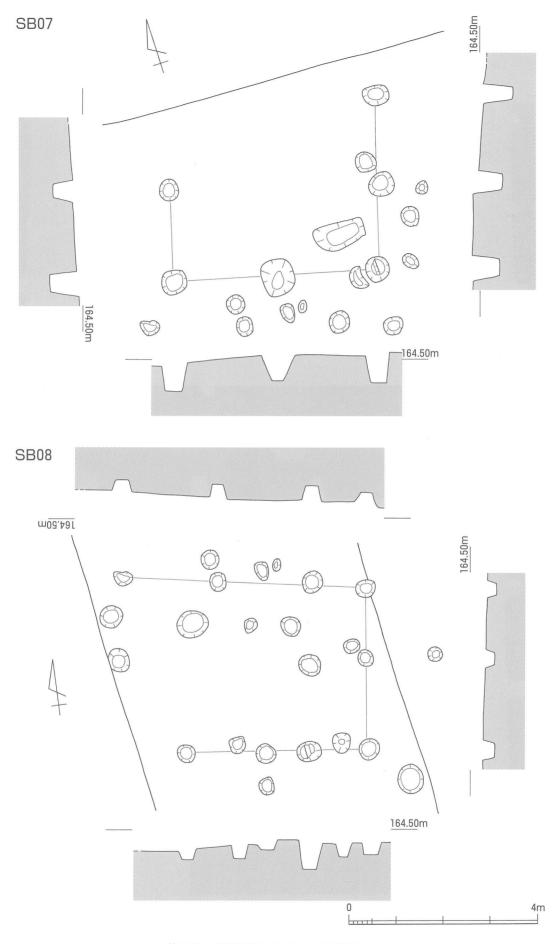
第17図 野脇遺跡SB01·SB02実測図



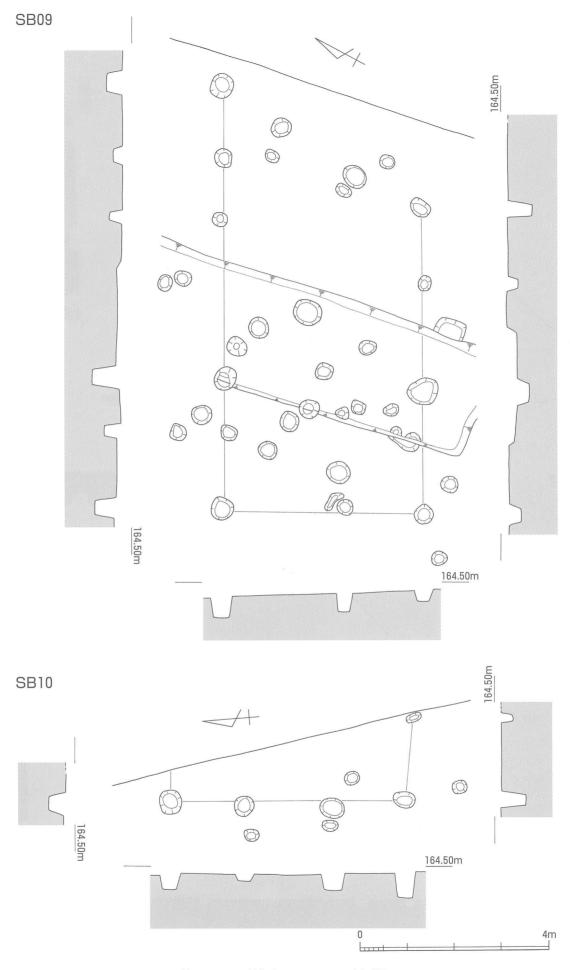
第18図 野脇遺跡SB03·SB04実測図



第19図 野脇遺跡SB05·SB06実測図



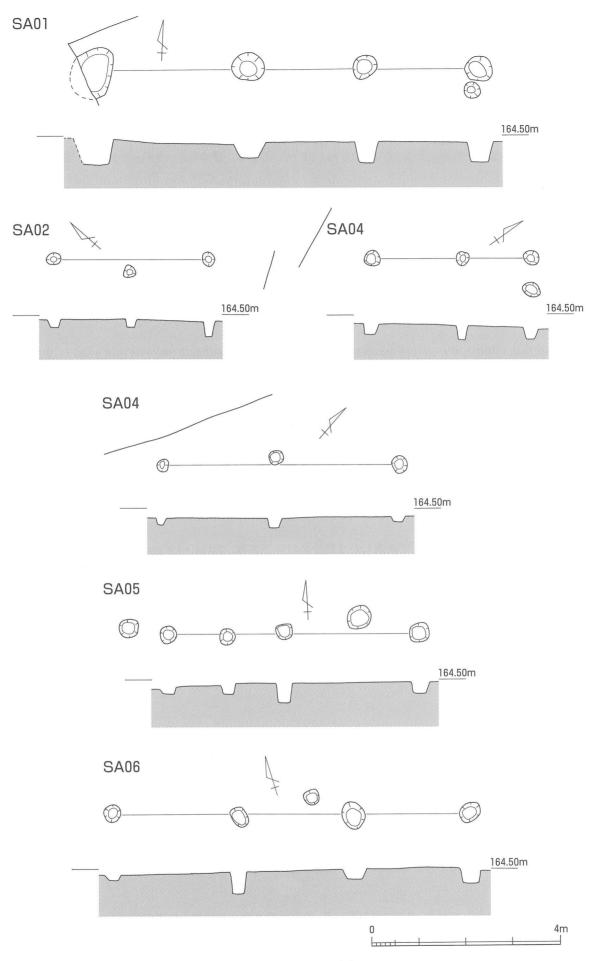
第20図 野脇遺跡SB07・SB08実測図



第21図 野脇遺跡SB09·SB10実測図



第22図 野脇遺跡SB11·SB12実測図



第23図 野脇遺跡柵跡実測図

主軸は N10° E と SB01 ~ 03 とは異なっている。

#### **SB05**

SB04 の南東に位置し N18° E と僅かに方位を変えていることと SB06 と近接していることから、時期の異なる建物と思われる。東西 2 間、南北 3 間となる側柱の南北棟である。東西 3.6 m (南辺西から 1.8 m・1.8 m)、南北 6.2 m (西辺北から 2.0 m・2.0 m・2.2 m)となる。径は  $0.3\sim0.4$  mと小さく、深さも  $0.2\sim0.3$  mと浅い。

#### SB06

SB05 の北東に築かれており、SB05 北東コーナーと西辺で  $0.7\,\mathrm{m}$ と近接している。主軸は SB04 と同じ N15° E でほぼ北辺を合わせていることから同時期かと思われる。SB05 が新しい時期かと思われる。北東コーナーは調査区外であるが  $2\,\mathrm{ll} \times 3\,\mathrm{ll}$ の南北棟である。側柱建物で南北  $7.0\,\mathrm{m}$ 、東西  $4.3\,\mathrm{m}$ を測る。心々 llで南辺では西から  $2.2\,\mathrm{m} \cdot 2.1\,\mathrm{m}$ 、西辺では北から  $2.2\,\mathrm{m} \cdot 2.4\,\mathrm{k}$  となる。深さは  $0.4\,\mathrm{m}$  前後である。 SA01

調査区北端で検出している 3 間分の柵跡である。北側に延びる掘立柱建物跡の可能性が高い。主軸方向は N4°W と SB01 と同じである。

#### **SA02**

調査区中央で確認している。南北2間で調査区東側に延びる掘立柱建物跡の可能性も考えられる。

#### **SA03**

調査区南側の溝の北側で検出している。南北 2 間で 1 間 2.5 mの 5.0 mを測る。深さは  $0.11 \sim 0.18 \text{ m}$ と浅いが、南側の方が削平されていることを考慮すると、もっと深かったかもしれない。

#### **SA04**

調査区南端の SD02 に平行して確認した 2 間分の柵跡である。  $2.0~\mathrm{m} \cdot 1.4~\mathrm{m}$ の  $3.4~\mathrm{m}$ で溝ののちに築かれた遺構である。

# SD01

調査区南側にあり、SD02 と平行して存在する。道跡のような一対の遺構の可能性も想像される。東西とも調査区外に延びている。幅  $0.8~m\sim1.0~m$ 、深さ  $0.2~m\sim0.3~m$ を測る。ほぼ直線的に延びるが、僅かに南側に弧状となる。溝が埋まった段階でピットが存在している。そのことから、古墳時代後期より古い時期が想定される。

## SD02

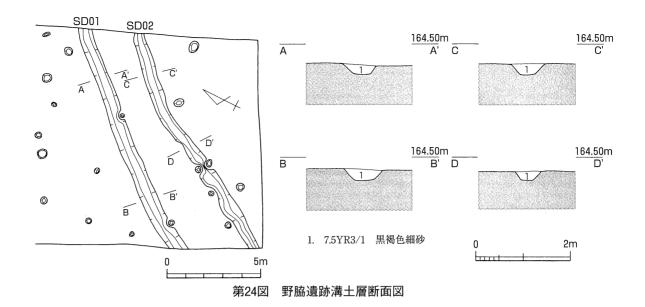
調査区南側にあり、SD01 の南側約 2.5 mの位置にほぼ平行している溝である。一連の遺構と考えられる。SD01 より弧状になっている。規模はほぼ同じで、幅 0.6 m  $\sim 0.9$  m、深さ 0.2 m  $\sim 0.3$  mを測る。埋土は 1 層で礫混じりの黒色シルト質極細砂である。

## B地区

検出した遺構は、A地区とほぼ同じで掘立柱建物跡・柵・溝・土坑・ピットである。掘立柱建物跡は6棟調査している。柵としたものも、掘立柱建物跡の1辺の可能性がある。

## **SB07**

調査区北端で検出しており、北側に延びている。東西 2 間で南北 3 間以上の南北棟である。側柱建物で、主軸は N5°E である。 東西は 1 間 2.2 m の 4.4 mで、南北は 1 間 1.8 mである。深さは  $0.3 \sim 0.7 \text{ m}$ あり、コーナーの柱穴は深い。



#### **SB08**

SB07の南側に平行した位置に築かれている。東辺が通っており、同時並存した建物と思われるが、 1 m と近接している。南北 2 ll の 3.4 m を測る東西棟である。東辺は北から 1.4 m ・ 2.0 m である。他の 掘立柱建物跡に比べて浅く、柱穴の深度は 0.2 m 前後である。西側は調査区外に延びており、 3 ll 以上の建物である。北辺で東から 1.2 m ・ 2.0 m ・ 2.0 m を測る。

#### SB09

SB09 と空間を共有する切り合い関係にある掘立柱建物跡で、東側調査区外に延びている。主軸方向は N30°W となっており、A 地区の建物とは方位を変えている。南北 2 間で東西 3 間以上の東西棟である。西辺は北から  $2.5~\mathrm{m}\cdot 1.5~\mathrm{m}$ の  $5.0~\mathrm{m}$ で、東西の検出長は  $9.5~\mathrm{m}$ である。北辺は西から  $2.8~\mathrm{m}\cdot 3.4~\mathrm{m}\cdot 2.8~\mathrm{m}$ を測る。浅い柱穴は  $0.2~\mathrm{m}$ であるが、深いところは  $0.6~\mathrm{m}$ となる。

#### SB10

調査区北側で東側に延びている建物で、SB08 の東側に位置し、SB07・ SB08 と近い主軸を採っている。僅かに西に振りほぼ南北に主軸を有する。南北 3 間で北から  $1.5 \text{ m} \cdot 1.8 \text{ m} \cdot 0.5 \text{ m}$ となる。西辺の両端は  $0.4 \text{ m} \cdot 0.5 \text{ m}$ とやや深いが、間の柱穴は  $0.2 \text{ m} \cdot 0.35 \text{ m}$ と浅い。

# SB11

SB09 の南西コーナーと接する位置にあり、調査区西側に延びている。南北 2 間で東西 2 間以上の東西棟である。主軸は N40° E と今までの建物とは主軸が異なっている。東辺は北から 2.0 m・1.5 mの 3.5 mを測る。南東部の柱穴だけ 0.5 mだが、それ以外は 0.2 m  $\sim$  0.3 mと浅い。

## **SB12**

SB11 の南側に位置している、やはり西側調査区外に延びている。南北 2 間、東西 3 間の東西棟である。主軸方向は SB11 と同じ N40° E である。東辺で北から 3.0 m·2.4 mの 5.4 m、南辺で東から 2.4 m·3.2 m·2.2 mの 7.8 mである。深さは 0.2 m~ 0.4 mと浅い。柱穴の径も最大で 0.7 mで、0.4 m前後の楕円形が多い。SA05

北側の建物群の南側にある 4 間の柵跡であるが、掘立柱建物跡であった可能性も考えられる。主軸方向は SB07 と同じ N5° E で長さ  $5.0~\mathrm{m}$  を測る。西から  $0.8~\mathrm{m}\cdot 1.2~\mathrm{m}\cdot 1.2~\mathrm{m}\cdot 1.8~\mathrm{m}$ である。東端のピットは底に礎盤となる石材が置かれていた。東から  $2~\mathrm{m}$  目だけ  $0.4~\mathrm{m}$  と深く、他は  $0.11~\mathrm{m}$  から  $0.2~\mathrm{m}$  と浅い。

位置的に SB07 ~ SB09 の柵跡と考えている。

#### SA06

SA05の南に $5.2\,\mathrm{m}$ 離れている。主軸方向はSA05より振っており、N15°Eである。 $3\,\mathrm{ll}$ 分検出しており、やはり掘立柱建物跡の可能性も残されている。  $1\,\mathrm{ll}$   $2.6\,\mathrm{m}$ の  $7.8\,\mathrm{m}$ である。主軸方向が同じ建物がないことから、どの遺構とセットになるかは不明である。

# 3. 遺物

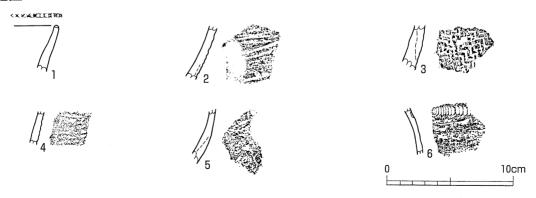
A 地区出土土器

## 縄文土器 (1~6)

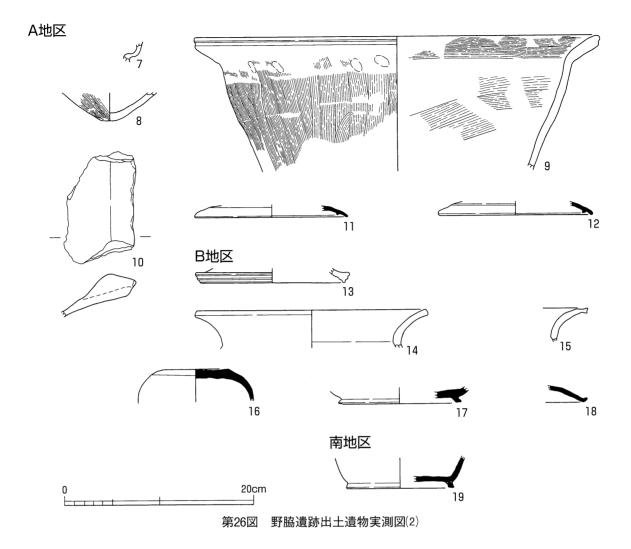
6点とも小片である。(1) は僅かに内湾する口縁部で、端部に刻みが施されている。砂粒を含み、に 
ぶい黄橙から黄褐を呈する。(2) は斜め方向に条痕文の残る深鉢である。内面黒から黒褐、外面にぶい 
黄橙から褐灰を呈し、砂粒を含んでいる。金雲母が目立つ。(3) は深鉢体部で押形文が施されている。 
山形のもので稜線がはっきりしている。器壁は厚く 12 mm前後である。砂粒多く含み、色調は外面にぶい橙、内面にぶい赤褐である。前期はじめである。(4) は磨滅が著しいが縄文の施された鉢である。時 
期は明らかにし難いが中期であろうか。砂粒含み、内面は浅黄橙からにぶい褐、外面は黒褐である。(5) 
条痕が施された鉢の底部に近い部分の体部である。強い条痕で成形しており、内面はナデである。砂粒 
多く含み、外面はにぶい黄褐から黒褐、内面は赤褐で一部黒褐である。2 次焼成を受けている可能性が 
高い。(6) は頸部に爪形の連続した押圧刺突文がみられる。内面はナデ調整し、外面には横方向の条痕 
がみられる。内面は黒褐、外面はにぶい赤褐から灰黄褐をしている。砂粒を含み、焼成は良好である。 
弥生土器 (7・8)

- (7) は口縁部の破片で甕である。ほとんど端部に近いが口縁端部は欠失している。受口状の口縁部で砂粒を多く含んでいる。にぶい黄橙をしている。(8) は甕底部で、小さな不安定な平底である。全体的には尖り底から大きく外傾する体部になる。底径 0.9 cmで残存高 3.0 cmを測る。内面は板ナデで外面と底面はハケ整形である。ハケは7本単位で9本/cmの細かいハケである。外面は明赤褐、内面は灰褐から黒褐である。内面底は有機質が付着した影響かもしれない。(7) は後期前半、(8) は後期末と思われる。土師器 (9・10)
- (9) は煤が付着した鍋である。明確な頸部を持たない口縁部で体部は屈曲しながらも直線的に延びている。口縁端部付近が暑く、角張るようにしてから端部を上方につまみ出している。端面には幅の広い

#### A地区



第25図 野脇遺跡出土遺物実測図(1)



1条の凹線が施される。外面は縦方向のハケ整形、内面は横方向のハケ整形ののち板ナデで仕上げている。口縁部内面も横方向のハケ整形がなされている。外面はハケメが口縁部まで及んでおり、体部を形成してから折り曲げて口縁部を作り出していることが看取される。折り曲げた際の指頭圧痕が認められる。ハケは粗い原体で  $5\sim6$  本/cmで 10 本単位である。口縁部はヨコナデで仕上げている。色調は内面がにぶい赤褐から暗赤灰で、外面はにぶい赤褐から黒褐である。外面には煤が付着している。

- (10) は竈である。幅広の粘土帯を付加して端部を厚くしており、端部はユビで押圧している。内面はヘラケズリで成形している。外面はナデで仕上げている。にぶい橙から明褐で、砂粒を含む。 須恵器 (11・12)
- (11) は杯蓋である。口縁端部付近の小片で、天井部は残存していない。内湾する体部で、断面三角形の反りが付く。端部は丸い。天井部近くはロクロケズリである。口径 16.0 cm、残存高 2.2 cmを測る。灰白で外面は自然釉が付着している。砂粒多く含む。(12)も杯蓋で、口径 16.0 cm、残存高 1.4 cmを測る。僅かに内湾するが直線的で内側に断面三角形の反りが付く。端部は丸く肥厚ぎみである。砂粒多く含み、灰から黄灰を呈している。

#### B地区出土土器

# 弥生土器(13)

高杯脚部である。直線的に広がり、端部は内外に肥厚する。端面には2条の凹線が施されている。色

調はにぶい黄橙から褐灰で端面上部だけ黒褐をしている。石英・チャートの砂粒を多く含む。裾部径15.2 cm、残存高 1.5 cmを測る。

## 土師器 (14·15)

- (14) は外反する甕口縁部で、端部は角張る。口径 240 cm、残存高 40 cmを測る。器表はにぶい橙で、器肉は黒褐をしている。砂粒多く含み、焼成は良好である。体部内面はヘラケズリと思われ、口縁部はヨコナデで仕上げている。(15) も甕口縁部である。小片であることから径を復原することは困難である。残存高 35 cmを測り、体部内面はヘラケズリで、口縁部はヨコナデである。にぶい橙からにぶい褐で砂粒多く含む。 須恵器 (16  $\sim$  18)
- (16) は杯蓋であるが、口縁端部を欠いている。残存高 3.5 cmを測り天井部は平坦で、ヘラ切りのままで未調整である。天井部端に板状工具の痕跡が見られることから、板ナデ調整をしかかったのかもしれない。ロクロケズリが一部にみられる。内面は1方向の仕上げナデが見られる。灰から灰オリーブを呈しており、小石粒を含んでいる。胎土はパサパサした感じを受ける白っぽいものである。(17)は杯Bの高台部である。底径が12.0 cmを測る。胎土・焼成とも良好である。ロクロナデで内面だけ仕上げナデが施される。高台は外側に肥厚させて踏ん張る形態を採っている。器肉は灰で器表は暗灰をしている。(18)は杯蓋で、小片であることと歪でいることから径を出すことはできない。天井部はロクロケズリである。口縁端部だけ黒褐で、器表は灰から灰白、器肉は灰である。小石粒を含んでいる。

# 4. 小 結

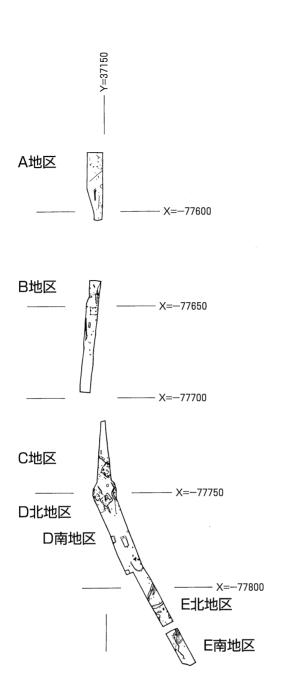
野脇遺跡では12棟の掘立柱建物跡と柵跡・土坑・溝などを検出した。圃場整備によって遺構面を削平され、包含層も削られている。そのことから、出土遺物が希薄であった。掘立柱建物跡は削平されているにも係わらず、深度が0.8mを越える規模の大きなものもあった。径も1mを超えるものがあり、大形の掘立柱建物跡群が存在したことが想定される。以前磨製石剣が出土したことから、弥生時代中期の集落を想定したが、調査では古墳時代の遺物が含まれていた。そのことから、大形柱穴を持つA地区の北側の南北に主軸を持つグループのみが弥生時代の掘立柱建物跡の可能性が残されている。ただ、出土土器からは中期にはならず、後期末とするのが妥当であろう。それ以外は古墳時代のもので、新しければ後期になると思われる。出土遺物の奈良時代に下るものはB地区南から本調査を実施していない確認トレンチから出土しており、掘立柱建物跡の時期を示すものではない。

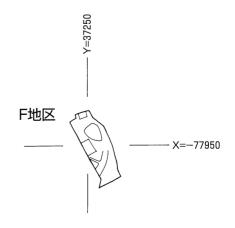


- 26 -

第1表 野脇遺跡及び周辺確認調査出土遺物観察表

番号	種別	器種	技法 他	形態の特徴	口	法量 (cm) 器高	底径	出土地区	遺構	層位	備考
	縄文土器	棒	ョコナデ、端部に刻み目	内湾し小さな反り	ı	(3.6)	ı	A地区		面精查	
	縄文土器	林	内面ナデ、外面条痕	内湾する	ı	(4.0)	1	A地区	SP07		
	縄文土器	棽	内面ナデ、外面山形押形文	外傾する	1	(4.5)	ı	2T		黑色細砂	
	縄文土器	棽	内面ナデ、外面縄文	外傾する	I	(2.7)	ı	4T		殿上内	
	縄文土器	綾	内面ナデ、外面条痕	内湾する	ı	(4.3)	1	A地区	SP04		
	縄文土器	核	内面ナデ、外面条痕、爪形押圧	内湾し小さな反り	I	(3.6)	1	A地区		面精査	
	弥生土器	覾	비기수구	外傾する	I	(2.3)	1	4T		大工村	
	弥生土器	搬	内面板ナデ、外面タテハケ	平底、外傾する	l	(3.0)	06.0	A地区		面精査	
	上師器	够	内面ヨコハケ、体部外面タテハケ	外傾する	(42.6)	(14.2)	1	A地区		面精査	
10	上節器	カマド	体部内面ヘラケズリ、ヨコナデ	外反する、端部角張り肥厚する	展(10.5)	幅(7.5)	厚2.7	A地区	SP03		
11	須恵器	杯(蓋)	ロクロナデ、ロクロケズリ	外反する、端部角張る	(16.0)	(2.2)	1	A地区		面精査	
12	須恵器	杯(蓋)	ロクロナデ、ロクロケズリ	内湾する	(16.0)	(1.4)	E	17T 周辺			
13	弥生土器	高杯 (脚部)	ヘラケズリ、ヨコナデ	内湾し端部外側に反る	ı	(1.5)	(15.4)	B地区		遺構面精査	
14	上節器	毈	内面ヘラケズリ、外面ヨコナデ	内傾する	(24.0)	(4.0)	I.	18T	SP12		
15	工師器	壺	ヨコナデ	外反し、端部肥厚する	ı	(3.5)	ı	B地区	SP01	完攝時出土	
16	須恵器	杯(蓋)	ロクロナデ、ロクロケズリ、仕上げナデ	天井部平たく、体部内湾する	ı	(3.5)	7.0	B地区		遺構面精査	
17	須恵器	杯B	ロクロナデ、仕上げナデ	高台外方に踏ん張る、	ı	(1.7)	(12.0)	B地区		遺構面精査	
18	須恵器	蓋	ロクロナデ	内湾し、端部上方へつまみ出す	ı	(1.8)	1	B地区		遺構面精査	
19	須恵器	杯B	ロクロナデ	平底で僅かに内湾する体部、方形高台	-	(3.4)	(11.2)	20T		松土	





第28図 場市遺跡地区図

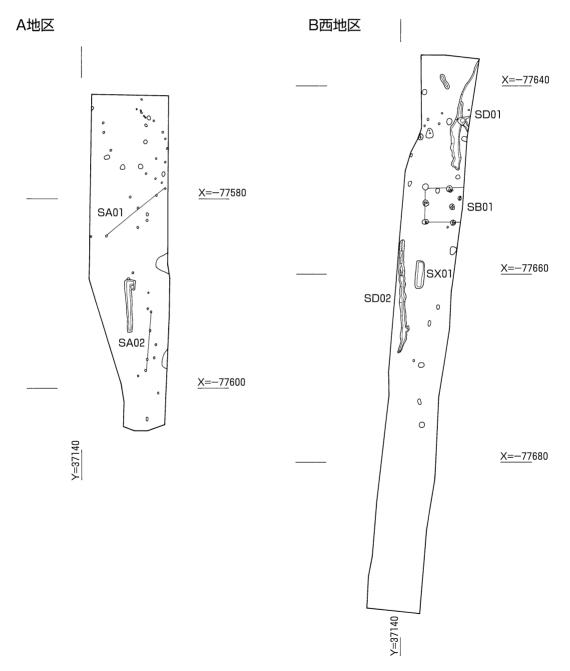
# IV 場市遺跡の調査結果

# 1. A 地区

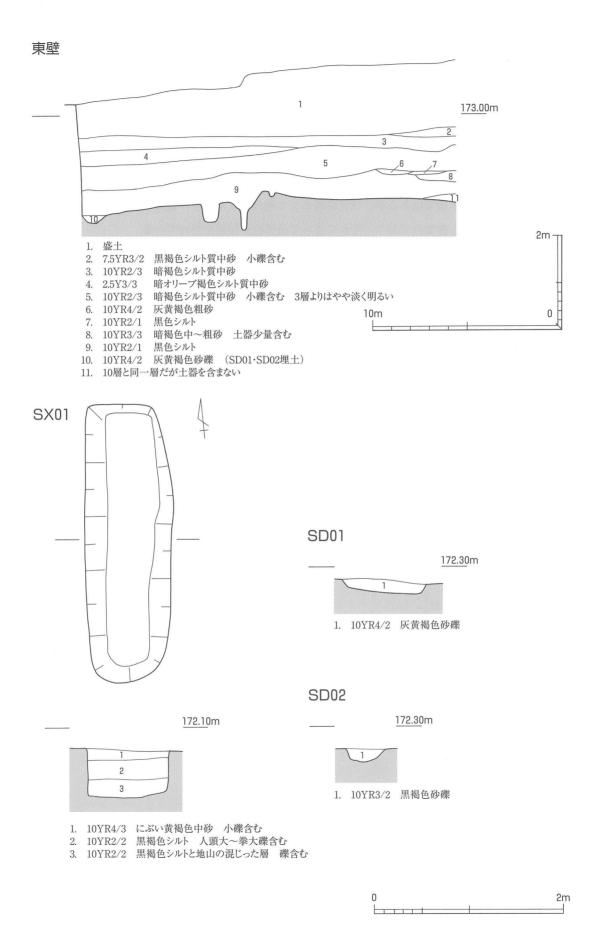
場市遺跡の最も北側に位置している。東側に建屋川が北流し、能座から延びてくる微高地上に遺跡は 広がっている。

調査区中央に大きな撹乱坑があり、それ以外にも全体的に手が加えられており、遺構面残存状態は悪い。調査前の地目が水田ではあるが、資材置場として利用されており、盛土が厚くみられた。その際のコンクリートガラも含まれており、それによって遺構面が損壊を受けている。

検出した遺構は少ない。不定形な落ち込みとピットを確認しているが、性格の明らかな遺構はない。



第29図 場市遺跡A地区・B 西地区平面図



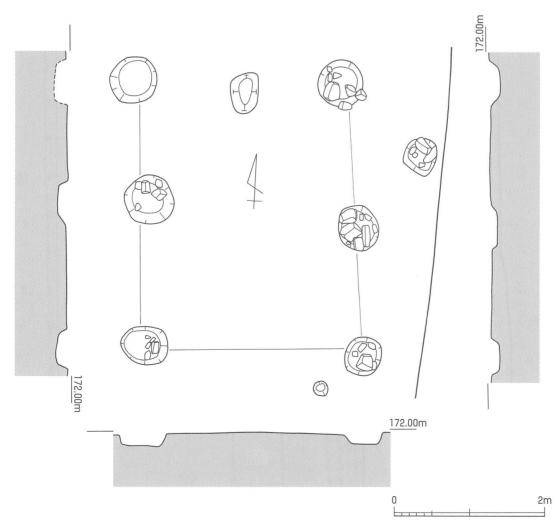
第30図 場市遺跡 B 西地区遺構実測図

2列の柵跡とした柱列だけを検出した。SA01 は主軸 N40° E で 3 間調査しており、さらに東側に延びている。柱間は均等でなく、西から  $4.8~\mathrm{m}$ 、 $2.0~\mathrm{m}$ 、 $1.8~\mathrm{m}$ となる。ピットの径は  $0.2\sim0.25~\mathrm{m}$ で、検出した多くのピットと同じ規模である。SA02 はほぼ南北に主軸を持つ 3 間の柵跡である。北から  $2.0~\mathrm{m}$ 、 $2.8~\mathrm{m}$ 、 $1.2~\mathrm{m}$ となる全長  $6.0~\mathrm{m}$ を測る。時期は明確にしがたい。

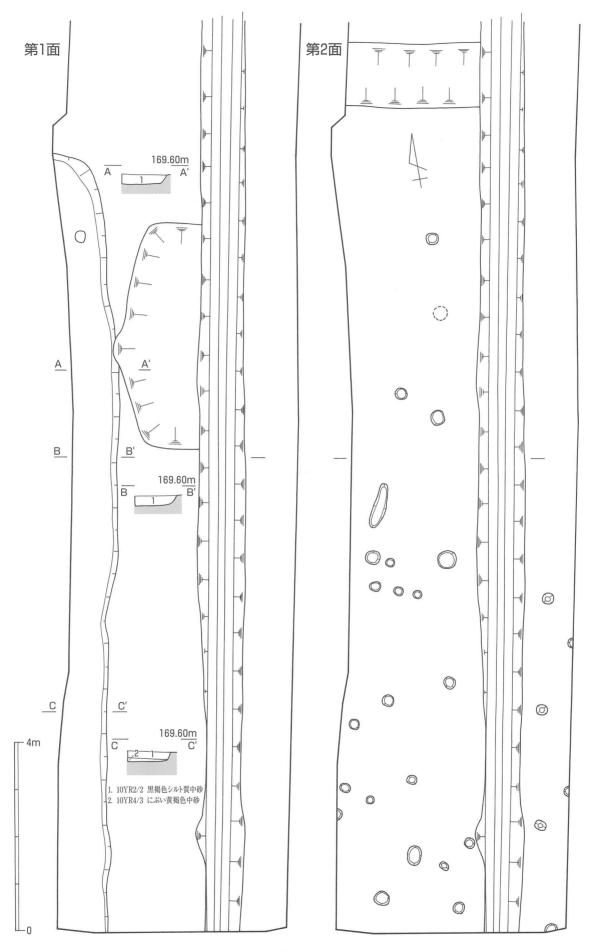
# 2. B西地区

A地区の南側に位置しており、町道を隔てた地域であり、調査区内を農道が南北に走っており、それによってB西地区と分けている。地形的には西側から東側に向かっての段丘面で南側に小さな谷部が開析している。調査面積は376㎡であったが、調査対象地南半は圃場整備事業によって削平されており、遺構面も残存していなかった。落ち込み以外は古墳時代の遺構と思われる。

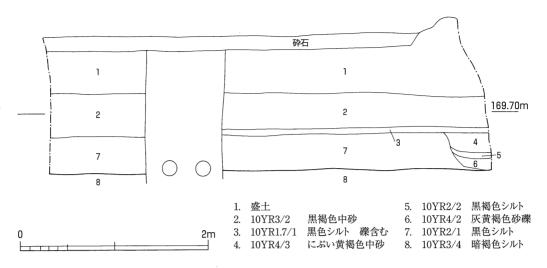
確認した遺構は、掘立柱建物跡 1 棟、溝 2 条、落ち込み 1 基とピット 10 数基である。掘立柱建物跡 (SB01)は東西方向の総柱建物で、南北 2 間で東側の調査区外に延びている。南北の棟方向は 1 間 2 mで、 桁方向は 1 間 3 mである。調査区内での規模は南北東西両辺とも 4 mを測る。ピットの規模はやや大きめで、径 50 cmを測り、深さも  $40\sim70$  cmと削平されていることを考慮すれば深さのある柱穴と言えよう。 SD01 は北東コーナー部にあり、東側が内側になる弧を描いている。北側の方は幅が 2 mと広く、南



第31図 場市遺跡 B 西地区 SB01 実測図



第32図 場市遺跡 B 東地区実測図



第33図 場市遺跡 B 東地区土層断面図

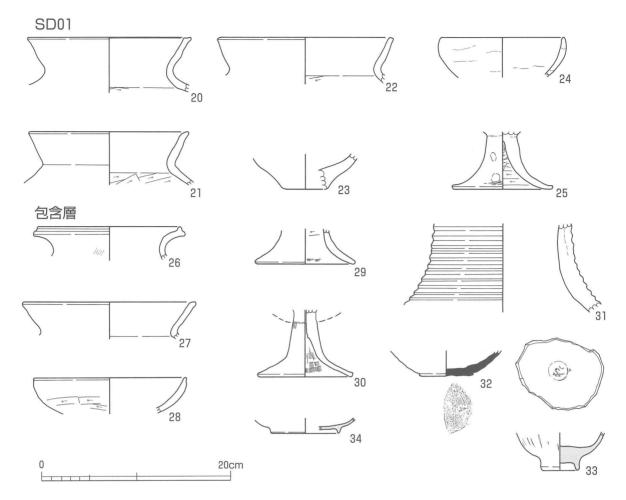
側になると幅  $1.6~\mathrm{m}$ と狭くなっている。埋土は灰黄褐砂礫である。SD02 は調査区中央西側で検出されており、ほぼ南北に近い N5° W に主軸をとり直線的に延びるが、部分的に蛇行している。幅  $0.25~\mathrm{m}\sim0.4~\mathrm{m}$ で  $12~\mathrm{m}$ の長さである。

落ち込み(SX01)は SD02 の東側にあり、長方形プランである。南北 2.92 m、東西 0.9 m、深さ 0.48 mを測る。断面形状は箱形で、平面も断面も南端のみ丸くなっている。埋土から磁器片が出土しており、そのことから中世末の遺構と思われる。

#### (遺物)

出土遺物の量は少ない。全体でコンテナ1箱である。比較的まとまって出土したのが、SD01である。 6点図化しており、土師器に限られている。 $(20) \sim (22)$ は甕口縁部である。成形技法は似通っており、 体部内面はヘラケズリで口縁部はヨコナデである。口径も比較的近い数値を示す。口縁部は内湾気味で あるが直線で器壁が厚い。(20)が一番丁寧な作りで口縁部中途で屈曲している。端部は面となり外側 につまみ出している。端部は外側に尖らせるようにつまみ出す点は共通している。胎土はチャート・長 石などのクサリ礫を含んでいる。色調も3点とも類似している。器表はにぶい黄橙からにぶい黄褐で、 黄肉は黒褐である。(23) は底部で壺と思われる。底面は2次焼成を受けている。突出平底で底部再成 形かと思われる。平底から内湾する体部になる。ユビ成形から外面はハケ整形をしてから板ナデで仕上 げている。内面はナデで調整している。クサリ礫を含み、にぶい黄橙を呈している。黄肉は淡く褐灰で ある。(24) は杯である。内湾する口縁部で最大径が端部より1cm余り下にあり、その部分の器壁が厚 くなっている。端部は尖りぎみに丸く仕上げている。色調は赤色顔料を塗布したものと思われ、外面は 赤褐である。内面と器肉は橙から黄橙で、砂粒を多く含んでいる。粘土紐の継ぎ目が明瞭にみられる。 ナデ整形である。磨滅が著しい。高杯杯部になる可能性もあるが、作りが粗く杯にしておく。(25)は 高杯脚部である。裾広がりに大きく外反する脚部で端部は角張っている。器表には赤色顔料が塗布され ている。塗布前の器表は橙で、器肉は黒褐をしている。内面はヘラケズリで形成し、外面はユビ成形か らナデそしてヘラミガキで仕上げている。砂粒を少量含むが、全体的な胎土は精良である。筒部に串状 のものを突き刺して成形したと思われる。杯部との接合部で剥がれている。

残り9点は包含層や不明瞭な遺構・機械掘削で出土している。(26) は弥生土器口縁部である。外反する頸部で端部は内外に肥厚している。端面に1条の凹線がある。端部内面は強いヨコナデでやや凹ん



第34回 場市遺跡 B 地区出土遺物実測図

でいる。体部外面はハケ整形で、口縁部はヨコナデで仕上げている。表面磨滅が著しい。クサリ礫を含 み、にぶい黄橙から褐灰をしている。(27) は土師器甕口縁部で、口径 18.0 cmを測る。僅かに内湾ぎみ の口縁部で端部は面になってから外側につまみ出している。頸部内面はヘラケズリで、口縁部はヨコナ デである。外面は黒褐で、内面と器肉は暗褐から暗灰を呈している。(28) は杯口縁部で、口径 16.0 cm、 器高3.8cmを測る。内湾する体部で端部下の器壁が厚くなっている。端部は内側に丸くつまみ上げている。 外面はヘラケズリで成形しており、口縁部はヨコナデである。一部赤色顔料が残っており、本来は全体 に塗布されていたと思われる。浅黄橙から褐灰をしており、クサリ礫を含んでいる。(29) は高杯裾部 で磨滅が顕著である。直立ぎみの径の大きな筒部から大きく外反する裾部である。裾部径 10.2 cmと小 形で、端部は丸い。筒部には絞り目状の痕跡が認められ、ヘラケズリがなされている。内面はハケ整形 で端部周辺はヨコナデで仕上げている。胎土は比較的良好で砂粒は少ない。(30)も土師器高杯脚部で ある。串を刺して成形しているようで、中実の中央に岸状の小孔が残っている。細身の筒部から外反す る丁寧な作りである。内外面ともにハケ整形で、外面は板ナデとヨコナデで仕上げている。内面はくも の巣状の7本/cmの細かいハケである。ソケット状に杯部に接合したもので、杯部との接合面が看取さ れる。器表は橙から浅黄橙で、黄肉は黒褐で、胎土は精良である。(31) は弥生土器器台下台部である。 外面は11条以上の幅の広い凹線で文様にしている。器壁は厚めで、ユビ成形ののち内面は板ナデで整 形している。クサリ礫を含み、表面は磨滅している。にぶい黄橙をしており、2次焼成を受けている。

(32) ~ (34) は新しい時期の遺物である。(32) は須恵器椀底部で、糸切りがみられる。底径 5.6 cm、残存高 2.6 cmを測る。砂粒を多く含み、色調は灰色である。底部は不安定な平底で、内面は底面部分が下がっており段が付いている。底部はほぼ半分残っており、機械掘削で出土している。14 世紀の東播磨産であろうか。(33) は青磁でオリーブ黒の釉がかかっている。底部は施釉後掻きとっている。見込み部には文様化している文字として成り立たない文字が押印され、草花文と思われる文様が見られる。15 世紀終わり頃と思われる。(34) は白磁皿で近世のものである。機械掘削で出土している。内外面とも施釉しており、底径は 7.3 cmを測る。高台は断面三角形の輪高台である。18 世紀であろうか。

## 3. B東地区

町道部分で、迂回路建設・水道管移設後に本調査を実施した。当初から道路下に水道管が埋設されていることはわかっていたが、調査したところ 2 本の管が調査区中央を貫通している。その掘り方で遺構面は大きく損壊を受けている。遺構面は 2 面あり、上面では溝状の大形の落ち込みを 1 基検出している。下面では溝状の土坑とピットを検出している。柱痕跡の認められるピットもあったが、建物跡としては復原できなかった。ピットは径  $0.2 \sim 0.4$  mと比較的小規模である。埋土に 2 種類あることから、時期幅があるものと思われる。上面は中世の、下面は古墳時代の遺構面である。

## 4. C地区

B東区の南側は損壊が激しく、遺構面は残存していなかった。D 北地区に接する南半のみ遺構を検出している。D 北地区が道部分として同時に調査が実施できなかったことから、地区名を設定したが、D 北地区と同じ遺構である。そのことから、遺構番号も通し番号となっている。

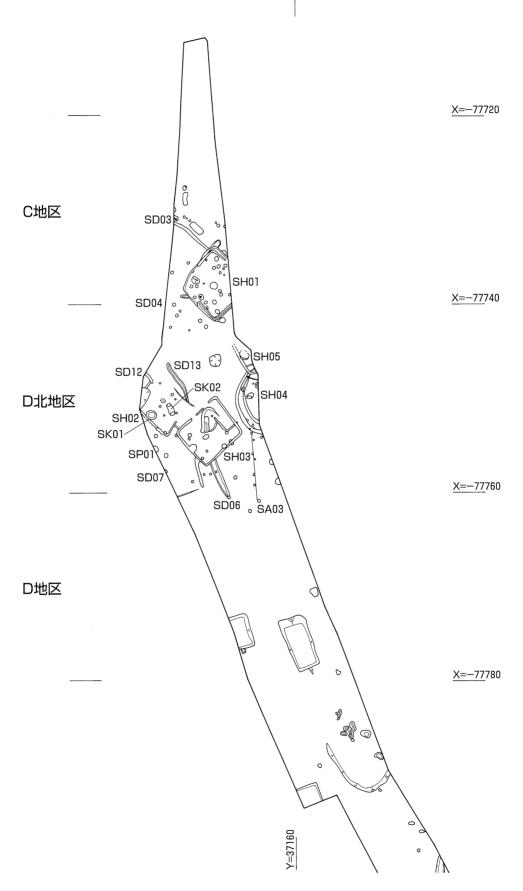
遺構は竪穴住居跡 1 棟 (SH01)・土坑 1 基 (SK01)・溝 1 条 (SD03) とピットを検出している。すべて調査区南側で検出しており、北側では遺構は検出していない。

SH01 は方形の竪穴住居跡で、東側の一部が調査区外に存在するが、ほぼ全容を推測できる。壁は削平されており、最大で 0.1 mしか残っていない。平面的には残存しているが、垂直的には残存状態は悪い。主軸は約 40°振っている。西側コーナーは隅円になっており、南北コーナーは角張っている。南西辺は 4.5 mで直線的、北西辺は 5.35 mで弧状を呈している。中心部では、北西 – 南東方向 5.8 m、南西 – 北東方向 5.9 mを測る。壁溝が巡っており、幅 0.3 m前後で最大深度 0.15 mとなる。南西辺中央は残存状態が悪いためかもしれないが、壁溝が 1.05 m切れている。北西辺も残存状態は悪い。中央に径 0.8 mの円形土坑がある。断面は半円形で底に焼土層が堆積していることから炉であろう。ピットの位置と深さから、主柱穴は 4 本と思われ、東側は調査区外に位置していると思われる。北側の主柱穴には土器が埋納されていた。布留式の影響を受けた甕が出土しているが、製塩土器も保有していることから、古墳時代中期でも後半になろうかと思われる。

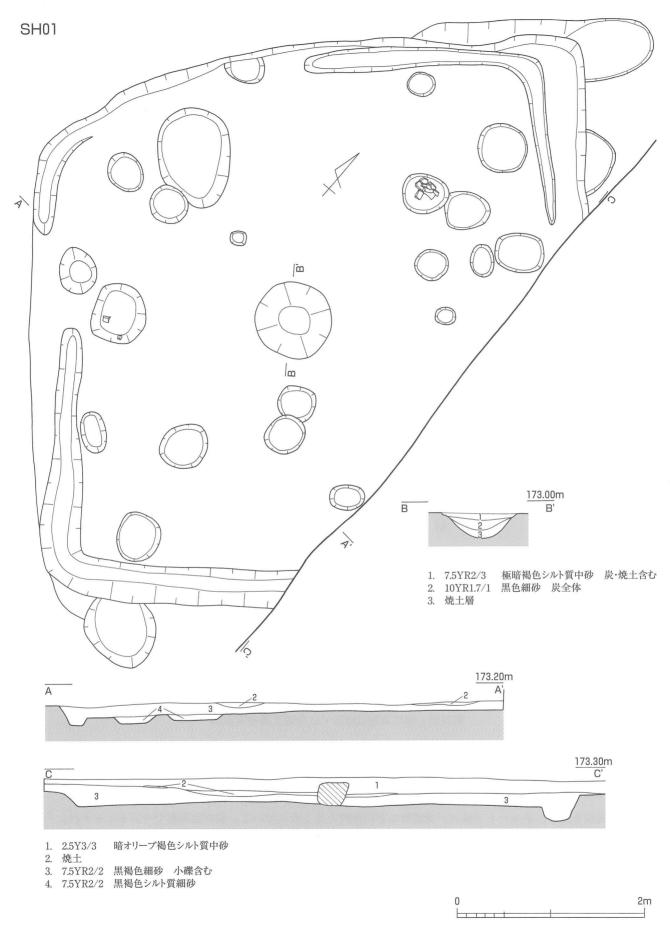
SK01 は SH01 に切られた小形土坑で、最大径  $0.8\,\mathrm{m}$  を測る。深さは  $0.3\,\mathrm{m}$  と浅い。SD03 も SH01 に切られた溝で、幅  $0.2\,\mathrm{m}\sim0.3\,\mathrm{m}$  で北西方向に延びている。深さは  $0.1\,\mathrm{m}\sim0.2\,\mathrm{m}$  と浅く、断面は半円形である。ピットは 10 数基あるが、建物跡に復原 d きなかった。

#### (遺物)

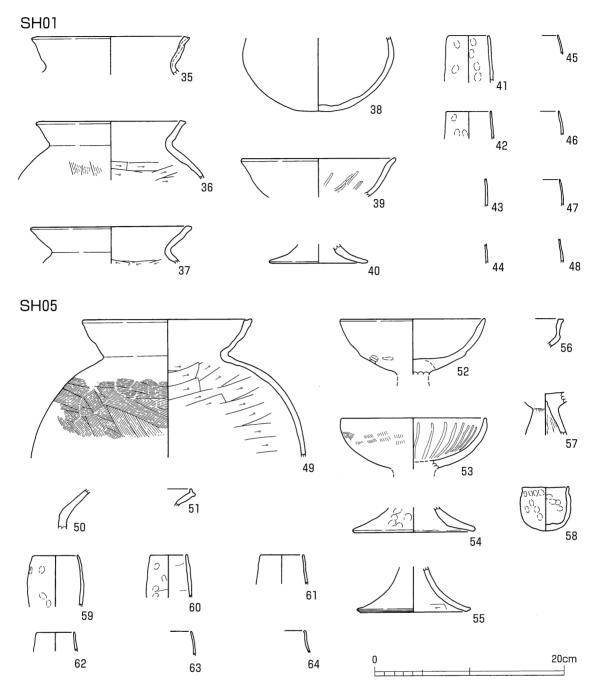
(35) から (48) は SH01 出土である。(35)  $\sim$  (37) は甕口縁部で布留式の様相を示す。(35) は口径  $15.6~\mathrm{cm}$ 、残存高  $4.0~\mathrm{cm}$ を測る。くの字の口縁部で緩やかに屈曲して延びる。端部は内外に肥厚するが、



第35図 場市遺跡C地区·D地区平面図



第36図 場市遺跡C地区SH01実測図

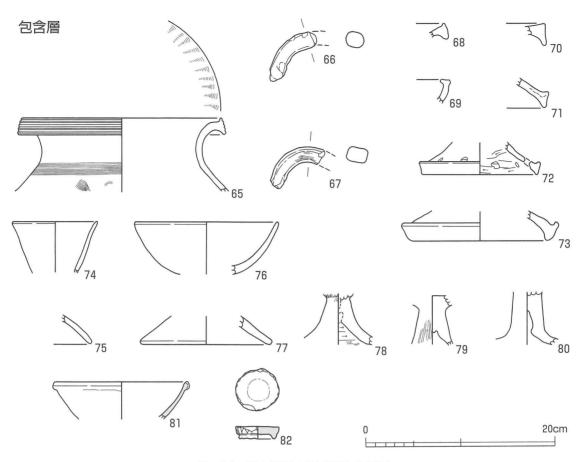


第37図 場市遺跡C地区·D北地区遺物実測図

外側の方が大きくつまみ出している。中央が窪んだ面を持つ端部で、ヨコナデで仕上げている。灰黄褐からにぶい黄橙を呈し、砂粒多く含んでいる。(36) は住居跡内 P5 から出土している。にぶい黄橙から褐灰を呈し、チャート・長石・金雲母などの砂粒を多く含んでいる。器肉は黒褐でサンドイッチ状になっている。体部内面は横方向のヘラケズリがなされており、外面はハケ整形ののちナデで調整している。口縁部は僅かに屈曲し直線的に延び、端部は内外に肥厚する。ヨコナデが施されている。くの字の頸部は明瞭な稜線は有さない。焼成は良好で、口径は14.9 cmを測る。(37) はやはり住居跡内ピット(P13) から出土している。灰白から褐灰と器表はやや白っぽい。断面はサンドイッチ状になっているが、灰で橙の部分もある。胎土は同じでチャート・長石・金雲母などの砂粒を多く含んでいる。ヨコナデされた

口縁部は内湾ぎみで、端部は面になっている。体部内面はヘラケズリである。(38) は丸底の壺底部で ある。全体に磨滅が著しい。ユビ成形からナデで、体部上部のみヨコナデが見られる。チャートや赤色 の酸化粒の小石粒を含んでいるが、全体的には緻密である。浅黄橙から褐灰を呈している。内湾する底 部で器壁は薄めである。最大腹径は 16.0 cmを測る。(39) は高杯杯部である。口径 16.0 cmで、内湾する 浅めの杯部で、口縁端部付近で外反する。端部は丸くおさめている。胎土・焼成は良好で、橙から明赤 褐をしている。外面には丹が塗られている。ヨコナデののちヘラミガキで仕上げられている。(40) は 高杯脚裾部である。(39)と同一個体かもしれない。裾部径 10.1 cmと小さめである。緩やかに外反して おり、端部は丸い。柱状部となる筒部につながるものと思われる。胎土にはチャート・長石含むが緻密 である。ヨコナデののちナデで仕上げている。顔料が塗布されている。(41)~(48)は製塩土器であ る。丸底㈱式の一群である。小破片となっており、底部は残存していない。(41) は P3 からの出土で、 口径 4.2 cm、残存高 4.9 cmを測る。 2 分の 1 前後の残存率である。ユビ成形ののちナデで仕上げている。 直線的に延びており、端部は丸いがナデによって内側に曲がっている。胎土はチャート・長石を含むが 砂粒は少なく緻密である。赤色の酸化粒が多いのが特徴である。(42) は器壁が薄く、口径 4.6 cmである。 内傾しており、端部は尖りやや反っている。ユビ成形ののちナデで仕上げている。橙~にぶい橙と赤っ ぽい色調をしている。(43)~(48)は小片のため、径を復原するのは困難である。内湾しているもの と直線的なものがある。砂粒も(43)(44)(47)の多いものと少ないものがある。

(49) ~ (64) は SH05 出土遺物である。(49) は土師器甕口縁部である、山陰系の肩の張る布留式の 甕である。上位に最大腹径を持つ内湾する体部から明らかな稜線を有する頸部になり、内湾する口縁部 となる。端部は内外に肥厚しており、端面に凹線状の窪みを持つ。体部内面はヘラケズリ、外面はハケ 整形で、口縁部はヨコナデが施されている。にぶい黄褐から黄灰を呈し、チャートなどの砂粒を多く含 む。口径 17.6 cmで最大腹径 29.0 cm、残存高 14.5 cmを測る。(50)は弥生土器壺頸部の小片である。 3 条の沈線を有する前期末の破片である。2次焼成を受けており、表面磨滅が著しい。砂粒多く含み、浅 黄橙からにぶい黄褐をし、黄肉は暗褐である。(51)は弥生土器甕口縁部で、ヨコナデで仕上げられて いる。外傾し、端部は内側につまみ上げている。端面に1条の凹線を有する。口縁部が僅かに内湾ぎみ なので、後期末の庄内並行期かと思われる。砂粒を含む。(52) は土師器高杯杯部である。水平な底部 から外面は稜線と段を持って僅かに内湾する口縁部になる。端部は尖りぎみに丸くヨコナデで仕上げて いる。下半はユビ成形ののち板ナデとユビナデで調整している。細い中実の脚が付くもので、円板充填 で接続している。外面は顔料を塗布しており橙を呈している。器肉は浅黄橙からにぶい黄褐である。胎 土には長石·チャートの砂粒を多く含んでいるが、表面は平滑で精製土器に見える。口径 15.2 cmを測る。 (53) も同形同種の高杯で杯部だけが残存している。口径は(52)と同じ15.2 cmである。稜線を持たな い内湾する杯部で端部は尖っている。ユビ成形ののちハケ整形を行い、ナデで仕上げ、口縁端部はヨコ ナデを施している。内面には縦方向の暗文状のミガキが見られる。色調・胎土・焼成も(52)と同じで、 やはり顔料を塗布している。(54) は高杯の裾部の破片である。復原裾径 12.6 cm、残存高 2.6 cmを測る。 ユビ成形ののちナデで整形している。端部周辺はヨコナデで仕上げる。外反してから内面に明瞭な稜線 を持って水平ぎみに外傾している。端部は丸い。明褐から浅黄橙で砂粒を含んでいる。(55) も高杯脚 部である。ラッパ状に外反するもので、端部は上方につまみ上げている。内面は横方向のケズリで、外 面はユビ成形からナデで、端部周辺はヨコナデである。チャートや酸化粒など砂粒多く含み、にぶい橙 をしている。 2 次焼成を受けており、裾部径 11.1 cmを測る。(56)も高杯口縁部であるが、弥生土器で



第38図 場市遺跡C地区遺物実測図

後期の小片である。色調はにぶい黄橙から褐灰と異なっており、ヨコナデで仕上げられている。断面は暗褐でサンドイッチ状の色調になっている。杯部下判は外傾し屈曲して外反する。端部はやや肥厚し面に近くなって角張りぎみである。(57)は土師器高杯の接続部で、表面が磨滅している。円板充填で接続している中空の脚部で、内面には絞り目が見られる。外面はハケ整形からナデ調整と思われる。(58)は手捏ね土器である。ミニチュアの鉢で、器高  $4.6~{\rm cm}$ 、口径  $4.8~{\rm cm}$ を測る。手捏ねであることから、全体に歪である。ユビ成形からハケ・ナデで整形し、端部周辺を僅かにヨコナデで仕上げている。底部付近に黒斑がある。灰黄褐から黄灰をしており、チャートなどの砂粒を多く含んでいる。底部は不安定な大きなもので、平底と丸底の中間である。体部はやや内湾しているが直立ぎみで、端部をヨコナデによって僅かに外傾させている。(59)~(64)は丸底 I 式の製塩土器である。ユビ成形ののちナデで仕上げている。内湾するものと内傾するものがある。(59)で口径  $4.6~{\rm cm}$ を測る。橙からにぶい橙で、砂粒は多いものと少ないものがある。

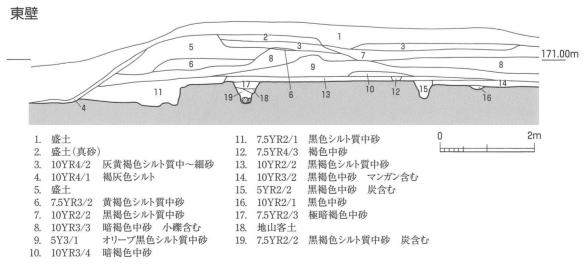
- (65) ~ (82) は包含層出土遺物である。(65) は弥生中期の壺口縁部で、短めの頸部で大きく外反する。口縁端部は上下に肥厚し、端面には4条の凹線を施す。肩部に11条の直線文とその下に同じ原体の櫛描き波状文を有する。端部内面に扇状文が施されている。内面はナデ仕上げで、口縁部はヨコナデで仕上げている。口径21.0 cm、残存高7.7 cmを測る。砂粒多く含み、橙からにぶい橙を呈する。(66)(67)は把手である。(66)は断面円形でユビ成形の痕跡が残り、明赤褐から橙を呈している。(67)はは断面長方形でナデ成形からナデ・ミガキで仕上げている。砂粒含み、にぶい黄橙である。
  - (68) は壺口縁部の小片である。短い頸部から大きく肥厚しており、ヨコナデで仕上げている。明赤

褐で砂粒多く含む。(69) は無頸壺の口縁部で、端部は内側に肥厚している。にぶい橙で、砂粒含むものの比較的緻密である。(70)は器台端部の小片で、水平ぎみに延びて端部が下方に肥厚するものである。

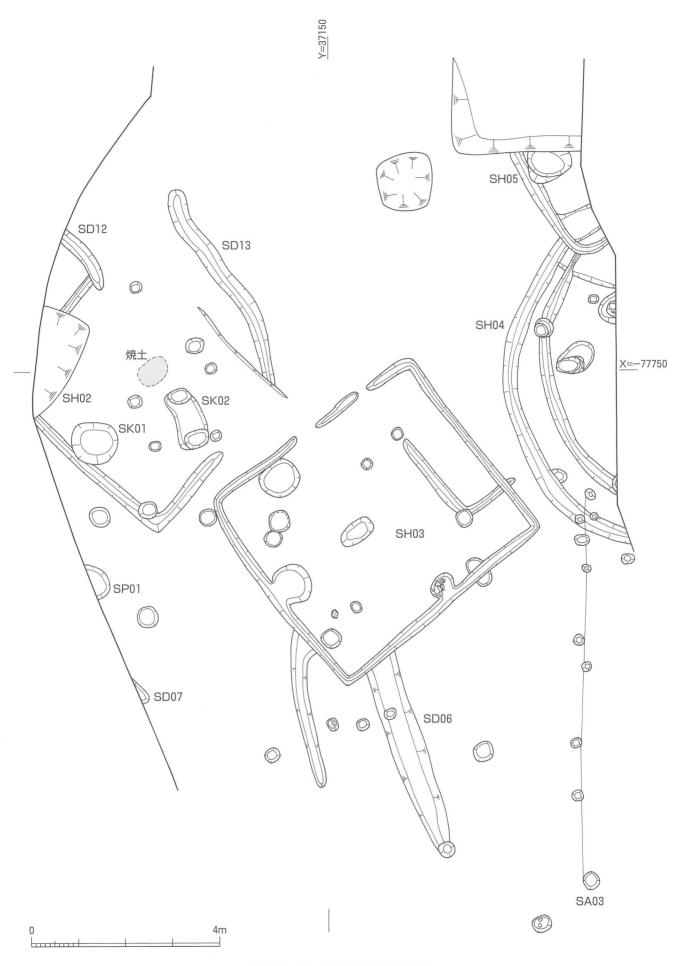
- (71) ~ (73) は高杯脚部で、(71) は復原不能な小片である。直線的に広がり、端部は肥厚する。内面は板ナデ、外面はハケ整形ののちナデ仕上げ、端部はヨコナデ仕上げである。焼成やや悪く、砂粒多く含む。(72) は残存高  $3.4~\mathrm{cm}$ 、裾径  $12.0~\mathrm{cm}$ を測り、内面はにぶい橙でヘラケズリのままである。外面はにぶい橙からにぶい黄橙で、端部とともにヨコナデで仕上げている。僅かに外反する裾部から端部は内外に肥厚する。径  $0.5~\mathrm{cm}$  前後の小孔が復原すると  $12~\mathrm{cm}$  存まれている。(73) は厚みのある脚部で、やや内湾し端部は大きく肥厚する。砂粒多く、ヨコナデで仕上げている。
- (74) は外開きの壺口縁部で、直線的に広がる。端部は丸く、ナデとヨコナデで仕上げている。明赤褐で精製された胎土で、全体的に丁寧な作りである。口径 8.9 cm、残存高 5.5 cmを測る。(75) は高杯か器台の裾部小片である。内湾しており、端部は角張りぎみである。ハケ整形ののち、ヨコナデとミガキで仕上げている。(76) は椀形高杯の杯部で、口径 15.0 cm、残存高 5.6 cmを測る。内湾し端部は丸く、ヨコナデで仕上げている。明赤褐を呈し、砂粒多く含む。(77) は脚部で、(76) と同一個体かもしれない。直線的に開き、器壁は厚く端部は角張る。(78) ~ (80) は高杯柱状部である。(78) は中空で粘土を充填している。短く裾部に外反している。内面はヘラケズリで、外面はハケ整形ののちナデを施している。明赤褐で、砂粒多く含む。(79) は中実の柱で外面と杯部内面はミガキを行っている。(80) はにぶい黄橙で中空のものである。
- (81) は白磁碗である。体部は内彎気味に斜め上方に延び、口縁部は小さい玉縁状に肥厚する。内外面とも透明釉を施釉し、灰白色に発色する。横田・森田分類の白磁碗Ⅳ類相当で、12世紀後半~13世紀前半代に比定される。
- (82) は面子である。白磁碗の底部を打ち欠いて作っており、内面は蛇の目状に釉ハギが見られ、外面は露胎である。原体は18世紀前半代の肥前系白磁と考えられる。

#### 5. D 北地区

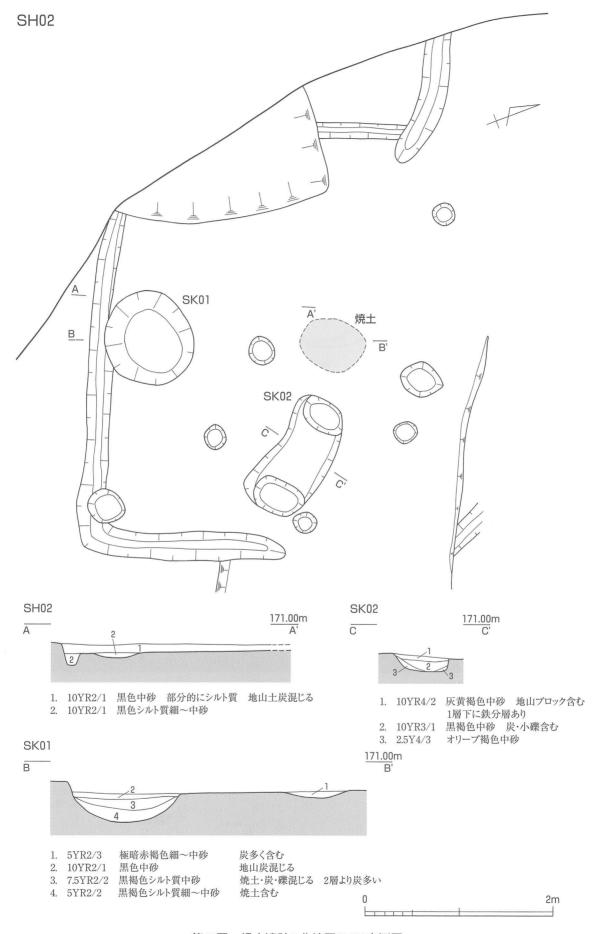
C地区とD地区の間で農道があることから、本発掘調査段階で調査が実施できなかった地域である。 耕作の終了した時期で、B東地区の調査時に合わせて調査を行った。



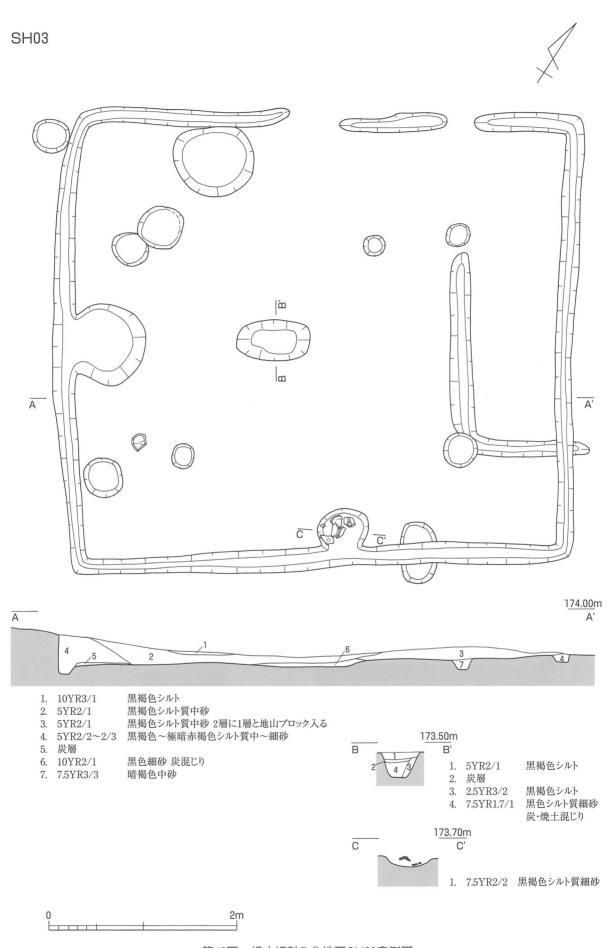
第39図 場市遺跡D北地区土層断面図



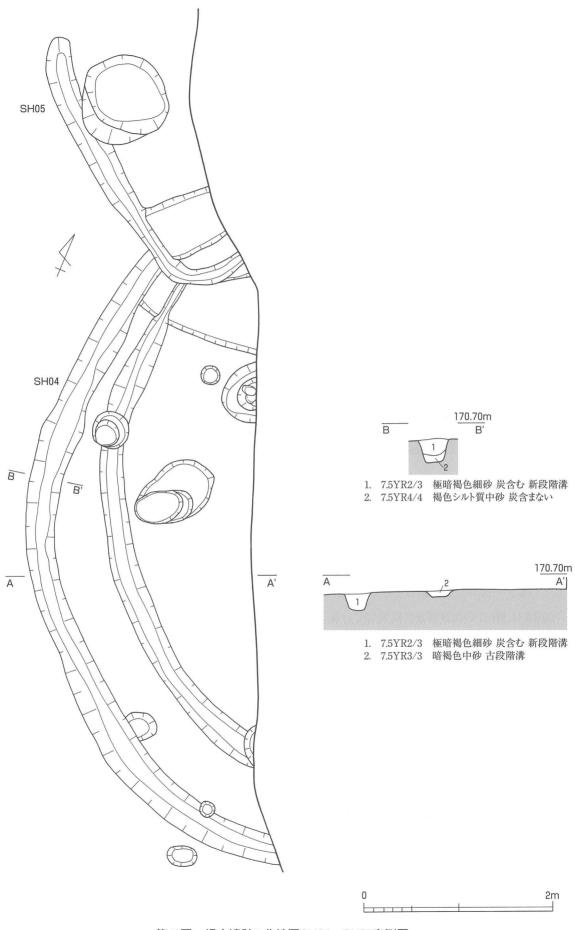
第40図 場市遺跡D北地区平面図



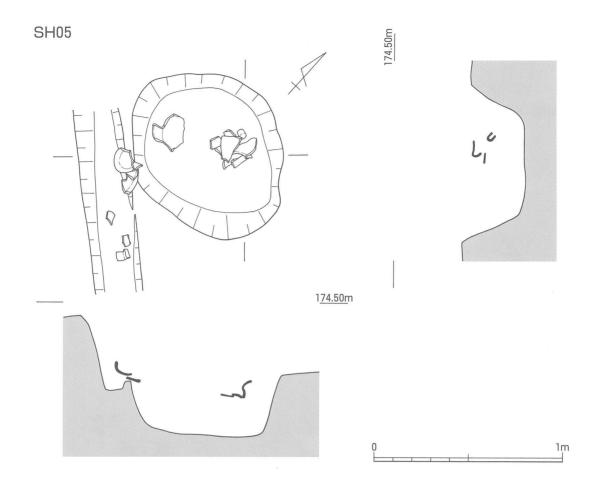
第41図 場市遺跡D北地区SH02実測図



第42図 場市遺跡D北地区SH03実測図



第43図 場市遺跡D北地区SH04·SH05実測図

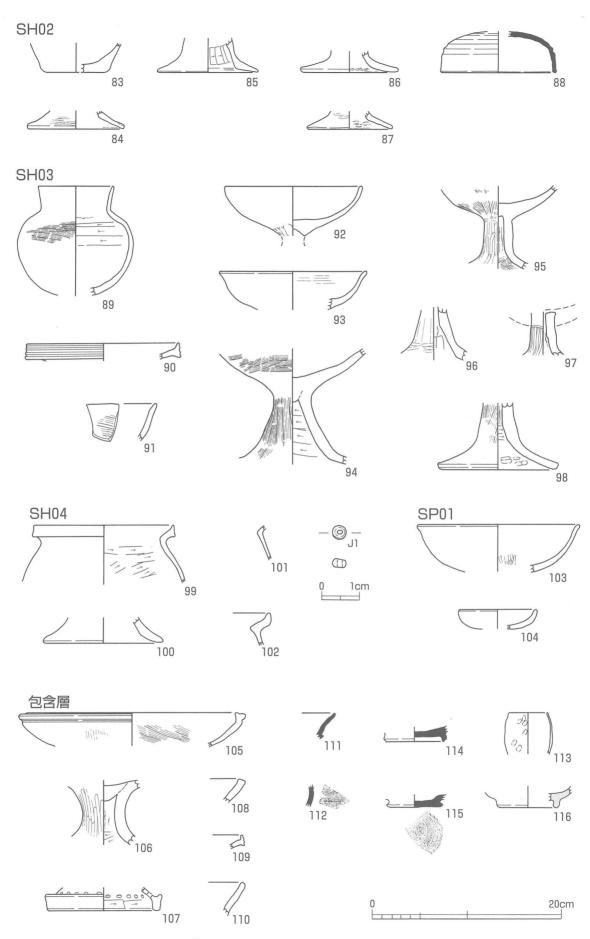


第44図 場市遺跡D北地区SH05中央土坑実測図

調査の結果、1面の調査で小面積ながらも遺構の集中した地区であった。D地区から続いている遺構も含めて、竪穴住居跡4棟と溝2条・土坑・ピットを検出している。遺構名はC・D地区の名称を継承している。一連の遺構であることから、D地区北側の遺構もここで合わせて報告する。

SH02 は SH03 の北西部分に位置している。南側1 m前後が前回調査している。調査の結果、北東部分は SH03 と同様に削平されていた。また、南西側も町道側溝によって大きく損壊を受けている。南西コーナーは検出できなかった。北側を溝(SD12)に切られているが、西側壁溝の一部がかろうじて検出された。その結果、1 辺 4.6 mの方形住居跡であることが判明した。柱穴の径は 0.25 m前後と小形であるが、深さは 0.25 m~0.5 mと比較的深い。0.45 mを越える深度を有するピットは 3 基あり、その位置から 4 本柱の上屋構造と思われる。床面中央に焼土面があり炉跡と考えている。南西辺の中央付近に土坑(SK01)が付加されている。径 1.0 m前後で、SH03 も同様な土坑が存在する。位置的には竈を想像させるが、被熱していない。炉跡南東側にも長方形の土坑(SK02)が 1 基ある。西側の長辺は僅かに弧状を呈している。長さ 1.35 m、最大幅 0.65 m、最小幅 0.55 mで、深さ 0.18 mを測る。小口部は両方ともさらに 0.05 m~ 0.1 mに深掘された土坑が付いている。形状からは木棺墓の小口穴かとも思われ、SK02 は木棺墓の可能性が考えられる。ただ、長辺の棺痕跡は確認できなかった。床面で検出したので、時期の下るものではない。墓とすれば、住居跡より古いものとなる。SH01 と同じ古墳時代後期の竪穴住居跡である。

SH03 は前回の調査でほとんど調査したが、今回北東部分を調査し全景写真を撮影した。方形住居跡で1辺5.8 mを測る。中央に炉があり、壁溝が巡っている。今回調査部分は残存状態が悪く、壁溝も全



第45図 場市遺跡D北地区遺物実測図

体には残っていなかった。

SH04 は今回調査した中で唯一の円形住居跡である。本調査時には溝として調査したが、拡張したところ、円形住居跡の壁溝であることが判明した。調査区東側にほとんど位置しており、床面の5分の1程度検出しており、直径も明確でない。壁溝が2条あり、拡張していることが判る。拡張した壁溝は復原すると、直径8m近くとなる。北側を古墳時代の方形住居跡(SH05)に切られている。床面の土坑からガラス小玉が1個出土している。弥生時代後期前半の住居跡である。

SH05 は SH04 を切っている古墳時代の方形住居跡である。北側は撹乱坑によって削平されており、2.6 mしか残っていない。壁溝は巡っており、最大幅 0.3 mで深さ 0.2 mを測る。南側近くに方形土坑が、西辺中央に円形土坑が深掘されている。円形土坑は最大径 0.95 mで深さ 0.3 mを測る。底面は平たく、断面逆台形になっている。埋土上部に土器を包含している。土坑埋没時に置かれたものかもしれない。方形土坑は幅 0.6 mで南辺に沿って東側に延びている。深さは 0.1 mと浅い。

溝は調査区北側で 2条検出している。SD13 は SH02 との接点は削平されていることから、明瞭な切り合い関係は不明であるが、SD12 同様に新しい時期と思われる。幅  $0.3~\mathrm{m}\sim0.45~\mathrm{m}$ で深さ  $0.15~\mathrm{m}\sim0.25~\mathrm{m}$ で蛇行している。 SD12 は SH02 の西壁を切っており、新しい時期であることがわかる。ただ、時期はそう大きくは変わらないものと思われる。僅かに弧状を呈して調査区外へ延びている。

柵跡 (SA03) はほぼ南北に主軸を持ち長さ 8.4 mを測る。 5 間分と思われるが、部分的に柱穴が 2 基あり板などを挟んでいるように思える。 SH04 を切っていることから古墳時代以降の柵跡である。 SH03 などの古墳時代前期の遺構か、さらに新しい時期かは明らかにすることはできなかった。 出土遺物は古墳時代土師器の小片だけである。

ピットも検出しているが、掘立柱建物跡に復原することは出来なかった。

SH02 出土遺物 (83) ~ (88)

(83) は底部の破片で底径 6.6 cm、残存高 3.1 cmを測る。黄灰からにぶい褐で砂粒多く含む。表面磨滅しており、成形技法は不明である。(84) ~ (87) は高杯脚部で、外方に開き端部は角張る。ヨコナデののち外面はヘラミガキを施し仕上げている。胎土は砂粒少量含むが緻密である。裾部径 10.3 cm、残存高 1.9 cmを測る。(85) は外傾してから屈曲して水平ぎみに開く。端部は尖っている。内面はヘタケズリのままで、水平部分だけハケで仕上げている。裾部径 10.4 cm、残存高 3.6 cmを測る。明赤褐から灰赤を呈し、砂粒多く含む。(86) は外反する裾部で裾部径 9.6 cm、残存高 2.2 cmを測る。内面はハケ整形で、外面と端部周辺はヨコナデで仕上げる。接地面は大きく、端部は角張りぎみである。(87) は直線的に広がり端部は角張る。ユビ成形からヨコナデののちヘラミガキを行っている。明赤褐で砂粒多く含む。(88) は須恵器杯蓋で、口径 12.0 cm、器高 4.3 cmを測る。天井部は丸くロクロケズリがなされている。体部は内湾ぎみに外傾し、端部は僅かに内外に肥厚する。天井部内面は仕上げナデが施されている。外面には灰がかかっており、灰から暗灰を呈する。稜線は 2 条の凹線で画し、シャープな稜線を有さない。径が小さいことから、稜線は甘いものの MT15 型式と思われる。(83) は磨滅が著しく、弥生中期のものが堆積したものと思われ、竪穴住居跡の時期は 6 世紀初頭であろう。

SH03 出土遺物 (89) ~ (98)

(89) は土師器小形直口壺で、最大腹径 12.2 cmを測る球形の体部となる。内面は暗灰でヘラケズリののちナデで仕上げる。外面はハケ整形ののちナデ仕上げで明赤褐を呈する。口縁部は僅かに外傾する直線的で端部は丸くヨコナデで仕上げる。口径 7.8 cm、器高 6.55 cmを測る。(90) は 3 条の凹線を端面

に有する器台上台部である。水平ぎみに外傾し端部は肥厚している。ヨコナデで黒褐をしている。(91) ~ (98) は土師器高杯である。(91) は椀形高杯口縁部で如意状をしている。ハケ整形ののちヨコナデで仕上げている。(92) は椀形杯部に中実の脚部が付く。口径 14.3 cm、残存高 5.2 cmで、ナデ整形ののちヨコナデを施している。脚部との接合の際の指圧痕が明瞭に見られる。(93) は内湾から端部付近で外反している。端部は丸く、口径 15.3 cm、残存高 4.0 cmを測る。ユビ成形からハケ整形し、ナデとヨコナデで仕上げている。にぶい黄橙で、砂粒多く含む。(94) は両端部を欠く高杯で、円板充填によって接合している。脚部内面はヘラケズリで外面はハケ整形である。残存高 12.2 cmで、砂粒多く含み、にぶい黄橙をしている。(95) も両端部を欠いており残存高 8.8 cmを測る。ハケ整形ののち内外面ともにヘラミガキで仕上げている。橙から明赤褐をしている。(96) は外傾する脚部で内面はヘラケズリ、外面は板ナデののちヘラミガキを施している。(97) も接合部の破片で杯部をソケット状に差し込んだ痕跡が残っている。外面はヘラミガキで丁寧に仕上げている。内面には絞り目が見られる。(98) は裾径 12.5 cm、残存高 7.1 cmを測る。内面には絞り目が残り、ヘラケズリがなされている。全体的に器壁は厚く、外反して端部は角張る。外面はハケ整形で、端部周辺のみヨコナデで仕上げている。

SH04 出土遺物 (99) ~ (102) · (J1)

- (99) は甕口縁部で内湾する体部から短く外傾する口縁部となる。端部は内外に肥厚しており、端面となっている。口径 14.7 cm、残存高 6.1 cmを測る。体部内面はヘラケズリ、外面はユビ調整し、口縁部はヨコナデで仕上げる。橙から灰褐で、砂粒多く含んでいる。(100) は磨滅が著しい高杯裾部で、裾径12.0 cmを測る。器壁は厚く、外反し端部は丸い。(101) は甕の頸部で薄く仕上げられている。にぶい橙からにぶい黄褐で砂粒多く含んでいる。(102) も磨滅が顕著な甕口縁部である。内面ヘラケズリ、外面ハケ整形で、口縁部はヨコナデの短い口縁部である。(J1)は床面出土のガラス小玉である。0.34 cm×0.37 cmで厚さ 0.22 cmで重さ 0.04 g を測る。コバルトブルーを呈している。
- (105) ~ (116) は竪穴住居跡群部分での面精査や包含層出土の遺物である。(105) は高杯口縁部で口径 22.0 cm、残存高 3.5 cmを測る。ハケ整形ののちヨコナデで仕上げられている。内湾し端部付近で直立し、端部は内外に肥厚する。(106) は高杯柱状部で、外反し円板充填で接合する中空である。内面はヘラケズリ、外面はヘラミガキである。浅黄橙で残存高 6.85 cmである。(107)は高杯裾部で、裾径 11.6 cm、残存高 2.4 cmを測る。外傾し端部は大きく肥厚し、小さな円形の透孔を巡らせている。(105) ~ (107)は同一個体の可能性が高い。(108) ~ (111) は口縁部の小片である。(108) は甕で内湾し端部は角張る。ヨコナデで仕上げ、端部は僅かに肥厚する。(109) は器台かと思われ、端部は肥厚し、端面に 3 条の凹線がある。(110) は甕と思われ、僅かに屈曲し端部は丸い。ヨコナデである。(111) は須恵器ハソウの口縁部で外反している。内面に自然釉が付着している。(112) も須恵器ハソウで 7 条の波状文と沈線が施されている。灰で砂粒含んでいる。(113) は製塩土器で小形の丸底となるタイプの口縁部である。ユビ成形を行い、ナデで仕上げている。(114) は糸切りの椀底部である。底径 6.1 cmの高台があり、灰白を呈する。(115) も糸切り底の椀でロクロナデである。(116) は青磁碗で底面は露胎である。

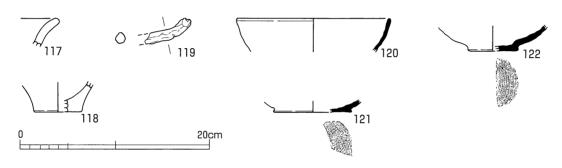
## 6. D地区

北側の竪穴住居跡はD北地区で報告している。それ以外の南側は粘土採掘などで大きく手が加えられており、ほとんど遺構面も残存していなかった。土坑3基とピット数基を検出しているが、性格のわかる遺構はない。

遺物もほとんど出土していない。すべて包含層からの出土である。

(117) は甕口縁部小片である。内面は橙、外面は明赤褐を呈している。長石・チャートの砂粒を含んでおり、焼成は良好である。端部は丸く、端部近くで外反している。器壁は厚めである。残存状態が悪いが、古墳時代前期の破片であろうか。(118) は甕底部で、底径 5.1 cm、残存高 3.2 cmを測る。平底で外反する体部になる。ハケ整形からナデ仕上げである。弥生中期後半である。(119) は弧状の棒製品である。残存長 5.35 cmで径 1.0 cmの不定円形の断面になっている。灰白から明褐で、砂粒を含んでいる。古墳時代のスプーン状土製品などの柄部と思っている。

(120) は須恵器椀である。体部は僅かに内彎し、口縁端部は丸みをもつ。口縁部~体部内外面は回転ナデ調整を施す。(121) は須恵器椀の底部である。平底で体部は緩やかに斜め上方に立ち上る。内外面とも回転ナデ調整を施す。底部外面は不調整で糸切痕が残る。東播系須恵器で12世紀後半~13世紀前半代に比定される。(122) は同じく須恵器椀の底部である。平高台で底部内面は僅かに窪む。内外面とも回転ナデ調整を施す。底部外面は不調整で糸切痕が残る。東播系須恵器で12世紀前半代に比定される。



第46図 場市遺跡D地区遺物実測図

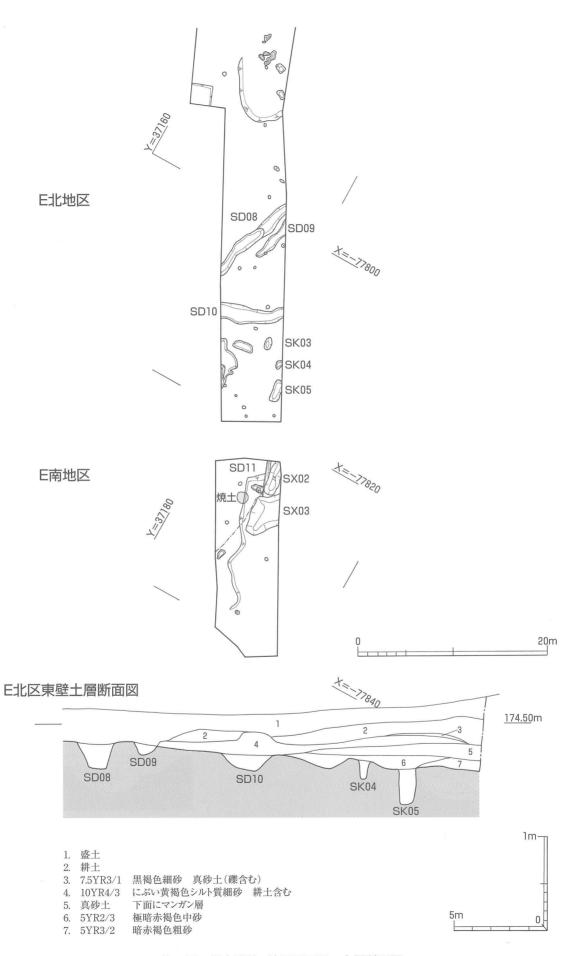
## 7. E地区

間に水路が存在したことから、南北2地区に地区名は分けている。両地区ともに性格のわかる遺構は検出されていない。

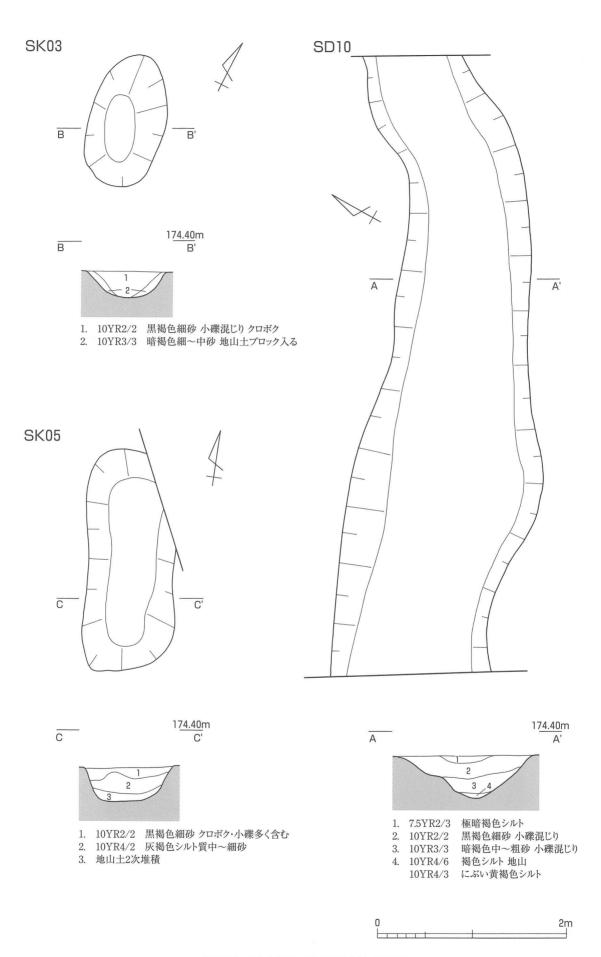
E北地区では、溝と土坑・ピットを検出している。SD08・SD 09 は南西から北東に向かう平行した溝である。SD08 は最大幅 1.6 mと比較的広い溝である。深さは 0.5 mで U 字形を呈している。調査区外東西両方に延びている。SD 09 は SD08 の南側にあり南西側には続いていない。深さは 0.1 mと浅く、最大幅も 1.2 mと小さい。SD10 は東西方向に延びる幅 2 mの溝で、調査区外に続いている。深さは全体的に 0.15 m下がり、部分的に 2 段になり深いところで 0.55 mを測る。遺物は小片だけであるが、時期は 3 本ともに中世以降と思われる。

SD10 の南側に土坑が集中している。 4 基あり形状はまちまちである。SK03 は長卵形で長径 1.4 m、短径 0.8 m、深さ 0.3 mを測る。SK05 は隅円長方形で、幅 0.9 m、長さ 2.4 m、深さ 0.4 mの断面逆台形になっている。SK04・SK06 は不定形である。土坑群の時期は埋土から溝と同じと思われる。

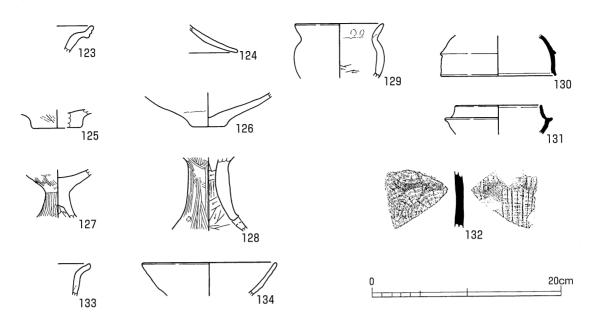
E 南地区では、北東から南西にかけて谷地形の肩部が検出されており、調査区の大半は谷地形の中になる。急激に下がっているところがあり、部分的には底を検出していない。谷地形の中の落ち込み(SX02・SX03)を検出しているだけで、これらは自然地形と考えている。肩部上面で溝と土坑を検出している。SD11は谷地形に削られており、南北に走る溝である。幅 0.5 mで断面は箱形である。深さは 0.2m でしっかりした溝である。溝南東部で焼土面を確認した。面的に検出したもので、土坑にはなっていない。西



第47図 場市遺跡E地区平面図・土層断面図



第48図 場市遺跡E北地区土坑実測図



第49図 場市遺跡E南地区遺物実測図

側で最長 1.2 mの土坑があるが、性格・時期ともに不明である。SD11 の埋土は D 地区の遺構に近いもので古墳時代になるかもしれない。谷の形成された時代は古代中世にかけてのものかと思われる。

谷地形は自然に生じたものと思われ、旧河道ないしは洪水痕跡と考えられる。北側に存在する SX02·SX03 はその時にできた落込みと思われる。人為的なものではなく、自然にできた窪みであろう。 3 mを越す大型の落込みで、底部分も平坦ではなく、全体的には溝状に中央付近が深くなっており、凹凸を持っている。本来は段丘崖かとも思われ、その後堆積物によって平坦化した部分が再度削られたのではないかと思われる。そして圃場整備によって盛土が行われたようである。肩部分に1ヶ所焼土が広がっている。中世以降のもので、明確に何の遺構かは明らかではない。肩部分付近に杭跡も数ヶ所認められる。底にもピットを2ヶ所で検出している。

### (遺物)

図化した点数は12点で、全体の出土遺物量も少ない。(134) だけがピット出土で、それ以外は包含層からの出土である。

弥生土器は4点図化した。(123) は高杯杯部で僅かに内湾するが直線的に延びる口縁部で、緩やかに 屈曲して外方に開く。端面には2条の凹線文を施している。端部は下側につまみ出しており、端部は丸 い。内外面ともにヘラミガキがなされている。外面には黒斑が見られる。橙から黄灰で、チャート・雲 母・長石の砂粒を少量含む。(124) は裾広がりの高杯脚部である。全体に磨滅しており、砂粒多く含む。 外反する裾部で端部は丸い。色調は浅黄橙から橙で外面はハケ整形が看取される。(125) (126) は壺底 部である。(125) は底部再成形の突出平底で、ユビ成形ののちハケ整形を行っている。橙で少量の砂粒 を含んでいる。底径5.2 cmを測る。(126) も丸底に平底を付け足すタイプで、やや大型の壺である。ユ ビ成形からナデ・ハケで調整している。底径3.2 cmと小さく、残存高は3.6 cmを測る。内湾する底部下 半で球形になろうかと思われる。表面磨滅しており、砂粒多く含む。(123) だけ後期の前半で、他は後 半から末と思われる。

(127) (128) は土師器高杯で、端部が残存しない脚部である。(127) は内面ヘラケズリで、外面ハケ

整形ののちヘラミガキである。杯内面もハケ整形ののちヘラミガキで仕上げられている。柱実の脚部で、にぶい橙で高杯では珍しく砂粒多く含む。(128)は中空の脚部で内面は絞り目が見られ、ヘラケズリがなされている。外面はハケ整形からヘラミガキで仕上げられている。上下ともに外反しており、個数不明ながら穿孔が見られる。にぶい赤褐から明赤褐で砂粒含んでいる。(129)は小形丸底壺の口縁部で、口径 9.2 cmを測る。内湾する体部で稜線を持たない頸部で短く直線的に延びる口縁部で端部は尖りぎみに丸い。口縁部は折り曲げて作っている。ユビ成形から、内面下半はヘラケズリがなされ、ハケ整形とナデで仕上げている。口縁部はヨコナデで、にぶい橙からにぶい褐を呈し、砂粒多く含む。

(130)(131)は須恵器である。(130)は口径 12.0 cm、残存高 4.3 cmを測る杯蓋で、ロクロナデである。 残存部ではケズリは認められない。内湾する器高の高い天井部から直になる口縁部になる。明瞭な突線 状の稜線を持ち、端部は外側につまみ出す。シャープな端部である。暗灰を呈し、やや砂粒を含む。(131) は杯身で内湾ぎみに直線的に上方に伸び短く丸い受部となる。立ち上がりは高く外反している。端部は 丸い。口径は 9.0 cmと小さめである。灰色で(130)より白っぽい色調をしている。受部に自然釉が付 着している。(132)は須恵器甕の体部片である。内面は同心円の、外面は格子状のタタキメが見られる。 黄灰から灰白でやや焼きが悪く生焼けぎみである。砂粒やや多く含む。

(133) は土師器甕口縁部で奈良時代後半ぐらいであろうか。内面は粘土の継ぎ目が明瞭に見られ、丁



調査風景

寧なつくりではない。口縁部はヨコナデで仕上げている。(134) は土師器椀口縁部である。E 地区のなかで唯一遺構から出土している。ピット1からの出土であるが、ピット1は掘立柱建物跡には復原できない。僅かに内湾する体部で、端部は丸い。回転台土師器で外面はナデがミガキ状になっている。

## 8. F地区

中世の庭園跡を調査した地区である。調査区全域が庭園関係の遺構で、3時期に分けられる。

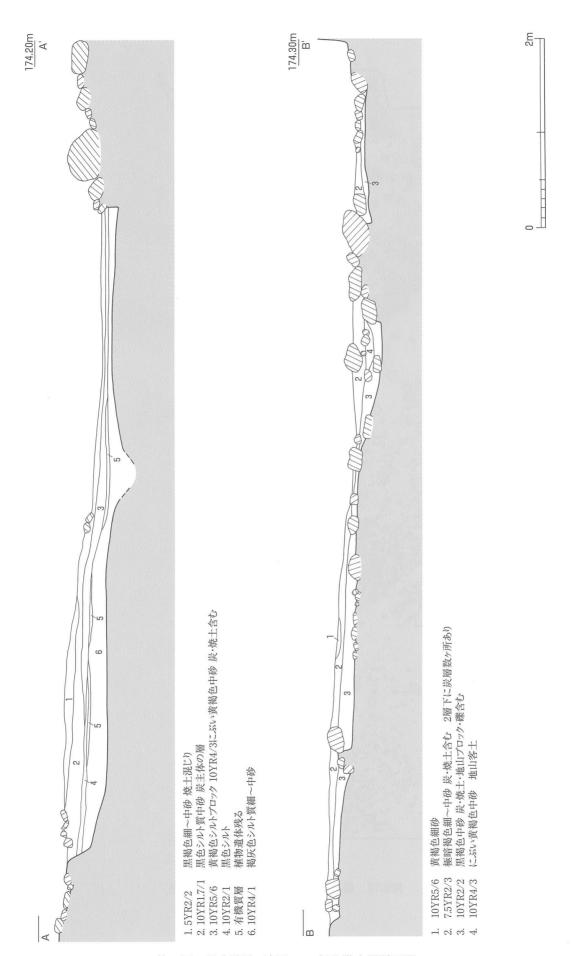
古段階は最も池が広い時期である。南北に長いイチヂク形をした池で、北東隅に相当する一部が調査区外に延びているが、ほぼ全体を調査している。水は北西方向の谷部から引き、南東部へ排水する地形に即した形状である。端部の石材(根石)は人頭大以上の大きめの石を使用している。部分的に大形の石を配置している。主に北側と西側の弧状を呈した中央部分が比較的大きな石が用いられている。東西9.5 m、南北11 mで三角形の各辺が弧を描いており、平面形はイチヂク形となる。南端は口をすぼめるように細くなっている。北辺と西辺が弧状であるのに対して、東辺はやや直線的である。地形的に東側は谷になり下がっていくので、直線的になったのであろうか。西辺は洲浜が広がっており、石敷き部分が幅6 mに及んでいる。こちら側に主屋(殿)があったものと思われるが、ピットを数基検出したものの掘立柱建物跡の復原には至っていない。洲浜上に柱が置かれたことも想定されるが、痕跡は確認できなかった。北側の礎石建物もこの時期には存在していない。底面はシルトであるが、すべて意図的に貼ったものではなく自然のものである。堆積土に砂層や僅かに粘質土があるものの、ヘドロ状の堆積は認められなかった。底浚えが行われていたようである。池底や石材の隙間から漆椀や陶磁器類・須恵器・土師器が出土している。

中段階の池は北側だけ手を加えている。東辺が古段階では11 mあったのを8 mに縮小している。北側がその分狭くなっており、弧状となった北辺を直線に変えて、全体的な平面形を三角形にしている。南半は余り変化していないので、調査結果から時期差を考えることは不可能であった。そのことから、西側の主殿(SB03)は同じ位置に継続していたと考えておく。南側の SB02 はこの時期からはじまったか不明である。埋土には炭・焼土が目立ち、フイゴ羽口・鉄滓・焼けた礫が含まれており、鍛冶関連の遺構が存在したものと思われる。池北側に平坦面が広がり、そこに建物などの遺構を築いたかもしれないが、新段階の改築によって明確にすることはできない。北辺中央に造り出しを設けている。幅18 mで長さ1.4 mの南側が狭い台形で池中央部に向かって張り出している。礫上面のレベルは僅かに下がっているが、ほぼ平坦である。根石はやはり大きめの石を配置している。造り出し部の南東の池内にやや高い部分が存在し、大形の石材が横向きに置かれていた。本来石材を立てて観賞用としていたかもしれない。中島の可能性が高いが、残存している基底部で東西1.2 m、南北0.8 mと小さい。造り出し前面南東隅から1.0 m離れている。西辺は古段階とほとんど変化しておらず、底面もほぼ同じである。自然地形を利用した給排水をしていたものと思われる。ただ、州浜は変化していたかもしれない。

新段階は池の形状を大きく変えている。池そのものは縮小しているが、導水施設や滝などを設けて庭園として整備している。北西のウスギ城跡の谷部から引水したものと思われる。調査区内入ったところに 1.5 mを越える大形の石材が 3 石あり、三尊石になるのではないかと想定している。水田耕作の支障になることから倒され移動しているが、その可能性は十分に考えられる。その石材の横から溝が設けられ、さらに幅 0.2 m、深さ 0.2 mの石組み溝となって東に流れる。石組み溝のところで段になっており、滝と見立てているのではないかと思われる。石組み溝はそのまま池跡に繋がっている。池は肩部が明確



第50図 場市遺跡F地区SG01新段階実測図



第51図 場市遺跡F地区SG01新段階土層断面図



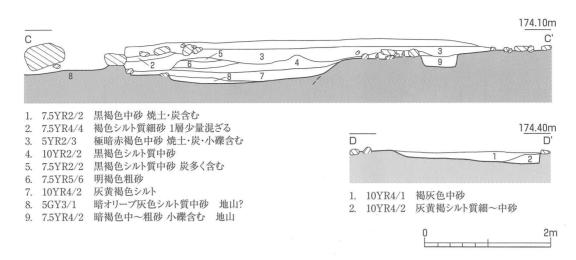
第52図 場市遺跡F地区SG01中段階実測図



第53図 場市遺跡F地区SG01中段階裏込め実測図



第54図 場市遺跡F地区SG01古段階実測図



第55図 場市遺跡F地区SG01古段階土層断面図

でない。小さい方を測れば、東西3m、南北2mの長方形に近い形状で箱状となる。大きい方を測れば、東西45m、南北3mの不定形となる。池南東隅から谷に向かって排水されているが、石組み溝にはなっていない。池南側は自然の礫層となっているが、一部整地して道を造っている。ウスギ城や殿屋敷から続く道と考えられる。緩やかにカーブして池裾まで延びている。調査区に入ったところで直角に分岐する枝道もある。その間に主殿(SB03)が築かれている。池主軸に合わせた東西方向の建物と思われるが、さらに南側にもピットを検出しており、枝道をまたいだ大形建物か2棟の建物になる可能性がある。絵図などを参考にすると枝道を橋で越えた連結棟とするのが妥当かと思われる。柱穴から復原することが出来ず、柱を州浜や自然礫の上に立てた可能性があるので、断定できなかった。今のところ主殿は枝道北側に東西棟であるとしておく。調査区西側に延びているが、調査地内の規模は東西9.0 m、南北7.2 mである。南辺西側で兎形水滴が出土している。調査区北側に礎石建物(SB01)が構築される。主殿から見ると遺水を越えた対岸で茶室と思われる。2×2間の総柱の建物で、規模は1間2.1 mの4.2 m 四方を測る。礎石は大形の0.5 m近いものが使われている。調査区南東部でも掘立柱建物跡を検出している。調査区東側に広がっているが、南北2間の東西棟と思われる。南北4.2 mを測る。

#### ②出土遺物

# 中世の土器・陶磁器

包含層出土 土器・陶磁器

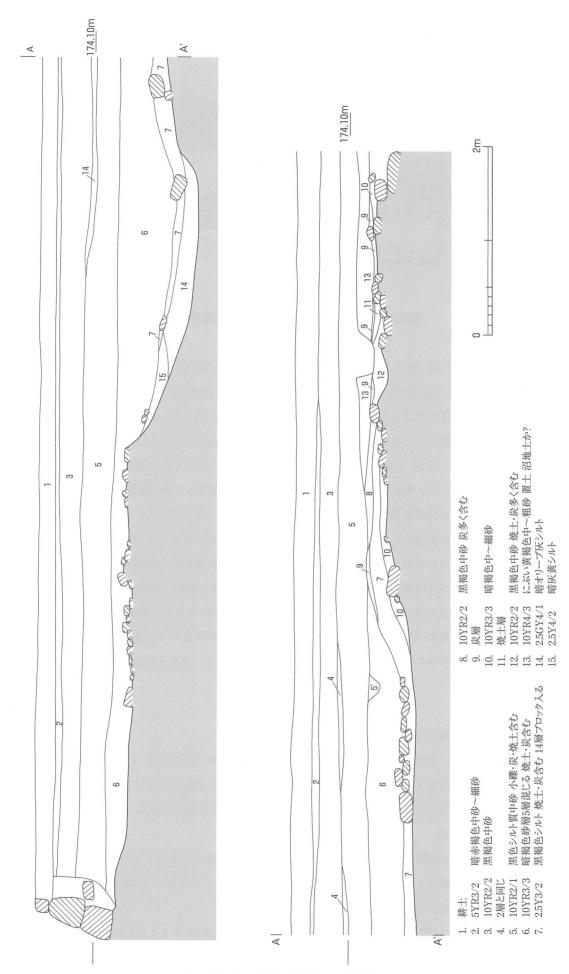
土師器皿については、後述する SG01 出土土師器の項で土師器皿の分類を行って、その概要述べている。ここでは、記述が前後するが、後述する SG01 での土師器皿の分類基準に従って記述する。

土師器皿には大きく分けて、京都産土師器を摸倣したいわゆる京都系土師器 (142・143・144・149) と在地系土師器とがある。

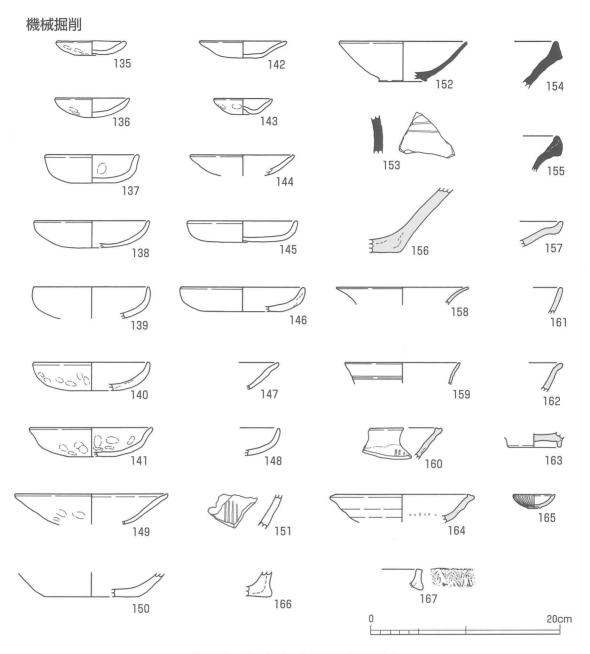
京都系と考えられる土師器皿には口径が比較的小さく、深身で底部が突出するヘソ皿タイプと、器壁が薄く、浅身で体部が緩やかに斜め上方に延びる伊野分類の I タイプのもの(142・144・149)とがあり、いずれも 15 世紀代に比定される。

在地系土師器には、I A類 (135·136)、I C類 (138)、I D類 (140)、II A 1 b類 (141)、II B 1類 (137·146)、II C 1類 (139) がある。

(152) ~ (155) は須恵器である。(152) は須恵器椀である。僅かに平高台の痕跡を留め、体部は内



第56図 場市遺跡F地区東壁土層断面図

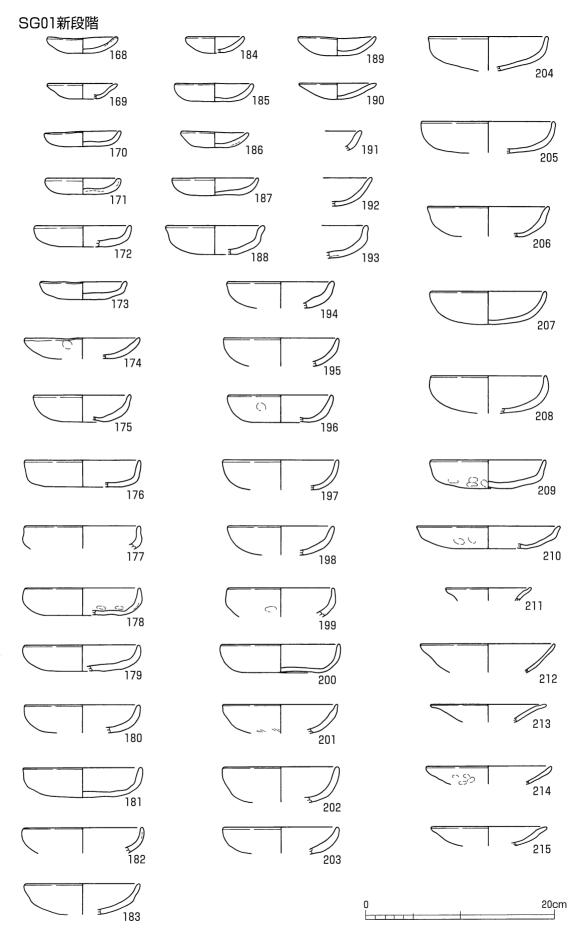


第57図 場市遺跡F地区遺物実測図(1)

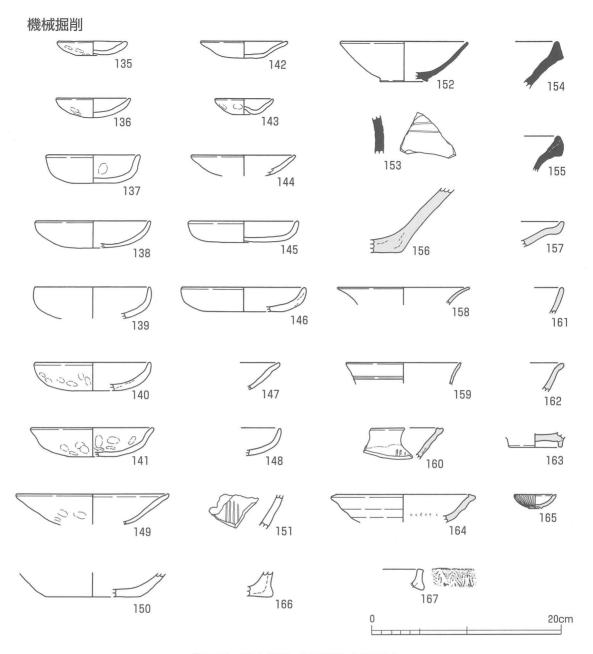
灣気味に斜め上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施し、底部外面は不調整で糸切痕が残る。東播系須恵器で12世紀中葉~後半代に比定される。(153)は須恵器片である。細片のため器種は不明である。(154・155)は須恵器鉢である。(154)は口縁部を斜め方向に切り、(155)は口縁端部が玉縁状を呈する。いずれも口縁部内外面には強い回転ナデ調整を施す。どちらも東播系須恵器で、(154)は12世紀末~13世紀前半代、(155)は14世紀後半~15世紀前半代に比定される。

(156) は無釉陶器甕の底部である。平底で体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。内外面とも回転ナ デ調整を施す。色調、胎土から備前焼と考えられる。

(160) (164) は施釉陶器である。(160) は施釉陶器の卸皿である。体部は直線的に斜め上方に延び、口縁部内面に凸帯が1条巡る。体部内面に、櫛描きの卸目が認められる。内外面とも灰釉を施釉し、淡黄緑色に発色する。内外面とも、体部以下は露胎である。瀬戸産で15世紀代に比定される。(164) は灰



第58図 場市遺跡F地区遺物実測図(2)

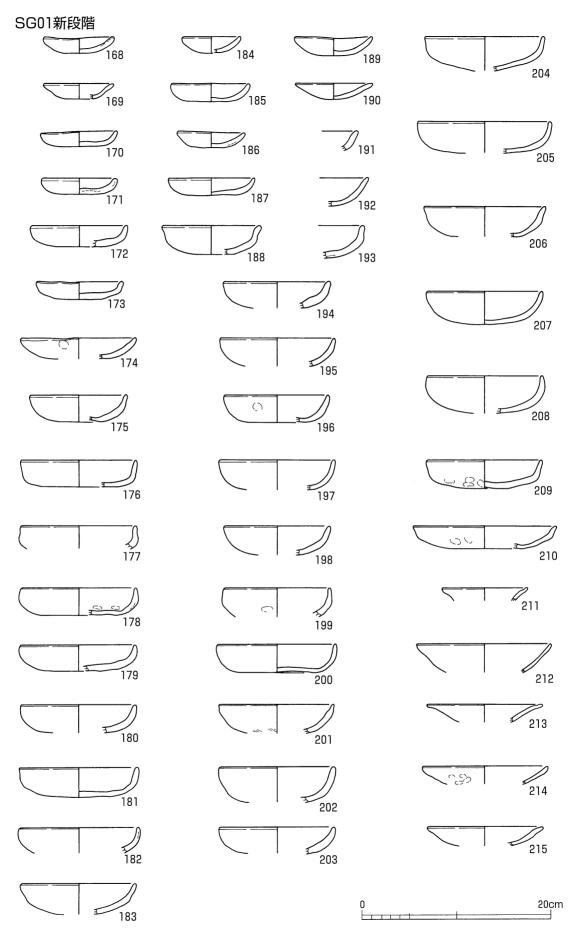


第57図 場市遺跡F地区遺物実測図(1)

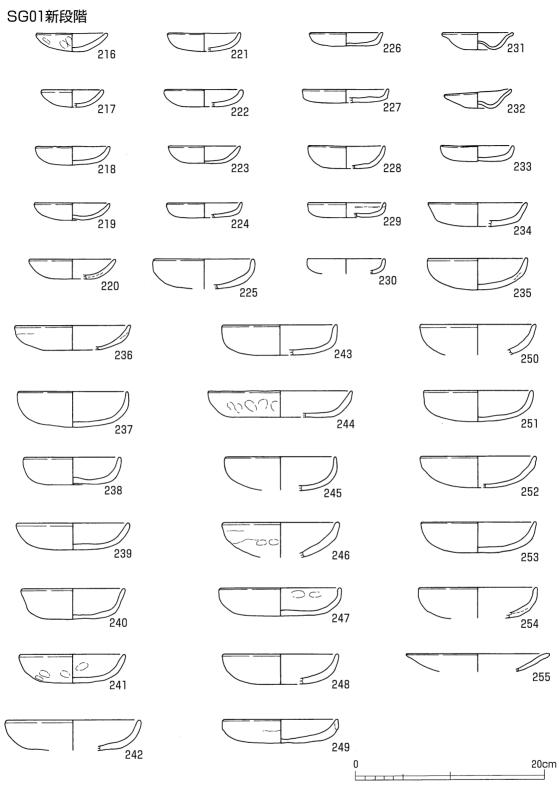
彎気味に斜め上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施し、底部外面は不調整で糸切痕が残る。東播系須恵器で12世紀中葉〜後半代に比定される。(153)は須恵器片である。細片のため器種は不明である。(154・155)は須恵器鉢である。(154)は口縁部を斜め方向に切り、(155)は口縁端部が玉縁状を呈する。いずれも口縁部内外面には強い回転ナデ調整を施す。どちらも東播系須恵器で、(154)は12世紀末〜13世紀前半代、(155)は14世紀後半〜15世紀前半代に比定される。

(156) は無釉陶器甕の底部である。平底で体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。内外面とも回転ナ デ調整を施す。色調、胎土から備前焼と考えられる。

(160) (164) は施釉陶器である。(160) は施釉陶器の卸皿である。体部は直線的に斜め上方に延び、口縁部内面に凸帯が1条巡る。体部内面に、櫛描きの卸目が認められる。内外面とも灰釉を施釉し、淡黄緑色に発色する。内外面とも、体部以下は露胎である。瀬戸産で15世紀代に比定される。(164) は灰



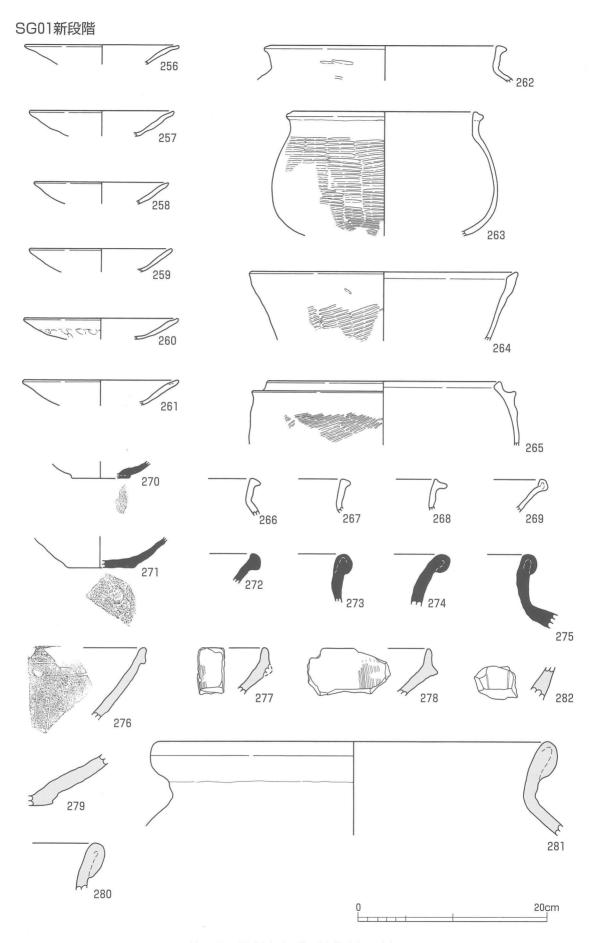
第58図 場市遺跡F地区遺物実測図(2)



第59図 場市遺跡F地区遺物実測図(3)

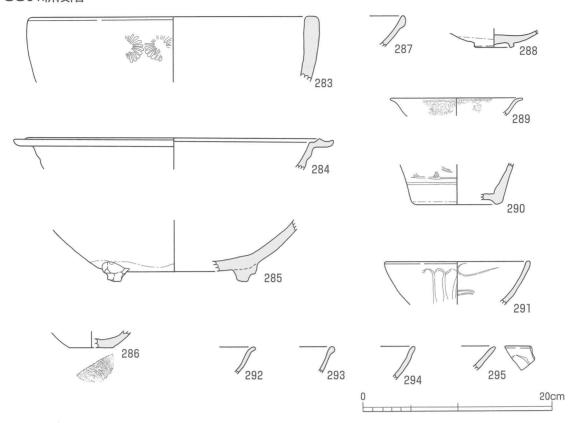
釉陶器の卸皿である。平底で体部は僅かに内彎し、口縁部は水平に端面をもつ。底部内面に櫛描きの卸目が認められる。内外面とも灰釉を薄く施釉し、淡黄緑色に発色する。瀬戸産で15世紀代に比定される。

 $(158) \sim (163)$  は貿易陶磁である。(158) は白磁碗である。器壁は比較的薄い。口縁部は外方にひらく。内外面とも透明釉を施釉し、灰白色に発色する。華南産白磁と考えられる。(159) は青白磁碗で



第60図 場市遺跡F地区遺物実測図(4)

# SG01新段階



第61図 場市遺跡F地区遺物実測図(5)

ある。器壁は非常に薄く、体部外面に小さい凸帯が1条巡る。口縁部は僅かに外方にひらく。内外面と も透明釉を薄く施釉し、やや青味を帯びた白色に発色する。13世紀代の景徳鎮窯産青白磁と考えられる。

(161) は青磁碗である。外面に剣頭と体部の一致した線描きの細蓮弁文を施文する。内外面とも青磁釉を施釉し、灰オリーブ灰色に発色する。龍泉窯系青磁細蓮弁文碗で、15世紀後半~16世紀前半代の所産であろう。(162) も青磁碗である。口縁部は外反し、端部は丸みをもつ。16世紀代の龍泉窯系青磁と考えられる。(163) は、青磁碗の底部である。高台は細く、比較的低い。内外面とも青磁釉を施釉し、淡黄緑色に発色する。高台脇まで施釉し、高台畳付から高台裏は露胎である。13世紀代の龍泉窯系青磁碗と考えられる。

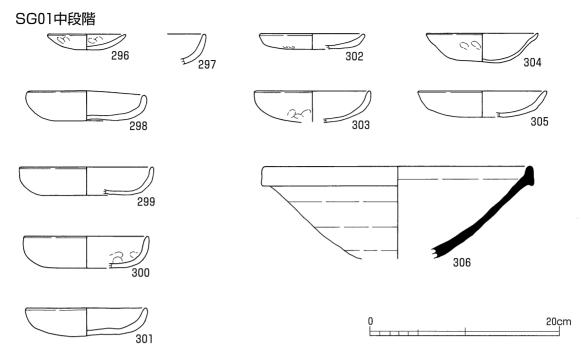
# SG01 新段階出土土器 · 陶磁器

土師器皿 (168~261)

土師器皿には、ヘソ皿などに代表される京都産土師器皿を摸倣した京都系土師器皿と器壁が比較的厚く、様々な形態をもつ在地産の土師器皿とに大きく分類される。ここでは、記述の都合上、場市遺跡 SG01 を中心に包含層などから出土した土師器皿を分類し、それぞれの遺構出土の土師器皿については、この分類に従って概要を述べる。

京都系と考えられる土師器皿には、器壁が薄く、口径が比較的小さく、底部が突出するいわゆるヘソ 皿タイプのもの(231・232)と器壁が薄く、浅身で、体部が緩やかに斜め上方に延びる伊野分類 I タイプのもの(211・213・214・215・255・256・257・258・259・260・261)とがある。

在地系と考えられる土師器皿は底部と体部の界が不明瞭な I 類と底部と体部の界が明瞭な I 類とに大別される。



第62図 場市遺跡F地区遺物実測図(6)

I 類は体部の形態から、体部が直線的に斜め上方に延びる I A類 (168・174・184・186・189・190・216)、体部が僅かに内彎気味に斜め上方に延びる I B類 (217・219・220)、体部が直線的にほぼ直上に延びる I C類 (195・198・201・235・236・241・246・248・252)、体部が僅かに内彎気味に短く直上に延びる I D類 (171・222) に細分される。

Ⅱ類は体部の形態から、体部が直線的に斜め上方に延びるⅡA類、体部が直線的にほぼ直上に延びるⅡB類、体部が僅かに内彎気味にほぼ直上に延びるⅡC類に分類される。

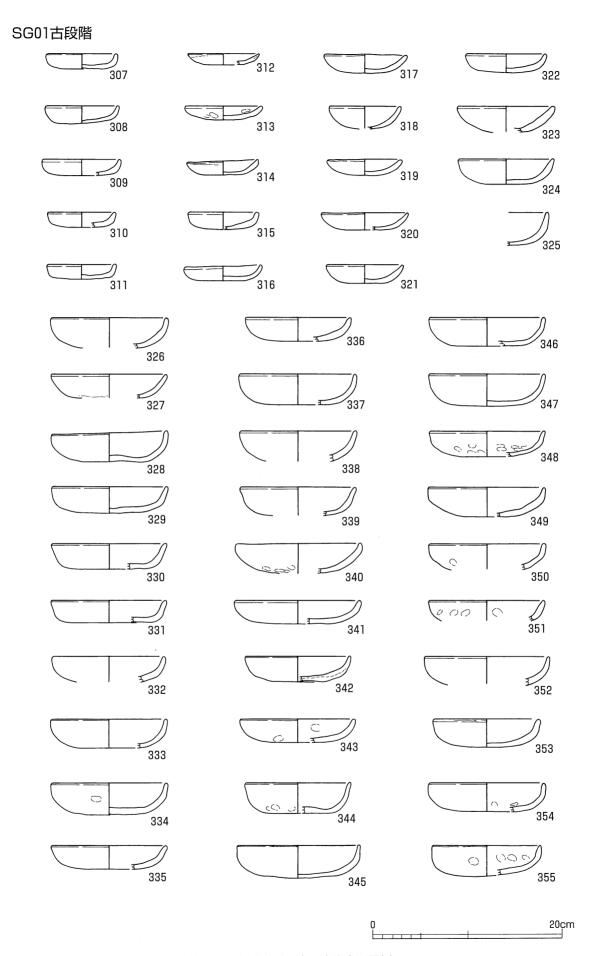
Ⅱ A類には内面の体部と底部の界が丸みをもつ Ⅱ A 1 類がある。更に Ⅱ A1 類は口縁部の形態から口縁部をそのまま上方に引き上げる Ⅱ A 1 a類(170・173・175・183・185・187・203・210・223・228・234・239・242・244・249)と口縁部が外反する Ⅱ A 1 b類(358・370)に分類される。

Ⅱ B類は更に内面の体部と底部の界が丸みをもつ Ⅱ B 1 類 (180・181・199・204・205・225・240・243・251・253・254) と内面の体部と底部の界が角張ってほぼ直角になる Ⅱ B 2 類 (172・176・178・209・224・226・227・229・230・233) に細分される。

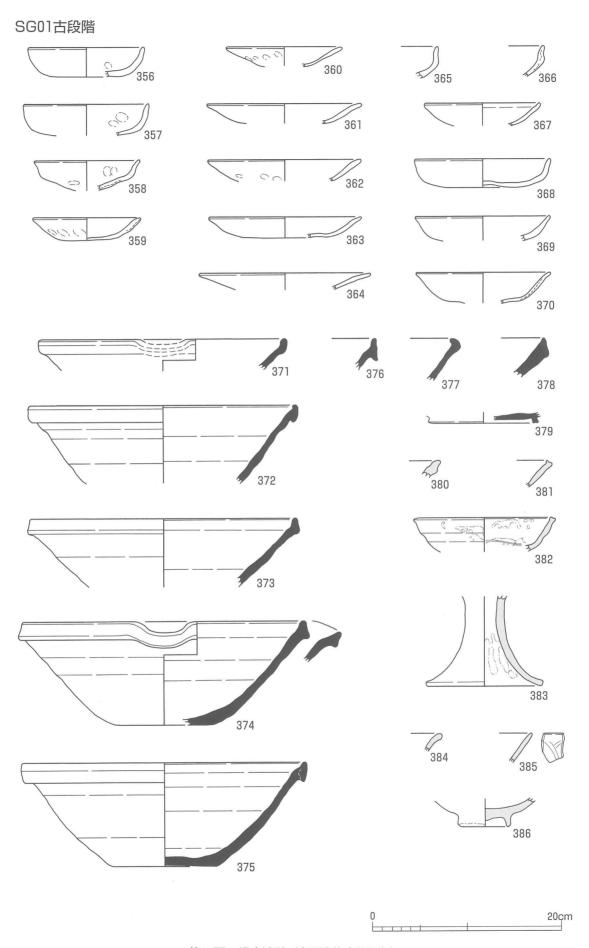
II C類は II C 1 類のみで、 II C 2 類は存在しないが、 II C 1 類は口縁部の形態から、口縁外面を強くナデて、口縁部外面に凹部をもつ II C 1 a 類(177・188・193・206)と凹部をもたない II C 1 b 類(179・182・196・197・200・202・207・208・218・221・238・245)とに細分される。

(262~269) は鍋である。(262) は口縁部で、頸部は短く直立し、口縁端部は外方に引き出す。体部外面に平行叩き目が残る。長谷川分類 播丹型 I 類相当で 13 世紀後半代に比定される。(263) は丸底で体部は大きく内彎する。頸部は短く直立し、口縁端部は外方に水平に引き出す。粘土紐巻き上げ成形で、口縁部内外面には強いヨコナデ調整を施す。体部外面は不調整で全面に平行叩き目が残る。長谷川分類 播丹型 II 類相当で 14 世紀前半代に比定される。(264) は体部が、直線的に外上方に延び、口縁部は僅かに内側に肥厚する。粘土紐巻き上げ成形で、口縁部内外面には強いヨコナデ調整を施す。体部外面は不調整で、斜め方向の平行叩き目が残る。長谷川分類 鉄かぶと形 I 類相当で 15 世紀前半代に比定される。

(265) は体部が内彎し、口縁部は大きく内傾する。口縁部外面に断面三角形状の鍔を貼り付ける。粘

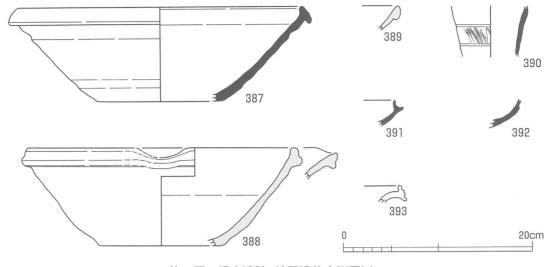


第63図 場市遺跡F地区遺物実測図(7)



第64図 場市遺跡F地区遺物実測図(8)

### SB03下層



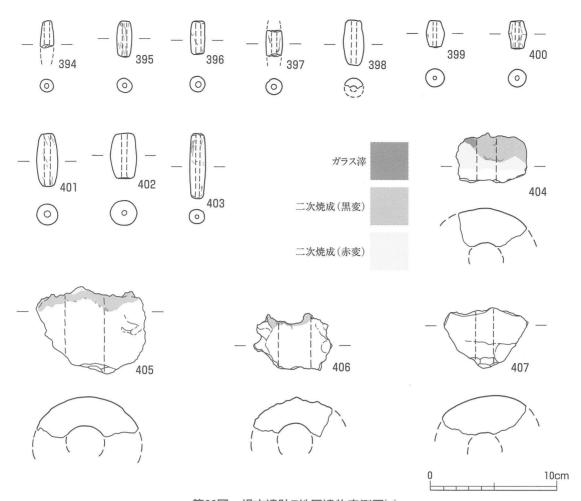
第65図 場市遺跡F地区遺物実測図(9)

土紐巻き上げ成形で、口縁部内外面に強いヨコナデ調整を施す。体部外面は不調整で、斜め方向の平行叩き目が残る。長谷川分類 播磨型 I B 類相当で 15 世紀中頃に比定される。(266・267・268) はいずれも鍋の口縁部片で、形態の特徴から長谷川分類 播丹型に分類される。また、同様に (269) は鉄かぶと形に分類される。

(276) ~ (281) は無釉陶器である。(276) は擂鉢で体部が僅かに内彎気味に斜め上方に延び、口縁部は上下に拡張して小さい縁帯をもつ。体部内面にはヘラ描きの卸目が認められる。産地は不明である。(277)・(288) はいずれも備前焼擂鉢と考えられる。口縁部は上下に拡張して縁帯をもち、内面には櫛描きの擂目を施す。いずれも備前焼Ⅳ期相当で、15世紀代に比定される。(282) は擂鉢体部、(279) は色調、胎土から備前焼と考えられる。(273・274・275) はいずれも甕の口縁部である。頸部は、ほぼ直立(273・275)もしくは僅かに外傾し、口縁端部がいずれも玉縁状に肥厚する。3点とも備前焼Ⅲ期相当で、14世紀代に比定される。(280・281) は口縁部が断面楕円形状に肥厚し、内外面とも回転ナデ調整を施す。備前焼Ⅳ期相当で、15世紀代に比定される。

(284) ~ (286) は施釉陶器である。(284) は灰釉陶器の折縁深皿である。体部は僅かに内彎し、口縁部は外方に水平に大きく折り曲げる。口縁部上面に凸帯が1条巡る。内外面とも灰釉を薄く施釉し、淡黄緑色に発色する。瀬戸産で15世紀代に比定される。(285) は灰釉陶器の深皿の底部である。平底で体部は僅かに内彎気味に斜め上方に立ち上がる。底部外面に簡略化された獣足状の脚を貼り付ける。内外面とも灰釉を薄く施釉し、淡黄緑色に発色する。瀬戸産で15世紀代に比定される。(286) は灰釉皿の底部である。平底で底部外面には糸切痕が残る。内外面とも灰釉を薄く施釉し、淡黄緑色に発色する。瀬戸系の製品と考えられる。

(287) ~ (291) は貿易陶磁である。(287) は白磁碗である。体部は僅かに内彎し、口縁部は玉縁状に肥厚する。内外面とも透明釉を施釉し、灰白色に発色する。横田・森田分類 白磁碗収類相当で12世紀後半代から13世紀前半代に比定される。(288) は白磁皿である。底部の器壁は比較的厚い。断面台形状の比較的低い高台をもつ。内外面とも透明釉を施釉し、白色に発色する。華南産白磁の高台付き皿で、13世紀代に比定される。(289) は染付磁器の皿である。体部は僅かに内彎し、口縁部は外



第66図 場市遺跡F地区遺物実測図(10)

方にひらく。外面には渦巻文、内面には崩れた瓔珞文をやや淡い呉須で描く。16世紀代の明青花磁器と考えられる。 (291) は外面に鎬の無い蓮弁文を、内面にヘラ描きで退化した草花文を施文する。内外面とも青磁釉を施釉し、灰オリーブ色に発色する。龍泉窯系青磁蓮弁文碗で14世紀代の所産である。 (292) は同じく青磁碗で、口縁部が外反する。 (293) も (292) と同様に口縁部が外反する青磁碗である。 口縁端部は丸みをもつ。いずれも龍泉窯系青磁で、 (292) は16世紀代に比定される。 (295) は外面に 鎬のあまい広形の蓮弁文を片切り彫で施文する。13世紀代の龍泉窯系青磁蓮弁文碗である。

SG01 中段階出土土器・陶磁器

土師器 (296~305)

SG01 新段階で行った分類に従って記述を行う。ここでは、新段階に比べて、量的には少ないものの、同様に京都系土師器皿(304)と在地系皿とが出土している。

# 京都系土師器皿

(304) は器壁が薄く、やや深身で体部は直線的に斜め上方に延び、口縁部が僅かに外反する。伊野分類 I タイプの皿と考えられる。

## 在地系土師器皿

在地系皿にはIA類 (296)、IC類 (302)、ⅡA1類 (305)、ⅡB1類 (300·301·303)、ⅡC1類 (298·299) が含まれる。

(306) は須恵器鉢である。体部はほぼ直線的に斜め上方に延び、口縁部は上下に拡張して、縁帯を形

成する。粘土紐巻き上げ成形で、口縁部内外面には強い回転ナデ調整が施される。東播系須恵器で 14 世紀前半代に比定される。

SG01 古段階出土土器・陶磁器

土師器皿 (307~370)

SG01 新段階で行った分類基準にしたがって記述を行う。新段階、中段階と同様に、土師器皿には京都系と在地系の皿が含まれる。

京都系土師器皿には、いわゆるヘソ皿タイプのものは含まれず、器壁が薄く、浅身で体部が直線的に 斜め上方に延びる伊野分類 I タイプのもの(360・361・362・363・364・367)のみで構成されている。 在地系土師器皿には I 類では I A類(312・313・323・359・369)、 I B類(318・319・340)、 I C 類(321)が含まれる。

Ⅱ類にはⅡA1a類(314・316・317・320・322・327・335・341)と新段階にはなかった口縁部が外方にひらくⅡA1b類(358・370)の他、ⅡB1類(307・308・309・310・324・332・333・334・338・342・344・345・347・348・349・350・352・353・354・355・356・357・368)、ⅡC1類(326・328・336・337・343・346)がある。

(371) ~ (379) は須恵器で鉢と杯が出土している。(371) は須恵器鉢である。口縁部は玉縁状に小さく肥厚する。口縁部内外面は強い回転ナデ調整を施す。東播系須恵器で、14 世紀後半~15 世紀前半代に比定される。(372) は体部が直線的に斜め上方に延び、口縁部は断面楕円形状に肥厚する。口縁部内外面には強い回転ナデ調整を施す。東播系須恵器で14世紀代に比定される。(373) は体部は直線的に斜め上方に延び、口縁部端部は上方につまみ上げる。口縁部内外面には強い回転ナデ調整を施す。東播系須恵器で13世紀代に比定される。(374・375) は平底で、体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。粘土紐巻き上げ成形で、口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整がそれぞれ施される。東播系須恵器で、13世紀後半~14世紀代に比定される。(376・377・378) はいずれも東播系鉢の口縁部である。口縁部形態の特徴から、(376) は13世紀後半~14世紀代、(377) は14世紀後半~15世紀前半代、378 は13世紀前半代にそれぞれ比定される。(379) は杯の底部である。平底で、断面長方形状の低い高台を貼り付ける。内面は回転ナデ、外面には回転へう削り痕が見られる。

(380) は無釉陶器の鉢である。口縁部内外面は強い回転ナデ調整を施し、端部は上方に摘み上げる。 外面には赤土部を塗布し、胡麻状に灰被りが見られる。丹波焼の可能性が高い。

(381) ~ (383) は施釉陶器である。(381) は灰釉陶器の皿もしくは卸皿である。体部は直線的に斜め上方に延び、口縁部内面に小さい凸帯を1条巡らせる。内外面とも灰釉を薄く施釉し、淡黄緑色に発色する。瀬戸系の製品と考えられる。(382) は灰釉陶器卸皿である。平底で体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上面に水平に端面をもち、端部は内側に僅かに引き出す。底部内面にヘラ描きの卸目が認められる。内外面とも灰釉が薄く施され、淡緑色に発色する。瀬戸系の灰釉卸皿で、15世紀代に比定される。(383) は灰釉陶器の脚部である。底部は円錐状を呈し、脚部は円柱状に直立する。外面から底部内面まで、灰釉を薄く施釉し、淡黄緑色に発色する。底部外面に胎土目跡が2箇所認められる。瀬戸・美濃系灰釉燭台の底部と考えられ、15世紀代に比定される。

 $(384) \sim (389)$  は貿易陶磁である。(384) は青磁碗もしくは鉢の口縁部である。口縁部は僅かに外方にひらき、端部は丸みをもって収める。龍泉窯系青磁と考えられる。(385) は青磁碗である。外面に

片切り彫で蓮弁文を施文する。13世紀代の龍泉窯系青磁蓮弁文碗と考えられる。(386) は青磁碗の底部である。底部の器壁は厚く、高台は比較的細く高い。内外面とも青磁釉を施釉し、灰オリーブ灰色に発色する。13世紀代の龍泉窯系青磁碗であろう。(389) は白磁碗の口縁部である。口縁部は玉縁状に肥厚する。内外面とも透明釉を施釉し、灰白色に発色する。横田・森田分類白磁碗IV類相当で、12世紀後半~13世紀前半代に比定される。

SB03 下層出土土器・陶磁器は2点ある。(387) は須恵器鉢である。平底で体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。粘土紐巻き上げ成形で、口縁部内外面には強い回転ナデ調整が、体部内外面には回転ナデ調整が施される。東播系須恵器で、13世紀後半~14世紀代に比定される。(388) は無釉陶器鉢である。平底で体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。粘土紐巻上げ成形で、口縁部内外面は強い回転ナデ調整を施す。形態的には備前焼に酷似するが、胎土、焼成は異質で、産地は特定できない。

### 引用・参考文献

- 1. 伊野近富 1995 「土師器皿」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会
- 2. 岡田章一・長谷川 眞 2003 「兵庫津出土の土製煮炊具」『研究紀要』第3号 兵庫県教育委員会埋蔵 文化財調査事務所
- 3. 森田 稔 1995 「中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- 4. 藤澤良祐 1995 「(生産3) 古瀬戸をめぐる中世陶器の世界-その生産と流通-」資料集
- 5. 横田賢次郎・森田 勉 1978 「大宰府出土の輸入陶磁器について-形式分類と編年を中心として-」『九 州歴史資料館論集』 4 九州歴史資料館

#### 弥生・古墳時代の土器

 $(390) \sim (392)$  は古墳時代の須恵器で、(390) はハソウロ縁部である。外面に波状文が見られる。(391) は杯身でしっかりした立ち上がりをしている。外反し端部は丸い。(392) も杯身である。(393) は弥生土器器台上台口縁部である。(220) 2条の凹線文を施している。

### 十製品

 $(394) \sim (403)$  は土錘である。すべて管状土錘で、平面形には変化がある。すべてユビ成形からナデで仕上げている。ユビで絞っているものもある。 $(394) \sim (398)$  は中央が膨らみ端部が細くなるタイプで(398) はやや大形である。(399) (400) は短いタイプである。(401) (402) は大形で中央が膨らむ。(403) は棒状に細長い。重さは 3.1 g から 15.7 g と幅がある。

(404)  $\sim$  (407) はフイゴ羽口である。 4 点とも破片で円形に残っているものはない。復原すると、(485) で 8 cmである。(404) はガラス滓が付いている。

第2表 場市遺跡 B地区出土遺物観察表

1	Ħ	1	ł	11/4F + 24/4		法量 (cm)			1	1	ı
番布	種別	報	技法 他	が 別の 特徴	口倭	器冒	底径	田田	這構	層位	龍
20	上師器	搬	ヨコナデ	外傾し端部外側につまみ出す	(17.0)	(5.7)	1	B地区	SD01		
21	上師器	赮	ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ	外傾し端部外側に尖らす	(16.7)	(2.5)	1	B地区	SD01		
22	上師器	搬	ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ	外傾し端部角張る	(18.0)	(4.75)	ı	B地区	SD01		
23	上師器	串	ハケ整形ののちナデ	内湾する体部に突出平底がつく	ı	(3.7)	(2.0)	B地区	SD01		
24	上師器	林	ヨコナデ、ナデ、粘土組継ぎ目	内湾し端部尖る、	ı	(4.6)	1	B地区	SD01		
22	上師器	高杯	内面ヘラケズリ、外面ユビ押さえ・ナデ	ラッパ状に外反し端部尖る	1	(5.9)	10.3	B地区	SD01		顔料塗布
26	弥生土器	굄	ハケ整形、ヨコナデ、端面に1条四線	外反し端部内外に肥厚	(14.9)	(3.4)	1	B地区	T26		
27	上師器	鯸	ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ	外傾し端部外側につまみ出す	(18.0)	(3.9)	1	B地区		機械掘削	
28	上師器	杯	ヨコナデ、外面下半ヘラケズリ	内湾する	(16.0)	(3.8)	1	B地区	SX01		
59	上師器	高杯	内面ヘラケズリ、ハケ整形、ヨコナデ	外反し端部丸い	1	(3.7)	(10.2)	B地区		面精査	
30	上師器	高杯	ハケ整形、板ナデ、ヨコナデ	外傾する柱状部から外反する	1	(7.1)	(9.6)	B地区		面精査	
31	弥生土器	器合	ユビ成形、ヨコナデ	外反する	1	(6.4)	ı	B地区		機械掘削	
32	須恵器	椀	ロクロナデ、底部糸切り	平底から内湾する体部	ı	(2.6)	(5.6)	B地区		機械掘削	
33	青磁	碗	高台露胎、見込み押印、草花文	内湾する、底部厚い	1	(4.0)	4.0	B地区	SX01		15世紀後半
34	白磁	Ħ	施釉	平底で内湾する体部、断面三角高台	1	(7.3)	(1.6)	B地区		機械掘削	

第3表 場市遺跡 C 地区・D 北地区出土遺物観察表

III H	担	"	<b>*</b> * * * *	٠		法量 (cm)		拉幹十五			l
	作工	45 住	R	心影の神政	口径	器高	底径	표구원	酒	温瓜	画
35	干邮器	難	ヨコナデ	屈曲しつつ外傾する、外側につまむ	(15.6)	(4.0)	1	C地区	SH01		
36	上前器	艱	内面ヘラケズリ、外面ハケ整形、ヨコナデ	内湾する体部から外傾する口縁部	(14.9)	(6.1)	ı	C場区	SH01	SP05	
37	上節器	删	内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ	内湾ぎみに外傾する、端部肥厚	(16.1)	(3.7)	ı	C地区	SH01	SP13	

番号	種別	器種	技法 他	<b>影の特徽</b>	8)	法量 (cm) " Pr	Đ.	田田路区	遺	層位	= 第
					T H	宣告	好任				
38	上節器	個	ユビ成形、ナデ仕上げ	球形に内湾する、丸底	1	(7.8)	1	C地区	SH01		
39	上師器	高杯	ヨコナデ、ヘラミガキ	内湾し端部付近で開く	(16.0)	(4.0)	ı	C港区	SH01		
40	上師器	高杯	ヨコナデ、外面ヘラミガキか	外反し端部丸い	ı	(2.0)	(10.4)	C地区	SH01	SP05	
41	製塩土器		ユビ成形からナデ	直線的に延びる、端部尖る	(4.2)	(4.9)	ı	C港区	SH01	SP03	
42	製塩土器		ユビ成形からナデ	直線的に延びる、端部尖る	(4.6)	(3.0)	ı	C地区	SH01		
43	製塩土器		ユビ成形からナデ	内湾する	ı	(3.0)	1	C地区	SH01	SP12	
44	製塩土器		ユビ成形からナデ	内傾する	1	(2.1)	ı	C地区	SH01	中央炉跡	
45	製塩土器		ユビ成形からナデ	内湾する	1	(2.0)	1	C地区	SH01		
46	製塩土器		ユビ成形からナデ	内湾する・・	1	(2.5)	1	C地区	SH01	SP12	
47	製塩土器		ユビ成形からナデ	内湾する	1	(2.7)	1	C地区	SH01	SP12	
48	製塩土器		ユビ成形からナデ	内傾する	1	(2.5)	1	C地区	SH01		
49	上師器	꾩	内面ヘラケズリ、外面ハケ、ヨコナデ	肩の張る体部、内湾する口縁部肥厚	17.6	(14.5)	1	D北地区	SH05	土坑	
20	弥生土器	串	ナデ、3条の凹線	直立する頸部から外傾する	-	(4.2)	1	D北地区	SH05		
51	弥生土器	毈	ョコナデ	外傾し端部肥厚する	1	(1.8)	I	D北地区	SH05		
52	上師器	高杯	ユど成形からナデ、ヨコナデ	内湾する底から外傾ぎみに広がる	(15.2)	(6.9)	ı	D北地区	SH05	土坑、顔料塗布	
53	上節器	高杯	ユビ成形からハケ整形、ナデ・板ナデ、ヨコナ デ、内面はミガキ	内湾する杯部、端部丸い	15.2	(5.35)	ı	D北地区	SH05	土坑、顔料塗布	
54	上師器	高杯	ユビ成形からナデ、ヨコナデ	外傾し水平に近く直線的に開く	ı	(2.6)	(12.6)	D北地区	SH05	土坑	
22	弥生土器	高杯	内面ヘラケズリ、外面ナデ、ヨコナデ	外反する、端部外側につまみ出す	1	(4.8)	(11.1)	D北地区	SH05	土坑	
26	弥生土器	高杯	ヨコナデ	内湾する下半から屈曲して外反する	I	(3.0)	I	D北地区	SH05	土坑	
22	上節器	高杯	絞り目、ヘラケズリ	外傾する脚部、杯底は平たい	I	(4.45)	-	D北地区	SH05	土坑	
28	弥生土器	蒋	ユビ成形からナデ、手捏ね	内湾する体部で口縁部は直になる	(4.8)	4.6	2.5	D北地区	SH05	土坑、黒斑	
59	製塩土器		ユビ成形からナデ	内湾し端部丸い	(4.6)	(5.5)	ı	D北地区	SH05		
09	製塩土器		ユビ成形からナデ	内傾し端部丸い	(3.8)	(4.6)	ı	D北地区	SH05	土坑	

ļ	L	ı	ı	1974 - A 7474		法量 (cm)			Į.	l	l
番売	種別	器型	技法 他	お 記の 特徴	口径	器高	底径	A 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田	順	層加	篇例
61	製塩土器		ユビ成形からナデ	内傾する	(4.5)	(2.1)	1	D北地区	SH05		
62	製塩土器		ユビ成形からナデ	内傾し端部尖る	(4.0)	(2.0)	ì	D北地区	SH05		
63	製塩土器		ユビ成形からナデ	内湾する	1	(2.5)	ı	D北地区	SH05	土坑	
64	製塩土器		ユビ成形からナデ	外反し端部内側に曲げ丸い	1	(2.2)	1	D北地区	SH05	土坑	
65	弥生土器	相	ナデ、ヨコナデ、四線波状直線扇形文	内傾してから外反する、端部肥厚	(21.0)	(7.7)	1	C地区		包含層	
99	弥生土器	出	ユビ成形、ナデ仕上げ	断面扁平な球形の把手	ı	(6.75)	1	C地区		面精査	顔料塗布
29	弥生土器	出	ユビ成形、ナデ仕上げ	断面隅円方形	ı	(6.5)	ı	C地区		包含層	
89	弥生土器	旧	비그수ブ	端部大きく肥厚する	ı	(1.65)	1	C地区		包含層	
69	弥生土器	丰	ヨコナデ	内湾し端部肥厚する	ı	(2.55)	ı	C地区		包含層	T28
70	弥生土器	器中	3247	下方につまみ出す	ı	(2.35)	1	C地区		包含層	
71	弥生土器	高杯	ハケ整形からヨコナデ	外傾し端部肥厚	I	(3.5)	1	C地区		包含層	
72	弥生土器	高杯	内面ヘラケズリ、ヨコナデ	外反し端部肥厚する	ı	(3.4)	(12.0)	C地区		包含層	円孔12?
73	弥生土器	自杯	ユビ成形からハケ・ナデ、ヨコナデ	内湾し端部内外に肥厚	1	(2.1)	(14.0)	C地区		包含層	
74	十二	桕	H L L	ラッパ状に外傾し端部尖る	(8.9)	(5.5)	-	C地区		包含層	T28
75	上節器	高杯	ハケ整形からヘラミガキ、ヨコナデ	内湾する	ı	(4.1)	-	C地区		包含層	T28
92	上節器		ヨコナデ、ヘラミガキ	内湾する、端部丸い	(15.0)	(5.6)	ı	C地区		包含層	T28
77	上節器	自杯	3747	僅かに外反する	ı	(3.0)	(13.3)	C地区		包含層	T28
78	上師器		内面ヘラケズリ・ハケ、外面ハケ・ナデ	短い柱状部で外反する	1	(5.35)	ı	C地区		面精査	
79	上師器	高杯	ヘラケズリ、ハケののちナデ・ヘラミガキ	中実で裾広がり	1	(5.2)	ı	C地区		面精査	
8	上師器		ユビ成形からナデ	筒状から外傾する	1	(5.55)	ı	C地区		面精査	顔料塗布
81	中廢	多	施釉	内湾し端部肥厚	(14.0)	(3.9)	1	C地区		面精査	
82	白磁	更	高台部再利用	高台断面台形	4.3	4.5	1.45	C地区		包含層	T28

第4表 場市遺跡 D 北地区出土遺物観察表

ᆙ	に野	出	*	以如子子		洪量 (cm)			1	1	1
T L	作が	·		ルが思いても一致	口径	器	底径	田田屋区	画	温 江	軍
83	上師器	鰕	摩滅のため不明	平底から僅かに内湾する体部	ı	(3.1)	(9.9)	D 北地区	SH02	検出時	
84	上部器	車	ヨコナデ, ヘラミガキ	直線的だが緩やかに外反する裾部		(1.9)	(10.3)	D北地区	SH02		
85	上師器	高杯	内面ヘラケズリ、ハケ整形	外傾する脚部で水平に近く開く		(3.6)	(10.4)	D北地区	SH02	検出時	
98	上節器	- - - - - - - - - - - - - -	ヨコナデ、ハケ整形	外反する	ı	(2.2)	(9.6)	D北地区	SH02	SK02	
87	上師器	高杯	ヨコナデ, ヘラミガキ	僅かに外反する、端部角張る	1	(1.9)	(8.8)	D北地区	SH02	SK02	
88	須恵器	杯蓋	ロクロナデ、ロクロケズリ	内湾する天井部、緩い稜線で直立	(12.0)	(4.3)	,	D北地区	SH02		
68	工師器	壘	内面ヘラケズリ、外面ハケ整形、ヨコナデ	球形の体部で外傾する口縁部	(7.8)	(6.55)	ı	D北地区	SH01		
90	工師器	器台	ヨコナデ、3条の凹線文	直線に広がり、端部内外に肥厚	(16.0)	(1.8)	1	D北地区	SH01		
91	上師器	高杯	ハケ整形、ヨコナデ	惟かに内湾し端部反る			ı	D北地区	SH01		
36	干師器	高杯	ョコナデ、ナデ	内湾する杯部	(14.3)	(5.2)	ı	D北地区	SH01		
93	上師器	<b>高杯</b>	ハケ整形からナデ、ヨコナデ	内湾する杯部で端部は反って丸い	(15.3)	(4.0)	1	D北地区	SH01		
94	上師器	肩杯	ハケ整形からナデ、脚内面ヘラケズリ	内湾する杯部、裾広がりの脚部	ı	(12.2)	1	D北地区	SH01		
92	上師器	高杯	ハケ整形からヘラミガキ、ヨコナデ	内湾する杯部、細く膨らむ柱状部	ı	(8.8)	ı	D北地区	SH01		
96	上前器	高杯	絞り目、ヘラケズリ、外面ヘラミガキ	直線的に開き屈曲して外傾する	ī	(5.7)	1	D北地区	SH01		
26	土師器	高杯	内面絞り目、外面ヘラミガキ	外傾し九曲して開く	ı	(4.5)	1	D北地区	SH01	南辺土坑	
86	上師器	高杯	ユビ成形からハケ整形、ナデ・ヨコナデ	柱状部外傾し外反する、端部角張る	1	(7.1)	(12.7)	D北地区	SH01	南辺土坑	
66	弥生土器	羅	ヨコナデ、内面ヘラケズリ	内湾する体部で外傾し端部肥厚する	(14.7)	(6.1)	ı	D北地区	SH04		
100	弥生土器	高杯	ヨコナデ、内面ヘラケズリ	外傾し屈曲して開く、端部丸い	1	(2.7)	(12.0)	D北地区	SH04		
101	弥生土器	꽳	ヨコナデ、内面ヘラケズリ	内傾し口縁部くの字	1	(3.7)	ı	D北地区	SH04		
102	弥生土器	剿	外面ハケ整形、内面ヘラケズリ、ヨコナデ	くの字で端部上方に直立につまむ	ī	(3.4)	1	D北地区	SH04		
103	上前器	高杯	ユビ、ハケ整形ののちョコナデ	内湾し端部付近で外反し端部丸い	(16.9)	(4.9)	1	D北地区	SP01	奉	
104	上師器		H L L	内湾し、端部丸い	(8.0)	2.05	·	D北地区	SP01		

	D H	H			1871 - 277 F		(cm) 書 (cm)		I i			
海生土器         高杯         月コナデ、ハケ整形、1条の凹線文         内湾する体部から直立し端部肥厚         (22.0)           弥生土器         高杯         外面ヘラケズリ、オコナデ、円形透孔         外板し端部に専する         -           歌生土器         選告         ヨコナデ、月形透孔         外板し端部に厚する         -           歌生土器         器台         ヨコナデ、3条の凹線文         外板し端部肥厚         -           北崎器         選告         ヨコナデ、3条の凹線文         外域し端部肥厚         -           須恵器         ハソウ         ロクロナデ         外域する         -           須恵器         施         ロクロナデ         内湾する         -           須恵器         施         ロクロナデ         内湾する         -           有恵器         施         ロクロナデ         中域で高台内側に尖らす         -           青磁         施         ロクロナデ         平底で高台内側に尖らす         -           青磁         施         ロクロナデ         平底から外反する         -           青磁         耐         ロクロナデ         平底から外反する         -           青磁         施         ロクロナデ         中         -           青磁         施         ロクロナデ         中           オラス王         小玉         -         -           カス王         小玉         -	争力	<b>俚</b> 別	Ė	- 1	形態の特徴			底径	出土地区	這稱	層位	軍者
効生土器         高杯         外面へラミガキ、内面へラケズリ、ナディ、円形透孔         外域し端部大きく上下に肥厚         -           立上師器         選         ヨコナデ、3条の凹線文         外域し端部位かに肥厚する         -           抗生品         器台         ヨコナデ、3条の凹線文         外域し端部地厚         -           須惠器         ココナデ、3条の凹線文         外域し端部地厚         -           須惠器         バッウ         ロクロナデ         外域する         -           製塩土器         が         コクロナデ         内湾する         -           類塩器         施         ロクロナデ         内湾する         -           類塩品         施         ロクロナデ         戸部糸切り         平底から外反する体部に         -           青磁         施         市台露船         中産から外反する体部に         -           青磁         施         ロクロナデ         平底から外反する体部に         -           青磁         施         ロクロナデ         平底から外反する体部に         -           青磁         施         市合露船         -           オラス玉         小王         中産・         -           カース         小玉         -         -           カース         -         -         -           カース         -         -         -           カース         -         -           カース	105	弥生土器	島杯	ヨコナデ、ハケ整形、1条の凹線文		(22.0)	(3.5)	1	D北地区			黒斑
站生土器         高杯         内面へラケズリ、ヨコナデ、円形透孔         外傾し端部性かに肥厚する         -           前生土器         器台         ヨコナデ、3条の凹線文         外傾し端部肥厚         -           土師器         選         ヨコナデ、3条の凹線文         外傾し端部肥厚         -           須恵器         ハソウ         ロクロナデ         外傾する         -           製塩土器         木ノウ         ロクロナデ         内湾する         -           須恵器         施         ロクロナデ、底部糸切り         平底で高台内側に尖らす         -           有恵器         施         自台露胎         中湾する         -           有恵器         施         高台露胎         内湾する         -           オラス玉         小玉         大き窓胎         -         -           カラス玉         小玉         大き窓         -         -	106	弥生土器	高杯	外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ、ナデ		ı	(6.85)	1	D 北地区			
上師器       鑑台       ココナデ、3条の凹線文       外傾し端部肥厚       -         丘師器       悪       ココナデ、3条の凹線文       外傾し端部肥厚       -         須惠器       ハンウ       ロクロナデ       外板する、端部丸い       -         須惠器       ハンウ       ロクロナデ       内済する       -         須惠器       施       ロクロナデ       対済する       (4.0)         須惠器       施       ロクロナデ、底部糸切り       平底から外反する体部に       -         青磁       施       高台露胎       内湾する       -         オラス玉       小玉       小玉       中湾する       -         カラス玉       小玉       小玉       -       -         カラス玉       小玉       小玉       -       -         カラス玉       小玉       小玉       -       -       -         カラス玉       小玉       -       -       -       -       -         カラス玉       小玉       - <td< td=""><td>107</td><td>弥生土器</td><td>高杯</td><td>ヨコナデ、</td><td></td><td>1</td><td>(2.4)</td><td>(11.6)</td><td>D北地区</td><td></td><td></td><td></td></td<>	107	弥生土器	高杯	ヨコナデ、		1	(2.4)	(11.6)	D北地区			
効生土器         器台         ヨコナデ、3条の凹線文         外傾し端部肥厚         -           須恵器         ハソウ         ロクロナデ         外反する         -           須恵器         ハソウ         ロクロナデ         内湾する         -           類塩土器         施         ロクロナデ         平底で高台内側に尖らす         -           須恵器         施         ロクロナデ、底部糸切り         平底から外反する体部に         -           青磁         施         高台螺胎         内湾する         -           オラス玉         小玉         大玉         -         -	108	上節器	쌔	コンナジ		1	(2.5)	1	D北地区			
土師器     悪     ココナデ     外傾する、端部丸い     一       須恵器     ハソウ     ロクロナデ     内湾する     一       製塩土器     木ノウ     コど成形からナデ     内湾する     一       須恵器     ・ カンロナデ     平底で高台内側に尖らす     一       須恵器     ・ カンロナデ、底部糸切り     平底から外灰する体部に     一       青磁     ・ 前     高台露胎     内湾する     一       オラス玉     小玉     ・ 大     一	109	弥生土器	器台	コナデ、		ı	(1.4)	1	D 北地区			
須恵器     ハソウ     ロクロナデ     内湾する     -       製塩土器     エど成形からナデ     内湾する     -       須恵器     施     ロクロナデ、底部糸切り     平底から外反する体部に     -       有恵器     施     ロクロナデ、底部糸切り     平底から外反する体部に     -       青磁     施     高台露胎     内湾する     -       オラス玉     小玉	110	上師器	羅	П		1	(3.5)	ı	D北地区			
須恵器     ハソウ     ロクロナデ     内湾する     -       製塩土器     新     コど成形からナデ     (4.0)       須恵器     新     ロクロナデ、底部糸切り     平底から外反する体部に     -       青磁     施     高台露胎     内湾する     -       ガラス玉     小玉	111	須恵器	ハソウ	ロクロナデ		1	(2.8)	ı	D北地区			
製塩土器     ユビ成形からナデ     内湾する     (4.0)       須恵器     施     ロクロナデ、底部糸切り     平底で高台内側に尖らす     -       青磁     施     百台露胎     内湾する     -       ガラス玉     小玉     の.34	112	須恵器	ハソウ	1		ı	(2.3)	1	D北地区	SH02	検出時	
須恵器         税         ロクロナデ、底部糸切り         平底で高台内側に尖らす         -           須恵器         税         ロクロナデ、底部糸切り         平底から外反する体部に         -           青磁         碗         高台露胎         内湾する         -           ガラス玉         小玉         0.34	113	製塩土器		ユビ成形からナデ	内湾する	(4.0)	(4.3)	ı	D北地区		表探	
須恵器     純     ロクロナデ、底部糸切り     平底から外反する体部に     -       青磁     碗     高台露胎     内湾する     -       ガラス玉     小玉     0.34	114	須恵器	椀	1		ı	(1.5)	(6.1)	D北地区			
青磁     碗     高台露胎     内湾する     -       ガラス玉     小王     0.34	115	須恵器	椀			ı	(1,35)	(5.8)	D北地区		包含層	
がラス玉 小玉 0.34	116	青磁	碗	高台露胎	内湾する	I	(2.3)	(9.9)	D北地区			
	II	ガラス玉	小玉			0.34	0.37	0.22	D北地区	SH04		0.04 g

第5表 場市遺跡 D地区出土遺物観察表

ᆙ	品品	出	*************************************	見続き、		法量 (cm)		四十十二	'	l	ı	_
_	作列			<b>応慰の特徴</b>	口径	器即	底径	田別	通梅	層位	富	
-	上節器	幺	ヨコナブ	外反する	-	(3.0)	ı	D地区		面精査		T
118	弥生土器	搬	ハケ整形からナデ仕上げ	平底から外傾する	ı	(3.2)	(5.1)	D地区			T29	,
	上製品		ユビ成形からナデ	断面円形で湾曲する	1.0	1.1	(5.35)	D地区		面精査	,	
	須恵器	麹	ロクロナデ	内湾する、端部丸い	(16.0)	(3.6)	ı	D地区		面精査		
	須恵器	黎	ロクロナデ、底部ヘラ切り	平底から外傾する体部	ı	(1.2)	(8.2)	D地区		面精査		
	須恵器	報	ロクロナデ、底部糸切り	平底で屈曲して内湾する体部	ı	(2.7)	(4.9)	D地区		面精査		

第6表 場市遺跡 E地区出土遺物観察表

li li	H	ı		見まられる		法量 (cm)		包括十日			##
番芍	俚別	布 俚	校法 他	乃態の光利	口径	器	底径	田工地区	阻	加量	盖
123	弥生土器	高杯	ヘラミガキ、2条の凹線	内湾し屈曲し外方に開く、端部丸い	ı	(2.80)	ı	E 地区		包含層	T32
124	弥生土器	高杯	ハケ整形、	外反し端部丸い	1	(3.00)	1	日地区		包含層	T32
125	弥生土器	啣	ハケ整形、底部再成形	突出平底で外反する	1	(1.90)	(5.20)	<b>E 地区</b>		包含層	
126	弥生土器	崓	ユビ成形からナデ仕上げ	小さい平底から内湾する体部	-	1	1	E 地区		面清掃時	
127	干師器	高杯	ハケ整形からミガキ、内面ケズリ	柱実、外反する杯部、脚部外傾	-	(2.10)	1	<b>E</b> 地区		包含層	T32
128	上師器	島杯	外面ハケ整形からミガキ、内面ケズリ	外反する、円板充填	1	(7.80)	1	E 地区		包含層	T32
129	上師器	單	ユビ成形からハケ・ナデ	内湾する体部から短く外傾する口縁部	(9.20)	(2.80)	1	<b>E 地区</b>		面清掃時	
130	須恵器	杯蓋	ロクロナデ	内湾し稜線を持ち、端部外側に尖る	(12.00)	(4.30)	1	E地区	*	包含層	T32
131	須恵器	杯身	ロクロナデ	内湾する体部から短い受部で端部丸い	(8.00)	(3.00)	1	E 地区		面清掃時	
132	須恵器	毈	<b>タ</b> タキ	僅かに内湾する	-	(0.00)	-	<b>E 地区</b>		面清掃時	
133	器嶼干	鯸	ユビ成形、ヨコナデ	直立する体部から外傾する口縁部	-	(3.40)	1	E 地区		包含層	
134	器嶼干	椀	ロクロナデ	内湾し端部丸い	(14.00)	(3.50)	ı	<b>E 地区</b>		SP01	

第7表 場市遺跡F地区出土遺物観察表

(135) 上節器 上節器 137 上節器 137 上節器 138 十節器 138 十節器 138 十節器	44年	女法 厄	が思いれば	口倭	器宣	D) (1)	H H H H H E	回	五里	三
		_				氐侄			- 1	
		ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	浅く内湾し端部肥厚し丸い	(7.00)	1.50	ı	下地区		黑色落込	38T
	目	ユビ成形からナデ、口縁端部ヨコナデ	内湾し端部尖りぎみ	(7.70)	2.10	1	1 地区		面精査	
		ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し端部丸い	(9.50)	3.00	(4.40)	万地区		面精査	
		ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し端部丸い	(12.00)	(2.90)	1	万地区			38T
139 上前器		ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し直立し端部尖る	(12.00)	(3.40)	I	万地区			38T
140 上師器		ユビ成形から板ナデ、端部ヨコナデ	内湾し端部丸い	(12.00)	3.00	(2.90)	万地区		面精査	
141 上師器	<b>=</b>	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	丸底から甘い稜線を持ち屈曲する	(12.60)	3.00	(2.00)	万地区		面精査	
142 上師器	<u> </u>	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	不安定な平底から外反する	(00.6)	1.80	2.80	万地区		面精査	
143 上師器	目	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	上げ底で外傾し端部つまむ	(00.9)	1.70	(2.80)	万地区		面精査	
144 上師器	目	ユビ成形からナデ、口縁端部ヨコナデ	内湾し端部つまみ上げる	(10.80)	(2.15)	1	万地区		面精査	
145 上師器	国	ユビ成形からナデ、口縁端部ヨコナデ	平底で短く外傾し端部丸い	(11.30)	2.30	(7.50)	下地区		面精査	
146 上師器		ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	直立ぎみに短く外反、端部尖る	(13.00)	2.60	ı	下地区		黑色落込	38T
147 上師器		ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	口縁部緩やかに屈曲し端部丸い	1	(2.80)	ı	下地区		面精査	
148 上師器		ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	底部小さく外傾し端部近くで開く	(16.00)	(3.30)	ı	下地区		面精査	
149 上師器	目	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し端部丸い	ı	(2.90)	ı	万地区		面精査	
150 上節器	横	ヨコナデ	広底から内湾する体部	ı	(2.50)	(10.00)	万地区	SG01	面精査	
151 上師器	- 提林	ナデ	内湾する	1	(4.00)	ı	F地区	SG01	面精査	
152   須恵器	暑	ロクロナデ、ロクロケズリ	断面三角の短い高台で外傾する体部	(13.40)	4.20	(2.10)	F地区	SG01	排	
153 須恵器	暑 不明	ロクロナデ	内湾する	ı	(4.00)	1	F地区			38T
154 須恵器	<b>播</b> 鉢	内面ナデ、外面条痕	内湾する	-	(2.00)	ı	下地区		床土下まで	37T
155   須恵器	程鉢	ロクロナデ	外反する口縁部で端部内外に肥厚	1	(3.70)	ı	下地区			38T
156 陶器	羅	ロクロナデ、施釉	平底で外傾する	ı	(08.90)	_	F地区		黒色落込	38T 備前焼

琳	推割	器	字	大部と本語		法量 (cm)		五十五	押	屋 休	部
1	- CAH	- 1	- 1	X4 51.75 var/1/	口倭	器回	底径	H			- 1
157	胸器	鉢	施和	外傾し端部厢曲し上方に上げる	1	(2.70)	ı	下地区		面精査	
158	日廢	夣	施釉	外反する	(13.80)	(1.90)	ı	下地区			38T
159	白磁	碗	施釉	僅かに外反する	(12.00)	(2.30)	ı	万地区			38T
160	施釉陶器	御皿	口縁部周辺施釉、卸目あり	外傾し端部内外に肥厚	ı	(3.30)	ı	下地区			38T
161	青磁	碗	施釉	外傾し端部丸い	ı	(2.80)	ı	下地区		面精査	
162	青磁	施	施釉	内湾し端部付近で外反する	ı	(3.05)	1	下地区			38T
163	青磁	碗	底部露胎、高台端部削り取る	平底で高台端部丸い	ı	(1.50)	(2.60)	日地区			38T
164	幽器	御皿	施釉	内湾し端部内外に肥厚	(14.00)	(3.00)	I	日地区		面精査	
165	白磁	紅皿	u T T	受口状の二重口縁部で直立	(4.20)	2.00	1.30	下地区		人力掘削	33T
166	弥生土器	底部	粘土細継ぎ目	平底	ı	(2.70)	I	下地区		面精査	
167	弥生土器	导器	ヨコナデ、波状文	端面となり上下に肥厚	ı	(2.20)	1	下地区			SP11
168	上節器	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	浅く内湾し端部厚く丸い	7.10	1.80	2.80	下地区	SG01	新段階南半	
169	上節器	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	上げ底で外傾し端部つまむ	(7.20)	1.60	(3.20)	日地区	SG01	新段階北半	
170	十二世器	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	平底ぎみで内湾する、端部丸い	(7.90)	1.70	3.80	日地区	SG01	新段階アゼ	
171	上節器	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	浅く口縁部内湾し端部丸い	(7.60)	1.70	(5.20)	五十二	SG01	新段階北半	
172	上前器		ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し端部丸い	(10.00)	2.30	(4.80)	五地区	SG01	新段階アゼ	
173	上節器		ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	やや平坦で屈曲して直立、端部角張る	(8.80)	1.90	(5.40)	下地区	SG01	新段階南半	
174	上節器		ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し端部丸い	(12.00)	(2.20)	ı	牙槽区	SG01	新段階北半	
175	十二	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し端部丸い	(10.00)	2.80	(4.40)	万塘尺	SG01	新段階北半	
176	十二部器		ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	平坦な底部で屈曲して直立	(12.00)	2.80	(8.00)	下地区	SG01	新段階北半	
177	上前器	E	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	直立ぎみに短く外反、稜を持つ	(12.00)	(2.50)	-	F地区	SG01	新段階北半西肩	
178	上前器	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	平坦な底部で内湾する体部から直立	(12.00)	2.95	(8.00)	F地区	SG01	新段階南肩	
179	上節器		ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し端部丸い、浅い	(12.00)	2.70	(2.00)	下地区	SG01	新段階南半	

#		舞	<b>拉</b>	おいてはある。		法量 (cm)		<b>区</b> 幸十	戦	屋	垂
# t	4	Ĺ		川が高く744 政	口径	器回	底径	H H	- 1	- 1	
180	上節器	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し端部丸い	(12.00)	3.00	(5.40)	下地区	SG01	新段階北半西肩	
181	十二世報	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	平底ぎみで内湾する、端部丸い	(12.30)	3.20	5.90	下地区	SG01	新段階アゼ	
182	上師器	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し端部丸い	(12.40)	(2.70)	ı	下地区	105S	新段階アゼ	
183	上町器	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し稜を持って外傾し端部丸い	(12.00)	(3.20)	ı	五十八十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十	SG01	新段階南半	
184	上	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	浅く内湾し器壁厚い	(00.9)	1.75	ı	下地区	SG01	新段階北半	
185	上師器	目	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し端部丸い、小形	(8.00)	1.90	3.50	F地区	SG01	养段階北半	
186	上節器	目	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	丸底で浅く内湾する	7.00	1.85	3.40	F地区	SG01	新段階排水部	
187	上師器	■	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	浅く内湾する	(00.6)	1.80	(5.40)	下地区	SG01	北側サブトレ	
188	上師器	目	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部から外反し端部丸い	(10.00)	3.10	(4.80)	下地区	SG01	养段階南半	
189	上師器	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	浅く内湾し端部尖る	8.00	2.10	2.20	下 地区	SG01	面精査	
190	上節器	E	ユビ成形からナデ	浅く内湾する、端部丸い	(8.00)	1.70	-	下地区	SG01	導水周辺	
191	上師器	目	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し僅かに屈曲し端部丸い	ı	(2.10)	1	下地区	SG01	南肩面精査	
192	上師器	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し端部丸い	ı	(3.00)	1	下地区	SG01	北半西肩	
193	上師器	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾から直立、端部外側につまむ	ī	(3.55)	1	下地区	SG01	<del>차</del> 뀨	
194	上師器	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し端部丸い	11.00	(2.80)	ı	下地区	SG01	排水部(古)	
195	上師器	目	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し端部丸い	(12.00)	(3.00)	-	F地区	SG01	北側サブトレ	
196	上師器	■	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾する口縁部で厚く端部尖る	(10.90)	2.95	-	F地区	SG01	新段階南半	
197	上師器	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し端部丸い	(12.00)	(3.10)	I	下地区	SG01	新段階南半	
198	上師器	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部から外傾する口縁部	(13.00)	(3.10)	_	下地区	SG01	新段階南半	
199	上師器	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	外傾する体部から直立する口縁部	(11.00)	(3.10)	ı	F地区	SG01	新段階南半	
200	上師器	目	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	平底から内湾し、端部丸い	(12.40)	3.00	(8.00)	F地区	SG01	新段階南半	
201	上師器	Ħ	ユビ成形からナデ・ハケ、端部ヨコナデ	内湾し端部つまみ上げる	(12.00)	(3.10)	ı	F地区	SG01	新段階アゼ	
202	上師器	Ш	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し端部丸い	(12.00)	(3.80)	1	下地区	SG01	新段階アゼ	

番号	種別	器種	技法 他	形態の特徴	×	法量 (cm) 器	库汉	出土地区	遺構	層位	無米
203	上節器		ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し端部丸い、器壁厚い	(12.00)	(2.80)	H -	下地区	SG01	北側サブトレ	
204	十二世界		レア 店 歩 かって ナップ 一部 当日 コーナップ	女権] アセット海ネス	(19 30)	(3 70)		立立	0001	にて発売が	
	i i		L day Hou		(177.00)	(9.10)		지위	2001	が大人間 / こ	
202	上節器	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ョコナデ	内湾し端部丸い	(13.90)	(3.90)	ı	五十四日	SG01	北側サブトレ	
506	器量升	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し端部付近で外反する	(12.60)	(3.25)	1	下地区	SG01	排水部(古)	
202	上	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し端部丸い	(12.00)	3.55	(6.40)	下地区	SG01	新段階アゼ	
208	上節器		ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し端部丸い	(12.00)	(4.00)	1	万塘尺	SG01	新段階アゼ	,
509	上部器	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し外傾する口縁部、やや上げ底	(12.00)	3.00	(5.30)	下地区	SG01	排水部(古)	
210	上節器		ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し端部外傾する	(15.00)	2.40	(7.80)	万地区	SG01	排水部(古)	
211	十二	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	外傾し端部近くでラッパ状に開く	(8.90)	(1.50)	1	下地区	SG01	新段階南半	
212	瓦器	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	僅かに内湾し端部丸い	(14.00)	(3.00)	1	下地区	SG01	新段階アゼ	
213	十二		ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	外頃し端部付近で開く	(12.00)	(1.90)	1	F地区	SG01	新段階北半	
214	十二	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	外傾し端部肥厚ぎみ	(13.00)	(1.90)	1	F地区	SG01	新段階北側サブトレ	
215	十二	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	浅く内湾し端部付近で外傾する	(12.00)	(2.00)	1	F地区	SG01	新段階北側導水	
216	出	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	浅く内湾し端部丸い	7.40	2.00	ı	F地区	SG01	新段階	
217	出	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	丸底で内湾し端部丸い	(6.30)	1.80	(3.00)	F地区	SG01	新段階	
218	十二	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し端部丸い	7.60	2.00	3.40	F地区	SG01	新段階	
219	十二	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	浅く僅かに上げ底で内湾する	(7.90)	1.80	(1.40)	F地区	SG01	新段階	
220	十二	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し端部丸い	(0.00)	2.05	(4.30)	F地区	SG01	新段階北半	
221	十二章器	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	浅く内湾する	(7.50)	2.00	1	F地区	SG01	新段階北半	
222	上節器	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	浅く内湾し、端部丸い	(8.00)	1.80	1	F地区	SG01	新段階北半	
223	上節器	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	平底ぎみで内湾、端部尖る	(7.40)	1.85	(3.40)	下地区	SG01	新段階北半	
224	上節器	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	浅く外傾する	(7.80)	1.60	ı	F地区	SG01	新段階北半	
225	上節器	E	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し端部付近で直立、端部丸い	(10.40)	(3.10)	1	下地区	SG01	新段階北半	

種別	1 器種	技法 他	形態の特徴	8,0	法量 (cm) 将自	定汉	出土地区	遺	層位	無米
上師器	目	ュビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	平底ぎみで短く外傾する	7.50	1.45	-	F 地区	SG01	新段階北半	
上師器	目	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	浅く口縁部直立ぎみで端部丸い	(0.00)	1.40	(4.80)	F地区	SG01	新段階	
上師器	盟	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	平底で内湾する、端部丸い	(8.00)	2.40	(3.20)	F地区	SG01	新段階	
上師器	盟	ュビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	平底ぎみで短く直立、端部丸い	(8.00)	1.55	(4.80)	下地区	SG01	新段階北半	
上師器	器	ュビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し口縁部直立し端部丸い	(8.00)	(1.60)	ı	下地区	SG01	新段階	
上師器	盟	ュビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	上げ底で外反して端部屈曲し肥厚	(7.30)	1.80	3.00	下地区	SG01	新段階	
上師器	器	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	上げ底で体部屈曲し端部丸い	7.00	2.00	2.40	下地区	SG01	新段階	
上師器	器	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	平底で口縁部短く内湾し端部丸い	7.50	1.70	5.30	下地区	SG01	新段階	
上師器	器	ュビ成形からナデ、口縁部ョコナデ	外傾する口縁部で端部丸い	(10.20)	2.60	(3.20)	下地区	SG01	新段階	
上師器	出	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し端部丸い	(10.40)	3.20	1	下地区	SG01	新段階	
上師器	監	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し、端部付近強いヨコナデで窪む	(12.00)	2.60	(2.90)	下地区	SG01	新段階北半	
上部器	監	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し端部丸い	11.40	3.80	I	下地区	SG01	新段階	
上部	目	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し端部丸い	(10.00)	2.90	(2.00)	下地区	SG01	新段階	
上節器	盟	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	平底ぎみで内湾する	ı	(2.70)	(6.20)	下地区	SG01	新段階	
上節器	盟	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	不安定な底部から外傾し端部尖る	10.70	3.25	4.60	下地区	SG01	新段階	
上部器	出	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し端部丸い	(11.00)	3.00	ı	下地区	SG01	新段階北半	
上師器	出	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し端部丸い	(14.00)	(3.15)	ı	下地区	SG01	新段階北半	
上節器	出	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	直立する口縁部で端部丸い	(12.00)	3.20	(4.60)	下地区	SG01	新段階	
上節器	出	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	平底で内湾する口縁部で端部尖る	(15.00)	2.80	(7.00)	万地区	SG01	新段階	
上部器	器	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	丸底で内湾し端部丸い	11.60	(3.55)	1	万地区	SG01	新段階北半	
上部	出	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	外傾し直立する、器壁厚く端部丸い	(12.00)	(3.70)	1	万地区	SG01	新段階北半	
上箭器	日路	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	平底ぎみで内湾する、端部丸い	(12.60)	3.05	(7.00)	F地区	SG01	新段階北半	
上節器	器	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	器壁厚く内湾する	(12.00)	(3.20)	I	下地区	SG01	新段階北半	

미 *	押	出	*	1000年) 400年		法量 (cm)			1	ı	1
# 1	4	1		応認の特徴	口倭	器	底径	五円短区	声	眉江	扁
249	上節器	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し器壁厚く端部つまみ上げる	(12.00)	2.45	(5.20)	下地区	SG01	新段階北半	
250	十二	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	器壁厚い体部から内湾し、端部丸い	(12.00)	(3.20)	1	下地区	SG01	新段階北半	
251	上部器	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	深く内湾し端部近くで直立し端部丸い	11.30	3.30	ı	下地区	SG01	新段階北半	
252	十二部器	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し端部付近で外傾する	(12.00)	3.30	(2.60)	下地区	SG01	新段階北半	
253	上師器	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し端部つまむ	(12.00)	3.30	4.10	下地区	SG01	新段階北半	
254	十二部器	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し端部外側につまみ出す	(12.40)	(3.30)	I	下地区	SG01	新段階北半	
255	十二	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	外傾し端部付近で開く	(15.00)	(1.95)	ı	下地区	SG01	新段階北半	
256	出電器	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	僅かに外反し端部肥厚し丸い	(16.00)	(2.10)	ı	下地区	SG01	新段階北半	
257	出電器	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	外傾し端部近くで屈曲し端部丸い	(15.00)	(2.65)	ı	日地区	SG01	新段階北半	
258	岩量	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し端部付近で外傾する	(14.00)	(2.30)	1	下地区	SG01	新段階北半	
259	上部器	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	外傾し端部肥厚	(15.00)	(2.50)	ı	下地区	SG01	新段階北半	
260	上師器	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	浅く内湾し端部丸く端部手前で肥厚	(16.00)	(2.25)	ı	下地区	SG01	新段階北半	
261	上師器	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	外頃し端部近くでさらに外傾する	(16.00)	(2.60)	ı	下地区	SG01	新段階北半	
262	上師器	鰕	ナデ、平行クタキ、口縁部ヨコナデ	直立する口縁部で端部肥厚	(24.00)	(3.70)	ı	下地区	SG01	新段階南半	
263	上師器	錦	タタキ、内面板ナデ、口縁部ヨコナデ	扁平な球形な体部、口縁部直立	(19.20)	(13.10)	ı	下地区	SG01	新段階北半	
264	上節器	鸋	<b>タタキ</b>	外傾し端部厚くなる	(24.00)	(7.30)		F地区	SG01	新段階北半	
265	上師器	鍋	<b>タタキ</b>	内湾し羽釜状低い突帯、端部角張る	(26.00)	(6.80)	ı	F地区	SG01	新段階北半	
566	上雪器	鰕	ナデ、ヨコナデ	口縁部外傾し端部肥厚	ı	(3.90)	ı	下地区	SG01	新段階アゼ	
267	十二世	邂	ナデ、ヨコナデ	口緣部外傾し端部肥厚		(3.60)	ı	下地区	SG01	新段階北半	
268	十二	鰕	ナデ、ヨコナデ	外傾し端部大きく肥厚	ı	(3.30)	ı	下地区	SG01	新段階南肩	
569	上簡器	≉	ョコナデ	外傾し端部玉緑状に肥厚	ı	(3.40)	1	下地区	SG01	新段階北半	
270	須恵器	翠	ロクロナデ、底部糸切り	平底で内湾する体部	ı	(1.80)	(00.9)	下地区	SG01	新段階南半	
271	須恵器	水	ロクロナデののちナデ、底部ヘラ切り	平底で内湾する体部	ı	(3.35)	(7.30)	下地区	SG01	新段階	

## 20	0	H H			見都ら在多		法量 (cm)					
現意器         23.0         1.0<	番芍	種別	器種	技法 他	が 影の特徴	口径	器	底径	五日路区	直	眉加	画ん
規範器         業         ロクロナチ         所及、機能を含         で、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の	72	須恵器	捏鍊	1	外傾し端部肥厚	ı	(3.10)	ı	下地区	SG01	新段階	
知意等         業         ロクロナテ         外反し機能定録さる。         一、「5.50         一、「5.50         一、「5.60         ー         上級区	273	須恵器	凞	ロクロナデ	直立ぎみで端部玉縁になる	ı	(5.10)	1	五地区	SG01	新段階	
規障         通常         のウナナマのちナズ・54節目         特別は都高からに関する。         一、「100]         一、「100]         一、「200]	74	須恵器	쎎	ロクロナデ	外反し端部玉縁になる	1	(5.50)	ı	下地区	SG01	新段階北半	
解認         指体         ロクロナテののち子、54時目         内荷り場部内外に駆逐         - (4.00)         - (4.00)         - P. 地区           開設         指体         ロクロナデ         外板にが調売点へ、網帯点へ、         - (4.00)         - (4.00)         - P. 地区           開設         指体         ロクロナデ         外板にが開える。網帯点へ、         - (5.00)         - P. 地区         P. 地区           開設         業件         ロクロナデ         米底から外板で着脂を高になる。         (41.00)         (10.00)         - P. 地区           開設         業件         ロクロナデ         外板に着間を含む。         イイルの         (10.00)         - P. 地区           開設         業件         ロクロナデ         人種         が板         大地区         (41.00)         (10.00)         - P. 地区           開設         業件         100         大きの調目のみ残子         外板         大地区         (41.00)         (10.00)         - P. 地区           開設         本株         地価         施価         施価         大きの調目のみを         (41.00)         (10.00)         - P. 地区           内容         本株         地価         地価         地域         地域         ・ P. 地区         ・ P. 地区           内容         市         地域         地域         地域         ・ P. 地区         ・ P. 地区         ・ P. 地区           内容         市	75	須恵器	邂	ロクロナデ	外反し端部王縁になる	ı	(7.90)	1	下地区	SG01	面精査	
解算         編練         ロクロナデ         内積は通面となる、環路力い         一 (4.90)         一 日本区         下地区           解替         編練         ロクロナデ         外積し傾面となる、環路力い         一 (5.00)         一 日本区         下地区           解替         編練         ロクロナデ         アルウク傾する体部         一 (5.00)         一 日本区         下地区           胸替         建株         ロクロナデ         スタンプ格文         内積であらり模しる様になる         (41.00)         (10.00)         一 日本区           胸替         建株         は本         大のフナデ、スタンプ格文         指標の時間を使かに内積、端部所表る         (41.00)         (10.00)         一 日本区           内容         本         は         がは         施利         所域         の の の         一 日本区           内容         本         (41.00)         (41.00)         (41.00)         (41.00)         一 日本区           内容         本         (41.00)         (41.00)         (41.00)         (41.00)         一 日本区           内容         本         施利         施利         施利         一 本区         日本区         日本区         日本区           内容         市         地域         施利         大のブルボルボルボルボルボルボルボルボルボルボルボルボルボルボルボルボルボルボルボ	276	とという。	擂鉢	ロナデののちナデ、5本卸	内湾し端部内外に肥厚	,	(7.70)	1	下地区	SG01	新段階西側肩部	-
開発         指鉢         ロクロナデ         外側に増加さるる。端部丸い         一 (5.00)         一 P地区           開発         2         ロクロナデ         平成から外側する体部         一 (5.00)         一 P地区           開発         業         ロクロナデ         単成やら外側する体部         一 (5.00)         一 P地区           開発         業         ロクロナデ         大の到目のみ残存         外値         一 (5.00)         一 P地区           開発         水鉢         ロクロナデ、スクン地域         外値         単板         (5.00)         一 P地区           開発         水鉢         面積         施利         施利         上地区         日本区         (5.00)         一 P地区           内容         本端         施利         施利         施利         地域         地域         一 P地区           内容         本端         施利         施利         上地区         日本区         (5.00)         一 P地区         日本区           内容         本端         施利         施利         上地区         日本区         日本区         日本区         日本区           内容         本地区         地域         地域         地域         地域         地域         中地区         日本区	77	陽器	擂鉢	ロクロナデ	内湾ぎみで端面となる	1	(4.90)	ı	下地区	SG01	<del>개</del> 갂	
陶器         浦林         ロクロナア         単位から外側する体部         -         (5.30)         -         F地区           陶器         選集         ロクロナア         単位をから外側する体部         -         (5.00)         -         下地区           陶器         選集         ロクロナア         内間から発音         外値         AR         (41.00)         (10.00)         -         下地区           陶器         水鉢         ロクロナア、スタンが施文         器物質         AR	&	とと	擂鉢	1	外傾し端面となる、端部丸い	ı	(2.00)	ı	F 地区	SG01	新段階北半	
陶器         悪         ロクロナテ         取く値向かて外反 端距正縁になる         -         (5.00)         -         下地区           陶器         鑑好         ロクロナデ、スタンブ施文         財債する層部、優別ので、         (41.00)         (10.00)         -         下地区           陶器         体体         ロクロナデ、スタンブ施文         器内間ぐ値かに内端、端路角張る         (30.80)         (6.90)         -         下地区           陶器         体体         店舗、底部窓舶         原土         所備、端珠水下に大きく間ぐ         (30.80)         (6.90)         -         下地区           白癬         原土         施輸、底部窓舶         原土         原土         (6.50)         -         下地区           白癬         施輸、底部窓舶         施輸、底部窓舶         内端し着衛売水下に関ぐ         -         (6.50)         -         下地区           白癬         施輸、底部窓舶         施輸、底部窓舶         内端し右部正確認定能上げ底         -         (6.50)         -         下地区           青磁         施輸、底部窓舶         施輸、底部窓舶         内端上電電売機を指定         内端上電部正確認定能上げ底         -         (1.60)         (4.60)         下地区           青磁         施輸、底部窓舶         施輸、底部窓舶         内端上電部正確認定         内端上電に定路上げ底         -         (1.80)         -         下地区           青磁         施輸、底部         施輸、延伸、連伸、底部、底部         内域上端部工を場下を         -         (1	79	とという。	擂鉢	1	平底から外傾する体部	1	(5.30)	1	F地区	SG01	面精査	
陶器         選         ロクロナデ         内値する肩部、短く外向し正縁になる         (41.00)         (10.00)         一         P地区           陶器         海線         2本の卸日のみ残存         外値         (41.00)         (10.00)         一         P地区           陶器         水体         ロクロナデ、スタンブ橋文         器内厚く催かに内荷、端筋角張る         (29.80)         (5.90)         一         P地区           陶器         庫橋         庭橋 成部露路         内荷工場部不下たきく間         (9.80)         (6.50)         一         P地区           白磁         成品         施桶         成部電         施桶         成部電         一         (14.00)         P地区           白磁         成品         施桶         庭網         成機         成準         人類         一         (14.00)         P地区           自磁         施桶         施桶         庭網         連組         成別等         一         (14.00)         (14.00)         P地区           有磁         海桶         施桶         政際         地種         内湾 大衛市で産業の内容         一         (14.00)         (14.00)         中         P地区           有磁         海桶         施桶         連絡         連絡         地域         中域         一         (15.00)         一         P地区           有磁         海         施桶	&	とという。	網	ロクロナデ	短く僅かに外反、端部玉縁になる	1	(2.00)	1	F地区	SG01	新段階北半	
陶器         指鉢         2本の担目のみ残存         外傾           陶器         火鉢         ロクロナデ、スタンプ協交         器内厚く催かに内薄、端部角張る         30.80         (5.90)         一         P地区           陶器         外鉢         店舗         店舗         成部の 店舗         施舗         人類し端部水下に大きく開く         (30.80)         (3.80)         (5.90)         一         P地区           陶器         庫額         施額         施額         施額         所額         所額         所額         上地区           自磁         減額         施額         施額         施額         所額         所額         所額         上地区           青磁         海         施額         施額         施額         加額         上地区         (14.00)         (14.00)         P地区           青磁         海         施額         施額         施額         上地区         中地区         中地区           青磁         海         施額         施額         施額         市地         中地区         (1.60)         (1.60)         P地区         P地区           青磁         海額         施額         施額         施額         地域する格部ではまままままままままままままままままままままままままままままままままままま	18	とという。	網	1		(41.00)	(10.00)	-	下地区	SG01	新段階北半	
陶器         火鉢         ロクロナデ、スタンブ筋文         器内間ぐ値かに内湾、端路角張る         (6.90)         一         下地区           陶器         庫桶         成業         施桶、底部露胎         内積し端部水平に大きく開ぐ         (3.08)         (3.30)         一         下地区           陶器         面桶         店桶         内荷する、段の付く即付く(3期)         一         (6.50)         (14.00)         下地区           白磁         腕         施桶         底部         施桶         内荷し着形となる         一         (1.60)         (4.60)         下地区           身位磁         海桶         施桶         成部         成場         大部区         上地区         上地区           青磁         海橋         施桶         政部         大地区         内積し着的で高端上で高端上で開く         一         (1.50)         一         下地区           青磁         海橋         施桶         施桶         上地区         内積する体部で端部上で高部上で高部上である。         上地区         上地区         上地区         上地区           青磁         海橋         施桶         施桶         地域する体部で端部上で高端を高いている。         中地区         一         「1.80)         一         下地区           青磁         海桶         施桶         地域する体部で端部上では高端         中地区         「1.80         ー         下地区           青磁         施桶         地域         地域 <t< td=""><td>282</td><td>幽器</td><td>擂鉢</td><td>2本の卸目のみ残存</td><td>外傾</td><td></td><td>(3.50)</td><td>1</td><td>下地区</td><td>SG01</td><td>新段階アゼ</td><td></td></t<>	282	幽器	擂鉢	2本の卸目のみ残存	外傾		(3.50)	1	下地区	SG01	新段階アゼ	
両器         鉢         植釉、底部器胎         外傾し端部水平に大きく開く         (30.80)         (3.30)         一         P地区           両器         面積         庫和、底部器胎         中底で内湾する体部         一         (6.50)         (14.00)         P地区           白磁         施和、底部器胎         施和、底部器胎         内湾し端部主操になる         一         (1.60)         (4.60)         P地区           身付磁器         施和、底部器胎         内湾し谷市で高台         一         (1.80)         4.20         P地区           青白磁         海         施和、底部器胎         内湾する体部で電部上げ底         一         (1.80)         4.20         P地区           青白磁         海         施和、底部器胎         内づきな体部で電部上げ底         一         (1.80)         4.20         P地区           青磁         海         施和、建井文         内湾する体部で電部上げ底         一         (1.50)         一         P地区           青磁         施和         施和         施和         内湾する体部で電部上がまる         (1.50)         (4.50)         9.60         P地区           青磁         施和         施和         大崎で高         地域         1.50         一         P地区           青磁         施和         施和         大崎で高         1.50         4.50         9.60         P地区           青磁         施和         施和	283	網盤	// // // // // // // // // // // // //	ロナデ、		(29.80)	(06.90)	ı	F地区	SG01	新段階南半	
陶器         配新、底部露胎         内湾する、段の付く脚付く(3脚)         -         (6.50)         (14.00)         P地区           白磁         成部         施和、底部露胎         中底で内湾する体部でなる         -         (1.60)         (4.60)         P地区           白磁         碗         施和、底部露胎         内湾し帯の高台         -         (1.80)         -         P地区           染付磁器         碗         施和、底部露胎         内湾する体部で端部水平に開く         (14.00)         (1.90)         -         P地区           青白磁         碗         施和、底部露胎         内湾する体部で域部上げ底         -         (4.50)         9.60         F地区           青白磁         碗         施和、底部無、底部露胎         内湾する体部で端部大い口縁部反る         -         (4.55)         -         F地区           青磁         碗         施和         A桶         A傾し端部下縁になる         -         (2.90)         -         F地区           青磁         碗         施和         株和         A傾し端部主縁になる         -         (2.90)         -         F地区           青磁         碗         施和         株和         AM         -         (2.90)         -         F地区           青磁         碗         施和         AM         -         (2.90)         -         F地区	84	とという。	類	施釉	外傾し端部水平に大きく開く	(30.80)	(3.30)	ı	F地区	SG01	新段階北半	
成約     施和     平底で内湾する体部     -     (1.60)     (4.60)     F地区       碗     施和、底部露胎     内湾し省市王縁になる     -     (3.30)     -     F地区       碗     施和、底部露胎     内湾する体部で端部水平に開く     (14.00)     (1.90)     -     F地区       碗     施和、底部露胎     外傾する体部で底部上げ底     -     (4.50)     (4.50)     9.60     F地区       碗     施和、連弁文     内湾する体部で端部丸小口縁部反る     -     (2.90)     -     F地区       碗     施和     仲傾し端部王縁になる     -     (2.90)     -     F地区       碗     施和     体和に内湾に端部大る     -     (3.60)     -     F地区	285	網器	目			ı	(6.50)	(14.00)	F地区	SG01	新段階北半	
白磁         施和、底部螺胎         内湾し端形工縁になる         -         (3.30)         -         F地区           自磁         施和、底部螺胎         内湾する体部で端部水平に開く         (14.00)         (1.90)         -         F地区           青白磁         香炉         施和、底部螺胎         外傾する体部で域部上げ底         -         (4.50)         9.60         F地区           青白磁         施         施和、連弁文         内湾する体部で端部上げ底         -         (4.50)         (4.65)         -         F地区           青磁         施         施和         施和         内域し端部王縁になる         -         (2.90)         -         F地区           青磁         施         施和         施和         施和         機和         中地区         -         (2.80)         -         F地区	983	總器	底部	施釉	平底で内湾する体部	1	(1.60)	(4.60)	F地区	SG01	新段階	
白磁         施和、底部露胎         内湾ナる体部で端部水平に開く         - (1.80)         4.20         F地区           染付磁器         施和、底部露胎         内域する体部で端部水平に開く         (14.00)         (1.90)         - F地区           青磁         添和、連弁文         内域する体部で成部上げ底         - (4.50)         9.60         F地区           青磁         施和、連弁文         内域する体部で端部丸い口縁部反る         - (2.90)         - F地区           青磁         施和         施和         植物         体板し端部玉縁になる         - (2.80)         - F地区           青磁         施         施和         施和         施和         一 F地区         F地区	87	型	多	施和	内湾し端部玉縁になる	1	(3.30)	-	F地区	SG01	新段階北半	
染付磁器         碗         施釉、底部露胎         内椅する体部で咸部上げ底         -         (1.50)         (1.50)         -         F地区           青磁         碗         施釉、連弁文         内湾する体部で咸部上げ底         -         (4.50)         9.60         F地区           青磁         碗         施釉、連弁文         内湾する体部で端部丸い口縁部反る         -         (2.90)         -         F地区           青磁         碗         施釉         外傾し端部玉縁になる         -         (2.80)         -         F地区           青磁         碗         施釉         施和         (4.57)         -         F地区         -	8	中級	氮		内湾し台形の高台	1	(1.80)	4.20	下地区	SG01	新段階南半	
青白磁         施和、底部露胎         外傾する体部で底部上げ底         -         (4.50)         9.60         F地区           青磁         施         施和、連弁文         内湾する         内湾する         (15.00)         (4.65)         -         F地区           青磁         施         施和         内域し端部玉縁になる         -         (2.90)         -         F地区           青磁         施         施和         (4かたし内湾し端部尖る         -         (2.80)         -         F地区	683	染付磁器	夠	施釉	内湾する体部で端部水平に開く	(14.00)	(1.90)	1	下地区	SG01	新段階北半	
青磁         碗         施釉、連弁文         内湾する         内湾する         (15.00)         (4.65)         -         F地区           青磁         碗         施和         内域し端部玉線になる         -         (2.90)         -         F地区           青磁         碗         施和         体板し端部玉線になる         -         (2.80)         -         F地区           青磁         碗         施和         (4.65)         -         F地区         -	063	青白磁	香炉		外傾する体部で底部上げ底	-	(4.50)	9.60	下地区	SG01	新段階北半	
青磁     碗     施釉     内域し端部玉縁になる     -     (2.90)     -     F地区       青磁     碗     施釉     外域し端部玉縁になる     -     (2.80)     -     下地区       青磁     碗     施釉     僅かに内湾し端部尖る     -     (3.60)     -     下地区	16	青磁	多		内湾する	(15.00)	(4.65)	I	F地区	SG01	新段階北半	
青磁     碗     施釉     外傾し端部玉縁になる     -     (2.80)     -     F地区       青磁     碗     施釉     僅かに内湾し端部尖る     -     (3.60)     -     F地区	95	青磁	毫	施釉	内湾する体部で端部丸い口縁部反る	1	(2.90)	ı	F地区	SG01	新段階	
- 「 (3.60) - F地区 -	93	青磁	薨	施釉	外傾し端部玉縁になる	ı	(2.80)	1	F地区	SG01	新段階アゼ	
	94	青磁	尾	施和	僅かに内湾し端部尖る	1	(3.60)	ı	下地区	SG01	新段階南半	

다. *	提出	出	井洪 伊	おおうます		法量 (cm)		拉车十五			
# 2	(年77)			心語の社政	口径	器副	底径	표구원조	回事	眉瓜	三名
295	青磁	塞	施釉、連弁文	外傾し端部尖る	ı	(2.50)	1	下地区	SG01	新段階アゼ	
296	上師器	Ш	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	浅く内湾し端部丸い	(8.00)	1.70	1	日地区	SG01	中段階	
262	上師器	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し端部丸い	1	(3.20)	ı	万地尺	SG01	中段階 (古?)	
867	上師器	I	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	平底で内湾する	12.20	3.20	6.50	下地区	SG01	中段階北半	
588	上師器	Ш	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し端部丸い	(14.00)	3.00	(00.6)	下地区	SG01	中段階	
300	上師器	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し端部丸い	(13.00)	3.45	ı	下地区	SG01	中段階	
301	上師器	Ш	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	平底で内湾する、端部丸い	12.40	3.05	I	下地区	G01	中段階	
302	上師器		ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	浅く平底で短く直立ぎみに外傾	(10.90)	1.60	(2.50)	以地下	SG01	中段階	
303	上師器	Ш	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し端部下厚い	(12.00)	(3.40)	1	下地区	SG01	中段階北半	
304	工師器	□	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	丸底で緩やかにS字になり端部丸い	(11.60)	3.10	3.70	下地区	SG01	中段階	
305	上節器	Ш	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し端部近〈厚〈尖る	(13.40)	2.80	(4.80)	下地区	SG01	中段階	
306	須恵器	捏鉢	ロクロナデののちナデ	僅かに内湾し端部肥厚	(28.00)	(9.80)	ı	下地区	SG01	中段階	
307	上師器	Ш	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	平たい底部で直立する口縁部	(7.20)	1.60	(5.20)	下地区	SG01	上段 階	
308	上師器	Ш	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	浅く直立ぎみに外傾する口縁部	7.60	1.90	5.10	下地区	SG01	上段 階	
309	上師器	Ш	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	短く直立する口縁部	(8.00)	1.75	(4.20)	下 地区	SG01	古段階	
310	上師器		ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	平底ざみで内湾する、短い口縁部	(7.00)	1.60	ı	下地区	SG01	古段階	
311	上師器	I	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	浅く短く外傾し端部丸い	(7.00)	1.60	(4.00)	下地区	SG01	古段階	
312	上師器	Ш	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	浅く内湾する	(7.60)	1.20	(4.00)	下地区	SG01	古段階	
313	上前器	Ш	ユビ成形からナデ、口縁端部ヨコナデ	浅く内湾する	(8.00)	1.40	(2.80)	下地区	SG01	上段 階	
314	上節器	H	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	平底ぎみで浅く内湾する	7.40	1.70	3.20	下地区	SG01	上段 階	
315	上節器	I	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	短く直立する口縁部	(7.10)	1.80	(4.00)	F 地区	SG01	古段階	
316	上師器	Ħ	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	浅く内湾する	(8.00)	1.70	(4.70)	F地区	SG01	古段階	
317	上師器	■	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し浅い、端部角張りぎみ	8.50	.10	(4.30)	下地区	SG01	古段階	

14.7   14.07   14.7   14.0		ルスをついれば 内湾し端部丸い 内湾し端部丸い 平底で内湾し外反する 不安定な丸底から内湾する 内湾し端部丸い 内湾し端部丸い 内湾し端部丸い 内湾し端部丸い 内湾し端部丸い	(13.00) (11.00) (12.00) (12.00) (12.00) (12.00) (12.00) (12.00) (12.00)	2.50 2.50 2.70 3.30 3.30 3.40 3.40 3.40	底径 (6.00) (5.60) (7.40) (7.80) (7.20) (5.50)	H H H H H H H H H H H H H H H H H H H	<b>康</b>	T	E
「		内湾し端部丸い 内湾し端部丸い 中底で内湾し外反する 不安定な丸底から内湾する 不安定な丸底から内湾する 内湾し端部丸い 内湾し端部丸い 内湾する体部から直立ぎみの口縁部 体部内湾し口縁部直立する	(13.00) (11.00) (12.00) (12.00) (12.00) (12.00) (12.00) (12.00)	2.50 2.70 2.70 3.30 3.40 3.40 3.40 3.10	(6.00) (5.60) (7.40) (7.80) (7.20) (5.50)	五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五		古 古 古 古 古 古 古 哲 發 發 發 發 發 發 發 發 發 發 發 發	
日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日		内湾し端部丸い 内湾し端部丸い 平底で内湾し外反する 不安定な丸底から内湾する 内湾し端部丸い 内湾し端部丸い 内湾し端部かい 内湾しる本部から直立ぎみの口縁部 内湾する体部から直立ぎみの口縁部 外資する体部から直立ぎみの口縁部	(11.00) (12.00) (12.00) (12.00) (12.00) (12.00) (12.00)	2.70 (2.50) 3.30 3.50 3.00 3.40 2.70 3.10	(5.60) (5.40) (7.40) (7.80) (7.80) (7.20) (5.50)	五 本 本 本 本 本 本 本 本 本 本 本 本 本		古 古 古 古 古 古 哲	
		内湾し端部丸い 平底で内湾し外反する 不安定な丸底から内湾する 内湾し端部丸い 内湾する体部から直立ぎみの口縁部 内湾する体部から直立ぎみの口縁部 外湾する体部から直立ぎみの口縁部	(12.00) (12.00) (12.00) (12.00) (12.00) (12.00) (12.00)	3.30 3.50 3.00 3.40 3.10	(5.40) (7.40) (7.80) (7.20) (5.50)	万 地		古 古 古 古 古 哲	
「日		平底で内湾し外反する 不安定な丸底から内湾する 内湾し端部丸い 内湾する体部から直立ぎみの口縁部 内湾する体部から直立ぎみの口縁部 内湾する体部から直立ぎみの口縁部 外湾する体部から直立ぎみの口縁部	(12.70) (12.00) (12.00) (12.00) (12.00) (12.00)	3.30 3.40 3.40 3.10	(7.40) (7.80) (7.80) (7.20) (5.50)	五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五		古 古 古 古 拉 路 醫 醫 醫 醫 醫 醫	
「	1   1   1   1   1   1   1   1   1   1	不安定な丸底から内湾する 内湾し端部丸い 内湾する体部から直立ぎみの口縁部 内湾する体部から直立ぎみの口縁部 体部内湾し口縁部直立する 外傾する体部から直立する口縁部	(12.70) (12.00) (12.00) (12.00) (12.00)	3.50	(7.80) (7.80) (7.20) (5.50)	下 地 区 下 地 区 下 地 区 下 地 区 下 地 区 下 地 区 下 地 区 下 地 区 下 地 区 下 地 区 市 区 下 地 区 下 地 区 下 市 日 下 市 区 下 市 下 市		中 古 古 中	
「「「「「「「「「「「」」」」 「「「「」」」 「「」 「「」 「」 「」 「	に 参	内湾し端部丸い 内湾する体部から直立ぎみの口縁部 内湾する体部から直立ぎみの口縁部 体部内湾し口縁部直立する 外傾する体部から直立する口縁部	(12.00) (12.00) (12.00) (12.00)	3.40	(7.20)	下 地 区 市 地 区 市 地 区 市 地 区 市 地 区 市 地 区 市 地 区 市 地 区 市 地 区 市 地 区 市 地 区 市 市 区 市 市 区 市 区		古 古 古 報 羅 羅 羅 羅 羅 羅 羅 羅 羅 羅 羅 羅 羅 羅 羅 羅	
上節器       上節器       上節器       上節器       上節器       上節器       上節器       上節器	日 終 計 日 終 計 日 終 計 日 終 計 日 日 終 計 日 日 終 計 日 1 年 1 年 1 年 1 年 1 年 1 年 1 年 1 年 1 日 1 年 1 日 1 年 1 日 1 日	内湾する体部から直立ぎみの口縁部 内湾する体部から直立ぎみの口縁部 体部内湾し口縁部直立する 外傾する体部から直立する口縁部	(12.00) (12.00) (12.00) (12.00) (12.00)	3.40	(7.20)	下地区 下地区		中 故	
日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日	<ul><li>□ 縁部 □</li><li>□ 1 を</li></ul>	内湾する体部から直立ぎみの口縁部 体部内湾し口縁部直立する 外傾する体部から直立する口縁部	(12.00)	3.10	(5.50)	下 加 下 加区		古段階	
「   	口縁部目口縁部目	体部内湾し口縁部直立する 外傾する体部から直立する口縁部	(12.00)	3.10		F地区			
上	口縁部ョ	外傾する体部から直立する口縁部	(12.00)	(00 €)	(00.9)			二世段階	
上節器       上節器       上節器       上節器       上節器			(19 00)	(3.80)	. 1	下地区		古段階	
上	からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部で端部丸い	(17.00)	(2.20)	ı	F地区		上段 階	
上 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日	からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部で端部丸い	(13.00)	(3.00)	ı	F地区		上段階	
上	ビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し端部丸い	(11.00)	3.00	(7.00)	下地区		工 段 階	
	ど成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部から直立ぎみの口縁部	(12.00)	3.00	(6.30)	下地区		工 段 階	,
上節器	からナデ、口縁部ヨコナデ	直立ぎみに内湾する口縁部	11.30	3.25	1	下地区		工段階	
	口縁部ヨコナデ	平底から内湾し直立ぎみ、端部丸い	(12.00)	3.10	(7.80)	下地区		上段 階	
357 土師器 皿 ユビ成形からナデ、	<b>からナデ、口縁部ヨコナデ</b>	内湾し端部下で僅かに外反する	(13.00)	(3.35)	ı	下地区		上段 階	
358     土師器     皿     ユビ成形からナデ、	口縁部ヨコナデ	体部外傾し変化して口縁部も外傾	(11.00)	(3.20)	ı	下地区		古段階	
359     土師器     皿     ユビ成形からナデ、	口縁部ヨコナデ	丸底で体部屈曲し中央厚く端部丸い	11.20	2.50	3.75	下地区		古段階	
360     土師器     皿     ユビ成形からナデ、	<b>からナデ、口縁部ヨコナデ</b>	浅く外傾し端部丸い	(12.00)	(2.10)	ı	下地区		古段階	
361     土師器     皿     ユビ成形からナデ、	<b>からナデ、口縁部ヨコナデ</b>	浅く緩やかなS字状、端部丸い	(16.00)	(2.10)	1	万地区		工 段 階	
362     土師器     皿     ユビ成形からナデ、	口縁部ヨコナデ	外傾し端部ちっかうでやや開く	(16.00)	(2.30)	ı	F地区		古段階	
363     土師器     皿     ユビ成形からナデ、	口縁部ヨコナデ	平底で外傾し端部付近で開く	(16.00)	2.25	(00.6)	F地区		古段階	

<u>ז</u>	一年 アピカン・シャル・ガン				三十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二	戦卵	国 什	布
	\$21 E.I. CA 1977/1	口倭	器配	底径	H	- 1	- 1	
口縁部ヨコナデ	浅く緩やかに外傾する	(18.00)	(1.70)	ı	下地区		北半中段階	
口縁部ヨコナデ	内湾し屈曲して外反する口縁部	1	(3.40)	ı	下地区		古段階	
口縁部ョコナデ	内湾し屈曲して外反する口縁部	ı	(3.30)	1	日地区		古段階	
口縁部ヨコナデ	内湾し端部上えにつまみ上げる	(12.00)	(2.40)	ı	日地区		古段階	
口縁部ヨコナデ	内湾し端部丸い、僅かに上げ底	(14.00)	3.00	(7.40)	日地区		古段階	
口縁部ヨコナデ	内湾し端部薄くつまみ出す	(14.00)	(2.70)	1	日地区		古段階	
口縁部ヨコナデ	内湾ぎみに外傾し端部反る	(14.00)	(3.40)	1	下地区		計	
	薄い体部で口縁端部上方につまむ	(25.80)	(3.25)	ı	下地区		古段階	
ロクロナデののちナデ	外傾し端部内外に肥厚	(28.00)	(8.30)	ı	万地区		半	
ロナデののちナデ、底部糸切り	平底で内湾する体部	ı	(1.80)	(00.9)	日地区		半	
ロクロナデののちナデ	平底で僅かに内湾し端部肥厚	(29.70)	11.00	(10.50)	日地区		古段階	自然釉
	平底で僅かに内湾し端部肥厚	(29.80)	11.00	(11.00)	万地区		古段階北半	
	薄い体部で口縁端部大きく肥厚	1	(3.40)	ı	万地区		古段階	
ロナデののちナデ、底部ヘラ切り	平底から内湾する体部、端部肥厚	(28.00)	10.40	-	下地区		古段階	
ロクロナデののちナデ	外傾し、端部角張る	1	(4.20)	-	F地区		古段階	
ロナデののちナデ	平底で方形の高台付く	ı	(1.20)	(10.50)	F地区		古段階	
	短く2段に屈曲する、端部丸い	ı	(1.80)	ı	下地区		古段階	
	外傾し端部内外に肥厚	-	(2.80)	1	下地区		古段階	
	内湾し端部内外に肥厚	(14.00)	(3.70)	1	下地区		古段階	
	ラッパ状に外反して広がる	ı	(09.60)	11.80	1 地区		古段階	
	外反し端部肥厚	ı	(1.90)	1	下地区		古段階	
	外傾し端部尖る	1	(3.10)	-	下地区		古段階	
	内湾し高台高い	1	(3.10)	5.50	下地区		古段階	

番号	種別	器種	技法 他	形態の特徴	一人径	法量 (cm) 器高	底径	出土地区	遺構	層位	備考
387	須恵器	捏鉢	ロクロナデののちナデ	平底で僅かに内湾し端部肥厚	(29.80)	10.00	(13.10)	下地区		SB03下層	自然和
388	器皦	捏鉢	ロクロナデののちナデ	外傾し端部内外に肥厚	(28.00)	(7.25)	ı	下地区	,	SB03下層	
389	田	多	旋釉	外傾し端部王縁になる	ı	(2.60)	1	下地区		SB03下層	
390	須恵器	ハソウ	ロクロナデ、沈線・波状文	外傾する	ı	(2.50)	1	下地区		SB03下層	
391	須恵器	本	ロクロナデ、ロクロケズリ	内湾する体部、受部立ち上がり外反	ı	(2.80)	ı	下地区		SB03下層	
392	須恵器	高杯	ロクロナデ、ロクロケズリ	内湾する	ı	(3.00)	ı	下地区		SB03下層	
393	弥生土器	쏌	ハケ整形からヨコナデ、3条四線	外反し端部内外に肥厚する	1	(1.80)	ı	1 地区		SB03下層	
394	上節器	上鎌	ユビ成形からナデ	管状で中央が膨らむ	(2.20)	1.05	06:0	F地区		井	
395	上師器	工錘	ユビ成形からナデ	管状で中央が膨らむ	2.90	1.05	1.20	F地区		北	
396	上師器	工錘	ユビ成形からナデ	管状で両端面になる	2.60	1.15	1.20	F地区		中段階	
397	上無器	工錘	ユビ成形からナデ	管状で両端を欠く	(2.10)	1.30	1.20	F地区		古段階	
398	上節器	上錘	ユビ成形からナデ	管状で手捏ねで歪	3.65	(1.50)	(0.80)	F地区		導水周辺	
399	上節器	上錘	ユビ成形からナデ	管状で中央が膨らみ端面になる	2.10	1.45	1.40	F 地区		中段階	
400	上無器	上錘	ユビ成形からナデ	管状で中央が膨らみ端面になる	2.30	1.40	1.30	F 地区		中段階	
401	上節器	上錘	ユビ成形からナデ	管状で中央が膨らむ	4.20	1.65	1.65	F地区		SB03下層	
402	上節器	上鍾	ユビ成形からナデ	管状で中央が膨らみ短く端面になる	3.40	1.05	1.95	F 地区		中段階	
403	上節器	上鍾	ユビ成形からナデ	管状で両端面になる	5.15	1.12	1.10	F地区		面精査	
404	上製品	湖口	ガラス淬付着、ナデ			(4.00)		F地区		中段階	
405	上製品	羽口	ガラス淬付着、ナデ			(6.90)		F地区		뀨	
406	上製品	羽口	ガラス滓付着、ナデ			(4.45)		下地区		뀨	
407	土製品	部	ナデ			(4.80)		下地区		奉	

### 9. 土器以外の出土遺物

## 石器

3点出土している。(S1) は B 西地区出土で安山岩の削器である。長さ 11.1 cmを測る。(S2) はチャート製の火打ち石で F 地区 SG01 古段階埋土から出土している。長さ 2.05 cmで打面が鈍角になっている。(S3) は砥石である。F 地区 SG01 中段階から出土しており、幅 3.05 cmで残存長 5.17 cmを測る。

#### 金属製品

(M1) だけが B 西地区出土で、それ以外は F 地区出土である。(M1) は鏨状の頭を折り曲げたものである。断面は長方形で、長さ 18.6 cmを測る。(M2) ~ (M4) は確認調査で出土したものであるが、本発掘調査の SG01 部分に相当する。 3 本とも釘で、長さはまちまちである。

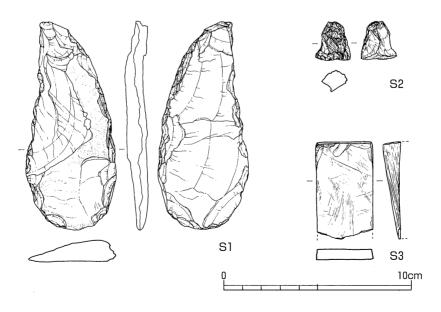
 $(M5) \sim (M60)$  は SG01 上層や面精査・機械掘削時の遺物である。(M5)は池に面する主殿南側から出土した青銅製水滴である。ウサギ形をした類例のないものである。左耳を欠いている以外は残存している。前脚を伸ばして座っており、耳を立てた状態をリアルに表現している。前を見ており、目や後脚と尻尾も表現している。中は空洞で背中から入れて口から水を出すものである。 $46.9~{\rm g}$  で、高さ  $3.9~{\rm cm}$ 、長さ  $5.1~{\rm cm}$ 、幅  $2.6~{\rm cm}$ を測る。

第8表 場市遺跡 B 地区出土石器計測表

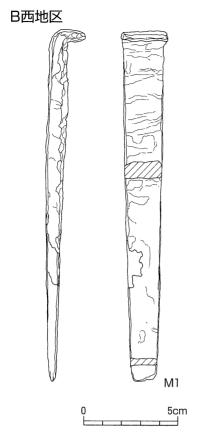
	山上屋丛	聖孫	T++		法量(cr	n) (g)		備考
番号	出土層位	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	川 与
S1	SD01 西半	削器	粘板含	11.1	4.8	1.22	58.9	

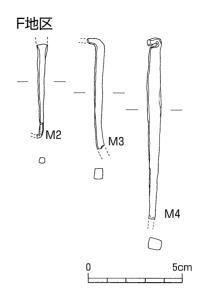
第9表 場市遺跡 F地区出土石器計測表

番号	出土層位	器種	石材		法量(ci	n) (g)		特徴	備考
街写	山上厝山	行生	10111	長さ	幅	厚さ	重さ	付取	<b>佣</b> 专
S2	SG01 古段階埋土	火打ち石	チャート	2.05	1.91	1.17	3.8		断ち割りトレンチ
S3	SG01 北側 中段階	砥石	泥岩?	5.17	3.05	(0.96)	16.9		



第67図 場市遺跡石器実測図





第69図 場市遺跡金属器実測図(2)

第68図 場市遺跡金属器実測図(1)

(M23)は薄い板状で器種は不明である。(M24)は刃の付いた製品で刀子であろう。刃の一部で、残存長7.25 cmを測る。比較的大きめの刀子である。(M54)は断面方形で折れている。鉄鏃の基部かと思われる。(M55)は板状の幅1.1 cm、残存長3.27 cmである。器種は不明である。(M56)も不明品である。不定円形を呈している。(M57) は円形の孔につないでいる組合せの金具である。器種は断定できない。(M58) は鉄鏃・ヤリガンナなどの基部であろうか。中央が広くなっている。(M59) は断面円形で太さの変化のある製品で海老錠の鍵などが想定されるが、不明である。(M60) は刃を持っており刀子かと思われる。

それ以外の(M6)  $\sim$  (M22) (M25)  $\sim$  (M53) は釘である。頭は折り曲げているものが大半であるが、両方に開いているものもある。長さ・幅は変化がある。断面は長方形の方が多い。

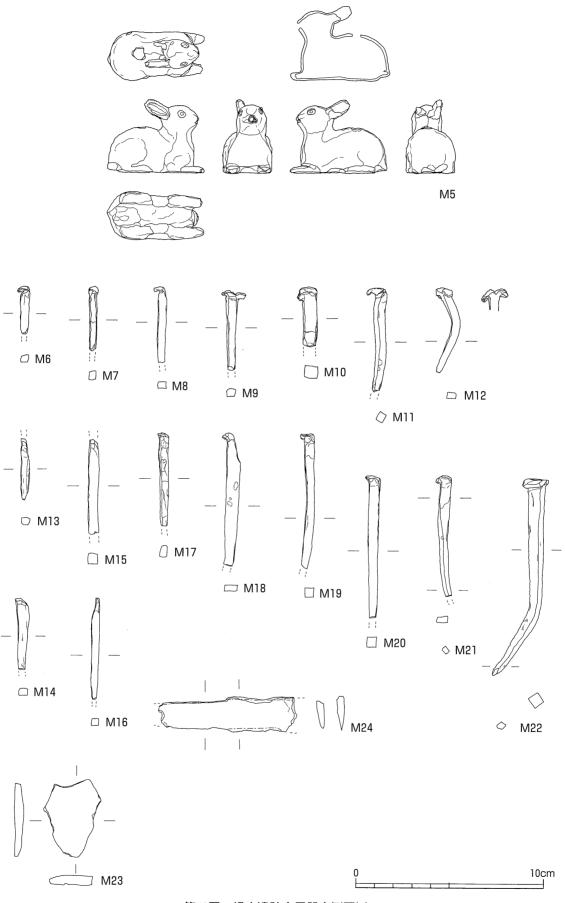
 $(M61) \sim (M92)$  は SG01 下層 (中段階) の遺物である。大半は釘である。不明品も数点ある。 $(M83) \sim (M85)$  は刀子である。(M85) は長さが 24.9 cmあり小刀とした方が良いであろうか。僅かに反っており、目釘孔が残っている。(M80) は青銅製品で、板状で曲がっているが本来の状況は不明である。それ以外は釘で、形態や規模などはまちまちであるが、上層との差はない。

(M93)  $\sim$  (M106) は最下層(古段階)の遺物である。(M105) (M106) は曲がっていて断定は出来ないが、すべて釘と思われる。

 $(M107) \sim (M111)$  は鉄滓である。椀形滓とほとんど鉄分のない軽いものがある。ガラス滓のようなものはない。

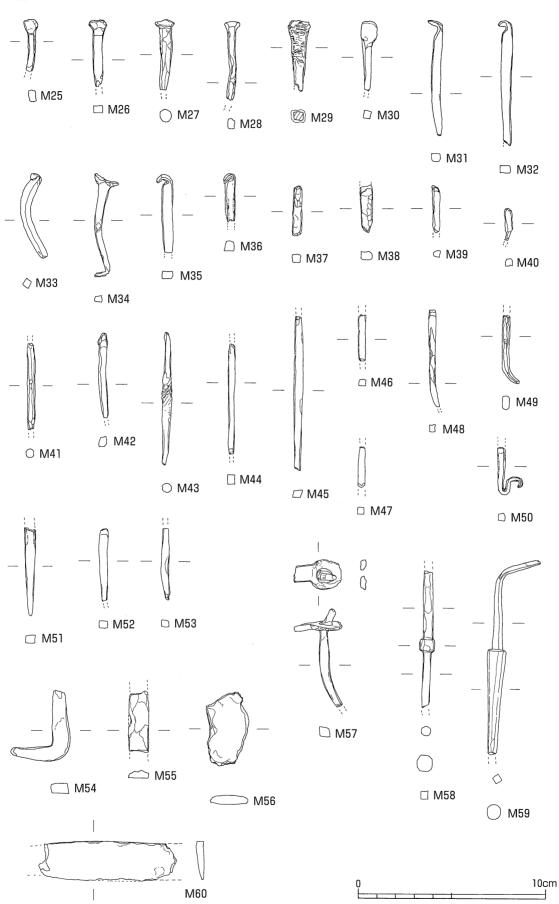
釘を中心に鉄器は出土している。鉄滓やフイゴ羽口も出土していることから、現地で鉄生産に係わっていたことが理解される。園地を築いて経済的基盤であろうか。

## F地区SG01



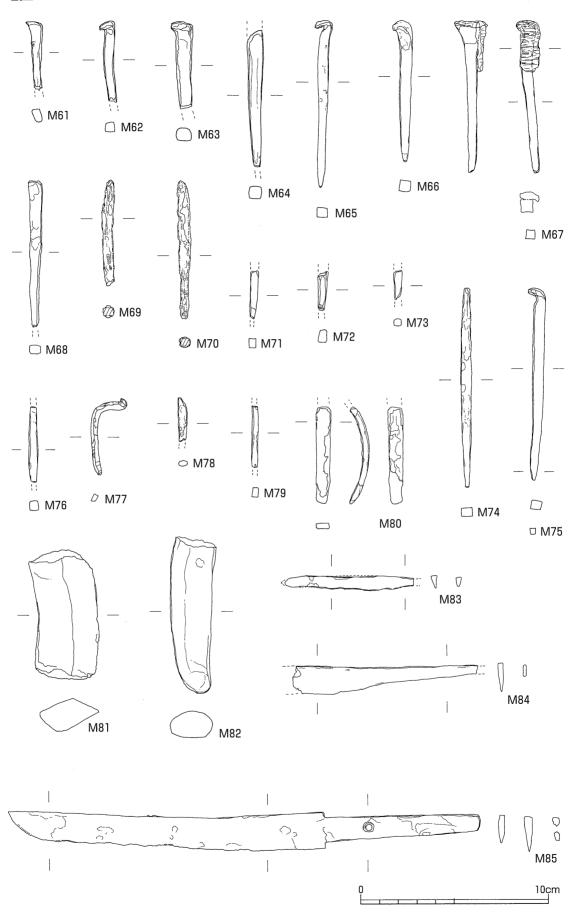
第70図 場市遺跡金属器実測図(3)

## F地区SG01

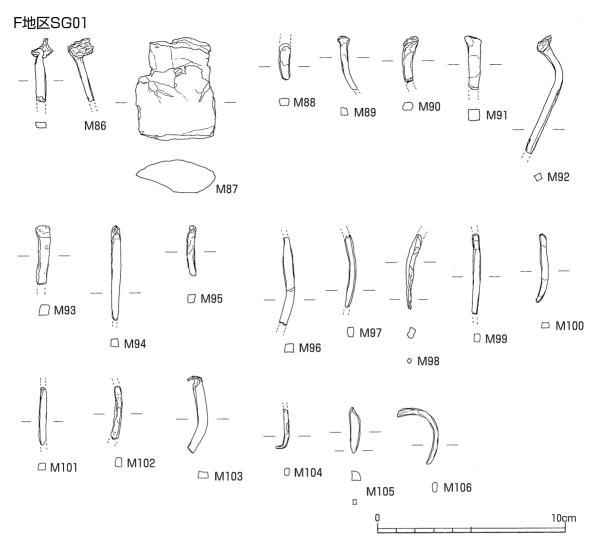


第71図 場市遺跡金属器実測図(4)

# F地区SG01



第72図 場市遺跡金属器実測図(5)

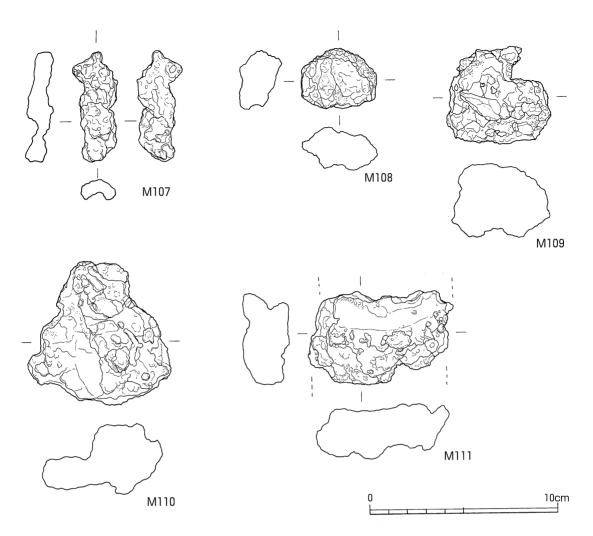


第73図 場市遺跡金属器実測図(6)

## 木製品

木製品は 24 点図化した。すべてF地区からで、(W1)が SD01、(W33)が P20 出土以外は SG01 から出土している。杭などの建築材以外はすべて生活用具である。

(W1) は下駄である。歯を一木から削り出したものである。後歯は欠いている。長さ 23.2 cm、最大幅 10.5 cmの小判型に歯を付けている。残存している後歯の幅は 14.0 cm(復原すると 16.0 cm)、高さ 9.2 cmを測る。歯はほぼ3 等分の位置に設けており、両歯とも厚さ 3.0 cmである。歯の前方に鼻緒孔を前 1 ヶ所、後ろ 2 ヶ所円孔が穿たれている。前の方は径 0.7 cmと小さく、後方は 1.2 cmである。孔の位置と磨耗度から右足と考えられる。(W2) は杓文字で柄部を欠いている。幅 7.15 cmで刃物痕跡が残っている。全体に炭化している。(W3) ~ (W6) は漆器椀である。(W3) は黒漆の上に内外とも朱漆で文様を描いている。高台を欠失している。口径 17.0 cm、残存高 5.0 cmを測る。他も方法は同様である。文様は花文を描いている。(W7) (W8) は曲物底板である。径 33 cmと大きめの曲物である。(W13) は中央に方形の孔のある容器蓋か栓と思われる破片である。被熱しているものは(W10)(W15) (W16) と付け木にみられる。それ以外は器種を断定しにくいものである。板材のなかで先を尖らせているもの(W26)は斎串とした。角材・板材・杭などである。(W33) (W34) は付け木である。



第74図 場市遺跡鉄滓実測図

## 第10表 場市遺跡 B 地区金属器計測表

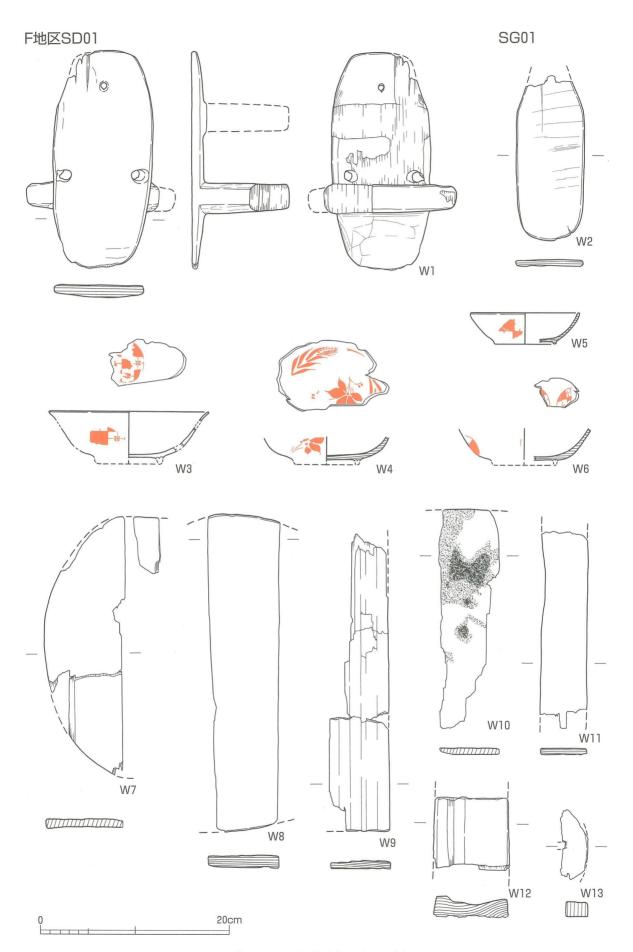
	番号	出土層位	器種		法量(cr	n) (g)		備考
ı	钳与	山工層区	台門里	長さ	幅	厚さ	重さ	畑 ち
	M1	機械堀削	不明	18.61	2.32	1.2	153.6	

## 第11表 場市遺跡 F 地区金属器計測表

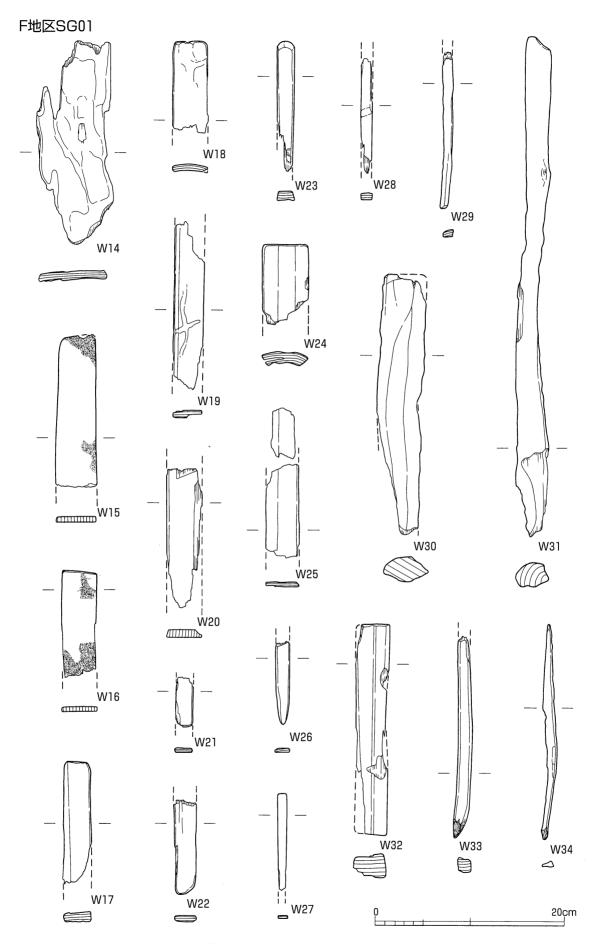
番号	 出土層位	器種		法量(c			備考
			長さ	幅	厚さ	重さ	Co. Will
M2	T38北端黒色落ち込み	釘	(0.50)	0.60	0.30	(1.1)	
M3	T38北端黒色落ち込み	釘	(0.59)	(0.92)	0.60	(2.4)	
M4	T38北端黒色落ち込み	釘	(9.61)	0.82	0.65	(6.2)	
M5	遺構面直上	水滴	3.90	5.10	2.60	(46.9)	銅製品
M6	北側拡張 上層遺構面精査時	釘	(2.50)	0.61	0.40	(1.3)	
M7	機械堀削	釘	(3.44)	0.50	0.50	(1.6)	
M8	西精査	釘	(4.03)	0.70	0.40	(1.3)	
M9	機械堀削	釘	(4.23)	1.30	0.42	(2.8)	
M10	西精査	釘	(3.20)	1.05	0.68	(4.7)	
M11	西精査	釘	(5.53)	1.05	0.60	(1.6)	
M12	機械堀削	釘	4.50	0.83	0.30	2.3	
M13	機械堀削	釘	(3.22)	0.45	0.40	(1.2)	
M14	機械堀削	釘	(3.75)	0.74	0.38	(2.2)	
M15	機械堀削	釘	(5.00)	0.55	0.55	(3.8)	
M16	機械堀削	釘	(5.40)	0.45	0.40	(1.9)	
M17	機械堀削	釘	(4.98)	0.55	0.60	(3.1)	
M18	機械堀削	釘	(7.05)	0.90	0.32	(5.5)	
M19	西精査	釘	(7.20)	0.78	0.50	(4.1)	
M20	機械堀削	釘	(7.60)	0.83	0.52	(6.3)	
M21	機械堀削	釘	(6.45)	0.90	0.40	(2.7)	
M22	西精査	釘	10.50	1.32	0.90	7.8	
M23	機械堀削	不明	4.11	3.01	0.56	9.6	
M24	SG01西側 SD03	刀子	(7.25)	1.90	0.41	(8.7)	
M25	SG01北側 導水周辺	釘	(2.80)	0.75	0.60	(1.5)	
M26	SG01南半	釘	(3.60)	0.96	0.50	(2.1)	
M27	SG01北半西肩	釘	(3.80)	1.00	0.65	(1.7)	
M28	SG01南半	釘	(4.20)	0.81	0.51	(1.7)	
M29	SG01北半西肩	釘	(3.80)	1.10	0.68	(2.5)	
M30	SG01アゼ	釘	(3.80)	0.90	0.42	(2.0)	
M31	SG01北半西肩	釘	6.10	0.85	0.40	1.5	
M32	SG01北半	釘	(6.65)	0.75	0.40	(4.1)	
M33	SG01北半	釘	4.52	0.59	0.50	1.4	
M34	SG01北半	釘	5.50	1.29	0.35	3.0	
M35	SG01北半	釘	(4.20)	0.88	0.40	(2.8)	
M36	SG01アゼ	釘	(3.67)	0.69	0.52	(1.9)	

番号	出土層位	器種	E 7	法量(cr		まと	備考
M37	SG01北半西肩	釘	長さ (2.70)	<u>幅</u> 0.50	厚さ 0.42	重さ (1.1)	
M38	SG01北半西肩	釘	(2.58)	0.67	0.48	(2.0)	
M39	SG01北側 導水周辺	釘	(2.50)	0.49	0.31	(0.4)	-
M40	SG01北半 西肩	釘	(1.70)	0.40	0.40	(0.4)	
M41	SG01アゼ	釘	(4.65)	0.45	0.43	(1.3)	
M42	SG01南半	釘	(4.50)	0.55	0.50	(1.9)	
M43		釘	7.05	0.55	0.45	1.4	
M44	SG01北半西肩	釘	(5.90)	0.40	0.50	(1.6)	
M45	SG01南半	釘	(8.27)	0.50	0.50	(4.5)	
M46	SG01南半	釘	(2.50)	0.40	0.38	(0.6)	
M47	SG01アゼ	釘	(2.15)	0.40	0.40	(0.4)	
M48	SG01北半西肩	釘	(5.11)	0.35	0.40	(2.7)	
M49	SG01アゼ	釘	(3.60)	0.40	0.80	(1.5)	
M50	SG01南半	釘	(2.50)	0.40	0.40	(0.6)	
M51	SG01北半	釿	(4.70)	0.58	0.40	(1.4)	
M52	SG01北半	釘	(3.95)	0.50	0.40	(0.8)	
M53	SG01北側 導水周辺	釘	(3.78)	0.50	0.40	(1.1)	-
M54	SG01北半	鏃?	4.30	1.05	0.51	4.3	
M55	SG01北半西肩	鏃?	(3.27)	1.10	0.41	(2.8)	
M56	SG01北半	不明	3.95	2.35	0.50	6.7	
M57	SG01北半	不明	(5.25)	2.50	0.52	(2.9)	
M58	SG01南半	鏃	(7.30)	0.80	0.85	(2.6)	
M59	SG01北半	鏃	(10.48)	1.00	0.75	(6.4)	
M60	SG01北半西肩	刀子	(7.30)	2.10	0.41	(9.3)	
M61	SG01北側 古段階埋土	釘	(3.65)	0.90	0.68	(1.9)	
M62	SG01下層	釘	(4.45)	0.85	0.50	(1.9)	
M63	SG01北側 古段階埋土	釘	(4.70)	1.13	0.70	(6.5)	
M64	SG01北側 古段階埋土	釘	(7.30)	0.90	0.68	(9.0)	
M65	SG01	釘	8.83	0.90	0.51	4.1	
M66	SG01古段階遣水内?	釘	7.51	1.05	0.60	3.9	
M67	SG01	釘	8.00	1.70	1.07	9.5	
M68	SG01	釘	(7.71)	0.70	0.50	(2.6)	
M69	SG01下層	釘	5.55	0.69	0.62	4.2	
M70	SG01北側 古段階埋土	釘	7.30	0.78	0.58	6.1	
M71	SG01北側 古段階埋土	釘	(2.52)	0.41	0.50	(0.9)	
M72	SG01北側 古段階埋土	釘	(2.10)	0.51	0.70	(1.2)	
M73	SG01古段階遣水内?	釘	(1.50)	0.47	0.50	(0.4)	
M74	SG01北側 古段階埋土	釘	10.63	0.60	0.50	8.2	
M75	SG01下層	釘	11.22	0.90	0.50	8.4	
M76	SG01北側 古段階埋土	釘	(4.01)	0.50	0.51	(1.4)	
M77	SG01下層	釘	4.12	0.40	0.40	2.0	

	山土屋丛	<u> </u>		法量(c	m) (g)	<del> </del>	/## +V
番号	出土層位 	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	─
M78	SG01北側 古段階埋土	釘	(2.40)	0.58	0.30	(1.2)	
M79	SG01古段階遣水内?	釘	(3.30)	0.39	0.50	(1.5)	
M80	SG01古段階埋土	不明	(5.15)	0.79	0.31	(5.6)	銅製品
M81	SG01北側 古段階埋土	不明	6.90	2.65	1.80	92.6	
M82	SG01北側 古段階埋土	不明	(8.30)	2.45	1.41	(80.4)	
M83	SG01	刀子	(6.80)	0.80	0.30	(1.9)	
M84	SG01北側サブトレ	刀子	(9.77)	1.52	0.30	(3.4)	
M85	SG01	刀子	24.92	2.09	0.40	25.0	
M86	SG01古段階遺水内?	釘	3.45	1.14	0.40	(1.4)	
M87	SG01古段階遺水内?	不明	5.45	4.20	1.80	58.0	
M88	SG01北側サブトレ	釘	1.40	0.60	0.40	0.9	
M89	SG01北側サブトレ	釘	2.82	0.60	0.40	0.7	
M90	SG01北側サブトレ	釘	(2.48)	0.87	0.42	(1.3)	
M91	SG01北側サブトレ	釘	(2.87)	0.89	0.60	(2.6)	
M92	SG01北側サブトレ	釘	(6.29)	0.73	0.40	(2.2)	
M93	SG01最古段階埋土	釘	(3.13)	0.79	0.50	(1.3)	
M94	SG01最古段階埋土	釘	(5.00)	0.50	0.40	(1.1)	
M95	SG01最古段階埋土	釘	(2.67)	0.50	0.46	(0.8)	
M96	SG01北東最古(排北部)段階	釘	(4.70)	0.80	0.43	(1.6)	
M97	SG01最古期埋土	釘	(3.90)	0.63	0.51	(0.8)	
M98	SG01最古段階埋土	釘	(4.00)	0.85	0.51	(0.8)	
M99	SG01最古期埋土	釘	(4.37)	0.45	0.44	(1.3)	
M100	SG01北東最古(排北部)段階	釘	(3.69)	0.49	0.30	(0.6)	
M101	SG01最古期埋土	釘	(3.05)	0.40	0.40	(0.7)	
M102	SG01最古段階埋土	釘	(2.82)	0.59	0.50	(0.6)	
M103	SG01北東最古(排北部)段階	釘	(4.10)	0.80	0.36	(1.9)	
M104	SG01最古期埋土	釘	(2.10)	0.28	0.40	(0.4)	
M105	SG01最古期埋土	不明	2.40	0.58	0.50	1.6	
M106	SG01最古期埋土	不明	(2.93)	2.15	0.51	(1.6)	
M107	SG01南半	鉄滓	5.81	2.40	1.38	17.1	
M108	SG01南半	鉄滓	3.20	4.00	2.50	31.3	鉄塊形遺物の可 能性あり
M109	SG01下層 北半	鉄滓	5.10	5.51	3.90	90.5	剥離状の鉄片が 見られる
M110	SG01最古段階埋土	鉄滓	7.62	7.60	3.85	193.6	械形滓(精錬滓 の可能性あり)
M111	SG01最古段階埋土	鉄滓	(4.95)	8.70	2.90	(95.1)	椀形鉄滓
M111	SG01最古段階埋土	鉄滓	(4.95)	8.70	2.90	(95.1)	椀形鉄滓



第75図 場市遺跡木器実測図(1)



第76図 場市遺跡木器実測図(2)

第12表 場市遺跡 F 地区出土木器計測表

番号	出土層位	器種	長さ	法量 (cm) 幅	厚さ	特徴	備考
W1	SD01	下駄	23.20	(14.00)	10.30	削り出し	前歯折損
W2	SG01	杓文字	(17.50)	7.15	0.70	柄部欠失	刃物痕あり
W3	SG01	漆椀	17.00	(5.00)	0.50	黒漆の上に朱漆	高台欠損
W4	SG01	漆椀	(13.40)	(2.60)	0.70	内外に朱漆の模様	高台欠損
W5	SG01	漆椀	(11.40)	3.25	0.40	低い高台、朱漆	
W6	SG01	漆椀	(14.00)	(3.50)	0.50	黒漆の上に朱漆	高台欠損
W7	SG01	曲物	(27.50)	(8.10)	1.00		
W8	SG01中段階	曲物	33.70	(7.60)	1.30		
W9	SG01	板材	(36.60)	(6.35)	0.90		
W10	SG01中段階	板材	(23.40)	(6.30)	0.65	被熱し炭化	曲物?
W11	SG01中段階	板材	(21.00)	4.80	0.70		
W12	SG01	角材	(7.80)	7.90	(2.20)		
W13	SG01中段階	容器	(7.45)	(2.35)	1.60	中央に方孔	
W14	SG01中段階	板材	(21.60)	(7.20)	1.00		
W15	SG01	板材	(16.40)	4.15	0.60	炭化	
W16	SG01	板材	(11.40)	3.70	0.50	炭化	
W17	SG01	板材	(12.90)	2.90	1.10		
W18	SG01	板材	(9.90)	3.70	0.80		
W19	SG01中段階	板材	(17.90)	3.10	0.80		
W20	SG01	板材	(14.80)	(3.70)	0.85		
W21	SG01	板材	(5.30)	1.85	0.45		
W22	SG01	板材	(10.00)	2.30	0.70		
W23	SG01	板材	(13.90)	1.85	0.95		
W24	SG01	板材	(8.60)	4.90	1.35		
W25	SG01中段階	板材	(15.40)	3.50	0.50		
W26	SG01中段階	斎串	(8.80)	1.50	0.45	尖る	
W27	SG01中段階	板材	(10.30)	1.00	0.20		
W28	SG01中段階	串状	(12.20)	1.20	0.70		
W29	SG01中段階	串状	(16.70)	1.10	0.80		
W30	SG01中段階	杭	(27.60)	4.70	2.60		
W31	SG01中段階	杭	(53.70)	3.50	2.50		
W32	SG01中段階	角材	(22.40)	3.50	2.50		
W33	SG01 P20	付け木	21.30	1.30	1.55		
W34	SG01中段階	付け木	22.80	1.10	0.65		

# V 広瀬遺跡の調査結果

#### 1. 位 置

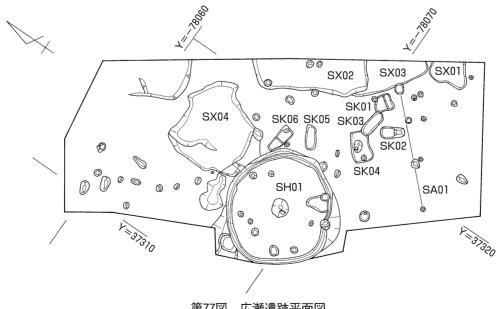
今回調査したなかでは建屋谷の最も下流に位置している。養父市建屋字広瀬に所在し、建屋川左岸に ある。場市遺跡下地区とは南に m離れている。間には場市遺跡下地区のすぐ南側に餅耕地川が西か ら東に流れている。現況でも少し高い水田になっているが、昭和50年代の圃場整備以前は段丘面とし て比高差がより大きかったようである。

### 2. 遺 構

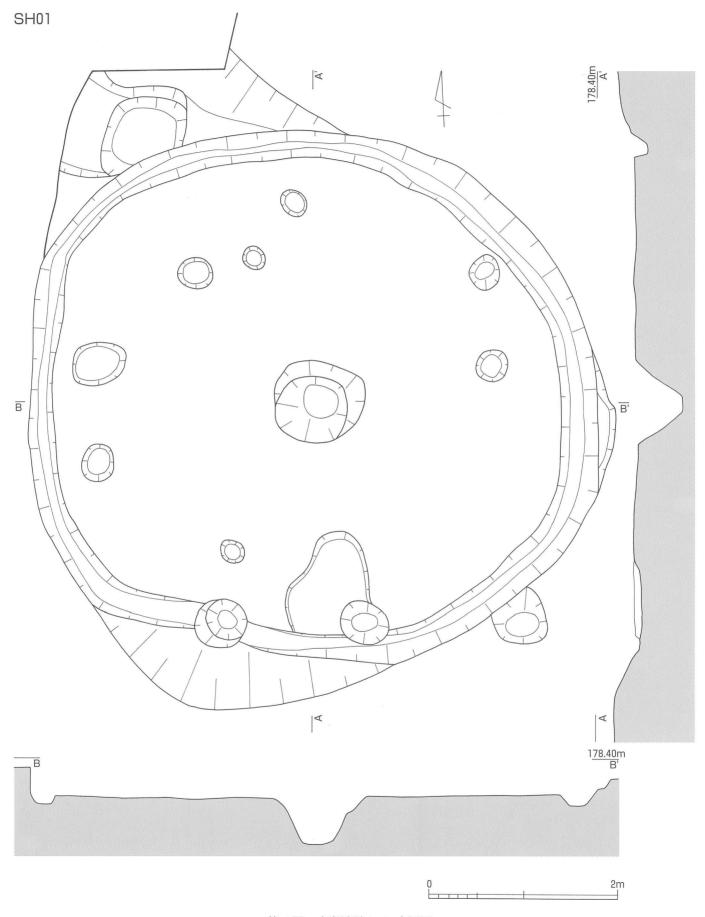
調査面積は182 ㎡と狭い。基本土層は①表土 ②黒褐細砂 ③地山で、地山の上に部分的に地山ブロ ック混じりの黒褐細砂層が堆積している。全体的に浅く、耕土を含めても 40 cm前後で遺構面に達する。 本来は堆積層があったものと思われ、圃場整備で削平されたものと考えられる。

検出した遺構は竪穴住居跡・落ち込み・土坑・溝・ピットである。中央部分竪穴住居跡や落ち込みの 大形遺構を調査し、南北土坑や柵跡などの小形遺構を検出している。

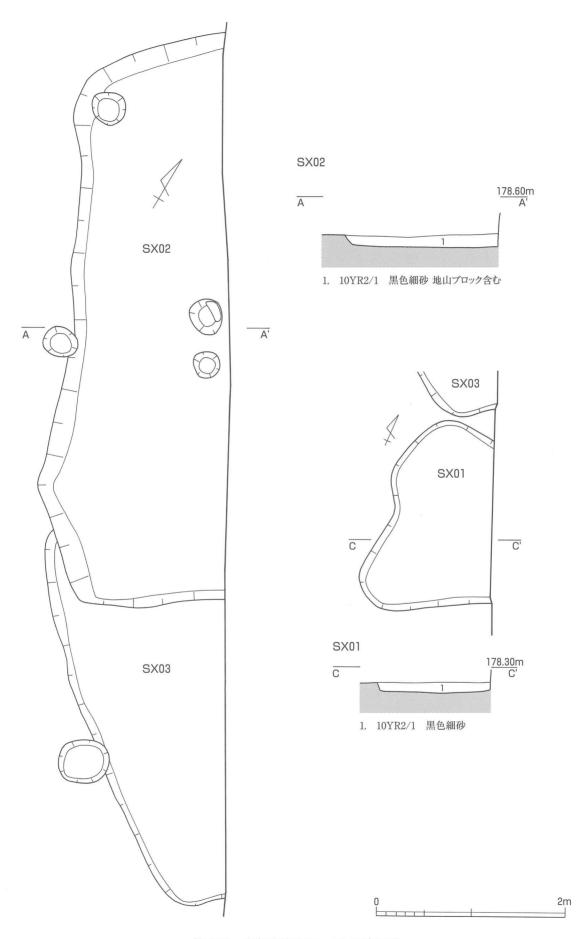
竪穴住居跡(SH01) 1 棟は調査区中央西側で検出している。円形の竪穴住居跡で一部拡張して全体を 調査した。東西 6.2 m、南北 6.1 mと上面では近い数値を示している。やや南側が付き出た不正円形を している。北側も平坦面を構成するために一段下げた可能性のある段が認められる。床面では南側が弧 を描かず直線状になっている。3方向は円形だが、南側だけ平たく歪になっている。床面の壁溝は巡っ ており、広いところで 50 cm、狭いところで 32 cmを測る。深さは  $10 \sim 15 \text{ cm}$ で底は比較的平坦で、断面 形は逆台形になっている。ほぼ中央に最大長 1.0 mの土坑が存在する。東西方向に多少長い不定円形で 中央より南側に偏って深く下げられている。底面は径 0.35 m前後の円形で比較的平たい。深さは最大で 0.52 mを測る。床面には9基のピットが検出されている。径0.3 mから0.6 mまで大きさに差がある。明 確に上屋構造を復原することは出来ない。住居跡の壁の残りは良好とは言えない。東側が悪く、西側で は20cm残っている。南側壁溝に接して土坑が存在する。床面は焼けていないが、焼土を埋土に含んでいる。



第77図 広瀬遺跡平面図



第78図 広瀬遺跡SH01実測図



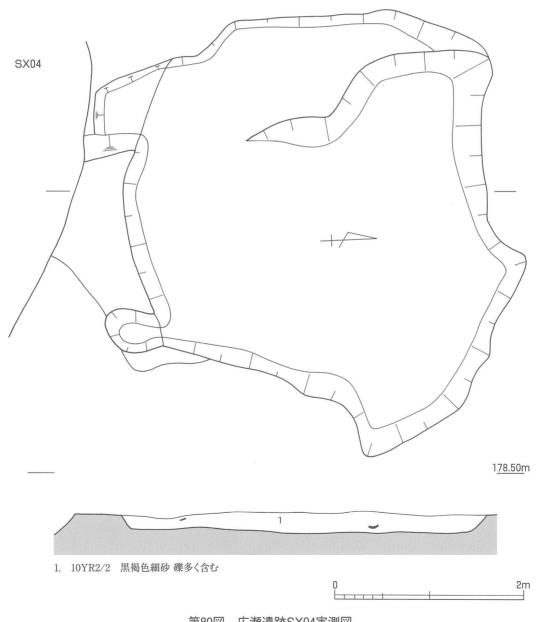
第79図 広瀬遺跡SX01・02·03実測図

落ち込みは4基調査している。SX01 は調査区南東部で検出しており、東側の調査区外に続いている。 最大幅 2.1 mの不定形をした東西に長い遺構である。深さは 10 cm前後と残存状態は悪い。出土遺物も 小片だけで、SH01と似た時期と思われる。

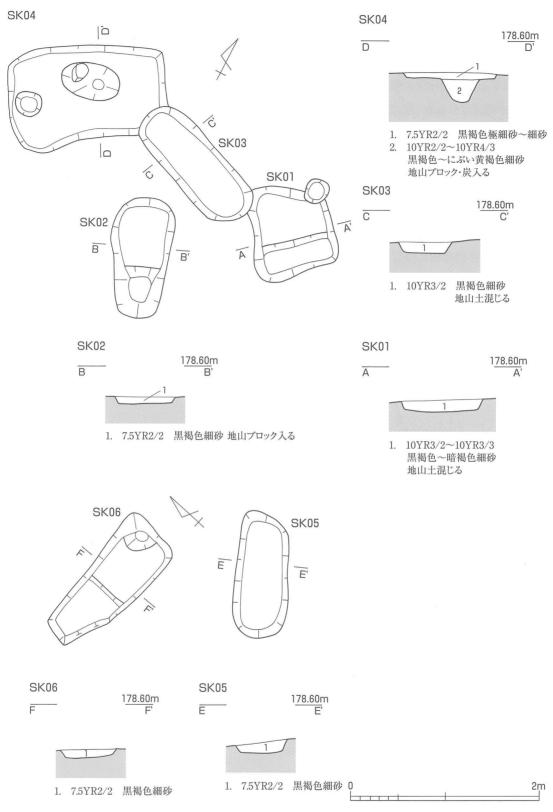
SX02 は平面で検出作業の段階では当初竪穴住居跡を想定して掘り下げた。残存状態が悪く壁溝や柱 穴・炉跡が確認されなかったことから、竪穴住居跡と断定することが躊躇され落ち込みとした。平面プ ランからは方形の住居跡の可能性は高い。南北6.0mで東西の検出長は最大で2.0mで東側に延びている。 壁は最大で 0.15 mと浅い。

SX03 は南端を SX01 に接し、北側は SX02 に切られた不定方形の落ち込みである。やはり、調査区 東側に延びている。主軸方向はSX02とは異なっている。最大の深さ0.10 mを測る。出土遺物はないも のの切り合い関係から後期以前である。

SX04 は SH01 の北側に接して築かれている落ち込みである。明確なプランを呈さない不定形の落ち 込みである。最大長4.8 m、最大深度0.21 mを測る。壁溝など検出されず、底も平坦でない。弥生後期



第80図 広瀬遺跡SX04実測図



第81図 広瀬遺跡土坑群実測図

の土器が出土しており、SH01と同時期である。

土坑群は竪穴住居跡と落ち込みの間で検出されている。 1 基(SK03)だけ切り合い関係のある 6 基を調査した。SK01 だけ正方形に近いプランで 2 段に下げられている。東西 0.9 m、南北は西辺 1.06 m

で東辺  $0.72\,\mathrm{m}$  の台形プランをしている。深さは  $0.1\,\mathrm{m}$  前後と浅い。南半は  $5\sim8\,\mathrm{cm}$  さらに幅  $0.4\,\mathrm{m}$ 、長さ  $0.8\,\mathrm{m}$  の大きさで下げられている。SK02 は不定楕円形を呈する土坑である。南北  $1.34\,\mathrm{m}$  で最大幅は  $0.7\,\mathrm{m}$  である。北側の方が広く、南側が狭くなっており、小口部も辺でなく弧状になっている。全体的 には浅く  $7\,\mathrm{cm}$  で、南半が  $5\,\mathrm{cm}$ 深く下げられている。SK03 は隅円長方形のプランで SK01 と SK04 を切っている。土坑出土の遺物がほとんどないので、時期を決定しがたいが SK01・SK04 よりは新しい遺構であることが切り合い関係から理解される。東西方向に主軸を有し、長さ  $1.5\,\mathrm{m}$ 、幅  $0.6\,\mathrm{m}$  を測る。 SK04 は大形の長方形プランの土坑である。SK03 に切られている。長さ  $1.7\,\mathrm{m}$ 、幅  $1.1\,\mathrm{m}$  で深さは  $8\,\mathrm{cm}$  と残りは悪い。SK05 は隅円長方形に近い不定形をした土坑である。南側は弧状で北側は辺に近い。長さは  $1.3\,\mathrm{m}$  で幅は  $0.6\,\mathrm{m}$  である。深さは最大で  $15\,\mathrm{cm}$  と広瀬遺跡の土坑のなかでは深い。SK06 は長方形の土坑で SH01 の肩と接している。東辺は  $0.7\,\mathrm{m}$ 、西辺は  $0.4\,\mathrm{m}$ で、長さは  $1.55\,\mathrm{m}$ を測る。深さは  $9\,\mathrm{cm}$  で西半はさらに  $3\,\mathrm{cm}$  前後下げられている。

ピットが 10 数基検出されている。南側で列となるもの 1 列を確認したので SA01 として柵跡として報告する。 4 基のピットは長さ 6.5 mで埋土から中世の遺構と考えられる。東西方向の調査区外へ続いている可能性も残されている。北側で検出したピットも埋土から中世のものと考えられる。

#### 3. 遺物

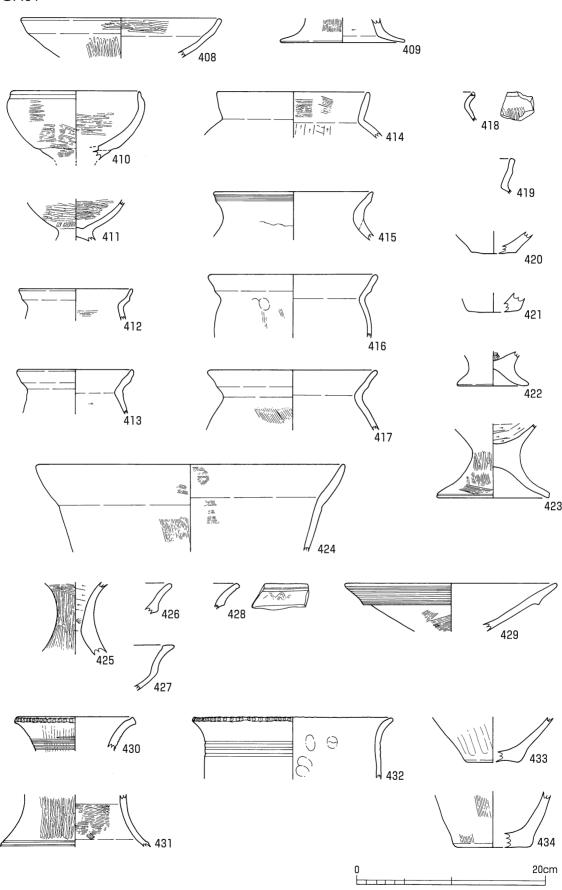
包含層は薄く遺物量は少ない。大半の遺物は遺構から出土している。特に竪穴住居跡である SH01 から多数出土している。遺跡出土遺物の時期は弥生時代前期末から古墳時代前期にかけてと、中世から近世の遺物も包含層から出土している。

SH01 出土遺物 (408) ~ (434) (451) (452)

(408) は床面出土の弥生土器器台である。上台部の破片で口径 20.8 cm、残存高 4.25 cmを測る内湾しており、端部下で淡い稜線を持って屈曲している。端部は角張りぎみである。内外面ともにヘラミガキで丁寧に仕上げられている。口縁端部周辺はヨコナデがなされており、横方向の細かいヘラミガキが見られる。にぶい橙で口縁部周辺に黒斑が認められる。長石・チャートなどの砂粒を含むが精製土器である。高杯の可能性も考えられる。(409) はピット出土の器台下台部である。裾径 13.2 cmで裾広がりに直線的に広がり屈曲して水平に近くわずかに外反して丸い端部になる。内面はヘラケズリで外面はハケ整形である。端部近くの水平部分はヨコナデで仕上げられている。長石・チャートの砂粒を多く含んでおり、焼成は良好である。器表はにぶい赤褐、器肉は灰褐である。

(410) からは住居跡埋土からの出土である。(410) は台付鉢(壺)で台部を欠いている。内湾する体部で下の方が器壁が厚くなっている。最大腹径 14.6 cmを端部から 2 cm下に有する。口縁部は短く内側につまみ上げている。ハケ整形ののちヘラミガキで仕上げており、端部周辺にはヨコナデが施されている。橙を呈しており、砂粒を少量含んでいる。(411) も台付鉢である。ハケ整形ののちヘラミガキで仕上げている。体部は内湾し、脚台端部は残存していない。にぶい橙で部分的には灰白を呈し、砂粒含んでいる。

(412) ~ (419) は甕口縁部である。(412) は口径 11.8 cmの浅い二重口縁で、残存高 3.4 cmを測る。内傾する体部から頸部は明瞭な稜線を持たない、口縁部は外反し、稜線を持って屈曲し外傾する。端部は丸い。長石・チャート・酸化粒などの砂粒を多く含んでおり、ヨコナデで仕上げている。器表は浅黄橙と他と異なって黄色みが強い。器肉は灰白である。丹波系の口縁部である。(413) は器壁の厚い口縁部である。口径 11.95 cm、残存高 4.7 cmを測る。内傾し稜線を持ってくの字となる。口縁部中途で僅か



第82図 広瀬遺跡出土遺物実測図(1)

に屈曲するが、内面はほとんど変化していない。外面は甘い稜線が認められる。端部は丸く煤が付着し ている。長石の最大径5㎜の石粒を含んでいる。にぶい橙を呈し、ヨコナデで仕上げている。(414)は 僅かに内湾する体部から外傾するくの字の口縁部で、端部は角張りぎみである。口径 15.8 cmで、外面は 赤橙、内面は橙を呈し、内面はヘラケズリ、外面はナデののち口縁部はヨコナデで仕上げている。(415) は外反する口縁部で端部を上方につまみ上げ二重口縁になっている。焼成は良好で、器表は橙で器肉は 褐灰をしている。口縁端部には擬凹線がみられる。長石は大きめの粒があり、チャート・石英の砂粒を 含んでいる。口径 16.6 cm、残存高 5.2 cmを測る。(416) も口縁部外面途中に変化点を有している。口径 17.4 cm、残存高 6.75 cmを測る。橙で砂粒を多く含んでいる。黒斑が認められる。ユビ成形、ヘラケズリ ののちハケ整形を行い、口縁部はヨコナデを施している。(417)も二重口縁になっている。内傾する体 部から外反し屈曲してさらに外反する。端部は丸く、器壁は厚めである。にぶい黄橙で、外面はやや赤 みが強い。砂粒を含み、口径 17.6 cmで、外面はハケ整形、口縁部はヨコナデである。(418) は短く外反 する口縁部で、小片であるが小形と思われる。外面はハケ整形で口縁部はヨコナデである。器表はにぶ い橙で、器肉は黒のサンドイッチ状になっている。長石など砂粒を含むが全体的には緻密である。(419) は二重口縁の小片で、端部は角張っている。表面磨滅しているが、擬凹線が施されていたようである。 外面は橙で内面はにぶい黄橙である。体部内面はヘラケズリが認められる。砂粒を含み、焼成はやや悪い。 (420)(421)は底部小片である。(420)は砂粒を多く含み、にぶい橙をしている。(421)も砂粒を多 く含んでいる。外面は橙、内面はにぶい黄橙を呈している底径 5.8 cmを測る。

(422)(423)は脚台である。(422)は裾径 7.6 cm、残存高 3.6 cmを測り、脚台部は外反している。端部は尖りぎみに丸い。磨滅が顕著であるが、ハケ整形と思われる。橙で長石などの砂粒を含んでいる。円板充填で体部と接続している。(423)は裾径 11.9 cm、残存高 7.8 cmを測り(422)よりも大形である。脚台部はユビ成形からハケ整形を行い、ナデ・ヨコナデで仕上げている。接合部分を中心にヘラミガキも看取できる。器形は緩やかに外反しており、端部は角張りぎみである。体部内面はヘラケズリが施されている。円板充填で、長石・チャートの砂粒を含んでいる。体部は丸底で内湾している。色調は全体的に橙で器肉は褐灰から灰褐である。

(424)は復原口径 32.4 cmを測る大形の鉢である。磨滅が著しい。外面は粗いハケ整形がなされている。 内面もハケ整形と思われる。橙からにぶい橙をしており、砂粒を多く含んでいる。 2 次焼成を受けたものと思われ、器表がボロボロである。外傾する体部から内湾する口縁部で端部は尖りぎみに丸い。

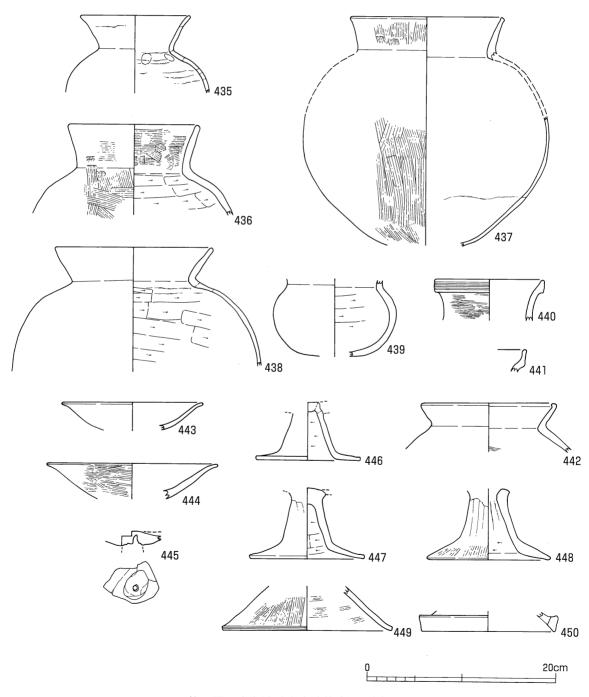
(425) ~ (428) は高杯である。(425) はユビ成形ののち内面はヘラケズリからハケ整形を行っている。部分的にナデで仕上げている。外面は細かいヘラミガキを施している。表面はにぶい橙で器肉は灰褐で砂粒を含んでいる。焼成は良好で、黒斑が認められる。(426)~(428)はともに杯部口縁部の小片である。(426) はにぶい橙を呈する保存状態の悪い破片である。砂粒を含み、粘土紐の継ぎ目が見られる。外反し端部は丸い。(427) は内湾してから稜線を持って外反する口縁部で、端部は肥厚しており、外側に水平に引っ張っている。外面には擬凹線が認められる。外面下半はヘラミガキで仕上げられている。7 mmを測る長石の石粒と長石・チャートなどの砂粒を多く含んでいる。(428) は外反する口縁部で端部は角張っており、端部外面下に1条の凹線が施されている。残存部は粘土の継ぎ目ではがれている。内外面ともにヘラミガキがなされ、磨滅しているが外面に円形浮文と山形文のような痕跡が看取される。器表はにぶい橙で器肉は灰褐で、砂粒を含んでいる。

(429) は保存状態が悪く磨滅している器台である。上台径 22.0 cmに復原されるもので、残存高は

5.15 cmを測る。直線的に開き、端部は丸い。外面は突帯状になって端面となっており、擬凹線が施されている。外面はハケ整形がなされ、口縁部はヨコナデである。砂粒を多く含み、器表は橙で、器肉はやや黄色味がかった橙である。口唇部は黒褐からにぶい橙を呈する。

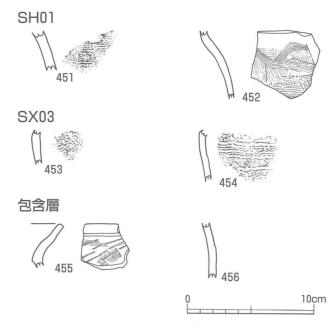
 $(430) \sim (434)$  は時期の異なる土器である。SH01 の時期ではなく、より古い弥生前期末の遺物である。 (430) は壺口縁部で、口径 12.2 cm、残存高 3.55 cmを測る。粗いハケ整形の後に 5 条の沈線が頸部に施されている。ハケ状の原体は貝殻かと思われる。口縁部外反し、端部は角張る。僅かに内外に肥厚ぎみで、端面に刻み目が認められる。橙でチャート・長石の砂粒多く含んでいる。(431) は壺の頸部から肩部の破片である。16.0 cmの最大腹径付近に 2 条の沈線が施されている。外反しており、外面はヘラミガキで

## SX03

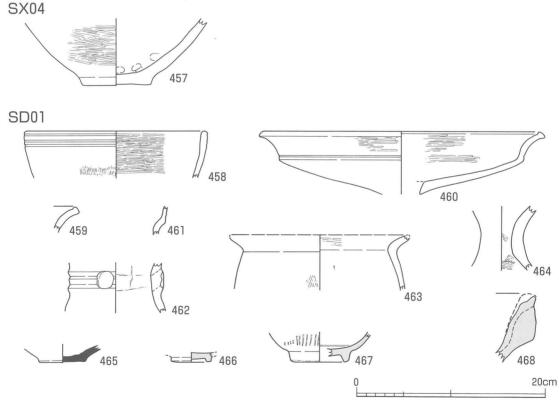


第83図 広瀬遺跡出土遺物実測図(2)

丁寧に調整されている。内面はハケ整形で、胎土は比較的緻密である。にぶい橙を呈している。(432)は甕口縁部で、口径20.8 cm、残存高6.6 cmを測る。直立する体部から短く如意状に外反する口縁部になる。ユビ成形ののちナデ調整している。外面には3条の沈線がみられる。端部には刻み目が施されており、砂粒多く含んでいる。外面の色調は褐灰で煤が口唇部にかけて付着している。内面はにぶい橙である。(433)は壺底部で、底径6.2 cmの僅かに上げ底になった平底である。体部は内湾し、外面はミガキで仕上げている。小石粒



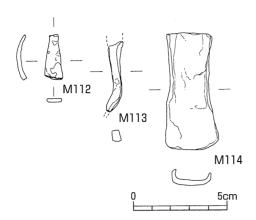
第84図 広瀬遺跡出土遺物実測図(3)



第85図 広瀬遺跡出土遺物実測図(4)

を含み、残存高 4.7 cmを測る。内面は明褐灰、外面は浅黄橙をしている。(434)も壺底部である。底径 8.6 cm、 残存高 5.9 cmを測る。器壁の厚い平底から内湾する体部になる。砂粒を多く含み、にぶい橙を呈している。 磨滅が顕著であるが、外面はハケ整形が認められる。

(451)(452)は文様のある破片である。(451)は壺体部で直線文と波状文が施文されている。砂粒含み浅黄橙をしている。(452)は波状文のある体部である。浅黄橙で少量の砂粒を含んでいる。内面はヘ

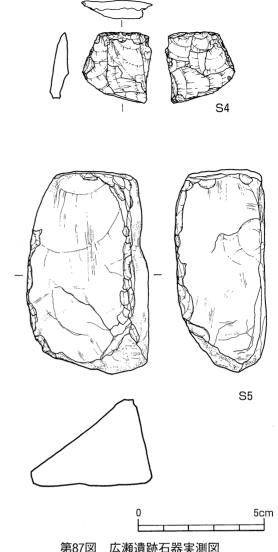


第86図 広瀬遺跡金属器実測図

ラケズリ、外面はハケ整形ののちに波状 文を施している。住居跡上面出土ではあ るが、古墳時代の遺物で検出時に混在し たであろう後世の遺物である。

SX03 出土遺物(435)~(450)(453)(454)

(435) は壺口縁部で、やや肩の張る内 湾する体部から外反する口縁部につなが る。端部は丸く、口径 11.5 cm、残存高 8.2 cmを測る。器表は橙で、器肉は黄橙 である。表面には赤色顔料を塗布してい る。体部内面は粘土紐の継ぎ目が明瞭で、 頸部には成形時のユビ痕跡が残ってい る。体部外面はナデ、口縁部はヨコナデ で仕上げている。砂粒はやや多く含んで



第87図 広瀬遺跡石器実測図

いる。(436) も壺口縁部であるが、(435) と比べると粗雑にみえる。口径 13.4 cm、残存高 9.55 cmを測る。 肩の張る内湾する体部から外反ぎみに外傾する口縁部となる。端部は丸い。体部内面はヘラケズリ、外 面はハケ整形である。口縁部はハケ整形ののち、ナデで仕上げている。砂粒を多く含み、にぶい橙から 橙をしている。(437) は底部を欠くもののある程度全体像が想像できる壺である。肩部も欠き頸部とは 接合しないが、胎土・焼成などの状況から同一個体と考えられる。口径15.80 cm、残存高24.25 cmを測る。 外面はハケ整形で、丸底になろうかと思われる。外形する直立ぎみの口縁部で、端部は肥厚ぎみに丸い。

(438) は肩の張る内湾する体部から大きく屈曲して外傾する口縁部となり、端部は角張りぎみである。 体部内面はヘラケズリ、外面はナデ仕上げで、口縁部はヨコナデである。頸部は強いヨコナデによって 窪んでいる。口径 16.3 cm、残存高 13.2 cmを測り、現在の残存部が最大腹径 26.0 cmになるものと思われる。 にぶい赤褐で砂粒を含んでいる。焼成は良好である。(439) は小形の壺で口縁部を欠いている。橙から にぶい橙をしており、チャート・長石などの砂粒を含んでいる。扁平な球形の体部で接地面の広い丸底 である。外傾もしくは外反する口縁部が付くであろう。内面はヘラケズリ、外面はハケ整形ののちナデ で仕上げている。保存状態は悪く表面磨滅が著しい。腹径 13.1 cm、残存高 8.2 cmを測る。 黒斑が見られる。 (440) は壺口縁部で端部に擬凹線を施している。外反する口縁部で端部は内外に肥厚している。ユビ整

3表 広瀬遺跡出土遺物観察表

	三葉	報	本	おおります。		法量 (cm)		区 年 王	舞	屋件	垂水	
`	<u></u>			ルがあります。	口倭	器号	底径	H		- 1		
辉	弥生土器	器	ヘラミガキ	内湾する、外面淡い稜線	(20.80)	(4.25)	1		SH01	床面	黒斑	
松	弥生土器	器台	内面ケズリ、外面ハケ整形	外傾し水平に近く開く裾部	1	(2.60)	(13.20)		SH01	パット		
茶	弥生土器	台付鉢	ハケ整形からヘラミガキ、凹線	内湾し端部上方につまみ上げる	(13.40)	(7.30)	ı		SH01	計		
弥	弥生土器	台付鉢	ハケ整形からヘラミガキ	内湾する体部	1	(4.50)	ı		SH01			
弥/	弥生土器	機足	ハケ整形からヨコナデ	内傾する体部から屈曲する口縁部	(11.80)	(3.40)	ı		SH01			
※	弥生土器	選品	ョコナデ、擬凹線	内傾する体部から屈曲する口縁部	(11.95)	(4.70)	1		SH01		煤付着	
崧	弥生土器	概	内面ケズリ、ハケ整形からヨコナデ	くの字で端部丸い	(15.80)	(4.80)	1		SH01			
松	弥生土器	概	粗いハケ整形からヨコナデ、擬凹線	外反する口縁部で端部上方につまむ	(16.60)	(5.20)	1		SH01			
影	弥生土器	撰尾	ヘラケズリ、ハケ整形からナデ・ヨコナデ	内湾する体部から屈曲する口縁部	(17.40)	(6.75)	I		SH01			
浴	弥生土器	概	ハケ整形からヨコナデ、擬凹線	内湾ぎみの体部から屈曲する口縁部	(17.60)	(6.40)	1		SH01			
将	弥生土器	粼	月殻?で整形	くの字で口縁部短い	ı	(3.00)	ı		SH01			
松	弥生土器	劉	ヘラケズリ、ヨコナデ	くの字で屈曲する口縁部	ı	(3.70)	ı		SH01			
№	弥生土器	絮	ナギ	不安定な平底、内湾する	ı	(2.30)	(2.05)		SH01			
※	弥生土器	底部	<b>计</b>	平底	ı	(2.10)	(2.80)		SH01			
弥/	弥生土器	脚影	ハケ整形、ヨコナデ	脚台外反し端部丸い、体部内湾	1	(3.60)	7.60		SH01			
弥	弥生土器	脚合	内面ヘラケズリ、ハケ整形からミガキ	体部内湾し、脚部外反する	1	(7.80)	11.90		SH01			-
※	弥生土器	横	ハケ整形、ヨコナデ	外傾し、口縁部内湾	(32.40)	(8.80)	1		SH01			
松	弥生土器	器	内面ケズリ、ハケ・ナデ、外面ヘラミガキ	外反する	ı	(7.70)	1		SH01			
弥	弥生土器	- - - - - - - - - - - - - -	ヨコナブ	外反する	ı	(3.10)	ı		SH01		-	
弥	弥生土器	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	口縁部ヨコナデ、ヘラミガキ	内湾し屈曲して外反、端部肥厚	1	(4.80)	ı		SH01			
茶	弥生土器		ヨコナデ、ヘラミガキ	外反する口縁部	ı	(2.40)	ı		SH01			
弥	弥生土器	器	ハケ整形からヨコナデ、擬凹線	僅かに内湾し、端面になる	(22.00)	(5.15)	ı		SH01			
												1

出	理品	報	*************************************	大部分を共		法量 (cm)			単	4	#
r H	1=72	- 1		// 15/5/5/14 (数	口楼	器即	底径	표		温瓜	噩
430	弥生土器	車	ハケ整形から沈線、端部刻み目	外反し端部角張る	(12.20)	(3.55)	ı		SH01		
431	弥生土器	丰	ヘラケズリ、ハケ整形からヘラミガキ、凹線	外反する	,	(6.30)	1		SH01		
432	弥生土器	鰕	ナデ、3条沈線、端部刻み目	如意状で端部角張りぎみ	(20.80)	(09.9)	1		SH01		煤付着
433	弥生土器	塵	ナデ、外面ヘラミガキ	上げ底で体部内湾する	1	(4.70)	(6.20)		SH01		
434	弥生土器	雞	ハケ整形からナデ	平底で体部内湾する	1	(2.90)	(8.60)		SH01		
435	上師器	脚	ユど成形ののちナデ、ヨコナデ	扁平な球形の体部、外反する口縁部	(11.50)	(8.20)	1		SX03		
436	上師器	車	内面ケズリ、ハケ整形からナデ・ヨコナデ	肩が張り僅かに外反する口縁部	(13.40)	(9.55)	1		SX03		
437	上師器	中	ハケ整形からナデ・ヨコナデ、内面板ナデ	球形の体部から外傾する口縁部	(15.80)	(24.25)	. 1		SX03		黒斑
438	上師器	増	内面ケズリ、ナデ・ヨコナデ仕上げ	外傾する口縁部で端部丸い、内湾	(16.30)	(13.20)	ı		SX03		
439	上師器	丰	内面ケズリ、ハケ整形からナデ・ヨコナデ	内湾する体部、やや扁平	1	(8.20)	ı		SX03		黒斑
440	上節器	丰	端部ヨコナデ、外面ミガキ、3条四線	外反し端部内外に肥厚	(11.20)	(4.40)	ı		SX03		
441	上節器	鰕	ヨコナデ、4条擬凹線	外反する頸部から外傾し端部丸い	1	(2.50)	ı	39T			
442	上師器	毲	口縁部ヨコナデ	くの字で直線的、端部折り曲げる	(13.50)	(5.15)	ı		SX03		
443	十二年	島杯	口縁部ヨコナデ	内湾し端部外反し丸い	(14.70)	(2.90)	ı	39T			表面磨滅
444	十二年	高杯	ナデ整形、外面ミガキ	内湾し端部外反し丸い	(18.10)	(4.00)	ı		SX03		
445	上師器	高杯	ナデ	杯部との接合部、串状小孔あり	-	(1.60)	I	39T			
446	十二年器	高杯	内面ケズリ、裾部ヨコナデ	外傾する柱状部から水平ぎみに開く	ī	(6.10)	(10.80)	39T			
447	上師器	高杯	内面ケズリ、端部ヨコナデ、外面ミガキ	外傾する柱状部から僅かに外反	1	(7.40)	(12.10)		SX03		
448	上前器	高杯	ユビ成形ののちハケ・ナデ、外面ミガキ	外傾する柱状部から水平ぎみに開く	1	(7.45)	(13.10)		SX03		
449	十二世器	高杯	ハケ整形ののちナデ・ヨコナデ	直線に広がり端部反って角張る	ı	(4.60)	(17.80)		SX03		丹遼
450	弥生土器	自称	内面ケズリ、ヨコナデ	外傾し端部肥厚	ı	(2.10)	(14.20)		SX03		
451	弥生土器	旧	ナデ、直線文・波状文	内湾	-	(3.10)	-		SH01		
452	干邮器	椒	ハケ整形・被状文	内湾する体部	_	(5.40)	1		SH01		

1	L	1	ı	INCAL SE MANY		法量 (cm)			'	1	ı
神	種別	器種	技法 他	形態の特徴	口径	器配	底径	전 되 전 보 다 전 로 전 로 전 로 전 로 전 로 전 로 전 로 전 로 전 로 전	画	眉江	二
453	弥生土器	圕	ナデ整形、外面5条波状文	僅かに外湾する	ı	(2.70)	1		SX03		
454	弥生土器	丰田	ナデ、5条2帯の波状文	直線的な体部、如意状口縁部か	1	(4.10)	1		SX03		
455	弥生土器	旧	タタキから折り曲げハケ整形、ヨコナデ	外傾し途中で屈曲、端部角張る	ı	(3.20)	1			黒色土	
456	弥生土器	搬	4条の沈線	僅かに内湾する	ı	(4.40)	ı				
457	弥生土器	日本	ユビ成形ののちナデ、外面ミガキ	平底から内湾する体部	ı	(7.10)	7.40		SX04		黒斑
458	弥生土器	為	ハケ整形ののち凹線3条、ヘラミガキ	内湾し端部角張る	(18.60)	(2.00)	-		SD01		
459	上師器	羆	ĭ≻ + □ m	外反し端部内側に肥厚	I	(3.30)	1		SD01		
460	弥生土器	高杯	ナデからミガキ、口縁部ヨコナデ、凹線	緩やかに外傾して外反、端部肥厚	(29.20)	(0.70)	1		SD01		
461	弥生土器	相	ヨコナデ、4条擬凹線	外反し直立ぎみに延びる	ı	(3.10)	1		SD01	黒色土	
462	弥生土器	梅	3条の突帯、円形浮文	外反する頸部	I	(5.40)	1		SD01	黒色土	
463	上	網	ヘラケズリ、ハケ整形からヨコナデ	内湾する体部から短く外反する	(19.00)	(5.80)	1		SD01		黒斑
464	弥生土器	高杯	ハケ整形	外反する、円板充填か	ı	(6.85)	1		SD01	黒色土	
465	須恵器	救	ハケ整形ののちョコナデ	外傾し口縁部折り曲げ、端面に凹線	. 1	(1.80)	4.20	40T		表採	
466	多器	落	高台端部露胎、それ以外施釉	台形の削り出し高台、底平坦	ı	(1.05)	(4.30)			機械掘削	
467	口磁	塚	底部露胎	台形の高い高台、内湾する	1	(3.20)	(6.20)			機械掘削	
468	施釉陶器	擂鉢	内面ヘラケズリ、外面ナデ、端部指押圧	端部折りまげて厚くする僅かに内湾	1	(2.00)	1	42T			備前焼

形ののちヨコナデを施し、細かい横方向のヘラミガキで丁寧に仕上げている。口径 11.2 cm、残存高 4.4 cmを測る。橙を呈し、チャート・長石の砂粒を含んでいる。(441) も口縁部である。外反し直立する口縁部で、端部は丸い。直立した端面には擬凹線が見られる。ヨコナデで、にぶい赤褐をしている。

- (442) はくの字形の甕口縁部である。僅かに内湾する体部から屈曲して明瞭な稜を持つ頸部から外傾する口縁部になる。直線的で端部は内側につまみ上げている。体部内面はヘラケズリで、口縁部はヨコナデで仕上げている。口径 13.5 cm、残存高 5.15 cmで橙を呈している。チャート・長石や酸化粒を含んでいる。
- (443)~(450)は高杯である。(450)だけ弥生時代中期のものである。小片であるが、透孔が認められる。(443)(444)は椀形高杯の杯部である。内湾し端部付近で外反する。端部は尖りぎみに丸く、ヨコナデで仕上げている。(444)は外面ヘラミガキで仕上げている。口径は(443)は14.7 cmで、(444)は17.8 cmと大きい。(445)は杯部の接合部で、下からヘラなどで突き立てた痕跡がある。(444)と接合する可能性が高い。(446)~(449)は高杯の脚部である。(446)は外傾し裾部近くで水平に広がっている。内面はヘラケズリで、僅かに肥厚した端部周辺はヨコナデである。(447)(448)も同タイプの脚部である。(448)は外面ハケ整形である。(449)は大きく開く高杯脚部である。内外面ともハケ整形である。
- (457) は SX04 出土の壺である。残存高 7.1 cmを測る体部下半である。底径 7.4 cmの平底である。内湾する体部で、内面はユビおさえののちユビ整形で、外面は細かいみがきを施す。弥生前期末の所産であるう。
- (458)(459)は SD01 出土である。(458)は弥生中期後半の鉢口縁部で、口径 18.6 cmを測る。内湾する口縁部で端部は丸い。端部下に 3条の凹線が見られる。ヨコナデののち、内面は横方向の細かいミガキがなされている。(459)は土師器甕口縁部の小片である。明褐灰からにぶい橙を呈しており、砂粒を含んでいる。古墳時代はじめかと思われ、遺構の時期もこの時期になる。(460)は大形の高杯杯部で口径 29.2 cmを測る。内湾する杯部から短く外反する口縁部になる。端部は内外に肥厚している。
- (461) ~ (464) は包含層出土である。(461) は壺口縁部で端面に擬凹線が認められる。(462) は歪であるが壺頸部と思われる。3条の突帯の上に円形浮文が配されている。(463) は甕口縁部で端部を欠いている。内湾する体部から外傾する口縁部になる。外面はハケ整形で、長石などの砂粒を含む。(464) は高杯筒部である。外反するもので、残存高 6.85 cmを測る。
- (465) ~ (468) は中世の遺物である。(465) は須恵器椀の底部である。平高台をもち、底部内面は 僅かに窪む。内外面とも回転ナデ調整を施す。底部外面は糸切の後、ナデ調整を施す。
- (466) は施釉陶器で椀の底部である。低い輪高台をもつ。底部内面に鉄釉を施釉する。天目茶碗の底部と考えられる。
- (467) は白磁碗の底部である。高台は比較的細く高い。体部は内彎気味に斜め上方に立ち上る。外面 に櫛描きで施文する。内外面とも透明釉を施釉する。青味を帯びた灰白色に発色する。高台畳付~高台 裏は露胎である。近世の肥前系 白磁と考えられる。
  - (468) は無釉陶器片である。色調・胎土から備前焼擂鉢の口縁部片と考えられる。

石器は2点図化している。2点ともSX03から出土している。(S4)はサヌカイト製の楔形石器である。 長さ2.85 cmである。(S5)は砥石かと思われる製品である。1面は擦り面かと思われるが、石材がやや 硬質で砥石には不向きなようにも思われる。

鉄器は3点出土している。すべてSH01から出土している。(M112)はヤリガンナの破片かと思われる。 長さ2.40 cmで湾曲している。刃先は残存していない。(M113) は屈曲した3.70 cmの破片である。断面 形は歪な四角形で、鉄鏃の茎かと思われる。(M114) は鉄斧である。長さは 6.20 cmを測り、刃先の幅 2.80 cm、刃部の長さ 3.50 cmである。ソケット部は大きくは折り曲げていない。鍛造品である。

第14表 広瀬遺跡出土石器計測表

- TE -	山上屋丛	聖稀	石材		法量(ci	n) (g)		備考
番号	出土層位	器種	101/1	長さ	幅	厚さ	重さ	<b>順</b> 考
S4	SX03 東半	楔	サヌカイト	2.85	2.78	7.4	5.7	
S5	SX03 東半	砥石?	チャート	8.02	4.86	3.63	170.2	

#### 第15表 広瀬遺跡出土金属器計測表

番号	出土層位	器種		法量(cr	n) (g)		備考
<b>台</b> 万	西工層世	<b></b>	長さ	幅	厚さ	重さ	川 写
M112	SH01 南半		2.40	0.95	0.20	0.9	
M113	SH01 南半	釘	(3.70)	0.95	0.60	(1.5)	
M114	SH01 南半		6.20	2.80	0.30	9.3	

## 4. 小 結

広瀬遺跡は182㎡と小規模な調査であったが、遺構は集中して検出された。遺構面としては1面で調査したが、時期的には弥生時代前期から中世にかけての複合遺跡である。弥生前期は明瞭な遺構は検出されなかったが、但馬の山間部まで早急に弥生文化が浸透してきたことが明らかになった。以前の圃場整備などで野谷遺跡から縄文後期の、野外遺跡から縄文晩期の土器が出土していたが、それが継続されていることが明確になったことは大きな成果である。その際に採集された中に貝殻腹縁で施文した山陰西部の影響を受けた文様を持つ破片があり、それに加えて今回の出土例はある程度の弥生文化を導入した先見地域の1つと言える。建屋川下流部の森の犬野遺跡でも前期末の土器があり、養父市域の中でも前期の遺跡が存在する地域と言える。

中期の遺物は出土していないが、場市遺跡ではこの時期の竪穴住居跡が確認されており、西側の餅耕地ササ遺跡でも完全な形の中期後半の土器がセットで出土しており、弥生文化が継続していることが看取される。さらに森の西側に位置する高原遺跡である熊野遺跡にも広がっている。中期は絶えているが後期になって再び生活をするようになる。径6mの円形住居跡を完掘しており、土器以外に鉄器も出土している。この時期の鉄製品は多いとはいえないが3点出土していることは特記されよう。鉄斧・鉄鏃・ヤリガンナと器種の異なる3点が出土している点も興味深い。但馬では最近まで後期の集落の好例は検出されていなかったが、朝来市栗鹿遺跡などが調査されて資料が増えているが、その1例を加えたことになる。土器には搬入土器はなく、地元産の土器である。SX02・SX03も竪穴住居跡の可能性のある遺構である。平面プランは方形になっており、方形へと変化する時期の遺構かもしれない。また、土坑群を検出しているが、方形プランが主体であり、土壙墓群の可能性がある。

古墳時代になっても遺跡は継続する。SX04 は明確には出来なかったが竪穴住居跡が損壊を受けたものかもしれない。比較的前期の土器がまとまって出土している。直口壺があり精製土器であり、須恵器出現前の布留併行期と思われる。

遺跡は断続するが、柵跡やピット群は中世まで下る遺構ではと思っており、場市遺跡からウスギ城跡にかけての遺構群と無関係とは思われない。

# VI 兎形水滴の調査

場市遺跡から、兎形水滴1点が出土している。この水滴について保存処理を行う前に調査を行ったので報告する。

#### 1 埋蔵文化財調査事務所での調査

#### ① 処理前の観察

搬入された遺物を肉眼で観察し、劣化状況や破損状況を確認しスケッチで記録する。また、写真撮影により記録に残した。(第90 図)

遺物は、劣化が進み、左耳が欠損していた。

#### ② 処理前の調査

X線透過撮影を行い、内部構造や表面から肉眼では観察できないひび割れなどの破損状況や錆の中に埋もれて確認できない遺物本来の形状を確認し、保存処理の方法を検討した。

X線透過撮影により、内部は中空で、土が詰まっている状態が確認できた。(第89図)

#### 2 奈良文化財研究所での調査

奈良文化財研究所の村上隆氏に依頼して、蛍光X線分析装置による材質分析を行った。

#### ① 分析の方法

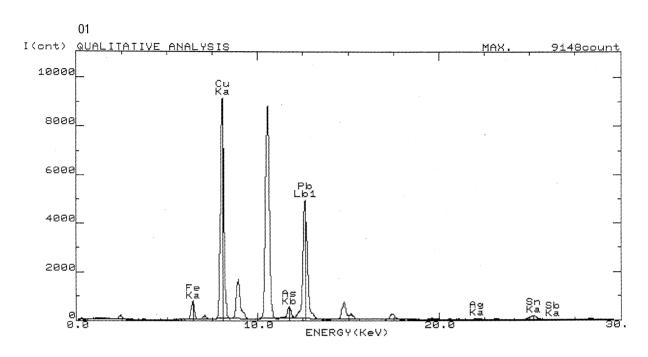
分析は、奈良文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部において行った。試料が小さく、劣化が進んでいるため、エネルギー分散型微小点蛍光 X 線分析装置(株式会社テクノス製 TREX640S)を用いた非破壊による調査のみにとどめた。分析の条件は次の通り。ターゲットはモリブデン(Mo)、管電圧は 45kv、管電流は 0.3mA、測定時間は 100 秒、コリメーター: 1 mm ø、大気圧中。

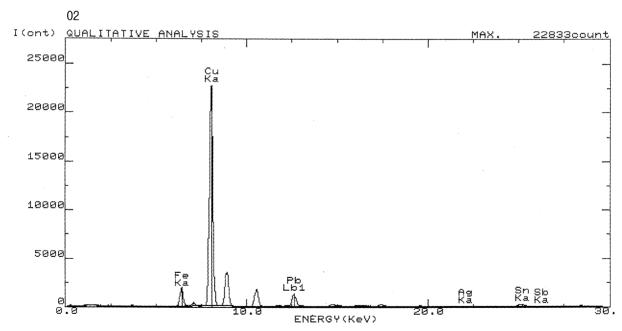
#### ② 分析結果

蛍光 X 線分析は、試料の形状や表面状態が良好な場合は、再現性のよい定量的なデータを得ることが可能である。今回の試料の場合は、表面の腐食が著しいため、元素の定量分析を行うことは不可能であった。

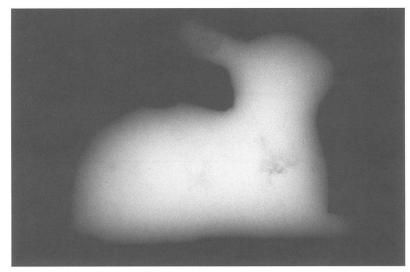
分析により検出された元素の同定結果から、今回の試料は、銅(Cu)、スズ(Sn)を主成分とする 青銅でこれに鉛(Pb)を含有していることがわかった。その他にもヒ素(As)、銀(Ag)、アンチモン(Sb)鉄(Fe)が検出されたが、ヒ素からアンチモンまでの元素は微量であるため、銅もしくは 鉛鉱石に不純物として含まれていたものに由来する可能性がある。鉄は試料が土中に埋没していたと きの周囲の土に由来するものと考えられる。参考までに定性分析のデータと半定量のデータを記載する。

試料番号	銅 (Cu)	錫 (Sn)	鉛 (Pb)	ヒ素 (As)	銀 (Ag)	アンチモン (Sb)	鉄 (Fe)	備考
場市No1-1	28.5	3.8	56	8.1	0.4	0.1	3.2	
場市No1-2	73.4	3.9	17.1		0.3	0.1	5.2	



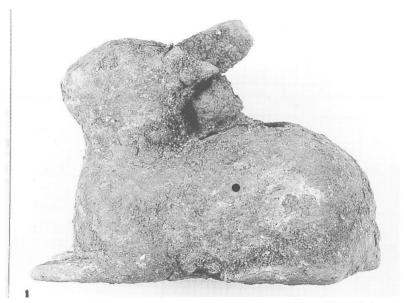


第88図 水滴蛍光 X 線開析図

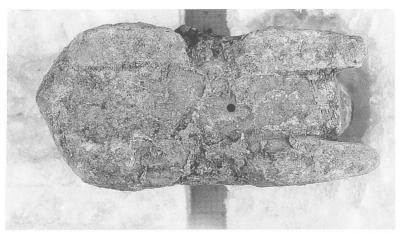


場市兎X線写真

第89図 水滴X線写真



兎側面 (分析地点 02)



兎下面(分析地点01)

第90図 水滴分析地点

# Ⅲ 放射性炭素年代測定結果報告書(AMS 測定)

㈱加速器分析研究所

#### (1) 遺跡の位置

野脇(場市)遺跡は、兵庫県養父市養父町建屋(35°17′52″、134°44′31″)に位置する。

#### (2) 測定の意義

池の埋没年代を特定する。

#### (3) 測定対象試料

池 (SG01) 上層から出土した炭化材 (No.1: IAAA-62558)、中層から出土した炭化材 (No.2: IAAA-62559)、下層から出土した炭化材 (No.3: IAAA-62560)、合計 3 点である。

#### (4) 化学処理工程

- 1)メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2)AAA(Acid Alkali Acid)処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では 1N の塩酸(80C)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では  $0.001 \sim 1N$  の水酸化ナトリウム水溶液(80C)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では 1N の塩酸(80C)を用いて数時間処理する。理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90Cで乾燥する。
- 3) 試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。
- 4)液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を精製する。
- 5)精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(還元)し、グラファイトを作製する。
- 6) グラファイトを内径 1 mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

#### (5) 測定方法

測定機器は、3MV タンデム加速器をベースとした  $^{14}C$ -AMS 専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。134 個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により  $^{13}C/^{12}C$  の測定も同時に行う。

#### (6) 算出方法

- 1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用した。
- 2) BP 年代値は、過去において大気中の炭素 14 濃度が一定であったと仮定して測定された、1950 年を基準年として遡る放射性炭素年代である。
- 3) 付記した誤差は、次のように算出した。

複数回の測定値について、 $\chi^2$  検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計 誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。

4)  $\delta^{13}$ C の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS 測定の場合に同時に測定される  $\delta^{13}$ C の値を用いることもある。

δ<sup>13</sup>C補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差(%;パーミル)で表した。

$$\delta^{14}C = [(^{14}A_S - ^{14}A_R) / ^{14}A_R] \times 1000 (1)$$
  
$$\delta^{13}C = [(^{13}A_S - ^{13}A_{PDB}) / ^{13}A_{PDB}] \times 1000 (2)$$

ここで、 $^{14}A_{\rm S}$ : 試料炭素の $^{14}C$  濃度: $(^{14}C/^{12}C)_{\rm S}$  または $(^{14}C/^{13}C)_{\rm S}$   $^{14}A_{\rm R}$ : 標準現代炭素の $^{14}C$  濃度: $(^{14}C/^{12}C)_{\rm R}$  または $(^{14}C/^{13}C)_{\rm R}$ 

 $\delta^{13}$ C は、質量分析計を用いて試料炭素の  $^{13}$ C 濃度( $^{13}$ A<sub>S</sub> =  $^{13}$ C/ $^{12}$ C)を測定し、PDB(白亜紀のベレムナイト(矢石)類の化石)の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に  $^{13}$ C/ $^{12}$ C を測定し、標準試料の測定値との比較から算出した  $\delta^{13}$ C を用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また、 $\Delta^{14}$ C は、試料炭素が $\delta^{13}$ C = -25.0 (‰) であるとしたときの  $^{14}$ C 濃度 ( $^{14}$ A<sub>N</sub>) に換算した上で計算した値である。(1)式の  $^{14}$ C 濃度を、 $\delta^{13}$ C の測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}A_{\rm N}=^{14}A_{\rm S}$$
 ×  $(0.975$  /  $(1+\delta^{13}{\rm C}~/~1000))^2$   $(^{14}A_{\rm S}$  として  $^{14}{\rm C}/^{12}{\rm C}$  を使用するとき) または 
$$={^{14}A_{\rm S}}$$
 ×  $(0.975$  /  $(1+\delta^{13}{\rm C}~/~1000))$   $(^{14}A_{\rm S}$  として  $^{14}{\rm C}/^{13}{\rm C}$  を使用するとき) 
$$\Delta^{14}{\rm C}=\left[(^{14}A_{\rm N}-{^{14}A_{\rm R}})~/{^{14}A_{\rm R}}\right]$$
 ×  $1000$  (‰)

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない  $\delta^{14}$ C に相当する BP 年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

 $^{14}$ C 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon) がよく使われており、 $\Delta^{14}$ C との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}C = (pMC / 100 - 1) \times 1000 (\%)$$
  
 $pMC = \Delta^{14}C / 10 + 100 (\%)$ 

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}$ CあるいはpMCにより、放射性炭素年代 (Conventional Radiocarbon Age; vrBP) が次のように計算される。

T = 
$$-8033 \times ln [(\Delta^{14}C / 1000) + 1]$$
  
=  $-8033 \times ln (pMC / 100)$ 

- 5) <sup>14</sup>C 年代値と誤差は、1 桁目を四捨五入して 10 年単位で表示される。
- 6) 較正暦年代の計算では、IntCal04 データベース (Reimer et al 2004) を用い、OxCalv3.10 較正

プログラム (Bronk Ransey1995 Bronk Ransey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

#### (7) 測定結果

池(SG01)上層から出土した炭化材(No.1:IAAA-62558)が 400 ± 30yrBP、中層から出土した炭化材(No.2:IAAA-62559)が 710 ± 30yrBP、下層から出土した炭化材(No.3:IAAA-62560)が 580 ± 30yrBP の  $^{14}$ C 年代である。暦年較正年代( $1\sigma=68.3\%$ )は、No.1 が 1440AD  $\sim$  1620AD、No.2 が 1265AD  $\sim$  1295AD、No.3 が 1315AD  $\sim$  1410AD である。No.1 が室町時代中頃から安土・桃山時代、No.2 が鎌倉時代中頃、No.3 が鎌倉時代後半に相当する。No.2 と No.3 の年代は、層位の上下と対応しないため、試料の出土状況、池跡の埋土の形成過程について検討する必要がある。

#### 参考文献

Stuiver, M. and Polash, H. A. (1977) Discussion:Reporting of 14C data. Radiocarbon, 19:355-363

Bronk Ramsy C. (1995) Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Plogram, *Radiocarbon*, 37 (2) 425-430

Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A) 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. (2001) 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon*, 43 (2A) 381-389

Reimer et al. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP. Radiocarbon, 46:1029-1058

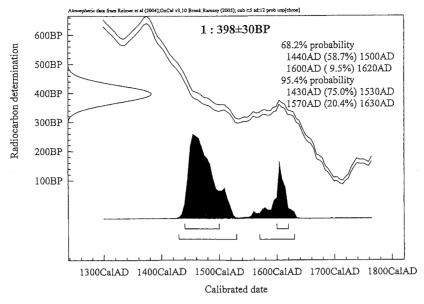
IAA Code No.	試料		BP 年代および炭	素の	D同位体比	
IAAA-62558	試料採取場所:養父市養父町建屋	場市遺跡	Libby Age (yrBP)	:	400 ±	30
			$\delta^{13}$ C (‰)、(加速器)	=	-27.21 ±	0.61
	試料形態:炭化材		$\Delta^{14}$ C (‰)	=	$-48.4 \pm$	3.6
	試料名(番号) :1		pMC (%)	=	95.16 ±	0.36
			$\delta^{14}$ C (‰)	=	$-52.7 \pm$	3.4
	(参考) $\delta^{13}$ C の補正無し		pMC (%)	=	$94.73 \pm$	0.34
# 1626-1			Age (yrBP)	:	440 ±	30
IAAA-62559	試料採取場所:養父市養父町建屋	場市遺跡	Libby Age (yrBP)	:	710 ±	30
			$\delta^{13}$ C (‰)、(加速器)	=	$-26.62 \pm$	0.75
	試料形態:炭化材		$\Delta^{14}$ C (‰)	=	$-85.1 \pm$	3.6
	試料名(番号) :2		pMC (%)	=	91.49 ±	0.36
			$\delta^{14}$ C (‰)	=	-88.2 ±	3.3
	(参考) $\delta$ <sup>13</sup> C の補正無し		pMC (%)	=	91.18 ±	0.33
# 1626-2			Age (yrBP)	:	740 ±	30
IAAA-62560	試料採取場所:養父市養父町建屋	場市遺跡	Libby Age (yrBP)	:	580 ±	30
			$\delta^{13}$ C (‰)、(加速器)	=	$-25.98 \pm$	0.65
	試料形態:炭化材		$\Delta^{14}$ C (‰)	=	$-69.2 \pm$	3.6
	試料名(番号) :3		pMC (%)	=	93.08 ±	0.36
			$\delta^{14}$ C (‰)	=	-71.1 ±	3.4
	(参考) $\delta$ <sup>13</sup> C の補正無し		pMC (%)	=	$92.89 \pm$	0.34
# 1626-3			Age (yrBP)	:	590 ±	30

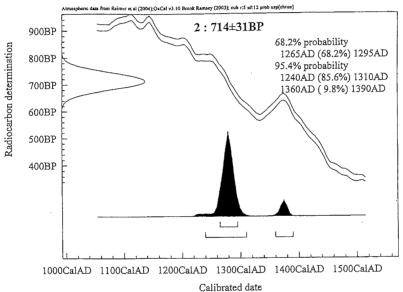
#### 参考資料: 暦年較正用年代

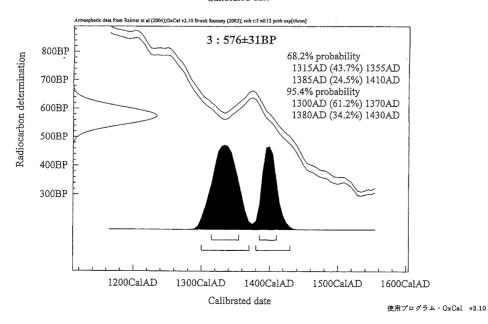
IAA Code No.	試料番号	Libby Age (yrBP)
IAAA-62558	1	$398 \pm 30$
IAAA-62559	2	714 ± 31
IAAA-62560	3	$576 \pm 31$

ここに記載する Libby Age (年代値)と誤差は下 1 桁を丸めない値です。

【参考值: 曆年補正 Radiocarbon determination】







# Ⅲ 広瀬遺跡、場市遺跡および野脇遺跡の地形環境

立命館大学非常勤講師 青 木 哲 哉

#### 1. はじめに

人間は、自然環境に影響され、またそれを利用しながら活動してきた。中でも地形は、人間の生活舞台であり、活動の場となってきただけに、地形環境と人間生活との間には密接な関係が存在する。地形環境は、第四紀に変化を続け、現在に至っている。そのため過去の人間生活を浮き彫りにするには、各時期の地形環境とその変化を明らかにすることが必要と考えられる。

人間生活の解明につながる地形環境は、数万年や数千年オーダーでの考察だけでなく、それより細かいオーダーで捉えなければならない。これには、考古遺跡の発掘調査区における地形・地質調査が有効な手段となる。調査区では、微地形の観察や堆積物の詳細な区分ができ、地形環境を細かいオーダーで復原できる。同時に人間活動の痕跡である遺構が検出されるため、過去の人間生活が知られる。考古遺跡の発掘調査区では、地形環境と人間生活の関わりについても考察できるのである。

本稿では、広瀬遺跡、場市遺跡、および野脇遺跡における地形環境について明らかにしたい。調査では、2万分の1空中写真の判読と現地踏査を通じて3つの遺跡周辺に分布する地形を区分し、それとともに各遺跡の調査区における地質断面とその周辺にみられる露頭の観察によって堆積物を把握した。こうして得られた調査結果に発掘調査の成果を加味して、各遺跡における地形環境を考察した。

#### 2. 遺跡付近の地形分布

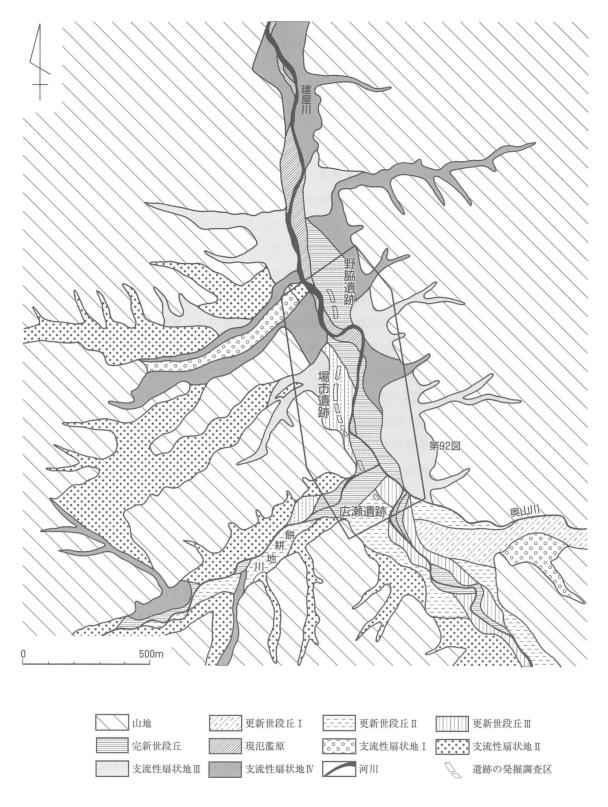
広瀬遺跡、場市遺跡、および野脇遺跡は建屋川流域の平野に位置する。建屋川は、兵庫県北部を日本海へ流れる円山川の小規模な支流である。これは、概ね北〜北東へ流れた後、他の支流に合流して、円山川の中流部で本流に注ぎ込む。3つの遺跡付近では、この川が山地に挟まれた狭長な谷中をやや蛇行しながら流下する。谷の幅は250~350 mで、周辺の山地は標高300~700 mである。

谷中には、建屋川とその支流によって平野が形成されており、遺跡付近の平野には、更新世段丘、沖積低地、ならびに支流性扇状地が認められる(第 91 図)。これらはさらに細分され、更新世段丘は 3 面に、また沖積低地は完新世段丘と現氾濫原に、支流性扇状地は 4 面に分けられる。本稿では、更新世段丘と支流性扇状地について高位のものから順に更新世段丘  $I \sim III$  および支流性扇状地  $I \sim IV$  と呼ぶことにする。

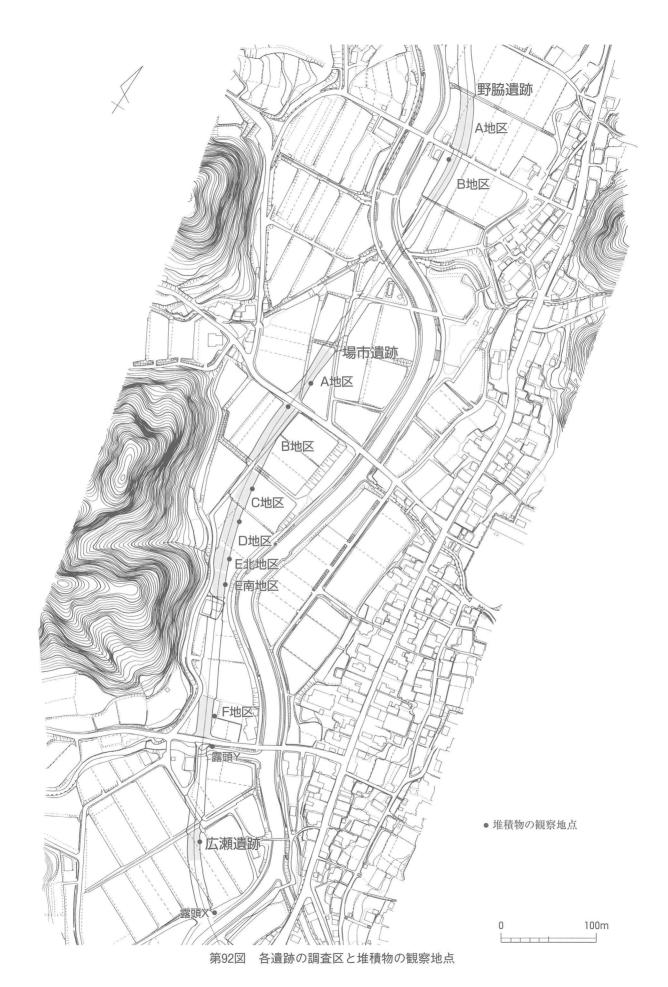
建屋川流域にみられるこうした地形の中で、広瀬遺跡は更新世段丘Ⅱ上、また場市遺跡A~E地区は 更新世段丘Ⅲ上、場市遺跡F地区と野脇遺跡は完新世段丘上に位置する(第 91 図・第 92 図)。これら の遺跡付近にみられる各地形の特徴は次のとおりである。

#### (1) 更新世段丘の特徴

[更新世段丘 I] この段丘は、あまり発達しておらず、建屋川の支流である奥山川沿いにのみ分布する。 段丘面は、更新世段丘 II 面より約2 m高く、奥山川の河床勾配と同様に急傾斜である。これは、主に奥山川によって形成されたものであり、建屋川沿いではその後の侵食によって姿を消したと考えられる。 [更新世段丘 II] これは、広瀬遺跡の調査区より上流によく発達し、建屋川の支流である餅耕地川や奥



第91図 遺跡周辺の地形分類図



山川に沿っても認められる。この段丘は、更新世段丘Ⅲと比高2m前後の崖で接しており、広瀬遺跡の調査区はこのような段丘崖の近くに位置している。

〔更新世段丘Ⅲ〕 この段丘は場市遺跡 A 地区より上流に分布する。これは主に建屋川に沿って断続的に認められ、完新世段丘との間にみられる段丘崖は約2.5 mの比高をもつ。場市遺跡 A ~ E 地区が位置する段丘面は比較的大きい面積を有する。

#### (2) 沖積低地の特徴

[完新世段丘] これは建屋川沿いと餅耕地川の下流部に認められる。段丘面は、建屋川と餅耕地川の合流点より下流でよく発達し、それより上流では幅が小さい。野脇遺跡 A・B地区と場市遺跡 F地区は面積の比較的大きい完新世段丘面に位置する。こうした段丘面は現氾濫原より約1.5 m高い。

〔現氾濫原〕 この地形面は、河川の氾濫によって冠水する可能性の高い低地である。これは、建屋川に沿って細長く分布し、支流沿いには認められない。特に、場市遺跡A地区より下流では連続的にみられ、それより上流では、蛇行する建屋川の滑走斜面側に断続的に分布する。

#### (3) 支流性扇状地の特徴

この扇状地<sup>1)</sup> は、山地を刻む開析谷中から山麓にかけて発達する。これは洪水や土石流によって背後の山地から堆積物が供給されてできたものである。広瀬遺跡、場市遺跡、ならびに野脇遺跡の付近では、このような支流性扇状地が建屋川とその主要な支流に沿う平野の縁辺に認められる。

[支流性扇状地 I ] この扇状地は、更新世段丘 I に対応するもので、両者はほぼ同時期に形成されたと考えられる。支流性扇状地 I は、3つの遺跡付近であまり認められず、2ヶ所に分布するだけである。ひとつは奥山川南岸の山腹から山麓にみられる。これは前面に広がる更新世段丘 I の段丘面と傾斜変換線で接する。他の一つは野脇遺跡より約 300 m西方に認められる。これは、建屋川西岸の山地斜面から建屋川のすぐ側まで  $30\sim70$  mの幅で細長く発達する。この扇状地は段丘化しており、隣接する支流性扇状地 IV との間には、比高  $6\sim7$  mの崖がみられる。これらは平均約 14.4%の傾斜で北西および北東へ高度を減じる。

[支流性扇状地Ⅱ] これは、更新世段丘Ⅱに対応し、建屋川の西岸と餅耕地川の流域に数多く分布している。これらの地表傾斜は約23.7%で、支流性扇状地の中で最も急である。扇端付近では更新世段丘Ⅱと傾斜変換線で接し、更新世段丘Ⅲや完新世段丘との境界には比高2~3mの急崖、また支流性扇状地Ⅲ・Ⅳとの間には緩やかな崖がみられる。

〔支流性扇状地Ⅲ〕 この扇状地は更新世段丘Ⅲに対応する。これは、建屋川と奥山川の合流点より下流に分布し、建屋川の両岸に認められる。支流性扇状地Ⅲは、更新世段丘Ⅲと傾斜変換線で接し、完新世段丘№を支流性扇状地Ⅳとは約2mの比高をもつ緩やかな崖で境される。地表傾斜はおよそ17.8%で、支流性扇状地Ⅱよりやや緩傾斜である。

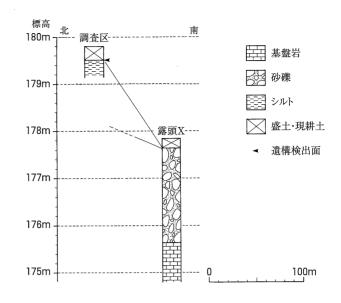
[支流性扇状地Ⅳ] これは、完新世段丘に対応する扇状地であり、主に完新世に形成されたと考えられる。支流性扇状地Ⅳは、場市遺跡A~E地区より下流の建屋川両岸と餅耕地川流域に分布し、特に建屋川の下流ほどよく発達している。これらは、完新世段丘と傾斜変換線で接し、現氾濫原との間には比高約2mの崖がみられる。地表傾斜は、支流性扇状地の中で最も緩やかで、約13.2%である。

#### 3. 調査区付近の堆積物について

#### (1) 広瀬遺跡における堆積物

本遺跡の調査区で観察される堆積物は、 黄褐色のシルトとその上位にみられる現耕 土である(第93図)。 黄褐色のシルトは 洪水に伴う堆積物で、その上面が遺構検出 面にあたる。遺構は弥生時代後期の竪穴住 居跡や14~16世紀の柱穴などで、弥生時 代前期の遺物も検出されている。これらの 時期に土壌化した旧表土は、近年の圃場整 備で人為的に削り取られたため認められない。

調査区の南東約80m地点にある露頭 X<sup>2)</sup> (第92図) では、基盤岩が現地表下およそ



第93図 広瀬遺跡調査区とその付近における堆積物

2.2 m以深に露呈し、その上位に暗褐色の砂礫が観察される(第 93 図)。この砂礫は、更新世段丘 Ⅱ の 堆積物に相当し、扇状地を構成するものである。層厚は 2 m前後と薄く、径 20 ~ 50 cmの角~亜角礫を 主体とする。この砂礫の上位には、調査区で観察される黄褐色のシルトが堆積すると考えられる。

#### (2) 場市遺跡における堆積物

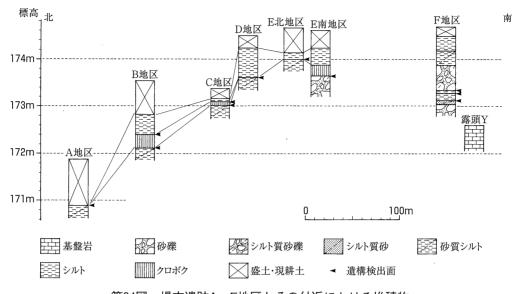
当該遺跡のA~E地区は更新世段丘Ⅲ上に、またF地区は完新世段丘上に位置するため、これらの2つに分けて堆積物の特徴を述べる。

〔A~E地区の堆積物〕 A~E北地区における基本的な堆積物は、下位から順に黄褐色の砂質シルト、 黒色のクロボク、暗褐色のシルト、および盛土・現耕土である(第 94 図)。黄褐色の砂質シルトは、洪 水堆積物に該当し、広瀬遺跡と同様に扇状地を構成する砂礫上の堆積物と推定される。

クロボクは荒地で生成される土壌で、そこには7世紀の遺物が含まれる。クロボクの下面では、その時期の遺構が認められ、B地区で掘立柱建物跡など、また $C\sim$ D地区で竪穴住居跡などが検出されている。B~E北地区は、埋没した旧中州 $^3$ 上に位置しており、そこが人間の居住に利用されたと考えられる。その上位にみられる暗褐色のシルトは、クロボクの上部がさらに土壌化した旧表土である。この堆積物には、 $14\sim16$ 世紀の遺物が混入し、B地区ではその下面で同時期の掘立柱建物跡が検出されている。なお、A地区では、クロボクと暗褐色のシルトが圃場整備の際に人為的に削られており、黄褐色砂質シルトの上に盛土が厚く認められる。

E南地区では、A~E北地区と層序が少し異なり、クロボクの下位に暗褐色のシルト質砂礫が認められる。これは、旧河道堆積物であり、A~E北地区においてクロボクの下位で観察される黄褐色の砂質シルトを切って堆積している。堆積物中には、シルトがレンズ状に多数混入する。この旧河道は建屋川の流路跡に相当し、調査区を南から北へ延びる。これより上位には、A~E北地区から連続するクロボクと暗褐色のシルトがみられる。

[下地区の堆積物] 下地区における堆積物は、下位から順に黄褐色の砂礫、灰色のシルト質砂、暗オリーブ灰色のシルト、灰黄褐色のシルト、黒褐色のシルト質砂礫、暗褐色の砂質シルト、にぶい黄褐色のシルト、ならびに現耕土である(第94図)。



第94図 場市遺跡A~F地区とその付近における堆積物

最下位で観察される黄褐色の砂礫は、餅耕地川によってもたらされた扇状地堆積物に該当する。これは、径  $3 \sim 28$  cmの亜角礫を主体とし、最大で径 55 cmの巨礫が含まれる。F地区より約 20 m南方を流れる餅耕地川の現河床(第 92 図の露頭 Y)では、完新世段丘面よりおよそ 2 m低い位置に基盤岩が観察される(第 94 図)。砂礫は、その上に堆積しており、厚さ数十cm~1 mの薄い堆積物であると考えられる。

その上位に位置する灰色のシルト質砂は、洪水に伴う堆積物であり、扇状地堆積物を薄く被覆する。 下地区では、この堆積物上面と、それより上位の暗オリーブ灰色シルトおよび灰黄褐色シルトの上面で、 13世紀後半から 16世紀初頭にかけての庭園遺構が検出されている。庭園遺構はそれぞれの面で計 3 度 つくられ、下地区の中央~東部には池跡が分布する。池跡は灰色のシルト質砂上面から掘られたもので、 暗オリーブ灰色と灰黄褐色のシルトはその中に認められる。これらのシルトは、それぞれ最大で 20 cm の厚さであり、庭園の存続時期における池底の堆積物にあたる。

黒褐色のシルト質砂礫と暗褐色の砂質シルトは、いずれも洪水堆積物である。これらのうち黒褐色のシルト質砂礫は、径  $1\sim10\,\mathrm{cm}$ の亜角礫を主体とし、最下位の砂礫に比して径の小さい礫からなる。これらのシルト質砂礫と砂質シルトは、庭園遺構を覆っており、 $16\,\mathrm{tm}$  世紀初頭以降に堆積したことが知られる。完新世段丘の段丘化は、これらの堆積後であり、おそらく江戸時代に入るまでのことと考えられる。なお、暗褐色砂質シルトの上位にみられるにぶい黄褐色のシルトは旧耕土である。

#### (3) 野脇遺跡における堆積物

本遺跡の調査区における堆積物の基本層序は、下位から灰色の砂礫、暗褐色のシルト質砂、黒褐色のクロボク、暗灰色のシルト、および現耕土である(第95図)。これらのうち灰色の砂礫は、建屋川の河床に堆積したもので、扇状地の旧中州堆積物に該当する。旧中州は、その上位にみられる暗褐色のシルト質砂に覆われ、埋没している。このシルト質砂は建屋川の氾濫に伴う堆積物である。

クロボクと灰色のシルトは、近年の圃場整備によって削り取られたところがあるため、調査区の全域で認められない。これらのうちクロボクは、調査区付近が荒地であった時期に生成された土壌にあたり、 B地区北部では約30cmの厚さで堆積している。その下面では、5世紀から7世紀にかけての掘立柱建 物跡が検出されており、クロボクには同時期の遺物が含まれる。その上位にみられる灰色のシルトは、洪水堆積物であり、 $4\sim5\,\mathrm{cm}$ の厚さで薄くクロボクを覆う。これは7世紀以降に堆積したもので、その時期より後で調査区付近は段丘化したと考えられる。

#### 4. 各遺跡の地形環境について

ここでは、これまでの事柄から考察した広瀬遺跡、 場市遺跡、および野脇遺跡の地形環境について述べる。

# 標高 164m シルト質砂 シルト質砂 ジルト クロボク 現耕土 ・ 遺構検出面

第95図 野脇遺跡調査区における堆積物

#### (1) 広瀬遺跡における地形環境

本遺跡の調査区は更新世段丘 II 上に位置する。そこでは、更新世段丘 II の形成後に建屋川によって扇状地が発達し、これがシルトに被覆され埋没した。更新世段丘 II はこうした地形が段丘化したものである。段丘上はその後洪水の及ばない安定した環境となり、調査区ではこのような環境下の弥生時代後期と  $14 \sim 16$  世紀に人間が居住した。当時、調査区の東側には更新世段丘 III がすでに形成されており、北側には水田稲作を行いやすい餅耕地川の氾濫原がみられた。調査区は当時の河床より約5 m高かったと考えられる。

#### (2) 場市遺跡における地形環境

[A~E地区の地形環境] A~E地区は更新世段丘Ⅲ上に位置し、これは砂質シルトによって埋没した 扇状地が約2万年前あるいはそれ以前に段丘化したものである。更新世段丘Ⅲでは、その後洪水の発生 しない安定した環境が続いていた。

人間はこのような環境下の段丘面で 6 世紀と  $14 \sim 16$  世紀に活動した。特に、人間の居住は埋没旧中州上でなされ、 B地区では 6 世紀と  $14 \sim 16$  世紀に掘立柱建物が、また C 地区から D 地区にかけては竪穴住居が 6 世紀に建てられた。当時、  $A \sim E$  地区より数十m東側には比高 3 m前後の段丘崖がみられ、崖下には水田稲作の可能な建屋川の氾濫原が広がっていた。なお、旧河道が埋没する E 南地区では、人間の顕著な活動がみられなかった。

〔F地区の地形環境〕 F地区は完新世段丘上に位置する。これは、餅耕地川によって形成された扇状地が洪水堆積物によって埋没し、16世紀初頭以降に段丘化したものである。F地区では、この扇状地の埋没過程である13世紀後半から16世紀初頭にかけて庭園が3度つくられた。

F地区は庭園の造営時期に洪水の及ぶ氾濫原であった。そこでは、13世紀後半以前に洪水が発生したもののその回数は少なく、扇状地はシルト質砂の堆積によって浅く埋没した状態であった。庭園は、こうした洪水のあまり起こらない環境下で、まずシルト質砂の上面につくられた。庭園の存続期間には顕著な洪水が発生せず、庭園の池底にシルトが薄く堆積するのみであった。その後下地区では、餅耕地川の氾濫に伴ってシルト質砂礫と砂質シルトが次々と堆積し、庭園は埋積された。

#### (3) 野脇遺跡における地形環境

本遺跡の調査区も場市遺跡下地区と同様の完新世段丘上に位置し、そこには扇状地の旧中州が埋没している。旧中州は建屋川による砂礫の堆積に伴って形成され、その後旧中州上にはシルト質砂やシルトが洪水の度に堆積していった。その間には、荒地が現出し、クロボクの生成される時期がみられた。人間は、クロボクの生成後にあたる5世紀から7世紀に埋没旧中州上で居住した。

当時の調査区付近は、まだ段丘化しておらず、建屋川の氾濫原であった。調査区には洪水の及ぶ危険性があったものの、周辺では水田稲作が営める氾濫原が発達していた。氾濫原の中でも埋没旧中州上は、わずかに高く、排水の便がよい。そのため、そこには掘立柱建物からなる集落が立地した。

#### 5. おわりに

広瀬遺跡、場市遺跡、および野脇遺跡は円山川の支流である建屋川流域の平野に位置し、広瀬遺跡は 更新世段丘Ⅱ上に、また場市遺跡A~E地区は更新世段丘Ⅲ上に、場市遺跡F地区と野脇遺跡は完新世 段丘上に認められる。

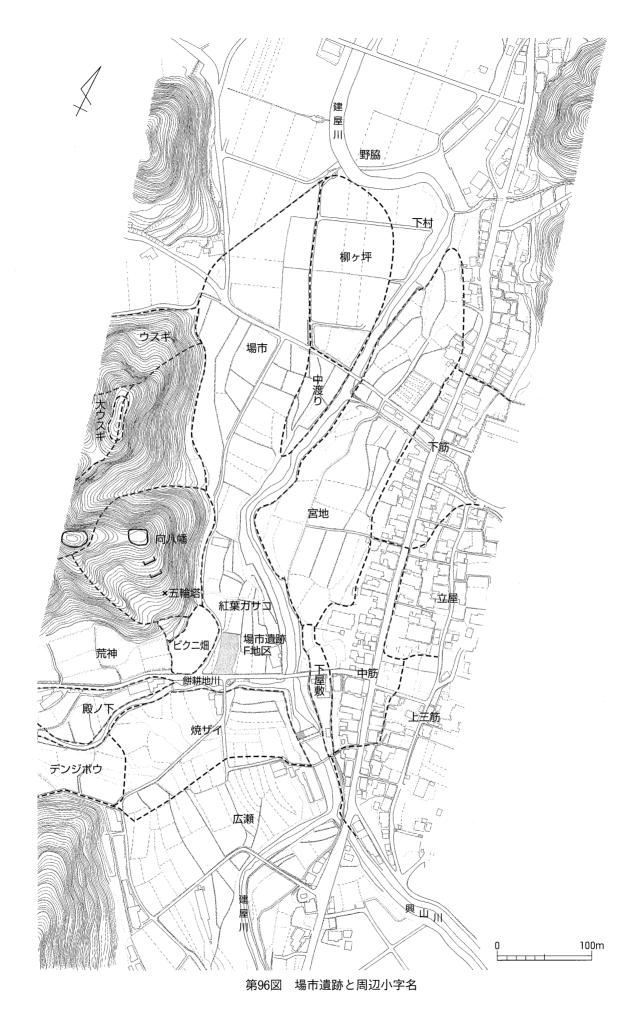
これらのうち、更新世段丘に位置する広瀬遺跡と場市遺跡A~E地区では、人間の居住が遅くとも弥生時代後期にはじまり、その後6世紀や14~16世紀にもみられた。これらの時期には、両遺跡の調査区付近がすでに段丘化しており、そこでは洪水の発生しない安定した環境が続いていた。加えて、調査区近隣の段丘崖下には氾濫原が発達し、段丘上で居住する人間は水田稲作が近くで行える状況にあった。両遺跡の調査区はこのように集落の立地に比較的適した地点であったと考えられる。

他方、場市遺跡下地区と野脇遺跡が位置する完新世段丘は16世紀初頭以降に段丘化したもので、それまでこれらの遺跡調査区は水害の危険性がある氾濫原に位置していた。場市遺跡下地区では、こうした環境下であった13世紀後半に、浅く埋没した扇状地上に庭園がつくられた。そこでは、庭園が存続した16世紀初頭まで顕著な洪水が及ばず、庭園はそれ以降段丘化の時期までに河川の氾濫に伴うシルト質砂礫と砂質シルトの堆積によって埋積された。

また、野脇遺跡の調査区は扇状地の埋没旧中州上に位置する。そこには、5世紀から7世紀にかけて掘立柱建物からなる集落が立地した。埋没旧中州上は、周囲よりわずかに高く、排水の便がよい。さらに周辺には、水田稲作の営める氾濫原が広がっていた。これらが野脇遺跡における集落立地の主たる要因と考えられる。以上のように、広瀬遺跡、場市遺跡、および野脇遺跡の調査区付近では、地形環境の異なる更新世段丘上と氾濫原で、活発な人間活動がみられたのである。

#### 注

- 1) 支流性扇状地は、田中眞吾ほか (1986) 「兵庫県・多紀連山地域の麓屑面」地理学評論 59 5 で述べられた 麓屑面とほぼ一致する地形である。
- 2) この露頭は建屋川の橋脚工事に伴ってできたものである。
- 3) 旧中州は扇状地に存在する微高地である。



- 137 -

### IX おわりに

野脇・場市・広瀬遺跡の調査では多くの成果を得た。建屋谷の歴史を考えるのに重要な資料が増加し、 そのことによって新たな問題点や課題提起されたことにもなる。

昭和50年代に圃場整備事業によって、各地で調査が行われた。そのこと自体とそれに敷衍した周辺の調査によって大きく変化した。圃場整備事業に先立つ確認調査で今回調査した野脇・場市・広瀬の3遺跡をはじめ野外・立石・野谷遺跡などが知られるようになり、縄文時代から中世にかけての実態が明らかになりはじめた。縄文前期と後晩期の土器が出土している。周辺では杉ケ沢遺跡・鉢伏山遺跡や熊野遺跡など高原の遺跡は早くから知られていた。が、平地でも多くの遺跡の存在が確認され、但馬での遺跡密度の高さが評価されるようになった。弥生時代では野脇遺跡での磨製石剣の出土が輝いている。

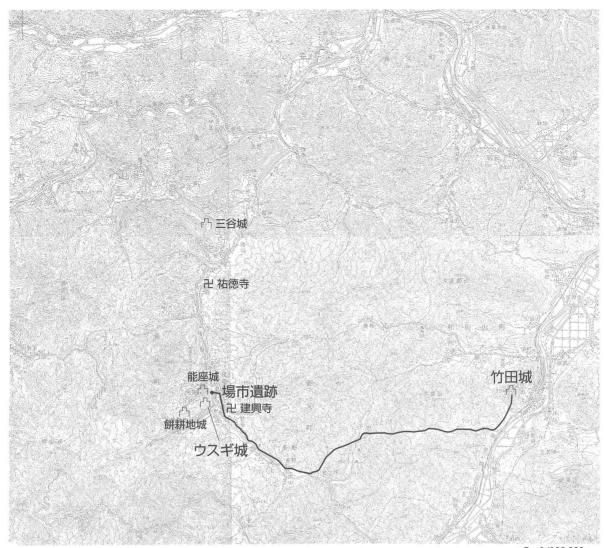
周辺調査の成果では養父町教育委員会による中世城館の調査によってウスギ城跡をはじめとする建屋谷の各城跡の位置や縄張りが明らかになった。併せて中世石造物の存在やウスギ古墳群も確認されるなど、圃場整備の調査成果に加えて多くの事実が判明した。

昭和50年代の土地改良から四半世紀が過ぎて、建屋バイパス建設に伴っての今回の調査となった。 縄文時代の遺構・遺物は検出することができず、この時期については新しい知見はなかった。

弥生時代前期文化は、建屋は縄文の遺跡はあるとはいえ、但馬の中でも奥まったところに位置する。そこに早くに導入されたことになる。円山川流域でも和田山町周辺に遺跡がやや集中するが、それ以外は点的な分布を示している。建屋では広瀬以外にも犬野遺跡があり、場市遺跡でも前期の破片が確認されている。縄文晩期の突帯文土器と共伴しても良いのかもしれない。縄文晩期から弥生時代に継続した文化が発展した一地域かもしれない。

中期の遺構はないものの、Ⅲ様式新段階の遺物は複数地点で出土しており、生活を継続していたものと思われる。今回の調査では遺構・遺物は確認されなかったが、野脇遺跡の磨製石剣は代表する遺物であり、建屋にも中心集落があったことを予想させる。後期になって、広瀬遺跡と場市遺跡で集落を営んでいる。円形住居で小単位の集落を幾つか形成していたようである。ガラス小玉を保有していることは特記される。

調査区内では後期末から生活が一時途絶えて、5世紀になって集落を再開する(周辺に集落を移動していたかもしれない)。それから小規模集落ながら6世紀中葉まで継続している。野脇遺跡・場市遺跡 B~ E 地区・広瀬遺跡で確認されている。野脇遺跡と場市遺跡 B 西地区で掘立柱建物跡が、場市遺跡 C・ D 北地区で竪穴住居跡が、広瀬遺跡で落ち込みが検出されている。それ以外の地区では明瞭な遺構は検出されていないものの、遺物が出土していることから、広く生活していたものと思われる。野脇遺跡の掘立柱建物跡のなかには規模の大きな建物もあり、大規模な集落であることが窺われる。削平を受けているにも関わらず、まだ深さが 0.8 mに及ぶ規模を有する。柱穴の最大径も1 mを超える大きさである。建物の規模は大きいものの通常の掘立柱建物跡である。柱穴の規模が大きいのは山陰地方の特徴であろうか。竪穴住居跡は4棟検出しており、すべて方形プランである。壁溝が巡り、中央に炉跡を持つ住居である。微高地に数棟で構成された集落であろう。出土土師器甕は布留式期を示すが、土師器高杯・壺や製塩土器からは新しい時期が提示されている。布留式甕の伝播が遅れたものと解釈し、5世紀後半から6世紀にかけての集落としておきたい。

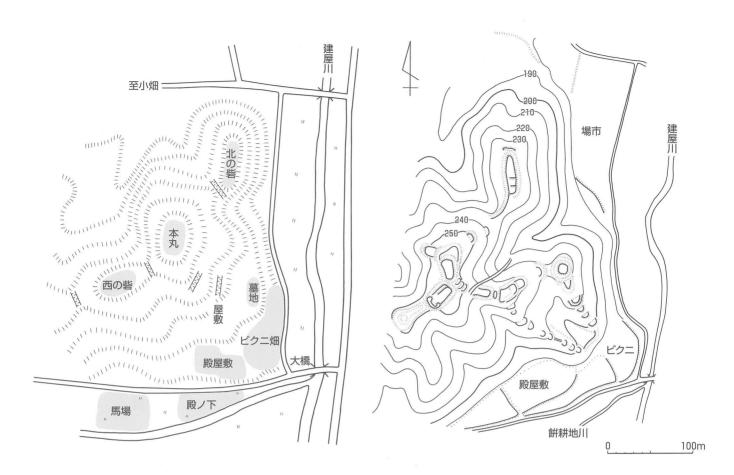


S=1/100.000

第97図 場市遺跡とウスギ城・竹田城

古墳時代末から奈良時代にかけての遺構は確認していないが、遺物は少量ながら出土している。遺構として確認されるのは、13世紀になってからである。場市遺跡 B 西地区・C 地区・F 地区と広瀬遺跡で確認されている。遺構の性格が明瞭なものはなく、小規模な集落が存在したようである。確実な遺構は F 地区の庭園を中心としたものと広瀬遺跡の柵跡である。広瀬遺跡は小面積の調査のため、柵として検出したが、集落跡になるものと思われる。ウスギ城下屋敷に対峙する良好な位置で、関連施設や武士層の集落が予想される。

F地区の遺構は庭園を中心とする遺構である。池は3時期あり、徐々に縮小されている。古い2時期は導水排水施設が明瞭でなく清流が流れる構造になっていないことから、清らかな水が溜まっていたとは思われない。地山はシルト質ではあるが、底に粘土を貼るようなことはしていない。常に水を湛えていたか不明である。場合によれば、特殊な時にだけ水を張った可能性も考えられる。また、それに伴って常に底浚えを行っていたはずである。それによる遺物の攪拌も十分に考えられる。平面形は当初(古段階)の池が最も大きく、南北11mを測る。イチヂク形で約38㎡の広さを持ち擂鉢状になっている。池西側に建物が存在したであろうが、明確には検出できなかったが、州浜の上にかかったところに南北



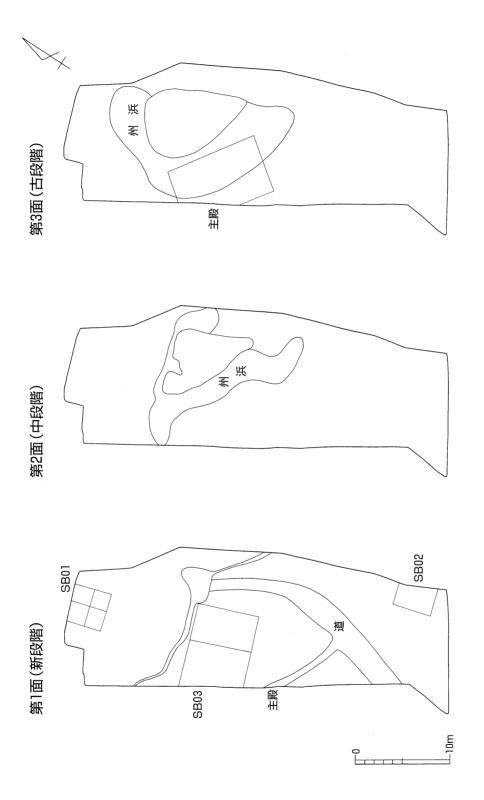
第98図 ウスギ城跡平面図

棟が存在したと推定している。この時期にすでに上屋敷(ビクニ畑)からの道が存在したと思われるが 確実ではない。13世紀の終わり頃の築造であろうか。

中段階は北側を縮小して平面三角形で約30㎡の広さで擂鉢状になっている。北辺は直線になり張り出し部を設ける。中の島も築かれたと思われる。主殿の位置は古段階と同じと思われる。北側に平坦面を広げているが、ここに建物か工房などの施設を増設した可能性が高い。埋土に炭・焼土が多く入っており、被熱した土器やフイゴ羽口が出土している。古段階から中段階への移行時期は明確ではない。14世紀中頃から後半にかけての時期と考えている。

新段階になると、大きく手を加えている。池そのものは約12㎡と縮小するが、全体的に「作庭記」に記されているような教科書的な庭に変化していく。導水施設を設けて、三尊石を立て、滝を見立てて流れ、池に流れ込む。大形石材は水田耕作時などで除去移動されており、残存していなかった。司馬氏館のように調査時まで、立っていた状況ではない。調査段階で2個の横倒しになった大形石材があり、これは本来庭園に使用されていた石材と思っている。それゆえに滝が残存していたのではなく、導水の溝がカーブしている部分が比高差を生じていることから、滝と考えている。石組溝が続いて池に繋がる。池南東部から排水されている。明確な石組溝ではなく、浅い断面 U 字形の溝である。池の南側まで上屋敷から道が延びてきている。途中で主殿に向かう道も検出されている。北側に方形の総柱となる礎石建物が建てられている。2×2間で茶室ではないかと思われる。主殿は東西棟となり、南東部に小形の南北棟である掘立柱建物跡も建てられる。15世紀前半と考えている。

池から出土している遺物は12世紀末からのものが含まれている。陶磁器は伝世されているとしても

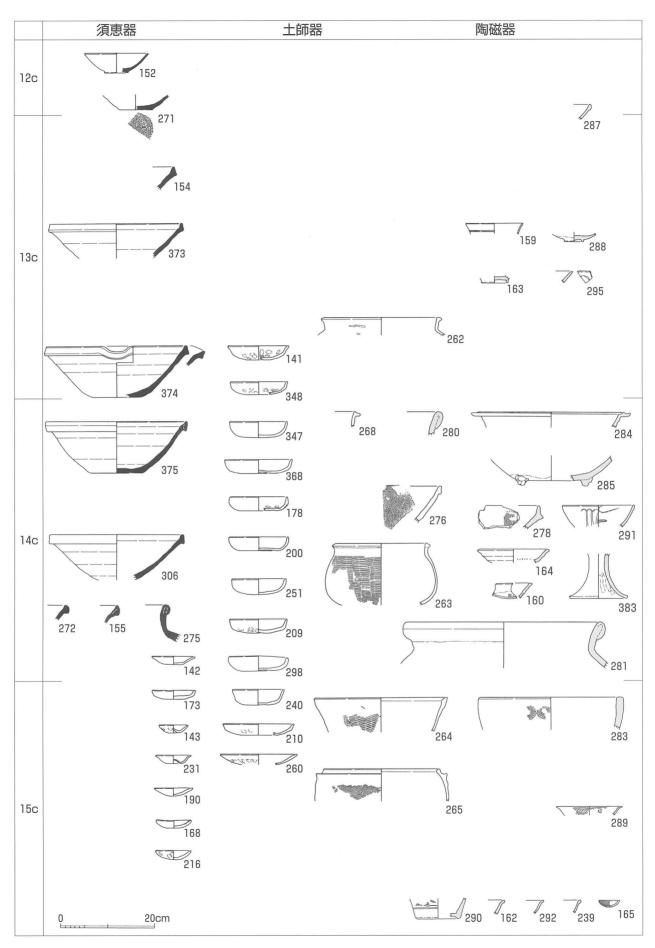


東播系須恵器は継続しないと思われるので、居館としては 12 世紀末頃に構えられたと考えられる。裏 込め部分は土器小片が出土しただけで良好な資料に恵まれていない。各池を作る際の埋土と考えられる。 すなわち、古段階埋土は中段階築造時のものであり、これから中段階築造を 14 世紀後半頃とした。前 記したように遺物の上下関係は整合しないものが含まれている。AMS の結果も同様であり、底浚えや 洪水などによる作り換えによるものと考えざるを得ない。

池を中心とした庭園を有する武家屋敷(居館)の類例は幾つか認められる。しかし、大半は在地領主でも国単位もしくはそれに準ずる規模の領主が普通で、守護から継続しているなどランクが上の領主層が園地を築いている。それに比べて場市遺跡は国人クラスの領主層である。国人層が築造したという点がさらに評価されるかと思われる。しかも長期に渡って庭園を維持していることは注目される。途中で作庭の作法に則った庭園に変化していることも、さらに特別に評価される点であろう。

そこで、場市遺跡の庭園を築いた領主はというと確実ではない。場市遺跡の本城である西側のウスギ (建屋) 城主であろうことは想像に難くない。口伝では竹田城を築いた太田垣氏の城郭であると言われ ているが確実ではなく、建屋氏であると考えられている。現在も竹田城本丸下に鎮座する稲荷社の祭祀 権を建屋の太田垣氏が保持している。そのようなことから、一般的には太田垣氏の故地は建屋であり、 ウスギ城の少なくとも後半の城主は太田垣氏であると考えられている。文献史料からみてみると弘安8 (1285) 年に但馬守護大田政頼が幕府に提出した『大田文』によると尊勝寺領建屋庄下司に建屋五郎太 夫女子と尊勝寺領建屋新庄下司に石和田又太郎の名が見える。石和田又太郎は建屋紙工にも名が記され ている。13世紀の後半には建屋氏の存在が明らかである。次に『祐徳寺文書』によると貞和4(1348) 年建屋下司に佐木直保と実阿とあり、延文3(1358)年には太田垣弥次郎光善が田1段を、貞冶3(1364) 年に田2段を太田垣光成が祐徳寺に寄進すると記されている。少なくとも1358年には太田垣氏が建屋 を納めていたことが明確である。太田垣氏は石和田氏から分かれたものと考えられている。永仁元(1293) 年に悪党として小野市大部庄に乱入した記録もあるが、14 世紀末から 15 世紀初頭には山名氏四天王の 1人となる。応永8(1401)年には太田垣通泰が山名時熈によって備後守護代に任命されたもの但馬に 勢力を残しており5年後には嫡子に備後守護代を譲り但馬に戻っている。応永 21(1414)年には但馬 守護代になり、続いて竹田城を嘉吉3 (1443) 年に築城したとされる。因みに織田信長による但馬出兵 時の竹田城主は太田垣輝延である。記録からは14世紀中頃には太田垣氏が建屋を納めていたことが理 解され、竹田城主となる太田垣氏とは同一と考えられる。それ以前の建屋・石和田氏との系譜は明確で はない。日下部系図によると建屋氏の子孫が石和田氏で分派が広瀬氏そして太田垣氏となり、同一系譜 になっている。ウスギ城築城は建屋氏と言われるが、その後系譜が辿れるかは定かではないが、14世 紀末から 15 世紀初頭には太田垣氏が所領していたのは明らかであろう。この時期は庭園の新段階にあ たり、太田垣氏によるものと考えて大過ないものと思われる。

ウスギ城跡は大規模な城郭である。尾根上に平坦面を築き、竪掘り・土塁・堀切などみられる。竪掘りなどは戦国期に改変されたもので、上記の理由から太田垣氏によるものと考えられる。南側の堀は深さ4m前後もある大規模なもので、東側の二重堀切とともに戦国期の遺構と考えられ、曲輪にある一石五輪塔や石仏はこの時期のものである。本来の南北朝期に構築された遺構も大規模な曲輪を造っている。西側の餅耕地城、北側の能座城(中尾砦)、南東の野谷城が一体となった城郭である。室町時代の石造物も残されており、その規模は特筆される。場市遺跡の本城であり、ウスギ城も含めて場市遺跡の評価を与えるにあたって、その経済力に驚かされる。庭園規模は小さいとはいえ、構築しているだけでも特



第100図 場市遺跡F地区SG01出土遺物編年

別である。他の庭園遺構が国人領主でも格が上である。例えば司馬氏は飛騨国の御家人であるが、相国 寺寄進では赤松・大内・武田などの守護と並ぶ位置付けがされており、その財政力は卓越している。一 国人・守護被官ではなく、実質的には守護に代わる位置だったと思われる。

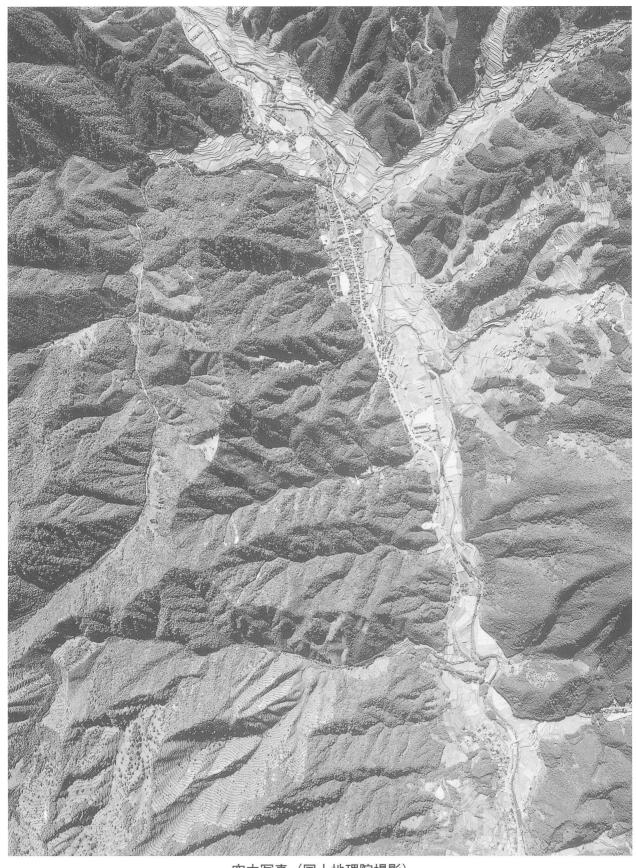
また、文化的には都や公家との接触が記録の上からは認められない。南北朝期から戦国期に至る争乱を生き抜いた太田垣(建屋)氏であるので、各地を転戦する中で知り合った知識人がいたとしか思われない。それに加えて、財力の問題がある。耕作面積は限られており、但馬のなかで広い水田があるわけではない。そうなると考えられるのは鉱山しかに。生野銀山で代表される鉱山が但馬には分布する。太田垣氏と特定鉱山を結びつける資料はないものの、財源は有力な鉱山を抱えていたとしか思われない。これこそが太田垣氏が発展した背景ではなかろうか。

司馬氏館跡では13世紀後半から館を築き、14世紀末頃に整備され庭園が築かれたと言われている。東氏館や高梨氏館も同時期の築造で、15世紀前半に栄えている。「花の御所」の影響を受けたもので、小島道裕氏によると室町期荘園制の具体的な表象とされており、益田氏館や江上館もこの時期から構築されている。ところが、場市遺跡では12世紀末から生活をはじめ、13世紀末遅くとも14世紀はじめには庭園遺構を築いている。宮廷文化が入っているところでもなく、太田垣氏が中央や有力公家との密接な繋がりを確認することができない。そのような地で庭園を伴う館跡を築いているのは特殊である。財政力の背景は鉱山であると推定したが、さらに実施する文化人(ブレーン)の存在が注目される。遺跡の終演は戦国期の終わりで他の遺跡と軌を一にしている。遺物の中で注目されるのは青銅製水滴である。ウサギをリアルに表現している優品である。中国製で国内での出土例がない逸品である。類似資料は美術館の蔵品に中国製として残されているが同一品は認められない。遺構面からの出土であるが、15世紀前半までの製品と考えている。

場市遺跡F地区の庭園は兵庫県但馬県民局の理解協力を得て地下保存されている。説明看板設置などの計画もあり、今後とも調査成果が活用されることを望むものである。

# 写 真 図 版

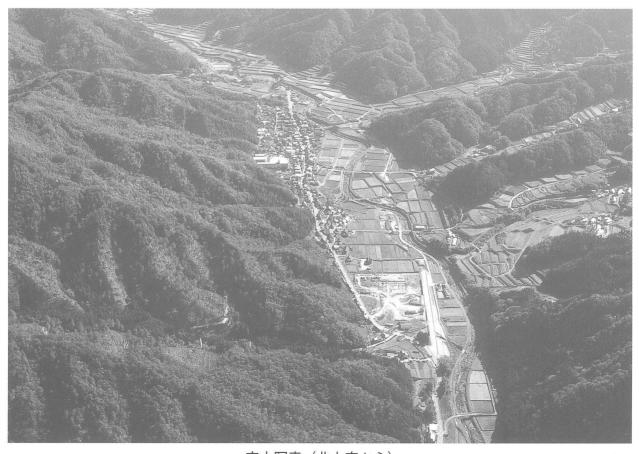




空中写真(国土地理院撮影)



空中写真(南上空から)



空中写真(北上空から)



空中写真(南上空から)



空中写真(西上空から)



空中写真 (北上空から)



空中写真(南上空から)



空中写真(北上空から)



空中写真(南東上空から)



1・2トレンチ遠景



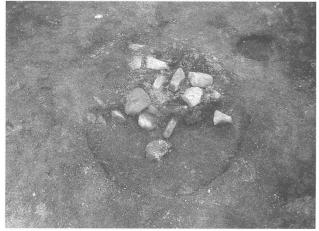
38トレンチから北側



2トレンチ (北から)



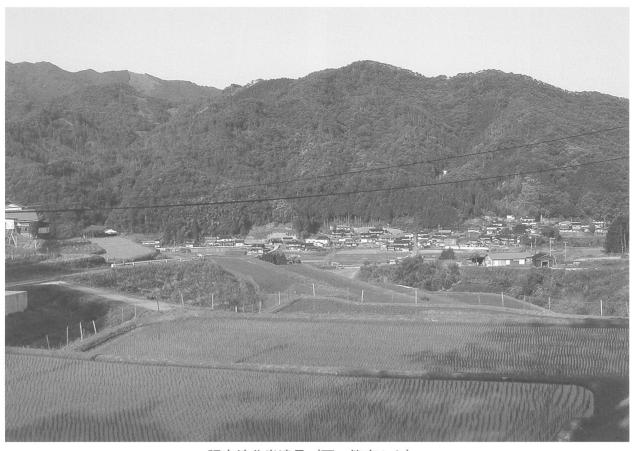
3トレンチ断ち割り(北から)



2トレンチ集石(北から)



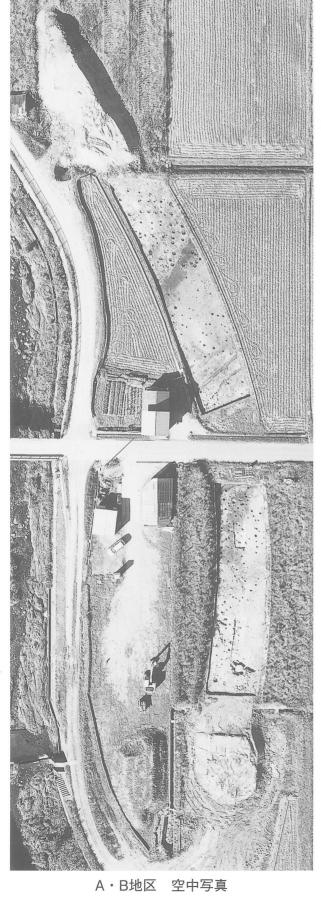
31トレンチ断ち割り(南東から)



調査地北半遠景(西・能座から)

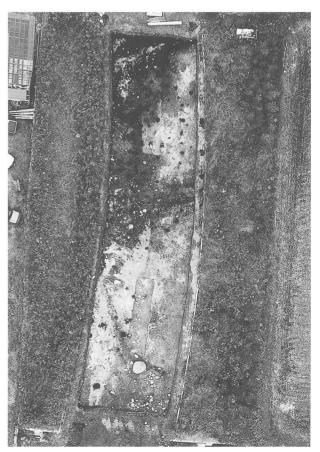


調査地南半遠景(西・餅耕地から)





A地区 空中写真



B地区 空中写真



全景 (北東から)



A地区全景(南から)

調査風景

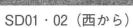


A地区全景(南から)



A地区全景 (北から)







SD01·02 (南から)



SB01 ~ 04 (南から)



SB03 (西から)



SB04·05 (南東から)



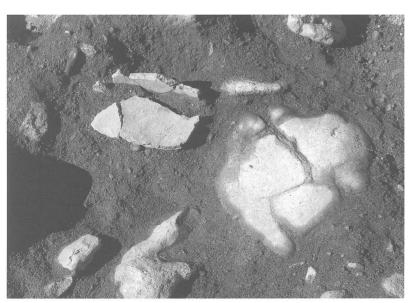
SB06 (南から)



SB06 (北から)



SB06 (北西から)



P10 土器出土状態

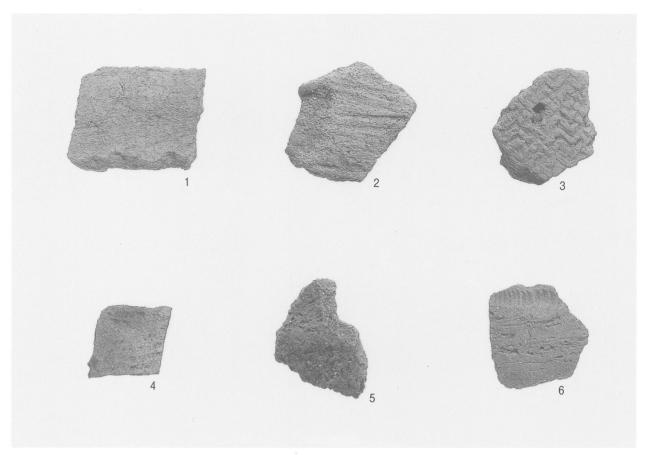
図版13



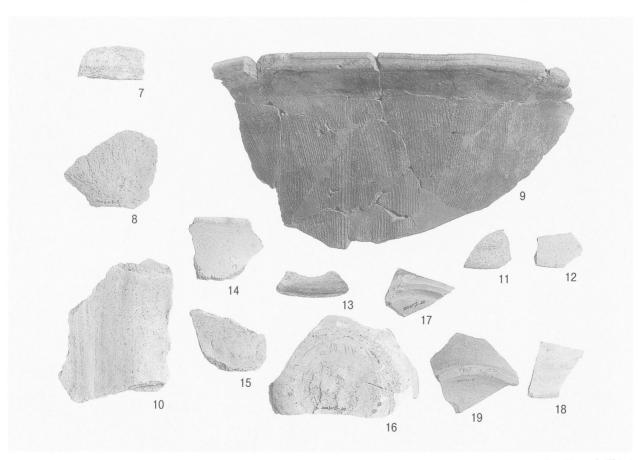
B 地区全景(北から)



B 地区全景(南から)



A地区



A・B・南地区



場市遺跡遠景(北側野脇遺跡から)



A地区 全景(北から)

A地区 全景(南から)





B西地区東壁

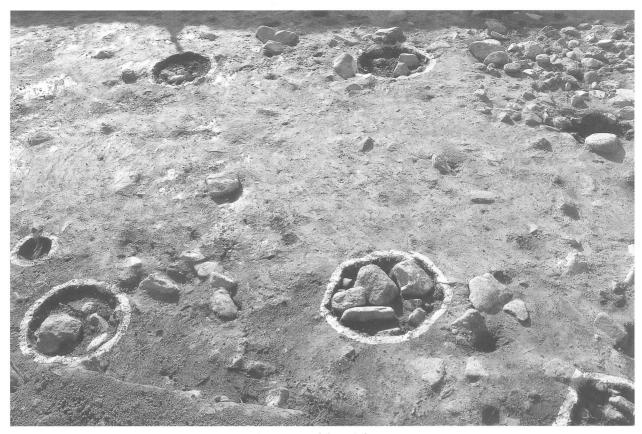


A地区全景(北から)

B西地区調査風景



B西地区 北半全景(南から)



SB01 (東から)



SB01 (南から)



SD01堆積状況(南から)



SX01 (南から)



SD02 (南から)

# 場市遺跡 B東地区



調査前(北から)



機械掘削風景



南壁



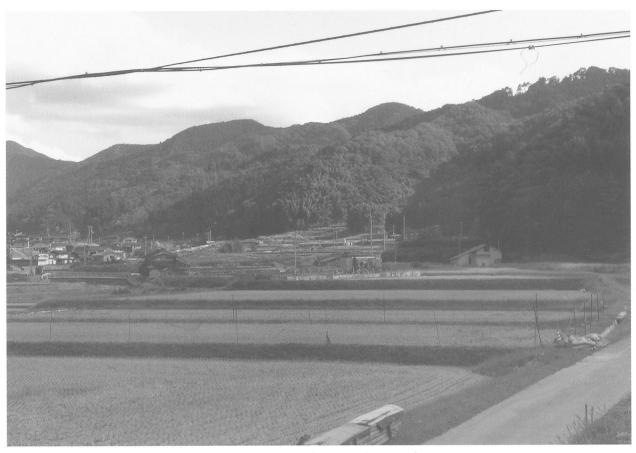
調査風景



第1面全景(南から)



第2面全景(南から)



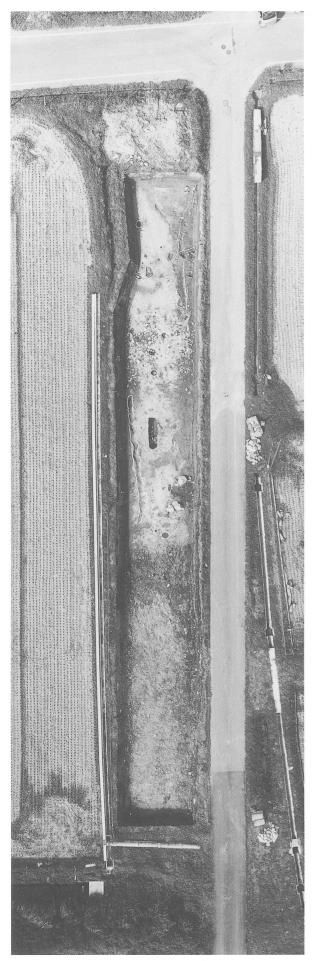
C~F地区遠景(北側B地区から)



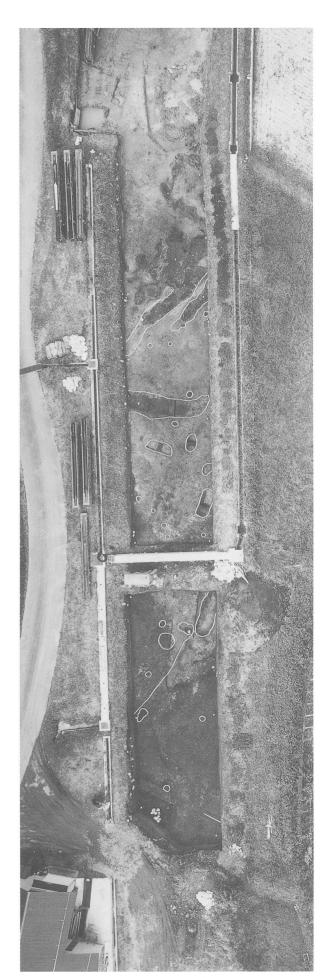
A~E地区遠景(南側F地区から)



C·D地区空中写真



B西地区空中写真



E北・E南地区空中写真